

思い出の
東京都立
玉泉中学校

1 9 4 0 - 1 9 4 6



思い出の

東京都立玉泉中学校

1940-1946

思い出の 東京都立玉泉中学校

1940 - 1946



正門の母校表札（三期文集いづみ七号から）



東京都立玉泉中学校

序

入るときは偶然、出るときは必然、そんな

な語句が浮かび出る。また、こんな言葉は嫌いだと思われる方もあろうが、同窓生というのは家族感情に通ずる同胞感で結ばれているようにみえる。あまり論理的なものではないのだが、とにかく、ある一定期間を共通の場で過した、共通の生活圏を持つたことから生ずる感覚、感情である。嫌いでも親戚は親戚という感覚があるように、「あんな奴」^{（一）}と思っ^{（二）}ていても、この「同窓生感覚」、「同級生感覚」からは逃げだし難い。だからこの感覚、この意識は老人が回顧するときの古い日本の感傷とかアジア的な家族連帯感情といった歴史的、風土的なものの所産ではない。現在のイートン校やハーバード大学の出身者たちの間にも似たかたちで存在しているようだ。ただし先進国での家族感情が次第に希薄化するのに連れて、この同胞感も薄れる方向には向か

っているらしい。

さて話を我が玉泉中学にしばらく、そこに懐きさと、ある種の哀感を伴う。それは十二歳から十六、七歳ころまでの少年期が刻印する甘くて幾分苦い記憶の味によることが大きい^{（三）}が、そこに夭折した玉泉中学という映像のほかなさと、大日本帝国が滅んで行くときの切なさ^{（四）}が重く加わってくるからだ。ここに寄稿した数十人の七十歳台の同窓生には、よかれあしかれ、この目に見えぬ軛^{くびき}が掛けられている。だから文面で初めてお目にかかる方の御氣持が直ぐわかっ^{（五）}てしまう気になる。人は夫々の人生を送るものだと思^{（六）}う反面、ことこの頃の回想に入れば、直感的に共感してしま^{（七）}う。会ったことのない親戚のような、同胞感を抱く。

仔細に見ると、各期のおかれた状況が

なり違うことと、各期の間の交流が殆んどないことがわかる。学年毎に学校で就学できた期間が違ふし、動員された職場の状況がかなり異っている。戦時下のために部活動など上下の交流は皆無である。どの学校でも同様であつたが、各学年毎に横の輪切り状態になつていたので。それでも他の期の人の文集を読んで同胞感が湧くのは、先述の少年期という大枠の中に、更に玉中という枠を引き入れ、そして太平洋戦争前後という時の枠を冠^{かぶ}せているところにその源がある。

このような文集は一九四〇年代に玉泉中学という薄命の学校に籍を置いた人たちに深い味わいを持つものであることは確かだが、玉中に関係のない人たち、別の世代の人たちが読んで面白いものであるうか。話がその頃の玉泉中学という場に局限されているわけだから。その局地性、時限性という限界があることは否めない。しかし少年期の出来事という一種の普遍性も秘めて

いるような気がする。例えば水野氏の描いた岡田先生の肖像画！と制作時のエピソードなどには充分普遍性を感じ得る。これは一方では若き日の水野氏の筆力が持つ普遍性にも依つて居るが、他方では描かれた岡田先生御自身が持つ居られた人格の普遍性にも依つて居るのである。多くの人が違う視野から描いた先生のパーソナリティは、あの時代の玉中の数学教師という局限されたものではなく、まとまった個性をしつかりと持った人の、いつ、どこでも通用する普遍的な人間性を見せてくれる。

だから、我々玉中生の方も、この文集を読んで徒にノスタルジーにとらわれることなく、このような体験を経たことをわきまえて、あまり華々しい時代とは言えない現在を、それもあまり長くとは言えないが、自分自身を保ち、実体的に生きて行くのではないか。

（近藤晴彦 記）

玉泉中学校の沿革

東京都立玉泉中学校は１９４０（昭和１５年）に東京府立第十八中学校として創立され、１９４１（昭和１６年）に玉泉中学校と改名された。１９４３（昭和１８年）に東京府が東京都になるに伴い東京都立玉泉中学校となった。玉泉中学校は狛江村（現狛江市）に校地を準備し校舎を建設する予定で、臨時に十中の校舎を使用していた。

代表的な学制

旧制度では小学校までが義務制

１９４０年	小学校 ６年	中学校 ５年	高校 ３年	大学 ３年
２００２年	小学校 ６年	中学校 ３年	高校 ３年	大学 ４年

玉泉中学校の経過

入学者は１９４０年の１期生から１９４５年の６期生まで、各期１５０人で合計９００名である。１期生は１９４５年（昭和２０年）３月に所定通り５年生で卒業、２期生は戦時の特例で１期生と同時に４年生で卒業した。３期生は４年終了で進学したものが西高名簿には玉中３期として登録されている。残った３期から６期生までは十中の６期７期更に学制の変更に伴い西高１，２，３期生となっている。

沿革

昭和１５年１月１８日 （１９４０）	東京府立第十八中学校を設立し、東京府立第十中学校に生徒総数を７５０名と定め昭和１５年４月より開校
昭和１５年４月１日	東京府立第十八中学校第１回入学式挙行
昭和１６年４月１日	東京府立第十八中学校は 同 玉泉中学校と改称
昭和１８年７月１日	東京都制実施され東京都立玉泉中学校と改称す。
昭和２０年３月３０日	東京都立玉泉中学校第１回、第２回卒業式挙行 卒業生 第１回９７名、第２回１４２名
昭和２１年２月２１日	火災のため、講堂・体育館及び教室を除く他大半を焼失
昭和２１年３月３１日	東京都立玉泉中学校は東京都立第十中学校と統合

校名の由来

第一期生 森 宏太郎氏の資料による

「玉」と「泉」について

「玉泉中」の名は、第一回生の父君がつけられたと聞く。学校の公募に応じられて採用になったものである。

「玉泉」の前半の「玉」は「多摩川」の「たま」をとられ、後半の「泉」は玉泉中学校の校地として予定されていた、狛江の「和泉」の地名からとられたのであろう。

(1) 多摩川の源流の「丹波(たば)川」がなまって「たま川」となったという説。

なお、「タバ」とは山間部の平坦地のことをいう。

(2) 多摩川は「玉川」とも書かれ、全国に有名な六玉川の一つとなっているが、その「玉」とは「玉のように綺麗な水」を意味するという説。

(3) 多摩川は、昔、武蔵国の国府があった現在の府中市のほとりを流れており、この川は国司がみそぎをした聖なる川、すなわち「魂川」で、これから来たという説。

なお「多摩」の地名は、「多摩川」に由来しており、逆に「多摩川」が「多摩」に由来していると見るべきではない点では諸説一致している。

なお、玉については「霊」という字にも通じ、これも「たま」とよむ。

次に、「玉泉」の後半の「泉」の由来は、狛江市和泉の地名だが、それはそこにある泉龍寺の泉の弁財天の池に由来し、その泉からこの地を和泉村と名づけたという。

なお、和泉には、氏神の社として、伊豆美(いずみ)神社があり、また、小田急電鉄の和泉多摩川駅のそばには「玉泉寺」がある。

この寺の境内には、泉は見られないが、ボダイジュ(菩提樹)の大木がある。何やらシューベルトの「泉に添いて茂る菩提樹・・・」の歌詞を思い出させる樹である。

目次

序	—————	(1)
沿革	—————	(3)
校名の由来	—————	(4)

十八中・玉中のことども	藤本 純助 先生	—————	1
玉泉中学の思い出	土屋 長松 先生	—————	5
書 簡	高野 正巳 先生	—————	8
回 想	中川 清 先生	—————	9
玉泉中学を憶う	牧野 太郎 先生	—————	1 2
玉中への思い出	見上 保 先生	—————	1 3
玉泉中学の思い出	1 期 天谷 和夫	—————	1 6
桑の実に惹かれて空襲を忘れる	1 期 斉藤 美寿	—————	1 8
タンカン	1 期 石毛 清雄	—————	2 0
回 想	1 期 安保 昭夫	—————	2 2
玉泉中学校時代の思い出	1 期 細越 弘康	—————	2 5
玉中時代の思い出	1 期 小林 博信	—————	2 7
私にとっての玉泉	1 期 木村 寛夫	—————	2 9
当時の日記から	1 期 村瀬 正直	—————	3 3
玉泉の二恩師の学恩	1 期 森 宏太郎	—————	4 0
玉中時代の想い出	1 期 梅村 喜夫	—————	4 3
学徒動員記	1 期 山崎 信	—————	5 6
玉泉中学の思い出を綴る	1 期 前田 信昭	—————	6 0
戦時下の中学校生活と法令等	1 期 降旗 経雄	—————	6 2
玉泉と私	1 期 竹田 信彦	—————	6 7
戦争中僕らが中学で夢見たこと	1 期 若林 彰	—————	7 0
私のニーチェ	1 期 加藤 茂樹	—————	7 2
教えられる日々の追想	1 期 長谷 孝次	—————	7 4
印象に残る思い出について	1 期 桑原 弘道	—————	7 7
恩師の面影	1 期 近藤 晴彦	—————	8 1
回想と未来	1 期 神田 芳郎	—————	8 4
思い出すままに	2 期 高橋 爽	—————	8 7

雑 感	2 期	光山 慎二郎	———	9 5
中学時代の思い出	2 期	堤 素高	———	9 6
さるかに合戦のこと	2 期	長谷川 草夫	———	9 8
五十年の思い出	2 期	阿部 道夫	———	1 0 0
先生と生徒	2 期	村田 良雄	———	1 0 2
思い出すこと等	2 期	藤森 明	———	1 0 4
思い出	2 期	富田 常治	———	1 0 6
五十年の昔	2 期	片岡 俊夫	———	1 0 8
オレンジ色の時代	2 期	波脇 行義	———	1 1 0
勤労働員の思い出	2 期	柴崎 英輔	———	1 1 2
戦災の記憶	2 期	中島 力	———	1 1 4
中央气象台動員の頃の思い出	2 期	小林 文雄	———	1 1 6
終戦後卒業まで人生は偶然の積重ね	2・4 期	内田 進三	———	1 1 8
五 省	2 期	飯島 弘	———	1 2 1
雑感・近況	2 期	黒川 泰三	———	1 2 4
雑 感	2 期	佐藤 健	———	1 2 5
玉中二期会発足への道	2 期	倉田 新	———	1 2 6
玉中時代の思い出	2 期	上田 一岳	———	1 2 8
気象神社紀行	2 期	片岡 俊夫	———	1 3 0
私の心の中で生き続ける玉泉中学校	2 期	本間 雄二郎	———	1 3 2
勤労働員のこと	2 期	長谷川 草夫	———	1 3 7
中学校時代の思い出	3 期	針谷 和夫	———	1 4 8
岡田先生のこと	3 期	鈴木 茂男	———	1 5 0
玉泉中—思い出の英語の先生	3 期	島村 馨	———	1 5 1
爆笑授業	3 期	榎本 勝起	———	1 5 3
追 憶	3 期	濱本 昭郎	———	1 5 5
喧嘩と殴られた思い出	3 期	蜂須賀 幸三	———	1 5 8
私と玉中	3 期	安永 和夫	———	1 6 0
勤労働員の思い出	3 期	高田 健一	———	1 6 1
勤労働員の思い出と・・・	3 期	斎田 秀雄	———	1 6 3
終戦の頃	3 期	山内 彬正	———	1 6 4
海軍甲種飛行予科練習生	3 期	古澤 達一郎	———	1 6 5
釣床 (つりどころ)	3 期	鈴木 茂男	———	1 6 7
真研六研機械班の人々	3 期	鈴木 茂男	———	1 6 9
六十五才を迎えて	3 期	鈴木 茂男	———	1 7 1

リヤカーで家まで運んでくれた人は	3期	石橋 昭彦	———	1 7 3
五十年前の工場体験	3期	溝部 衡志	———	1 7 4
表彰状と賞杯	3期	蜂須賀 幸三	———	1 7 5
工場見学・感想記	3期	斎田 秀雄	———	1 7 6
わが人生に思うこと	3期	山田 國雄	———	1 7 7
異常な体験	3期	山田 國雄	———	1 7 8
あのひと、このひと	3期	小池 玲爾	———	1 7 9
思い出二つ	3期	境澤 和男	———	1 8 1
噫！私の玉中	3期	金澤 良樹	———	1 8 3
防衛宿直二題	3期	佐藤 清一郎	———	1 9 9
水道道路	3期	佐藤 清一郎	———	2 0 1
思い出に残る二人の友について	3期	宇津木 一	———	2 0 4
歴史の見方を学ぶ	3期	土川 政夫	———	2 0 6
君の思い出～消えた親友	3期	島村 響	———	2 1 0
東京空襲のころ	3期	太田 富治夫	———	2 1 2
オペラ・音楽に傾倒した我が半世紀	3期	梶山 晋	———	2 1 6
長生きをしましょう	3期	小川 久	———	2 1 9
座談会 —— いづみ会発足の頃 ——	3期生		———	2 2 1
玉中入試の思い出	4期	中西 健一	———	2 2 4
私の中の玉泉	4期	鈴木 文男	———	2 2 6
恩師の思い出	4期	吉田 哲夫	———	2 2 8
告白	4期	大山 博	———	2 2 9
心に太陽を	4期	筒井 隆	———	2 3 1
雑 感	4期	栗田 年	———	2 3 3
一～二年生の頃	4期	並河 淳一	———	2 3 4
教官に敬礼	4期	青井 徹	———	2 3 6
奇遇ふたたび	4期	渡邊 卓	———	2 3 8
音楽の先生	4期	吉野 一	———	2 3 9
岡田信吉先生のこと	4期	水野 浩	———	2 4 1
鷹研の思い出	4期	溝部 澄男	———	2 4 4
勤労動員の思い出	4期	吉田 恵一	———	2 4 6
勤労動員・思い出されるままに	4期	初見 清	———	2 4 9
夏空と黒煙と	4期	村岡 精一	———	2 5 1
十九年の秋	4期	藤田 益生	———	2 5 4
鷹研のこと	4期	山原 茂一	———	2 5 6

青春一瞬の夢（勤労動員時代）	4期	小澤	一智	———	2 5 7
勤労動員時代の思い出	4期	宮澤	文雄	———	2 5 9
勤労動員時代	4期	金網	繁男	———	2 6 2
十五歳の青春	4期	毛利	英康	———	2 6 4
動員時代のスケッチ	4期	柏木	正史	———	2 6 6
勤労動員、疎開そして終戦	4期	藤井	安彦	———	2 7 0
鷹研日記より	4期	田中	昭	———	2 7 2
勤労動員時代	4期	天谷	芳夫	———	2 7 4
水泳部の思い出と今	4期	桑原	成巧	———	2 7 9
戦後の玉泉中学の思い出	4期	渡部	力	———	2 8 1
終戦から卒業まで	4期	佐田	昭午	———	2 8 4
敗戦から卒業までを振り返って	4期	近藤	徳彌	———	2 8 6
混沌の日々	4期	村岡	精一	———	2 8 7
あの頃の亡友たち	4期	竹中	弘祐	———	2 9 1

〔座談会〕戦中期の玉中を語る	—————	2 9 7
----------------	-------	-------

資料

校訓・校歌	—————	3 2 0
昭和十六年の入学試験（面接）問題	—————	3 2 1
勅語・詔書	—————	3 2 4
開戦の詔書	—————	3 2 5
終戦の詔書	—————	3 2 6
カイロ宣言	—————	3 2 7
ヤルタ協定	—————	3 2 8
ポツダム宣言	—————	3 3 0

年表	—————	3 3 3
先生方	—————	3 3 6
都立中学校と高校の関係	—————	3 3 7

編集後記	—————	3 3 8
------	-------	-------

十八中・玉中のことども

藤本 純助 先生

(西高二十五周年記念誌より抜粋) 1962

昭和十五年という年は東京府が未曾有の学校大增設をした年であった。中学校だけでも十三中から十九中までという大盤ふるまいであったが、これはつぎの年、昭和十六年には太平洋戦争という、どえらい戦争が起こることを、東京府のおエラ方もご存じなかった証拠である。

東京府立第十八中学校——略して十八中、後に玉泉中——略して玉中……思えばなつかしい名前ではある。

都の西郊、今の西高等学校のあるところ、そこに創立四周年を迎えた十中があり、十八中は独立するまでの三年間を十中で間借り、当時の十中の校長は創立以来の白澤清人先生で、先生が十八中の校長も兼ねられた。

当時は学区制はなく、志望は地域的に制限はなかったが、それでも杉並区が圧倒的に多く、中野、世田谷、武蔵野などがこれに続いていたと記憶する。十八中への合

格者は大抵小学校のクラスの八・九番から十三・四番までの分野のもので、十中のそれが二番から五・六番位までの席次のものであったことを見ると、両者の間には僅かでも水があいていたことがわかる。そして当時の一番という子供たちは大抵都心部の一流校へ向かったようである。

実際教室内で接触する生徒の素質は玉石混淆で頼もしくあったり、情けなくもあったりした。しかし概して言えば十八中の生徒を教えうべく、父兄の熱意信ずべく、これならやれる、いや、やらねばならぬという気持ちが一湧然と起こってきた。私たち十八中の教員は一つの大切な点で一致していた。つまり十中の中にいて十中と較べてひどく見劣りのするような生徒を育てあげてはならないということだった。大概の新設校がそうであるよう

に、十八中でも既成のものに負けまいとする気魄が横溢し、この気持ちがまた生徒たちにも通じた。

白澤校長は十中、十八中の上に正しく君臨しておられた。まことに一系乱れぬみごとな統率ぶりであった。こわいオヤジであつたけれども、半面、非常にやさしいところがあつて、この和製ヒットラーの破顔一笑には、ぐいと人をひきつける暖か味があつた。概して当時の校長はワンマンであり、デスポットであつた。とすれば白澤先生のようなワンマン校長を持ったことは、十中にしても十八中にしても幸運であつたと言わなければならない。我々は先生の識見に依存していた。時まさに太平洋戦争のなまぐさい風雲をはらんで、世は軍国主義の怒濤に押しまぐられていた時世である。先生の教育方針が国粹主義的・修練的・スパルタ式方向に片寄つたとしても、これは先生個人の責任ではあるまい。昭和何年かの五月二十二日に青少年学徒に対して詔勅が下されており、生徒たちは毎朝始業前に輪番でこれを奉読し、次いで校訓「感激」を唱え「強く、清く、賢く」と結んだものであ

る。その間一同頭を垂れて「統念」に入る習慣だった。

昭和十六年の四月を迎えるや、東京府立第十八中学校は東京府立玉泉中学校と名称を変えた。これに先立ち、府の方から適当な名称を考えておけとの通達があり、「玉泉」は生徒（一期竹田）の父兄から示唆されたものである。この名称の起こりは和泉多摩川にあり、十八中は和泉多摩川に近い狛江の地に一万坪の校地を設定されていたので、父兄から「たまいづみ」なるアイデアが出たもので、狛江に敷地が決まつてからは、校友会誌「いづみ」をも発行する機縁が生じた。

狛江の校地が昭和十五年何月何日に設定されたか、今の私には正確には思い出せない。しかし校地が決まつたことはさすがにうれしく、それからというもの狛江界隈や和泉多摩川は、しばしば遠足の目的地とされた。狛江一万坪は目を見晴るかすほど広く感ぜられ、やがてここに建つであろう木の香も新たな校舎を想像すると、胸も躍る思いであつたが、ついに実現せずに終わつた。狛江の校地に今も印象強く残るのは、入り乱れた数本の松の

立ち木であるが、その松の木立も今はありやなしや。

このあたりまでは大体順調に玉中も成長して来たのだが、しかし時すでにヨーロッパでは、第二次大戦が始まっており、太平洋戦争もこの年十二月八日勃発となると世情は大きく歪んできた。それも緒戦の勝っている間はまだ安んじて勉強ができたが、越えて昭和十七年夏頃のガダルカナル島の争奪戦に破れて以来、国内の状況はぐんぐん悪化の一路をたどることとなった。戦争はだんだんと不利に傾いて、学徒勤労動員なるものが行われ出して生徒たちは学園から工場へ駆り立てられることとなった。立川の航空廠、高円寺の陸軍氣象部などに生徒が動員され始めたのはこの頃である。

かくて昭和二十年三月には第一期生、第二期生一緒にした卒業式が行われた。第二期生には修業年限短縮が敢行されたからである。一、二期生はこのようにして仮屋から巣立って行った。彼らにも夢はあったろうが狛江の地には校舎は建たなかった。卒業した彼らは思いの外の進学ぶりを示した。今の西高の同窓会名簿を開いた時、

たまたまそこが玉中関係の箇所であっても、特に見劣りがしないように思うのは欲目というものであるうか。狛江には、やがての校舎建設の日に備えて植木の苗木が多々植えこまれていたけれども今はそのほとんどが空しくなり、わずかに桜などが現西高の校庭に移植されていて、みる者には当時のことをしのばせる。

衣なく、食なく——それでもやつと生徒たちは勉強の場にもどされ、ようやく軌道に乗ったと思うも束の間、悲しいかな十中校舎の大半は昭和二十一年二月二十一日の夜半、不慮の火災によって烏有に帰し去ったのである。焼け残った教室は僅かに九つ、校長室、事務室、職員室等学校の中枢部を失い、学校の機能は麻痺してしまった。翌朝、遠い所の生徒たちは何も知らずに登校してきた。校長はまだ見えない。私は焼け跡に全生徒を集めて災害と災害に対処すべき心構えにつき悲痛な訓示をした。当時十中が二十五学級、玉中が十五学級。とりあえず焼け残った九つの教室と体育館、講堂などを使用して二部授業でやっていくことになった。一方十中、玉中両方の父

兄を一丸とした校舎復興促進会が結成され、当時不如意な金融面、不足な資材面を克服して一日も早く校舎を復興させようとする運動が開始された。

昭和二十一年三月三十一日を最後として丸山校長が退職の止むなきに至ったのはまことに痛恨事であった。同時に東京都立玉泉中学校も六年の歴史を閉じて、十中に統合されることになった。そして細田菊雄校長を迎え、新しい都立十中がスタートしたわけである。したがって玉中について私の使命は、一応ここで終末にきたと私は思う。がしかし、私は一つ重大な点に関して語ることを残しているような気がする。それは玉中はなぜ独立しなかったか——という問題についてである。

実際、玉中と同時に生まれた他の六つの中学は全部独立して、今の豊多摩高校から国立高校までとなっている。なぜ玉泉高校というものができなかったのだろうか？

率直に言って玉中解消の責任の大半が私にあるように思う。何が何でも教頭ががむしやにやらなければいけなかったんだといえると思う。さすればやらなかった私が

悪いにちがいない。同時に生徒からも父兄からも独立促進の運動は起こらなかった。言うなれば河の支流の本流に注ぎ入るがごとく、きわめて自然になだらかに玉中十中の統合はなしとげられた。考えてみれば当時の資金や資材に悩む都当局が、ねだられてもせぬ併設校の独立を進んでやったはずがない。まだ歴代の十中校長も玉中独立には積極的でなかった。それに玉中は何と言っても十中かわいがられた。生徒も父兄も準十中というところで一応満足している。そこへもってきて教頭が能なしときている。これでは玉中が独立できるはずではなかった。とはいふものの、私は決して玉中不独立の責めを逃れようなどとは思っていない。「うぐいすの宿はと問わば」の古歌もあるが、もし玉中の卒業生の中で望郷の歎きをい多く人があるとすれば、私は万謝しなければならぬと。

玉泉中学の思い出

土屋 長松 先生

玉泉中の思い出を語るには、四回生の皆さんが入学する前に遡らなければなりません。

漱石の「坊ちゃん」のように単純で一徹な数学の教師が新設校府立十八中へ九中から転任になったのは、日支事変も四年目、勝った勝ったで紀元二千六百年の祝賀気分一杯の昭和十五年三月三十一日、二十六歳の青春の日でした。十中の下駄箱の横で三学級の一年生を迎え、授業を始めた時のことが未だに目の前にハッキリ浮かんで来ます。十中も青山から移転して満二年目、体育館も講堂も教室も中途半端で、十中の誇りである黄塵万丈の埃を被り、四方青々とした麦畑の中に雲雀のサエズリを聞き、耐えられない程の人糞の臭いを呼吸させられました。それでも青梅街道のけやき林の並木に武蔵野の面影を偲びながら、玉中のよき伝統を作ろうと一にも勉強、二にも勉強、と頑張ったものでした。

私は一回生が入学したとき組主任をやり、二回生、

三回生も一年のとき組主任を仰せつかりました。特に三回生のときは、下ッ端だった私は他に保護者会の係だの生徒会の係だの色々やらされていましたので、たまりかねて白澤校長に文句を言いに押しかけたものです。しかし校長はとり合うどころか、「君は若いのだから玉中と共に歩んでくれ」と逆に激励される始末。そんな中で四回生の皆さんを迎えたわけで、今度は組主任にはなりませんでしたが、授業を通じて深く関わり、戦後の二十二年に故郷の佐渡に帰るまで、玉中一筋に歩むことになりました。

さて、皆さんが入学した昭和十八年には、東京府も都に変わり、府立十八中学も都立玉泉中学になり、校地も既に狛江村に一万二千坪の畠を買収しましたが、この頃から、戦争もようやく日本に不利な様相を呈し始め、食料も極度に逼迫し、大豆粕混りの米が胃袋を見舞うようになり、私達も狛江村の校地へ二時間も鉄砲ならぬ鋤を担いでの行軍ということになりました。

麦、ジャガ芋、サツマ芋、野菜——全くパンのために生きる動物に変わったわけです。人糞も担ぎました。テニスコート、バスケットコートはカボチャ園や芋園に変わりました。白墨や三角定規より鍬の方を持つ時間がふえて来ました。私も学校の片隅に三十坪ばかりの土地を拝借し、老眼鏡ならぬ近眼鏡をずり下げて、ヘッピリ腰でトマトやナツパ作りをやりました。「早く芽を出せ柿の種」式に、それも今は悲しくも楽しい思い出です。

昭和二十年八月十五日、この日は今も私の五十年の歴史の中で、何によっても埋め難い一つの空洞となつてとり残されています。その日の正午、日本無線の庭で天皇放送をお聞きした時、ただ涙だけがとめどなく流れました。「終った」「負けた」「どうなるのだ」この言葉だけが矢車のように、頭の中を目茶苦茶に回り続けていました。そして涙だけが汗のように湧いて出るのです。考えてみると私達は戦争をしておりながら、戦争のことを何も知りませんでした。ただ人の言うなりに苦しみ、苦しむことが、その苦しみに耐えることが戦争であり、耐えることが勝つことであり、そして

勝つためには苦しむことは当り前のことだ、と思つていただけなのです。だから、本当は何のための戦争かということも知りませんでした。無責任だといえば、全く無責任な話です。しかしその無責任さえ解らなかつたのだから、これ程愚かなことはありません。

昭和二十一年度より、十中と玉中を合併して都立十中とする——ということが都庁から発表せられるや、既に卒業した一回生、二回生の一部をも含めて「校長、教頭不信任、一万二千坪の校地も立派にあるのに、玉中を潰すとは何事か、ストライキだ、都庁へ行こう」と、終業式で十中生も既に式場にあるのに、玉中生だけは一室に籠もつて来ない。そこで私がなだめ役になり、ようやく納得させて三十分程も遅れて式場に入るという一幕もありました。

玉中は戦時中の花のように、パツと開いて六か年で散つてしまいましたが、生徒諸君の努力で、当時ようやく頭角を現わしてきた十中には学力においても、入試合格率においても決して劣りませんでした。もともとが同一校舎であり、同一校長の下で、初めは違つていた教務室も同一になり、何も連絡し合つて歩調をと

つていたのであり、だからもともとから同一校であったわけです。

さて、私はここで十中玉中の神話的生活を紹介しておきたいのです。まず十中での朝は、組主任とともに静座瞑目し、レコードで「君が代」を拝聴することから始まります。中食も組主任と一緒に。午後は授業前に中庭でラジオ体操、それから乾布摩擦、生徒称して寒風摩擦。それよりもっと参ったことは、毎月二十二日は「青少年学徒二賜リタル勅語」を校庭で奉読して奉拝強行軍。十中を出発し、水道道路を東へ甲州街道を経て明治神宮、靖国神社、宮城前で解散するのです。足の少々ガ二股気味で弱い私には、それこそ実に耐えられない難行苦行でした。

戦後の出来事では、初めて教員組合が出来て私が十中分会の役員になったこと、皇居前広場で、共産党は嫌だといって全教協より分離し、同志が日比谷公園に集まって全教連を作ったこと、二・一ゼネストの可否で徹夜分会会議をやったこと。また藤本教頭や大坪教頭には散々喰ってかゝって迷惑をかけたこと。このような思い出をいくら綴ってもきりがありません。ただ、

今更ながら年月の流れの早いのに驚くばかりです。

（都立西高創立二十五周年記念誌より抜粋、加筆）

（2期文集での加筆）

十中との併合の話は二十一年の三月の終業式の時初めて聞かされ、前田先生と一緒に校長や教頭先生に談判に行きました。ほかの中学はどうなのかと聞いても、駐留軍との関係などもあるというようなことで、はつきりした返事はいただけなかった。校舎が焼けたことで校長も辞表を出している状態で、あまりことを荒だてないでくれということだった。狛江には軍需工場の跡があり、そこを借りて玉中は独立したらという考えもあった。

書簡

高野 正巳 先生

拝復

クラス会の写真、有難うございます。暫く諸兄にお会いする機会がないので懐かしいですが当年は五月以来当地で過ごしているためつい御連絡もつかず残念でした。当地は八ヶ岳を背景にした山麓で娘夫婦が求めた山小屋。私は居候の形です、代々木の家は建て替えるとか、来年五月以降になるでしょう。

つい一週間ほど前に高遠をドライブして来ました。絵島、生島の事件で絵島が流された僻遠の地と聞いています。

現在は寂しい遠いところという印象はなく、観光地化しているようです。

愚生九十五歳と相成りました。元気です。来年は諸兄にお目にかかる機会を持ちたいものです。

以上乱筆にて御礼まで

機会がありましたら諸兄に宜しく御伝言下さい

十一月吉日

竹田様

近頃短歌の集まりに加わり、来年あたり歌集を出すつもりです。

「爽樹」というグループで杉並の医者が中心になっています。

平成十二年十一月吉日

山梨県北巨摩郡大泉村

西井出八二四〇―六〇三九

高野正巳

敬具

回 想

中川 清 先生

さて思い出を書く段になると、何しろ六十年近い遠い昔のこととて、思い出すことが案外少ないのに驚きました。一つは点齡—私の悪趣味で 点〓 〓 齡〓 〓 合せて dot age 即ち「ぼけ」の所為かもしれません。十八中と言えば先ず十八中の誇りの埃ですね。当時の日本としては仕方ないことも知れませんが相当の代物でしたね。次に移る前に私の近況を報告します。心臓弁膜症と膝の痛みで、さくら病院に入院、歩行器で歩いていきます。

心臓の方は自覚症状はなく、じつとしていれば無事です。将棋や川柳で暇潰しをやっています。本題に戻って奉拝行軍がありました。みんなで歩けば疲れないという訳で、私も若かったし、苦痛ではありませんでした。隔月に宮城前解散の時は都心で自由になるのでそれが楽しみでした。初めての教員生活で張り切って、毎時間小テストをやりました。

これは中学生時代に先生にいつも小テストをやっている、それが大層役立ったので、その真似をした訳です。いい先生の影響は大きいと思います。張り切った原因の一つは十中の先生方が私達を見下すような所があつて、それへの反発だったかも知れません。補講はやったかどうか、はつきり覚えていませんが、生来補講好きの男ですから、やったでしょう。後に東海学園女子短期大学に勤めた時、家政学科の出来の悪い学生の有志を集めて補講をして楽しかったことを思い出します。言葉遊びが好きでしたから、授業中によく洒落をとばしたことでしょう。卒業して数十年になる教え子が「先生に習った英語は忘れましたが、この言葉は覚えています」などと言われると、嬉しくなります。先生方は新米の私を優しく扱ってくれたのは、今思っても有り難いことでした。下北沢で落ち合う先生の一人に岡田さんがいて、一緒に活力食堂で、登校中の生徒に覗かれながら一緒に朝飯を食べ

たのは楽しい思い出です。諸君も七十歳を越えたことで、もう若くはありませんので、お互い身体に気をつけましょう。

ここまで書いて読み直してみても、大切なことを書き忘れていたのに気がつきました。藤本先生のことです。先生宅へは将棋を指しによく行きました。奥様はご健在で、電話でよくお話をしています。奥様からお手紙を頂くと住所の久我山を懐かしく何度も見ます。奥様から同期生の消息なども懐かしく伺っています。

玉泉中学時代の思い出

玉泉中学校の思い出を書く前に、この学校と私の縁について書く。私は学生時代ずっと身体が弱かったのだ、兵隊検査は第三乙種、昔なら丙種で兵役は免除になった。大学院に入って勉強しようと思ったが、不合格者に対して徴用の制度があつて、これで軍隊に入ると兵卒以下の待遇をされる。それで中学校に職を求め

たのだが、卒業（昭和十六年十二月の繰上げ卒業）した同級生は殆どすべてが入隊し、残っている者は極めて僅かだったので、大学新卒の私でも直ぐに東京府内の公立中学校に就任することができた。毎日、規則的に学校へ通っているうちに、俺は思った程弱くないんだという自信が付き、それに中学生は可愛いし、教えることは本来嫌いではないので、教師が職業になつて終つた。旧制高等学校時代に英文科に進む決心をした時に、英語を学んでそれでどうしようという計画もなく、ただ英語が好きだったから英文科へ進もうと決めたのだから、今から思えば随分呑気なものだった。教師が自分の天職であると覺つたのは昭和四十七年、五十七歳の時であつた。

昭和十七年一月十三日（だったと思うが）初めての授業の日は、声の配分がうまくできないので、午後になつてもう声がかすれてしまったことを覚えていた。新米の教師の私が当時どんな授業をしたかは忘れてしまったが、リーダー（特に一年、二年の）を暗記することがいかに効果があるかは十分経験しているので、暗記には力を入れたつもりだが、もつと根気よく、も

つと時間をかけるべきだったかとも思う。それでも同窓会の席で「今でも覚えています」と言つて二十年も前のリーダーの暗唱を卒業生の誰かがやつてくれると嬉しくもあり、懐かしくもある。三単現（正確にいうと直説法・三人称・単数・現在）の S のことを喧しく言つたことは覚えてゐる。長い間の経験からいつても、英語を書くとき、この S は英語のできない学生（私はこの言い方は好きでなく、英語に他の人程は時間と手間をかけなかった人ということにしている）は大学生になつても一寸もマスターできない。また、英米人の間でもこの S を正確に使うかどうかが或る程度教養の有無の基準になつてゐる。ただアメリカ合衆国は雑多な人種の溜り場だから、言葉の乱れがひどくて、かなりの人が *do* does not *do* はなくて *do* *do* not と平気で言つてゐるようだ。ルーズな（英語の正しい発音はルーズでなくてルーズであり、逆に日本語のスムーズは英語ではスムーズである）アメリカ英語がのさばっている当今、英語は随分教え難くなつた。

私の下宿していた下北沢はその辺の交通の要所で、

学校へ行くときこの駅で見上先生や岡田先生と落合つた。岡田先生は活力食堂の私の相棒であつたが、その他囲碁の好敵手でもあつた。序盤は少し勉強した私の方がうまかつたが、実戦経験の差で先生の方が強かつた。このことだけでも懐かしい先生であつた。将棋は藤本先生・長坂先生・土屋先生とよくやつた。駒割と成績の記録があるが、皆さんの名誉のために公表はしない。

後になつて西高と一緒になつた四回生の諸君はどうか知らないが、十八中時代は何となく十中の先生方になめられたような所があつて（当方の僻みかも知れないが）、それがかえつて励みになつて一回生など一生懸命に絞つたものである。一回生の成績はその所為かどうかは知らぬが、悪くはなかつたようである。

玉泉中学を憶う

牧野 太郎 先生

私が玉泉中学に勤めたのは、昭和十七年四月から昭和二十年五月に静岡に帰るまでの三年間であつた。その間、三鷹の中島飛行機研究所に、諸君と共に出勤したことを覚えてゐる。

玉泉中学は、小田急沿線の狛江に校舎を持つことになつていて、私も此の敷地を訪れたことがあつた。辺りは見渡す限りの麦畑で、松の木であつたと思うが、数本立つてゐた。多摩川の多摩の美称であると思われる「玉」と、その清流を象徴する「泉」を重ねた玉泉という校名は、実によい響きをもつてゐたと思う。現在では、私立を除いてはほとんどの学校がその所在地の名を冠しているが、散文的でロマンに乏しい。玉泉中学も、狛江に移つて独立してゐたら狛江高等学校となつてゐたかも知れない。

時の流れとはいえ、玉泉中はこの地に移ることなく西高に吸収されることになつたが、残念なことであつた。しかし、玉泉中における私の体験は、玉泉中学が

新設校であつたという点において私にとっては得難い体験であつた。静岡に帰つてから、私は高等学校の県立移管や、二つの高校の新設に係つたので、此の仕事の遂行に大変有益であつた。本当に有難いことであつたと感謝してゐる。

余談ながら、狛江の狛は高麗のコマであつて、靈龜二年（七一六）に高句麗の渡来人を集めて武蔵国に高麗郡を置いたことが続日本紀に見えるが、狛江の発祥も此の時に求められるであらうか。

玉中への思い出

見上 保 先生

私は、昭和十七年八月末台北州立台北第三中学校より東京府立第十八中学校（翌年都制施行に伴い都立玉泉中学校に改称）に転勤してきた。都立第十中学校と併設校で、校長は浅井治平先生、教頭は藤本純助先生であつた。玉中は昭和十五年開校であつたので、一期生は三学年でありその級主任をした。

昭和十六年十二月勃発した太平洋戦争も、敗戦への進行が、日に日にテンポが早まって行きつつあり、昭和十八年になると学校教育もそれに対応、軍事色が強まってきた、一期生も立川陸軍兵器廠へ一週間泊り込みで作業に二期生も昭和十八年九月には全生徒御殿場の陸軍演習場滝ヶ原廠舎で一週間軍事訓練に、伊藤少佐、足利少尉、付添には私と長坂、岡田先生も同行した。その時の写真三葉が現在手許にあるが、二期生諸君の三八式歩兵銃をもつ凛々しい姿が、五十三年前の姿である。（伊藤少佐は現役復帰陸軍中佐となり、小笠原防備司令官となつた

が戦犯で処刑された）

昭和十九年になると、玉中も十中も三年生以上は全員勤労学徒動員で学校を離れ、二年生以下だけ学校に残つた。二期生は全員陸軍氣象部に動員され、長坂先生と私が付添教官として毎日通勤した。以上のような次第で、二期生と教室での觸れ合の印象は頭に浮かんでこない。

陸軍氣象部で十一月末、三鷹の中島製作所に米B29一機が飛来爆弾投下、生徒と一緒に防空壕に待避したことを思い出す。これから東京はB29の空襲がはげしくなり、遂に焼野が原の様相となつた。

昭和二十年一月、氣象部の染谷中尉と雪の深い山形県鶴岡中学校で、氣象觀測班に所属参加していた二期生数名の慰問に行つた記憶が強く残っている。

玉中四期生との触れ合い

私が昭和十七年八月、台湾の台北州立台北第三中学校から、都立玉泉中学校へ転勤して、太平洋戦争敗戦の昭和二十年八月退職するまでの三か年は、私にとれば生涯における十四年間の教員生活に終止符を打った時でもあり、日本帝国壊滅の秋でもあっただけに、この間の思い出・印象は強烈に残っている。そして教えず諸君との触れ合い、接触は、生涯私の心を豊かにしている。私は拙著「教師冥利の日々」にその心情を書き、自分の子孫へのメッセージとして残したのであるが、その中のひと齣に、玉中四期生との触れ合い、そして現在なお深い交わりがある事にも触れている。今回村岡君より連絡で、同期生の回想録に一筆との事であるので、思い出の断片を二、三拾って見よう。

昭和十八年四月入学した四期生（都立十中では七期生）とは、四月二十二日奉拝行軍で行動を共にしたのが最初であるが、玉泉中学校の学区が、小田急線の沿線で原町田までであり、玉中校舎の建設予定地が狛江

であつたため、私が狛江駅近くに住居を定めたので、四期生とは、混む通学電車で一緒に通学した。通学中も、私は四期生とはいくつかのエピソードも記憶に残っている。

私は終戦後実業社会人となつたので、学校とのかかわり合いは少なくなつたが、たまたま昭和四十一年九月、四期生の案内で、同期会を銀座のそば屋で開催するとの事で馳せ参じ、二十一年振りの出会いであつたが、その時特に小田急線、井の頭線通学の諸君の面々が懐かしかった。その時の自己紹介で、武田和男、利光良二両君が、何と茅ヶ崎在住で、武田君は坂田農園、利光君は石油会社勤務で浜見平団地に住んでいるとのことで、帰りの電車で懐旧談に花を咲かせて帰宅した。その後ある日、突然、利光君夫妻が拙宅を訪ね、懇談の中で、四期生の仲間で時々ゴルフの会をやっているが、先生も仲間に、と勧誘されたが、俺は亡国遊戯のゴルフはご免だ、と返事したら、それなら仲間のゴルフ会へ優勝カップを寄付しろ、それは学校時代に先生から頂戴したゲンコツ代だと、爆笑しながら決めた。それ以来玉中四期生とはゴルフ会を続けており、茅ヶ

崎ゴルフ場に毎年正月の日曜日に何回来たことか。故人となった黒木福一郎君、武藤克宏君のプレー姿が目につく。今年（平成二年）も一月十七日茅ヶ崎ゴルフ場でやることにしていたが、前日の大雪でゴルフ場閉鎖のため中止となった。

また昨年八月十二日、原町田付近の同期生に呼びかけて、北里大学医学部長に佐藤登志郎君が昇任した祝会を、私が社長をしている茅ヶ崎フィッシュセンター相模原支店の相楽園でやろうと近藤徳彌君に連絡したところ、集まった者は瀬戸（旧姓・深澤）、関田、永井、村岡、中西、土方、武田、西山、成田、吉田、近藤、田中と十四名で、同期の桜の懐旧談に花を咲かせた。

武田和男君は昨年坂田農園を退職したが、ハワイのマウイ島に五千坪の農園用地を確保し、今月末に現地へ住宅建築の打合せにハワイへ渡るとのこと、彼の生活態度には敬服している。（平成二年六月記）



滝ヶ原演習場にて
右から岡田・長坂・伊藤・足利・見上先生

玉泉中学の思い出

1期 天谷 和夫

我々の学年から中学の入学筆記試験が無くなって小学校のクラスの中での成績順に入学する学校が大体決められた。そこで当時十中に間借りして新設される十八中に決まった。学校のランクなど全く意識に無かった。入学できればよかった。徒歩で通学できるのでとても気に入った。最初に最も印象を受けた事はからっ風が吹くと畑の土が厚く廊下に積もる事だった。精神的に幼稚だったせいか中学時代を振り返ってみて残念ながらこの先生との出会い、あの先生の言葉がその後の自分の人生に大きな影響を与えたという覚えがない。

しかし自覚がなくとも年少の時代に過ごした中学時代の環境は私に何か大きな影響を与えているに違いない。小学校の時自分を振り返り反省するなどという習慣が全く無かったせいか一年の修身の授業で小川先生が一週間ごとに自分を振り返って日誌を書かせられる宿題に戸惑った。この大切さが分かったのはずっと後になってのこ

とだった。また初めての漢文が全くわからず一年の最初の学期4点という落第点を取って父にひどく叱られたが二学期には9点という成績をとって面目を回復した。やる気になれば出来るのだという事を体験した。学科で好きだったのは幾何と理科だった。論理的な代数より直感力の必要な幾何が好きでいつも成績がよかった。土屋先生の授業が楽しみだった。

学年の生徒数が3クラスで少ないので武道の課目では剣道しかなく柔道が無かった。双子の兄が柔道をやっていたので家で首の絞め方を教わった。学校でたまたま小林博信君とふざけていた時にこれを使って彼の首を絞めた。この業がどの程度効くものか全くわからず手心を加えなかったため相手が「そんなにやったら死ぬじゃないか」と真剣になって怒りひっぱたかれたのを覚えている。何事もそれがどういう効果や影響があるかを考えずにやるという幼稚さを示す事件だった。歴史の家令先生の時

間最前列の教壇の前の机に座って話を聞きながら下を向いて臍の穴に鉛筆を挿し込んで左右にまわして遊んでいた時、頭の上の方から「天谷、臍の研究をしているのか」と声が聞こえ、続いてからからと笑い声が聞こえた。はっと気がついて上を向き先生を見つめた。しかし叱られずにすんだ。

二年の冬、太平洋戦争に突入した時の記憶は鮮明に残っている。当時は上から言われる事は疑わずに信じた軍国少年だった。家田君が反戦的な事を言っているのを聞いてけしからんと思ったことや緒戦の勝利の勢いがなくなつて戦況が芳しくなくなつた頃、尊父が陸軍の参謀だった植地君からドイツの秘密兵器V2号の話を聞いて心を弾ませた記憶が残っている。当時幼年学校や海軍兵学校などの勧誘があつたが、理科が好きだったせいか国のために尽くすならば技術将校の方が貢献できると考えて応募しなかったのを覚えている。このことはその後の人生に大きな影響があつたと言える。

三年の一学期の期末試験の時、たまたま父が買ってきて

たアイスクリームについてきたドライアイスを使って兄とラムネを作った。最初少量のドライアイスを使って旨くいったので二回目に沢山入れた。泡の出方がゆっくりになってきたので危険だと直感した。「危ない」と叫んで周りで見ていた一番下の弟を抱いて逃げた。他の弟も一緒に逃げた。その直後兄が持っていたラムネビンが破裂し、兄は頬と右人差指の腱をきる大怪我をした。その時頼についた傷で双子の区別がつき、間違われなくなつた。この事件も後から考えると冷や汗が出る。

受験が近づいて模擬試験が十中と一緒に行われた。十八中が十中に負けずにより成績を上げたので先生を始め皆が喜んだのを思い出す。三学期の試験が終つてのどかな陽がさす麦畑を見ながら、これから試験勉強しないで自分の好きな事が出来るという何ともいえない開放感を味わいながら家に帰つたことを思い出す。今はその畑の場所に家が立ち並び自然の面影はない。比較的に自然に恵まれて、電車に乗らず四年間徒歩で通つた事は人間形成に大きな影響があつたと思う。

桑の実に惹かれて空襲を忘れる

1期 斉藤 美寿

日本にはすでに用なき戦闘機

低くすわりて草に埋もるる

歌人近藤芳美の「立川にて」と添え書きされたこの歌を読むと、その情景がありありと目に浮かんでくる。立川陸軍航空廠の勤労働員で整備を担当、飛行班でも又武装班に移っても、専ら一式戦闘機を扱っていた私には、草に埋もれたままの戦闘機の気持ちまでが、伝わってくるようにも思われた。それは陸軍航空の補給、技術、生産の中心基地にいて、次第に敗色が濃くなりつつあった状況を、直接肌で感じながら過ごしていた当時の、私の思いに通じるものがあつたのかもしれない。

中学校生活五年間（実際は卒業後の動員延期で三か月が加わる）の中で、半世紀を経て思い出せるのは、最終の一年三か月間の出来事ばかりである。通年動員が始まってからの異常な体験が強烈で、戦中でもまだ平穏といえる四年までの学校生活の記憶は薄れてしまっている。

初めてのB29の来襲、火気厳禁の油倉庫での喫煙、空襲警報下の授業、等々印象に残っているものは多い。ここでは、関係した少数の友だけが知る「退避中に食べた桑の実」について振り返ってみる。

B29の大編隊接近の情報で退避開始。多摩川の河原は飽きたので砂川方面へと、数人で相談して飛行場の北へ出た。この付近は養蚕が盛んで一面の桑畑、熟した実が沢山付いていた。その甘い実を食べ始めたら、空襲などは頭から消え、口の周りを紫色にしてひたすら食べたふとB29とは違う爆音に気付き、見上げると敵戦闘機ノースアメリカンP51の編隊だった。硫黄島が玉砕し、小型機の直接来襲も可能になった。B29だけと思ったのは迂闊だった。桑畑は平坦で遮蔽物がない。でも、こちらへ向かっていないからと気を緩めたのも束の間、旋回して攻撃姿勢に入った。もう、桑畑に伏せるしかなかった。

敵機は機銃掃射をあびせながら突っ込んできた。黒い大きな機体が腹を見せて、轟音と共に頭上を通り過ぎる。機体の巻き起こす風圧で桑の葉が騒ぐ。一機また一機と襲ってくる度に、体が少しでも薄くなるよう必死で地にしがみつく。ようやく、七、八機の息づまるような攻撃が止んだ。それまでの時間の、何と長く感じたことが。

幸いに皆無事だった。見回すと、すぐそこに対空陣地があった。そこからの射撃に応じて敵機が、私たちの頭越しに攻撃したのだ。立川の軍事施設防衛のため、こうした陣地が方々にあるのは知っていたが、食べることに夢中で近寄り過ぎ、危うく側杖を食うところであった。戦後、桑の実を何回か食べてみたが、この時の美味さには遠く及ばない。

航空廠も航空工廠もまた飛行場にしても、真先に爆弾で叩かれてもおかしくない重要な施設である。たしかに小型機の攻撃はよく受けたし、重火器装備の試作機キ九三の格納庫や隣の航空技術研究所等は激しい爆撃を受けている。運良く私たちは、勤務中は昼も夜も爆弾の直接

の攻撃は免れた。だから、何度か危険な目に会いながらも、なおのんきでいられたのである。本当の厳しさがあったのは、恐らく私たちの退廠以後であろつ。

いまさら負け戦での事を思つのは癪であるが、戦中を過ごした人はそれぞれに、風化しないものを背負って生きてきた。戦時中の体験にろくなものは無かつたし、本来の学校生活はできなかった。しかし正気隊で寝食を共にしたり、支え合つて苦難を乗り越えてきたことは、私たちの一体感を強めている。玉泉中が実在しないことは淋しいが、同期の方々への限らない親しみは消えることはない。

タンカン

1期 石毛 清雄

「このタンカンなことが判らぬか！」三八銃を手に二列横隊に整列した少年たちを一人一人次々に指し、同じ質問を繰り返すが、少年たちは「わかりません」「忘れしました」と答えるばかりで「知りません」と答えるものはない。

短軀・赤銅色に日焼けした配属将校伊藤少佐は地面を蹴り、口髭の先から唾をとばしながら「タンカン」を連発するが、少年たちは直立不動の姿勢で立ちつくし、少佐の期待する言葉を発するものは居ない。

答えるべき言葉は少年たちは皆、百も承知のことであるが、心にもないことを臆面もなく口にするのは気はづかしくて躊躇していただけのことである。軍国教育真盛りの頃ではあったが、この少年たちは充分マインド・コントロールされて居らず、デリカシーを内に秘め、ただただ伊藤少佐の面罵に耐えていた。

その教練の時間が終わり、解散後、ゲートルをほどきながら少年たちはニヤニヤ顔を見合わせていた。

「あのオッサン、余程頭が単純に出来ているんだな」

「あだ名をタンカンにしよう」

「タンカン」のあだ名がどれだけ広まったか、今はもう忘れた。あの時答えるべき言葉も「必勝の信念」であったか、「米英撃滅・撃ちてしまの精神」であったか、既に記憶にない。

みつみつし久米の子等が

垣もとに植えしはじかみ口ひびく

我は忘れずタンカンの声

伊藤少佐についての記憶はあと二つある。一つは学校教練の査閲に際し、時の総理東条大將が伊藤少佐と陸士同期（十七期）のよしみで来校するという事で、学校中が緊張に包まれたこと。

他の一つは昭和十八年六月、伊藤少佐に引率されて行った富士の裾野の野外演習「板妻廠営」である。演習の内容は殆ど忘れてしまったが、近藤晴彦著「春の祭典」によると結構充実した現役の兵隊さながらの歩兵訓練で

あった筈だが、体力章検定級外丙の落ちこぼれ少年にとつてはただただ辛い肉体的苦痛の連続であった。富士の裾野の荒地を小銃を片手に、地面を引きずらないよう持ち、匍匐前進させられた時の苦しさなど忘れ難い。

そしてその宿泊演習中に食中毒事件が発生し、何名か発熱する者が出た。その中であつて伊藤少佐が「熱発」とか「面洗所」とかいう言葉を発するのを耳にして、落ちこぼれ少年は単簡に悟るのであつた。

「なるほど、軍隊では熟語は上下反対に言うのか。『天皇』は『ノーテン』と発音し、死ぬときは『脳天陛下万歳』と言うわけか。」

昭和十九年に入り、戦争が急迫を告げて来た頃、いつの間にか伊藤少佐は学校から姿を消していた。

それから四十年経過した昭和五十九年、当時のタンカン少佐とほぼ同年令に達した元少年がたまたま手にした『歴史と人物』誌に元父島派遣参謀による「父島事件の顛末」なる記事があるのを見つける。そこに伊藤少佐と同姓同名、かつ東条と同期のかなりの老人伊藤中佐なる人物が登場するのである。

敗戦後、捕虜殺害に関し旧軍人たちが事件隠蔽と密告

に汲々とする中、その伊藤中佐は正直に事実を認め、グアム島の軍事裁判により十三階段を落着いて上がったとある。

そのいまわしい事件（殺害だけでない）の当事者とタンカン少佐が同一人物とは考えたくない心情が旧少年にある。強いて考えればタンカン少佐に中佐に昇進する器量・才覚なり功績があつたであろうか？——別人ではないか。

一方、単純な動機で事件当事者となり、事件隠蔽工作など行つた形跡が見られず、愚直にも事実を認め、運命を受容してしまった——その単純性に両人物の影が重なる。

回想

1期 安保 昭夫

「木曽路はすべて山の中である。」 島崎藤村の

『夜明け前』の冒頭です。

私の住む岐阜県中津川市は、この木曽路の西の入口にある人口五万五千程の小都市です。

今や都市化が進み、昭和二十年五月二十五日の東京大空襲で家を焼かれ、無一物になった家族が避難したのが父の在所近くのこの町でした。当時三万人位の里山も、今は、名古屋市の衛星都市化しつつあって、昭和二十四年、当地の中学校で教鞭をとり始めた頃の、鄙びた面影は、すっかりなくなっていました。

思えば中学時代の会話の中に「夜明け前」を読んでいた友人も数多くあり、当時の中学生は随分思索に耽った仲間達だったと思います。それにつけても、島崎藤村のことを、フジムラトウソンと云った友人がいたことが思い出され、それにまつわるいろいろの事が走馬燈の様に浮かんできます。

先ず当時の先生方、校長さんにヒットラーとあだ名

で呼んだ白沢校長、教頭で英語の藤本ドン助先生、一年の時の担任「金ペーコ・銀ペーコ」を出版された高野先生、数学の土屋ケモ先生、体操の竹内目ん玉先生、剣道の降旗五段、往復ビンタの見上先生、「突然行つて突然帰って参りました。」と徴用の挨拶をなさったので突然と云うアダ名になった英語の前田先生、高橋の毒まんじゅうことペチャ先生、森田教官、音楽の貝増先生、おそろしかった生物の長坂先生、勤労働員の面倒まで見て下さった都筑先生（一部ではフルトヴェングラーと呼ばれていた）。漢文の中込先生、おらずと授業された中村高樹先生、小さな声の理科のポリン先生、背の低い数学の岡田先生、等々、又その先生方にまつわる思い出も数限りなくあります。

世は軍国主義の真只中、新宿を七時五十三分に乗ると、大抵遅刻するので西荻の改札を駆け足で通り抜け、十中の上級生の「整列！」と言う掛声で並ばされ、一歩目を強く踏み出し、後は速足で学校迄黙々と二十分

間歩いて学校へ着く、電車の中でたまたま座っていた私の前に女学生が立っていたことがあったが、後で十中の上級生から「あの女学生とどう云う関係か」となじられた事など、今では考えられない世相でした。でも、一日おき位に、一本電車が遅くなると西荻からは駆足、だから中距離は、私は速かった。体力章検定の二千米で一着にゴールインした時、先生が八分三十秒と云われたので「先生一分違っています」と最終組で走り、やはり一着、タイムは七分三十秒だったことを覚えている。

あのせまいグラウンドで、先生の名前は忘れたが、プライマリーの免許をとった先生が、本物のグライダーで五米位浮き上り、見事着地したこと、観閲点呼のため、配属将校がやたらと怒鳴っていたのも思い出の一つ、教室の勉強もさることながら、外の想い出の方が鮮明に残っている。グラウンド西側の高い給水塔も、何かシンボルのような印象がある。

昭和五十八年十一月、用あって東京へ出たついでに、久我山駅に降りた。畑の中に、ポツンとあった井の頭線久我山駅は、街の真中となっていた。（踏切りを渡

って畑の中の小径を掘割の方へ上って行けば）なんて考えていたのが、家がたて混んで方角はわかるけど、道が全然わからない。うろろろしながら、給水塔を見つけた時「あーここだ」と嬉しかったものの回りの様子は全然違う。傘の先で芋をつき差したとこなんて、ありやーしない。作業の時間と言うのがあって、草取りの様子で点数をつけられた学校園なんてありやーしない。水道道路から立派な道が校舎の中央にのびている。その道路の入口には立派な食堂があって、男女高校生が昼食を摂っている。制服でなく、自由の様だ、どう云う光景なのかな。

帰り道は、水道道路を歩いて帰ったが、所どころ見覚えのある木や家は見つけたものの、畑の真中を一直線に道路だけ走っていたのが、両側は商店と住宅だらけ。どこから西荻駅へ入るのか、とうとう人に尋ねた程だった。

でも、一番忘れることの出来ないのは、勤労動員で、立川の航空廠へ行ってからの事でしょう。毎日飛行機のオッペシやシートに機体番号を書いたり部品を運んだり、発動機（エンジンの事）を所沢や狭山や中島飛

行機へ持ち運びしたり、だがその事ですごく飛行機というものに興味を持ったことは確かです。

危ない目にも遭いました。中島飛行機へ、エンジンを取りに行く時、トラックが故障して出発が三十分も遅れたその間に、B29が、頭の上を飛びこし、これから行く中島飛行機のエンジン製作工場を滅茶苦茶に破壊して行きました。トラックが故障したばかりに、生命拾いをしました。又、桑畑で桑の実を摘んでねころんでたべていたところ、P51の猛烈な機銃掃射を受けこれも待避壕のおかげで助かりました。只、気の毒だったのは、盟友の、富田勇君が、肺結核の為、亡くなられた事でした。級長の村田君が、ほんとによく面倒見てあげ、皆も交代で看病したのに・・・。

そんな中、やったのかやらなかったのか、わからない卒業式を玉中二期生と一緒にしたのも妙な想い出として残っています。

毎朝、グラウンド向けのスピーカーから流れる国歌を不動の姿勢で聞き、当番が読む「校訓・修文練武・強く清く賢く」をきいて始まった玉中の生活の最後は侘しいものでした。

藤村ではないけど、明治維新の激変の中をどう生きぬくか困惑していた藤村のお父さんの苦悩と違って、只動乱の戦中を、そうするのが国の為と過した私自身、申し訳なく思っております。

この僻地での教職四十七年間、何をして来たのか、臍を噛む想いです。そして今、私の近辺には、中学同期が一人も居ないことに、何ともやるせない寂しさを感じている毎日です。

木曽路の入口の寒村より

解体中の給水塔



玉泉中学校時代の思い出

1 期 細越 弘康

玉泉中学時代の思い出の一つは、代数の参考書のことである。と言っても今より六十年も昔のことなので、現在その参考書は持っていない。然し当時強い感銘を受けたので、記憶に残っている。

その参考書は「代数学の軌道」、著者は府立高校教授・小林幹雄先生であつたと思う。これは三年の時、理科担当の長坂先生が推薦されたものであるが、その特色は、一般的解法のほか、各章の終り毎に、写真入りで経歴・業績、その人柄等が書いてあつた。これに接するとき、受験勉強を離れて、興味と関心を抱かせるものがあつた。中でも最も印象に残っているのは、次の二人の数学者についてである。

まずフェルマー。(Fermat, Pierre de) 一六〇一～一六六五、フランスの数学者。フェルマーは、一六三〇年代に、ギリシアの数学者・ディオファントスの書物を読み、気付いたことを欄外の余白に書き込んでいった。その中に次のようなことを述べた。

『 n が2より大きい自然数であれば、

$$x^n + y^n = z^n$$

という方程式は自然数解 x 、 y 、 z を持たない』これが「フェルマーの大定理」と呼ばれるもので、未だに一般的証明が出来ていない。フェルマーの頭脳は驚くべきものであつたから、或いは彼自身は解いていたのかも知れない。

中学卒業後も、数学を専攻したわけではないが、この問題に関心を持ち続けていた。この定理は、長きにわたり証明されなかつたが、一九五五年頃より、日本の二名の数学者が、フランスの数学者と共に研究に精励し、解決に貢献した。そして一九九四年、イギリスのワイルズにより、最終的に証明された。実に三百六十年を経て、最終的に「定理」となったのである。

今一人はニュートン(Newton, Sir Isaac) 一六四三～一七二七、イギリスの数学者。物理学者。天文学者。彼は言った。『我々は、真理という大海の

前で、きれいな貝殻や変った小石を拾って遊んでいる子供に過ぎないのである』その敬虔・厳肅な態度は、思わず襟を正しめるものがある。

このニュートンの言葉は、四年の時、英語の藤本先生が副読本として選定されたユース・オブ・ライフ (Use of Life) 著者ロード・イーヴァリーの第一章にも出てきた。しかし私には、三年の時に「代数学習の軌道」で読んだ時の方が遙かに強い感動であつた。

ニュートンには、また神学に関する著述もあり、彼の思想にも、その影響があつたのかも知れない。

今日科学技術の驚異的發展による社会の諸様相にも、幾多の矛盾が現出していることを考えるとき、ニュートンの自然に対する謙虚さを想起することが必要なのではないだろうか。

玉中時代の思い出

1期 小林 博信

朝の日課は、久我山駅でおりて順番に列をつくって登校しました。先生・上級生に敬礼から始まりました。段々に慣れて来て、富士見ヶ丘駅でおりて、造園の芝生を通って通いました。駅の前に『木いちご』の木があつて帰りには良く食べました。シワザル先生、河野先生は久我山駅前の『活力食堂』で食事をしていました。朝は朝礼、昼は体操に乾布摩擦をしました。年間には二十二日に行軍がありました。学校から明治神宮、靖国神社、宮城、日比谷公園で解散を一回毎に逆のコースを行軍しました。年に一回マラソン競走がありました。赤岩君は何時も一着でした。玉中の二年の時に校内の剣道大会がありました。私は七人抜きをして『いづみ』の本に感想文を書きました。高橋先生にはとても喜んでもらいました。四年の時には十中の浪人十中、玉中の合同模擬テストがあり、私は一二八番で教室の前の廊下に掲示があり、とても嬉しかった事がありました。木村君は二番で立派でした。高橋先生に

はとても可愛がつて頂き、正月には級の者が先生のお宅でゲーム等をして遊びました。三鷹に住んで居られました。四月の開校記念日の休日に先生と級の者が多摩丘陵にハイキングをしました。三時頃にアメリカの爆撃機の銃撃に遭い、目の前を飛んで行く敵機を見ました。それから戦争がひどくなった様な気がします。

高橋先生とは亡くなられる一寸前迄文通をして頂き、病院から来た手紙が最後になってしまいました。江古田のお墓に酒井堅造君とお参りに行きました。高野先生は授業中に黒板に八の字の私のマユゲを書いて一人で喜んでいました。その事で私はメガネをかける様になりました。シワザル先生、ケモ先生、メンタマ先生のおだなをつけて喜んでいました。メンタマ先生には怒られてばかりいました。ドン助先生の英語の副読本の『ユース オブ ライフ』は日本語に訳しても私にはよく分りませんでした。音楽は十中の一年は毎年『小鳥は唄う』というABCの歌が音楽教室から流れ

て来て春の感じがよく出て来ました。音楽は白沢校長の訳詞ものが多く、今考えると賛美歌の類を唄っていた様な気がします。四年間には高下駄から靴、ゲートルを巻いて洋服に桑の皮、靴はサメの皮のものが出てきた様でした。

五年になると人数も半分位になり、立川の飛行場へ勤労働員に出掛けました。学校へ行く事も殆んどなくなりしました。作業は飛行機の燃料補給・整備で、戦闘機・偵察機など陸軍の戦地に行く飛行機が多く、特攻隊の人達も送る事がありました。最後に語り合って出発して行く時は涙が出ました。三回程試験飛行に乗っけてもらいました。天気の良い日には空襲がある事が多く、上空をB29が飛んで来ますが高射砲の弾もとどかないので下でゆっくり眺めていました。立川飛行機の新鋭機六枚プロペラの偵察に来ていた様でした。宿舎の正気隊ではたまにはおやつの支給がありました。作業のある日曜日には全員で多摩川に泳ぎに行った事もありました。配属将校の学校での教練も全員がサボツタリして、その時代としては大変な事で、多摩川の時は整備兵の軍人にしばられました。が、学校の事は配

属将校の恩情で助けて頂きました。N君。T君を中心とした、勇気ある行動でした。

皆仲良く一年間事故もなく送る事が出来ました。都筑先生から勤労働員皆勤につき成績順位三十二番で卒業といわれ、やれやれと五年間の玉中生活も終りをづけました。同期生の皆様に本当に御世話になりました。

私にとっての玉泉

1期 木村 寛夫

(1) 入学するまで

家庭の事情で小学校を転々とした自分が、六年生の一学期の途中で桃井第二に転校したことが、大袈裟に言えばその後の一生を左右する結果となった。田舎の小学校の優等生もあまりのレベルの違いに唯驚くばかり、同郷の有力者の紹介で、十中の先生を通じて前の志村第一での成績などをふくめて入試選考の参考にして頂いてやっと新設の府立第十八中学校に入ることが出来た。当人は知るよしもないが、こんな経緯が「補欠で入って一番になった奴がいる」という有難くない伝説のもとではないかと思う。お世話になった多勢の方々にお礼を申し上げたい。

時は皇紀二千六百年、昭和十五年の中学入学は子供心にも晴れがましいものがあつた。この翌年から小学校は国民学校と改称され、戦時色が次第に強まって行くことになる。

(2) 十八中から玉泉へ

十八中では併設されている十中と区別するためにクラスをA、B、Cでなく、い組、ろ組、は組、と名付けられた。そうでなくとも新設校ということで一ランク下に見られ勝ちだったが、かえってそれがバネになって後の対抗意識というか競争心が芽生えたのかもしれない。兎に角、先生も生徒も熱心でよく勉強したものだともう。

荻窪二丁目の自宅から約二十分かけて徒歩通学を続けたこと、一年生の二期期末ヘルニアの手術で入院して期末試験が受けられなかったこと、二年の末か三年の初めに校旗が出来て旗手になり学校の周囲を分列行進したときのつらかったこと、三年になって狛江に学校の用地がきまり独立校舎に入る希望に胸をふくらませたこと、体力章検定で百メートルがなかなかクリア出来ず初級さえとるのに苦労したこと、四年のいつ頃だったか富士の裾野へ野営訓練に行き、演習中に敵軍に捕まってしまったことなど断片的に思い出すこと

は多いが、何といっても玉中時代の印象は「よく歩いた」という一語に尽きると思う。毎月、二十二日は学校から皇居前広場までの全校行進だった。狛江の学校用地へも何度か歩いて作業にいった記憶がある。その他、井の頭公園をまわって牟礼街道を戻ってくる一万メートル競歩など、短距離は苦手の自分も長距離を走るのは楽しかった。思えばこの頃の基礎体力造りがその後の栄養失調の時代を乗り切り、今日まで生きて来られた遠因になっているのかもしれない。

(3) お世話になった先生方

玉中には優れた先生方が多勢おられた。その中でも私が後々まで恩恵に預ったのは、一年の時の家令俊雄先生だった。当時我が家の経済状態を心配された先生から大日本育英会という機関が新設されるので是非その奨学資金を借りる申し込みをしなさいと勧めて頂いた。両親も世間体その他迷いがあつたらしいが、後々のためにと説得され一番少ない月額十円をえらんだ。授業料五円五十銭の時代のことでは最初是有難味もそれ程なかったが、大学卒業の頃には月額一万六千円になり自宅通学の学生としては余裕のある日々を送ること

が出来た。勿論アルバイトもしたが学生時代を通じて親に一切学資の負担を掛けずにすんだのは家令先生のおかげである。

ろ組の担任も家令先生から 小山佐吉先生、河野清先生、都筑修一先生と変わり、一時い組の高橋一夫先生にも兼務で見ていただいた記憶がある。学科別には漢文の高野正己先生、英語の岡山茂夫先生、数学では土屋長松先生のほか、岡田信吉先生が大変目をかけて頂いた。一年の夏、謹厳な藤本先生が英語の授業で黒板に「You might or not head today's at

ing」と書かれて、意味がわかるかと聞かれた時は皆ポカンとしていたが、種明かしをされて大笑いになったことがある。まだまだユーモアの通じる世の中だった。

敬愛する玉泉の友人達

玉泉中学が創立から六十周年を迎えるという。文集の中で昔日を偲んで、心に残る友の姿にふれてみたい。何も娯楽といったものの無い時代で、友達付き合いも良い方ではなかった自分にとつて、先ず、当時から顔

がひろく何事にも積極的だった菊池十四吉君には色々
と声をかけてもらえて有難かった。社会に出てからも
折々のお付き合いはあったが、今でも現役で、阪神大
震災で芦屋の豪邸を失われる大難に遭われながら元氣
で活躍しておられる姿には頭がさがる。前田同窓会長
の期待に応えて新設の西校同窓会関西支部長を引き受
けていただいているのも嬉しい。

先日急逝された 竹内宏君とは同じ荻窪住まいの関
係でお宅へよく遊びにいった。慶応の経済から日銀へ
と父上の後を継いだ孝行息子で、結婚披露の宴に中学
の友人としてただ一人招いて頂いたことが良い想い出
になっている。麹町の半蔵門会館で出席者全員が当時
珍しい礼服装（さすが日銀）、テニスのプレーヤーに
たえて三つの「C」の付く言葉 特に

“Confidence” (Combination, Control) が大切とい
う来賓の祝辞が新鮮で印象的だった。山登りが好きで
見かけによらず頑健だったのに肝臓の難病で急逝され
たのは残念でならない。クラス会の席で三内丸山の遺
跡のことで教示を受けたのもつい一年前のことである。
もう一人、坂井安雄君とは一高の寮で同室であつた

関係で後の付き合いのほうが長かった。中学時代中野
のお宅へ伺った頃は、優しいお母さんと元氣な妹さん
がおられまさに良家のお坊ちゃんだったが、戦後お父
上が朝鮮の鉱山経営で築かれた財産の全てを失い、高
校から大学卒業までアルバイトで家計を支えた彼は、
まるで別人のように逞しい社会人に成長していった。
富士見高女の教師を振り出しに長く教育界で活躍し、
後年 東海大の松前重義氏の知遇を得て新しい学校造
りに専心したが、志半ばで悪性の癌に冒され再度の手
術も空しく不帰の人となった。もう三〇四年になると
おもう。

その他、桃井第二の唯一人の同級生で小学校時代か
ら数学と悪戯の天才ぶりで有名だった天谷和夫君とは
一緒に一高の理科に入り、大学も同年度に卒業して暫
くお付き合いがなかったが近頃は飯田会（小学校のク
ラス会）で折々顔を合わせている。今や専門の環境問
題でNGO組織で活躍しており、その情熱ぶりはとて
も真似ができない。

入学当時名実ともに生徒全体のリーダーだった梅村
喜夫君は、終戦後軍の学校から一高に転入された。小

生が寮生活をしていた時分、お宅へ伺って 世界文学全集を数冊をお借りしたがそれが盗難に遭い大変ご迷惑をお掛けした記憶がある。卒業後臨床医の道を選ばれ、藤本先生をはじめ多くの恩師・友人の方々が彼に面倒を見てもらったと感謝していると伺っている。後年、彼が院長をしていた城東病院に入院中の小生の仕事仲間を見舞いにいった時、それとなく先が長くないことを知らされて驚いたが、気を取り直して不幸を最小限にとどめる手配を済ませることが出来たのは有難かった。七十歳を過ぎてから調布に高齢者専門の診療所をほとんど独力で創設された行動力には驚嘆の他はない。ご盛業を希う次第である。

数え挙げればきりが無いが、少数民族出身（！）でありながら推されて西高同窓会長を引き受け、会の改革と発展のために挺身奮闘しておられる前田信昭君、散り散りになっている同窓生や、消息の知れなかった恩師の先生方と連絡を取り、平成五年玉泉の会復活をはかり、以来毎年十月十八日のクラス会開催を一人で取り仕切ってくれている 竹田信彦君、その他 演劇演出に尽きない情熱を傾けつづけている 万年青年の若林

彰君、ご夫妻で学校教育に専心され、今は自治会長として地域の方々に尽くしておられる山路和男君等々、世のため人のために活動し続けている多くの友人達を心から誇りに思っている。

当時の日記から

1 期 村瀬 正直

七月二十日 月曜日 晴れ

光陰矢の如しとはよく云はれる言葉である。又、月日の流れは水の流れに似て再びかへる事がない。この一学期間も全く夢のごとく早くも過ぎ去ってしまった。三年に進級しそろそろ勉強も始めなくてはならないと考へたのももうずっと約四月前のことだ。果してこの一学期間最初の志通りにやったかどうか。幸ひ通知表に現れた数字は前よりはかなり上がつてゐる。だが今学期はそれ程やったとは思はれない。ただ試験の時には相当頑張った。それでこれだけ保てたのだ。しかし自分は、試験の点をよくする為に勉強するのではない。順番が上がる為に勉強するのでは勿論ない。順位なんかどうでもよいのだ。唯自己の実力さへあれば、そしてその上に努力さへ重ねれば立派な人間になれるのだと思う。かう考へてみるとこの一学期間好結果を収めたとはいへ、その勉強は殆ど試験の為に他に何も益になつてゐない。

諸先生のおつしやる通り、ただこつこつとして自分の実力を養ふ者が最後には成功するのだ。来学期からいや明日から早速勉強をはじめよう。

七月二十一日 火曜日 晴れ

さあ、今日から待望の夏季鍛練期間一ヶ月にわたる長い休暇だ。

大東亜戦下初の意義深き休みである。休みになる前など友達と今年は夏休みがないんじゃないかと話し合つた事もあつた。全く炎天下に海行かばのあの心持ちで御活躍下さる皇軍将兵の労苦を考へる時、休みなどあつてはすまない気さへする。しかし体の鍛練も大切だ。今年は大戦争下にもかかはらず旅行も許されてゐる。この好機に大いに身も鍛へなくてはならぬ。今年の家で過ごすのかと思つてゐたがどうやら家中で岐阜へ行くことになるらしい。だが、僕は岐阜より越後の田舎へ行きたくてたまらない。それは岐阜は大勢であ

るが越後の方はお婆さん、をばさんと赤ちゃんが二人きり、まことに静かだからである。広い家でまはりはずっと島ばかり、遠くには山が連なり、すぐ裏には小川がありお宮があるといふ全く田舎らしい風景の高田市外の方がいいのだ。家ではみんな岐阜へ行けと云ふので全く迷ってしまう。

七月二十三日 木曜日

晴れ

昨日、陸軍省から空の軍神加藤少将について発表があつたが今日の朝刊にその戦歴や日頃の行ひ、生ひ立ち等を細かく書いてあつた。加藤少将は実に我陸軍の至宝であつたといふ。その武勲は前後七回といふ感状によつても知られる。しかも人格高邁と書いてある。真に不世出といはれるこの軍神が五月二十二日アキヤブ沖合で自爆したのである。我が軍独特の大和魂を十分に發揮したこの少将の武勲こそただ軍人のみならず、我々日本国民は深く心中に刻みつけて永遠に忘れてはならないのだ。

今日お昼少し前誰だか西瓜をもつて来てくれた。まる一年ぶりで大きな西瓜の顔を見た。暑い暑いとうな

つてゐる今日この頃、氷で冷やして冷たくなった西瓜にかぶりつく味は全く忘れられない。

お昼過ぎ、がたがたいふ自転車の修理をやる。どんな・がちゃがちゃたたいたたりひねったり、ねぢを廻したりして汗をふきふきやつとがたがたを直した。

七時頃一時にあたりが赤くそまつた。美しい夕焼けだ。東の方に浮いてゐる雲に夕日が映えて屋根も木々も庭も顔もあらゆる物はみんなぱつと火の様にそまつた。

七月二十四日

金曜日

晴れ

今日もまた寝ぼうをしてしまった。七時頃まぶしい目を細くしながら起き出す。今日もよい天気である。暑くならないうちにとまって勉強を始めたがどうも身が入らず遊んでゐるのか勉強してゐるのか解らないやうな勉強をしてしまった。

この間池の中に四つばかりおいてある石の上へ小さな蟻を沢山のせておいた。その蟻がもうここが自分の巣かとも思つたのか生活を始めたらしい。昼の暑いときはみんな陰の方にまわって頭を集め何かさうだん

でもしてゐる様子である。ふと他の大きな蟻を入れて見たらどうなるかと思ひ、早速大きいのを一匹その石の上へのせた。大きいやつはびっくりしてせまい石の上を行ったり来たり始めた。まはりが水ではどうにもならない。そのうちに遂に小蟻の群れの中に飛び込んでしまった。それとばかり小さな蟻は右へ左へかけまはった。大蟻も又、右往左往始める。その中一匹の小蟻が大蟻の脚へかみつく。さすがに大蟻は必死となつてその蟻をふるひ取らうとするが『何くそ』とばかりじつとかみついて離さない。ついに大蟻は体をまるめて脚にかみついてゐる小蟻にかみついた。小蟻は大きな口にかみつかれ死んでしまつたらしい。だが未だしつかりとかみついて離さない。しかし多勢に無勢、一匹離せば一匹が飛びかかり、両方共生死を賭して大奮闘を続けたが遂に大蟻はおさへられてしまった。まさに両軍見てゐても息づまる様な戦ひであつた。蟻でさへこの敢闘精神を有してゐる。それはただ自分の生命を保たうといふだけであらうが何かしら教へられる所があつた。

七月二十六日

日曜日

晴れ

澤山出た宿題の中で幾何が最もはかどつてゐる。幾何は面白いものだ。解らない所を一時間も二時間も考へて出来た時の気持ちは全くたまらない。今日も朝から幾何ばかりやつてゐた。夏にふさはしい入道雲がいかに暑さうに太陽の強い光線を受けて真つ白に輝いてゐる。

午後池の水のとりかへをやつた。水がきたないのであたたかくなつたせい、金魚が盛んに水面に口を出してはあつぷあつぷやつてゐる。ホースに穴があいてしまつたのでいちいちバケツに入れて運ぶのでくたたくに疲れてしまつた。しかし奇麗になつた水の中を赤い尾をゆり動かしながら金魚のうれしさうな姿を見れば何だか疲れもふつ飛んでしまひさうだ。思へばずい分永くあの池に飼はれたものだ。実に三・四年もたつだらう。いつの間に大きくなつたのか今では長さが十センチ以上もある。何時か大雨が降つて庭が水びたしになり池があふれてしまつた事があつた。あの時金魚が庭へ泳ぎ出したので風雨の中を一所懸命探してやつた事もあつた。庭の水がひいて死んだ金魚も二・三匹

あつた。そして墓も作つてやったことがあつた。

七月二十七日 月曜日 晴れ

十時頃勉強に飽きたので絵の好きな僕は雑誌の我が潜艦米本土砲撃の絵を見て書いた。我が本土から遠く九千キロ近くも離れてゐる敵地、しかも米海軍の目の光る敵地へ堂々単身乗り込んでしかも浮かび上がり砲撃をする。ちよつと考へただけでも血の湧く思ひのする快事である。この感激の一瞬を画いたものだが見てゐても力の湧き上がる思ひがする。やつと形だけ書き上げた時斎藤君が遊びに来てくれた。濡れ縁へ腰を下ろし話をする。何時も同じ話をするが大い飛行機や軍艦の話である。未だ秘密になつてゐる肥後といふ四万五千トン級の大戦艦が日本にあつて山本司令長官はそれに乗つてゐるなど何だかあてにならない様な事を云つてゐた。これも一商で誰かに聞いた事だらうが日本にはドイツのメッサーシュミットより速いのがあるとも云つてゐた。どこの学校でも同じやうな事を云つてゐると思ふとをかしくなつてくる。

この前植えた小豆が大きくなるにはなつたが花が少

しも着かない。斎藤君は芯をつんだ方がいいと云つてゐたので早速一番上に出てゐるのをみんな切つた。唐もろこしはずいぶん大きくなつた。もう頂上には穂が出てゐる。一年生の時に作業で貰つた十幾粒かの種が去年澤山なり、去年の種を蒔いたのだがこんなによくなるとは思はなかつた。

七月二十八日 火曜日 晴れ

岐阜から速達が来て五日頃こちらへ来てくれと書いてある。五日だつたら二十日迄約二週間しか行つてゐられないが向かうでも是非来てくれといふし玲子も待つてゐたのでたうとう行くことに決定した。

今日で幾何の宿題を一通りやつた。出来ない所もところどころにある。全部合はせたら相当あるが少しづつ考へて出来るだけやつてゆく積もりだ。物象の宿題の一つ、露の觀察は寝坊な僕には中々調べられない。昨日の図画の続きを描いた。自分ながらうまく書けたと思つた。

七月二十九日

水曜日

晴れ

今日から漢文の宿題にとりかかったがいちいち辞書を引くので中々はかどらない。その中に飽きて来て代数をやってみたりした。午後又漢文をやつてゐると何時の間にかこっそりと斎藤君がゐたのでびっくりした。普通の者なら黙つて人の家へ入つて来られたら変な気がするが、僕と斎藤君は向ふでも平気であるしこちらでもいやに思はない程仲がいい。小学校の時からずつと親しく何時も一緒に遊んだ。今でも一月に四・五回は必ず遊びにくる。夏休みなどは毎日の様にくる。今日も来て船を作らないかと云つた。何か作る事にかけては飯をたべるより好きな僕は早速物置から木を探して鋸で切つたりかななをかけた暑いのにやり始めた。そして夕方にはやつと船体だけを作り上げた。一等巡洋艦である。

七月三十日

木曜日

晴れ

朝の八時だといふのもう斎藤君がやつて来た。昨日の船の続きを作るのだ。朝っぱらからとんとんとんとやり始めた。煙突・砲台・司令塔と作つて行つ

たがその手間がかかることおびただしい。煙突一本を作るのも並たいていではない。知らず知らずの中に時間が過ぎ太陽もいつの間にか真上を過ぎかかつてゐた。一度やり始めたら夢中だがもう一時近いと聞いては流石におどろいた。まだ三分の二位しか出来てゐないのだ。午後からも又やつて来てそして仕事を続けた。暑い中を二時頃からやり出し出来上がったのはそろそろ涼しい風が吹き始めた五時半頃であつた。今日一日よく遊んだものだ。しかしどうやら巡洋艦らしい形になつた。池へ浮かばせるとスクリユーが重いかかなり後ろが沈むのでゴムもあまり無いスクリユーなしにしてしまった。安定は大たいいいらしい。昼間あんまり遊び続けたので夜少しばかり勉強をした。

八月三日

月曜日

晴れ後雷雨

今日も朝から大変むし暑かつたが夕方雷をともなつて久しぶりに雨が降つた。五時半頃からだんだん暗くなりつひに乾ききつた土へばらばらと落ちて来た。俄に風が起こり同時に雷が鳴り始めた。始の中は光と音の間がかなりあつたがだんだん近づいて来た。あたり

がすっかり暗くなると一層光がものすごく思はれる。

障子戸越しに荒れてゐる外を眺めた。稲光の強さ、ぴかっと光るとほんの一瞬の間ではあるが真昼の様に明るくなる。光を背景にして桜の木の影が浮かび出る。

黒い怪しげな雲も飛んでゐるのが光にうつし出される。誠に自然の威力には感嘆せざるを得ない。学者はまだ雷だけは防ぎ様がないと云つてゐるさうだ。あの莫大な電力を何かに利用することが出来たならばそれこそすばらしい物が出来るだらう。盛んに光つてゐる稲妻を眺めてゐると、こはいといふよりも真にすばらしいといふ気持ちになる。あの電氣を利用して日本からアメリカ迄射撃出来る電氣砲でも作れないものか、とうとうこんな空想めいた事迄心に浮かんて来た。

八月六日より一九日迄岐阜で過ごす。

八月二十日 木曜日 晴れ

一カ月の休みも今日で終りだ。

この一カ月を省みると自分でも最初は相当やったと思ふが後の方になって田舎で遊び過ぎたやうな気がす

る。

八月二十一日 金曜日 晴れ

今日から二学期だ。秋といふ最も良い季節のあるこの二学期こそ絶好の勉強時である。それにもかかはらず一年二年と二学期が何時でもずっと成績が落ちてゐた。今度こそ墮ちない様にしなければならない。何時もながら校長先生の御訓話は全く有益である。今日も我々がこれから二学期に入るにあたつての心掛けその他色々とお話し下さつた。今日は授業がなくて大掃除と校庭の草取りだけであつた。

八月二十二日 土曜日 晴れ

昨日の始業式の続きとして今日はこれから二学期を学んで行く誓ひやお願ひを報告する為、宮城、明治神宮、靖国神社へ奉拝行軍を行った。七時半神宮橋集合、遅刻が多いのはいけない事だ。参道を玉砂利の音も軽く足並み揃へて進む。謹んでお願いや誓ひをして靖国神社へ向かふ。八月の行軍は始めてだが道が近いので大して苦しくない。すぐ靖国神社へ出た。護国の英霊

に対し明治神宮と同じやうに誓ひをなした。次はいよいよ宮城前、長いお堀端を歩いて二重橋へ出る。

連絡書簡

拝啓 文集での参加をお願いしてありましたので拙文をお送り致します。たまたま玉中三年生夏休みの日誌が見つかりましたので一部原文のまま写してみました。昭和十七年夏のことです。前年の十二月大東亜戦が始まっておりますが未だ戦局はあまり深刻な状況ではなかったようです。私達は十五・六歳だったと思いますが軍国少年的な面も多々見受けられますが反面かなりのんびりしていたように感じられます。旧漢字や旧仮名遣いも、懐かしく思います。二学期が始まってすぐ行軍があり宮城まで行ったようですが何故か日誌がここでぶつとりと途切れており最後に高の文字が丸で囲まれて朱色で残っております。高橋先生のサインと考えられます。妙に力のみたり遊びほけたり幼稚な文章でお恥ずかしい次第

ですが懐かしくなつて筆をとりました。あまりにも長くなつてしまいましたが取捨選択は貴兄・近藤氏にお任せ致しますのでご多忙のところ恐縮ですがよろしくお願い致します。

敬具

玉泉の二恩師の学恩

1 期 森 宏太郎

一 玉泉中の名まえの由来について

「わが母校」といっても、私は卒業したわけではなく、途中（四年）で巣立ってしまったのだが、の『玉泉中』その校名は類い希れな素晴らしい名前である。

「玉泉」の上の「玉」とは「六玉川」の一つの「多摩川」の「玉」である。

多摩川のほとりの狛江の地に、本来は建つべきであった校舎の建設構想は、戦争の影響もあって、遂に「玉」と砕けてしまったのはまことに残念なことであった。

ところで、「玉」とは「魂」に通じ、校歌の中の「わが身にもてる真心」の「真心」に通じるが、その真心を尽くすべき「忠」と「孝」とは、現在もはや死語に近いことばとなってしまった。

一方、「玉泉」の下「泉」の名は、小田急の「狛江駅」のすぐそばの「泉」にちなむのだが、その泉は

今も涸れることなく清らかな水を滾々と沸き出させているのである。

「玉泉中」の名は、父兄から募集した名（竹田君の御父君が名付け親となられた）であるが、その改名前の「十八中」の名もめでたい校名であった。

「十八」は、「十八番（おはこ）」に通じまた、めでたい木の「松」の字にも「十八」

の字が入っているからである。

なお、「玉泉中」の後身の「西高」の名も「西方浄土」に通じるいい校名といえよう。

二 特に学恩を受けた二恩師について

わが母校「玉泉中」は優れた諸先生に恵まれた学校であった。

それと諸先生の中でも、特に私にとって有難く、また有難かったお二人の恩師は、国語の高野正巳先生と歴史の家令俊男先生であった。

私が古希を三歳も超えた今も、国語（特に「やまとことば」と歴史（特に「郷土史」）に打ち込んでいるのはまことに両先生から受けた学恩のお陰と云うていいのである。

まず、高野先生だが、先生は現在九十四歳のお歳ながら矍鑠とされておられ、いく冊も著書を出されるなど大変なお元気であり、私に対してもよくお手紙を出されて、お褒めや激励のお言葉を頂いているのである。

中学校時代の思い出話になるが、高野先生が、ある日の授業の冒頭に、一人一人の生徒に対し、「キミは将来何になるつもりか」と尋ねられることがあった。

私の番になったときに、私は咄嗟に「官吏なります」とお答えしたのだった。それは、つねづね商人の父が「官吏はいいぞ」といつていたからであったが、その時に軍人になると答えた生徒が多く、「官吏志望」などとは私一人であったことを覚えている。

後年、そのお答えどおり「官吏（国家公務員）」になったのだが、もし高野先生が御質問とその答えがなければ、あるいは別の途を歩いたかも知れないのである。

る。

大学卒業間近になつて就職先に思い悩みながらも、結局官途を選んだのも、先生へのお答えに背いてはとの潜在意識が働いたのかもしれないのである。

高野先生のお父様の高野辰之先生は数多くの唱歌の名作を作詞された方だが、その多くが、やまとことばで綴られており、その素晴らしさは、私をして、「やまとことば」の研究に打ち込ませる一因となつたのであり、御父上の両先生の学恩のお陰なのである。

一方、今は亡き家令先生、同先生のお話では、先生は大学を卒業されて、暫らくは山林局（現在の林野庁の前身）の委託を受けられて「林野史」を研究されたとのことであつた。

恐らく、名著『森林と文化』を著された高羽正雄先生のお弟子としてそのご指導を受けられたのではないかと思われる。

私も、その「姓」と林野庁勤務の経験とから、「森林」に限りない愛着をもち、「森林の歴史・民俗」についても現在も研究を進めているのである。

家令先生は、十八中、西高から三重高等農林専門学

校（現三重大学）へ移られ、津市に住まわれたが、津の先生のお宅を訪問した際には林の中の静かな雰囲気のお宅の中で色々とお話をおきしたのは懐かしい思い出である。

その数年後、先生は交通事故に遭われて亡くなられたことを、御子息からの御手紙で知り暗然とし、先生の御冥福を心からお祈りした次第である。

わが母校はない。今やかつての校舎もなく、多くの先生方も鬼籍に入られたが、なお多くの学友は健在であり、今年（平成十二年）六月二十四日には玉中一期から四期までの有志諸君が一堂に（玉中一期で西高同窓会長の前田信昭君設計の西高会館）に会し旧交を温め合つたことは嬉しいことであつた。

一期生達は、毎年十月十八日に集まつており、皆その間の楽しみにしているのである。

玉中時代の想い出

1期 梅村 喜夫

昭和十五年四月（皇紀二千六百年）東京府立第十八中学入学、戦時色濃く東京オリンピック中止。

入学試験は口頭試問と体力テストのみとなり、前年の夏休みに山のように出された宿題を放り出した記憶がある。

府立一中（日比谷）、二中（立川）、三中（両国）、四中（戸山）、五中（小石川）、六中（新宿）、七中（小松川）、八中（荏原）、九中（板橋）、十中（青山師範跡から杉並区大宮前3丁目に新築移転）が既にあった。

この年府立十三中から十九中までが新設され十八中は十中に併設されて、十中第四回生と同時に入学した。十中には二、四年の上級生がいて敬礼するように躰られたが、自分達は第一回生であり、十中生はあくまでも他校生という観念から真の兄貴分という親しみが持てなかった。生徒は中央線沿線（当時は省線と呼んだ）の通学者は西荻窪駅、帝都線（現京王井の頭線）

は富士見丘又は久我山駅から歩いたが、学校周辺からの通学者もあつた。勿論、今のような自転車通学は不可。

通学の想い出。

下北沢六時五八分で間に合い、七時十二分では駅から走らないと遅刻するタイミングであつた。当時は二両連結で一時間に四、五本しかなく、スピードもおそく車窓から富士山がよく眺められた。東横線から渋谷乗り換えで白田君、駒場で南君、池の上から高島、田中両君、下北沢は渡辺和夫、小林誠両君と小生、小田急線から乗り換え組が、代々木上原の水垣君、経堂の西君、祖師谷大蔵の鈴木君、梅ヶ丘から降旗君、あとになつて経堂の古川君、大秦野の工藤君が加わつた。ほぼ満員に近い車中に東松原駅で中山、川舟両君、明大前では京王線から笹山、村上勝俊、竹内惟義、狩野、住吉の諸君が加わり、次の永福町で立石君が乗車という順であつた。通学時間には他校の生徒を交えて十中、

十八中と三鷹台の立教女学院の生徒が多かった。十中の上級生に通学途中の敬礼を欠いて難癖をつけられたこともあったようである。その頃下北沢から新宿まで電車賃は九銭、渋谷まで六銭であり市電は早朝割引きがあった時代であるが、通学定期代は記憶にない。

久我山駅で降りると十中の四年生の指揮で隊列を組んで歩くが、冬季は呼気が白く立ち上ったものである。駅前に小さい食堂があり崖を切り開いた緩い坂を上って右折すると武蔵野の面影が濃い林の中を過ぎて左折し、当時珍しくモダンな一軒家（たしか中山家）の前を通って右折するとやがて校舎が見え、左手の養鶏場の糞の匂いに閉口し乍ら正面玄関に到るのであった。下校時には三々五々で、時には富士見丘駅まで歩いたこともあった。

校舎について。

学校の敷地は一万坪といわれ、運動場の端には高压線の鉄塔が聳え、下に三百坪程度の緑の芝生があった。校庭周囲には大根畑が多く、黒土から出ている首を傘で突いたりして歩いた記憶がある。

校舎はコ字形で建っていて一年の時は東側二階がい、

る組、一階の一番端がは組の教室であった。教室内の机は縦八列、横六列で身長順に前から席がきめられて一学期には四名の仮組長が任命された。多分入学成績によったのであろう。

服装について。

中学生になると、多少の例外はあるものの金釦に詰め襟の上着と長ズボンであり、小学生時代は大いに憧れたものであった。十中、十八中とも詰め襟ではなく、その上、十中のABCの組別と異なりいろいろの組別章は、江戸の火消しに似て大いにがっかりしたものである。十中の組長は襟マークが白と紺の二色であったが、十八中では別に校章の小型のものを両襟につけていた。通学時は折角の長ズボンにゲートル着用でズボンの脇ポケットは縫い閉じを指示された。肩からかける鞆は白いズック製で登校時は左肩から右へ、下校時は右肩から左へと定められていた。脊柱湾曲を予防する意味であったのであろう。十中の上級生には鞆を平たくし長く尻のあたりに下げて、当時でいう不良っぽい格好のOさん、Tさんなど下級生から恐れられていた。学生服は購買部で販売されいたがスフ（ステープル・

ファイバー)ですぐよれよれになったようである。父の古洋服を染め直して学生服に仕立ててもらい胸のポケットが右にあたりしたが四年間着ていた。それでもスフより上等であった。

校旗や帽子の校章は十中の梅花を白くし花卉の間に黄色い菊の花弁を配したものであった。

行事・授業の思い出。

入学式の翌日であったが全員で明治神宮に参拝した時の写真は、皆丸い顔で写っていてやっと識別可能である。その数日後に抜き打ちに実力考査があった。内申書だけの選抜となったために行われたのであるが、十中、十八中合同で実施された。数学、国語、地理、歴史、理科の五科目であったと思うが、今でも憶えているのは五十音図を書けというのが、地表上の一点を正確に示す方法如何というのがあり、後者は経度と緯度が正解であった。

授業は午前中四課目、午後二課目であったと思う。小学校では担任の先生にすべて教えられていたのと異なり課目別に先生がきまっているのが何よりも興味深かった。一年生では英語、国語(文法を含む)、代数、

幾何、修身、武道、教練、作業、図画、書道、音楽があった。

始業前の朝礼では時々白沢清人校長が広い運動場の号令台上から訓示された。背広姿も何時しか国民服に変わっていったのである。その他の日は武道場と校舎に囲まれたアスファルト敷きの中庭で朝礼があり、そのあと上半身裸体で乾布摩擦をするのが日課であった。教室に入り端座して「青少年学徒に賜りたる勅語」を奉読したと記憶している。

恩師の思い出。

十中与兼任された白沢清人校長は鼻下に髭をたくわえ浅黒く眼光が鋭かった。何時の朝礼であったか、「隻手の音声(せきしゅのおんじょう)とは何かよく考えよ」と云われたことが妙に頭に残っているが、片手で音が出るものかなと禅問答のようなこの解答はいまだに出せない。昔の先生は随分偉かったものだと感心させられる。十八中校長としては私達に「十中に負けるな。」と常に励まされたが、兼任されていた十中生にはどのように云われたか矛盾がありであったのではないか。

教頭として名実共に十八中を指揮されたのは藤本純

助先生であつた。一高、東大英文科の御出身、前任は高崎中学で中曽根さんは教え子の由、「彼は優秀であつたが、どうしても一番になれず二番でした。」と伺つたことがある。長身であられ集合写真では頭一つ突出されていてすぐにわかつた。「キングスクラウンリーダー」で *This is a pen* から教えていただいた当時の思い出がつい最近のようである。(先生の純助から鈍助と陰で申し上げたのであるが、動作がゆつくりされていたのと、英語の発音に因るものであつたためかも知れない)

十中教頭は大坪國益先生で銀縁眼鏡の小柄先生であつた。「坊ちゃん」の赤シャツを何となく連想させられた。

一年い組は高野正巳先生担任で国語と文法を教えていただいた。有名な高野辰之先生の御令息で十中の漢文担当の新井先生と御兄弟であつたと記憶している。丸顔で円満なお姿で最近までクラス会にも御出席いただいたが、担任が一年間であつたためか「あだ名」は奉らずに終つた。一回生の顔をよく御記憶いただき感

激している。

一年ろ組は家令俊雄先生、三重県津市の女学校から転任された地理、歴史の担任であつた。「かれい」という苗字については「魚屋にひらめを注文するときにかれいですと告げて笑われた」。など話された。「君達は十八中の御先祖様であるから伝統の基礎を築くには他校生より一層の自覚と努力を尽くせ」と常に励まされた。先生はその後十中に転任された。

一年は組は土屋長松先生。府立九中から転任され、当時二五才の気鋭の先生であられた。チヨークの箱と大きな三角定規と木製のコンパスを抱えて登壇されるやや上向きのお姿が目には焼き付いている。代数では一次、二次方程式幾何では三角形合同定理、ピタゴラスの定理などが懐かしい。先生は「そうだけれども」を「そうだけれ」と聞こえる発音をされるので奉つたあだ名は「ケモ」である。あだ名は短いほど秀逸である。一年生の三学期の頃、新潟高校の入試問題で細長い矩形の紙(割箸の袋を考えればよい)を結んで出来る形が正五角形であることを証明せよというのがあつたと紹介され、そういう時は実際に紙を折ってみればすぐ

に解けると教えて下さった。早速折ってみたが解答で
きなかった。それでも四年生で海軍受験時に、敵艦の
速度 A、我が潜水艦の位置と敵艦との距離 B としたと
き命中させる魚雷の発射角度如何という問題を先生に
教えていただいたアポロニウスの円を用いて解答出来
たと記憶している。

図画は分厚い近眼鏡をかけられた長身の若林先生で
あった。生物画でグリーンのバックに白いホーローび
きのコップとレモンの絵を描いた思い出がある。二階
にあった「ろ組」の窓から畑と民家の遠景をかけた笹
山（渡辺）道雄君の絵は「いづみ」第一号の表紙を飾
ったのであった。

音楽は東北の隅にピアノを置いた教室があり、ウエ
ーブのかかった頭髮に白色の顔と黒子のある石黒先生
が担当され、ローレライを歌ったり、イギリス民謡を
教えられたが、自分で作曲せよと宿題を出されたが才
能なく何も出来なかった。音楽はその後小柄な貝増先
生に教えられた。

書道は山田菱花先生で一年生の夏に木島君と上野の
展覧会に出し木島君が銀賞、小生が銅賞に入選した。

作業は竹内先生の御指導で堆肥の作り方や鍬の使い
方、畑の畦立て、大根・甘藷の植え方などを習った。

「気をつけ」の号令下、眼球を動かしてきよるきよ
すると、「めん玉動かすな」と叱られるので奉ったあ
だ名は「めん玉」であった。体操も先生の御指導で鉄
棒や幅跳び、徒手体操を行ったが、鉄棒は吉田、豊城
両君、幅跳びは山路君の独壇場であった。

武道場は西側の職員室寄りが柔道場、中央の広い部
分が剣道場で、教室に近い東側は銃器庫になっていた。
柔道場が狭いため十八中は総員剣道と定められ降旗先
生に御指南を受けた。小柄の先生であったが、必死に
打ち込んで難なくはね返された体感が今でもなつか
しく残っている。身長の高かった鈴木、村田、村上君
が強かったが、特筆すべき思い出は十中との合同試合
で中村延夫君が上級生をなぎ倒して美事優勝されたこ
とであった。同君は小学生時代から道場で鍛錬されて
いた由、流石の身のこなしと気合の掛け方など格別で
あり、偉業も当然であるが、十中に勝って一同心から
快哉を叫ぶと同時に大きな自信を持つこととなった。

武道は午前中にもあつて次の学課の時には指が震え

て困ったことも想い出される。竹刀は教壇の横に立てて置いたし防具は教室の後の方に置いていたような記憶がある。

教練は戦時色濃厚な当時は配属将校の指揮下に重要な課業であつた。一年生では十中の佐藤教官が兼任で担当されたが、白沢校長の御指示できびしく躡られた先生は鼻下に髭があり、細いが鋭い眼で、しかも暖かく生徒を訓育された。新入生には徹底的に容儀を指導されたが、軍国主義的な言動は全くされなかったと記憶している。

森田亘君の御父君森田教官にも種々御指導をいただいた。

他校にはおそらくなかつたと思うが、「徒歩」と称する課業があつて、級友の想い出の一つに「とにかくよく歩かされた」とあるように毎週一時間徒歩の時間が配されていた。学校の北側の井の頭通りを西は吉祥寺、東は浜田山、南は三鷹方面へと隊伍を組んで歩いたもので現在の一万歩運動に相当するのであるうか。クラス担任の先生方も一緒に歩かれ、勿論私語会話は厳禁であつたが無言の訓育をしていただいた。四列の

隊伍でかなりの速度で歩いた。メキシコで幼時を過ごした家田君はこのような集団行動に本質的な違和感をもっていたらしく歩調が僅かにおくれ勝ちであつたのをよく憶えている。

学校行事には運動会や遠足、文化祭などがつきものであるが。当時は全く記憶にないが、十中を含む全校マラソン大会で十八中生が優勝したことも特筆されることであつた。その栄光のランナーの名を失念してしまい申し訳けなく思っている。

掲示板に進級、落第の名が掲げられ、昭和十六年には二年生になつた。石田君は父君の関係から当然のように陸軍幼年学校に入学されたので卒業名簿に同君の名はみられない。出席簿で私の一つ前の上原君の名も消えている。金沢君は当時健康を害されていて惜しくも夭折された。昭和十五、十六年頃は食糧事情も次第に苦しくなっていたが、よく歩きよく鍛えられて教練や武道などでも骨折事故などはなかった。高橋寛夫君（現木村寛夫君）がヘルニア、近藤晴彦君が虫垂炎で暫く欠席されたのが例外的と思われる程皆元気な生活を送った。

充実した学校生活にも次第に勤労奉仕が介在するようになり、一年生では宮城前の緑地作業に行った。現在のパレスホテル付近であつたと思う。二年生では江戸川河川敷の葦の生い茂る荒地を開墾した。すでに東京府から東京都となり、府立十八中を都立玉泉中学と改称されていたのであつたらうか係員から「ぎよくせんちゅうがくさん」と呼ばれたのも憶えている。十中の間借り生活から晴れて独立の校舎建設が決まり、小田急線狛江駅から徒歩約十分の多摩川沿いということで「玉泉」の校名が決まった由である。この敷地は大宮前から歩いたり、狛江駅から訪れて何かの作業に従事したことが二、三回あつたが、大きな桶に一杯の湯気の立つ馬鈴薯に空腹を満たした喜びが忘れられない。

大崎駅前の明電舎に勤労働員されたのもその前後であつただろうか、戦場で使う電気機械ターミナルの半田付けを工員の人達の指導で一週間続けたり、板橋駅集合で赤羽の弾薬庫で砲弾製造の一部を手伝ったりした。弾薬庫では縫物をする何処かの女学生達の近くで作業があり、そちらに気をとられたものであつた。

青少年学徒に勅語を賜つた五月二十二日に因んで、

毎月二十二日には奉拝行軍が行われた。学校から井の頭通り、水道道路を経て代々木練兵場に出て明治神宮参拝、さらに赤坂経由で宮城前に出て参拝する半日の行程で、途中弁当をとつた記憶もないのでかなりの強行軍であつた。寒い季節には指が真赤に腫れてしびれたこともあつた。時々逆のコースのことであつたと思う。

昭和十六年三月には十中の四年生から高等学校に何名が進学したと発表され、玉中生にも一層の奮起が促された。十中一回生には高名な作曲家万城目正氏、大中寅二氏の御令息が在学されたと記憶している。

一年生では十中と兼任された小川先生と修身の授業をはじめ校外指導などの点で教えを受けたことも忘れられない。

昭和十六年四月に第二期生を迎えて玉泉中学生は三百名となり、新しく多数の先生方をお迎えした。クラス担任など詳細は忘れてしまった。

続、恩師の思い出。

二年になって図画、書道、音楽に代って漢文、物理、化学、地理、歴史が加わり、国語の高橋、漢文の中込、

英語の前田、岡山、数学化学の長坂、地理歴史の牧野、教練の奥少尉の諸先生が着任された。

高橋先生は丸顔ながら何となく扁平な感じで化学の教科書にあつたダルトンの肖像に似ておられ、鈴木誠也君あたりが奉ったあだ名は「ぺたんこ」、略して「ペタ」であつた。

英語の岡山先生は授業の第一声がリーダーの『Bob, did you hear the alarm clock?』であつたし、英語は典型的な文章の暗誦が重要とので暗誦を指導された関係もあつて「ボブ」ということになった。これについては最近、藤本先生の奥様から承わつたのであるが、岡山先生の下顎の形が高松宮に似ておられたとすることで先生の間では「宮様」と呼ばれておいででした。先生も平成七年九月熱海でご逝去、外国語大 学名誉教授であられた。

地理歴史の牧野先生は掛川中学から転任された。下校の時、電車の中で歴史に出てきた「しらすの政治」の意味をお尋ねしたところ種々御説明いただき乍ら理解できなかった。中込先生には漢文を教えていただいだ。長坂先生は山口縣豊浦中学から着任され因数分解

を教えられたが「いんずう」と言われるのが特徴的であつた。前田先生は主に新一年生の担当で直接授業をうけなかつた。

教練の奥高義先生には「なまざ髭」はなかつたが、円い眼と大きな声で生徒をビリビリとしびれさせられたためか「電気なまず」略して「電ナマ」として敬意を表したのであつた。二年生になると教練で銃を使用中し本格的なものに近づきつつあつた。銃器庫には日露戦争当時の菊の紋章が刻印された村田銃が多数あり、三八式歩兵銃もあつたが、これは擬銃で実弾射撃の出来ない代用品であつた。クラスを身長順に八名づつ分隊に編成すると、小柄な組は擲弾筒分隊となつたりすることもあつたが、ほぼ身長に等しい小銃を担いで行進したり校庭を匍匐前進したりであつた。銃を分解掃除したりする教程もあつたが、武器を大切に、とくに銃口蓋を紛失しようものなら一大事で薄暗くなつた校庭を隅々まで探し廻つたものである。晩秋の頃、一夜夜間行軍があり終夜銃を肩に三鷹方面に出て、ついウトウトして隊列から離れる場面もあり、疲れてくると枝々の梢に白い花が咲いているような幻視も体験

した。

昭和十六年十二月八日開戦のニュースは登校途中で何処からともなく耳に入り、朝礼時の訓話に身の引き締まるのを憶えた。緒戦の戦果が平出海軍報道部長、谷萩陸軍報道部長（級友谷萩君の父君）から毎日のように発表され、戦勝祝賀気分に溢れ提灯行列などもあつたりしている間に昭和十七年四月には三年生に進級した。新学期に白沢校長は四中校長に転任され後任に市立一中から浅井治平先生が着任された。玉中にも台北の中学から見上保先生はじめ、小山佐吉、中村高樹、岡田、都筑、板本、長浜、奥山の諸先生、配属将校伊藤少佐が着任されて授業は日増しに充実して行った。

この頃、父の勤務（船会社）の関係で海軍軍人と接する機会があつた為か、買って与えられた確か海音寺潮五郎著「江田島」という一冊の本がどうやら進路決意に大きく影響し、あまつさえ非常時下、健康な青年は軍人という時勢でもあり、海軍志望となったように、その頃親しかつた飯田八郎君に受験を誘つたが、彼は商船学校を選んでしまった。三年生になって転校された諸君もあつたが詳細は忘却してしまった。

富士山麓の廠営があつた。滝ヶ原、板妻という陸軍の演習場があり、我々は板妻に向つた。数校の生徒が品川駅から特別列車で御殿場経由で宿舎に入り二日間の教練をうけた。軍人勅諭の順序を間違えて冷や汗をかいたが、特別の処罰も受けず、胸を撫で下ろしたのも思い出の一つである。背景に富士山（写真屋が細工して入れたもの）を配した記念写真が残っているが、当時は忠君愛国滅私奉公の意気に燃えていたのである。長男ではあつたし、上級生との交際もなく先輩達から理想的な感化をうける機会もなかった。教科書以外の受験の書物を読む時間もなかった。

昭和十七年六月ミッドウエー海戦を機にして戦局は悪化の一途をたどり始めて行った。物資は欠乏し配給制の下、毎日の弁当作りに苦労した母の面影が懐かしう浮かんでくる。

続々、恩師の思い出。

三年生になってからかと思うが、英語の河野清先生（現中川先生）が東大英文科卒業後直ちに着任された。長身の学者肌の先生で、最初の授業の時に何よりも驚いたのは終業の「ベル」が鳴り渡るとリーダーを読み

かけている生徒に「はい、そこまで。」と声をかけられて授業を終わられたことであつた。時間厳守の尊い教訓を今でも感謝している。先生の大学時代の思い出として教えて下さったのは「落とし主」を『the last owner』と英訳して教授から褒められたという逸話があつた。英語は意味が伝わるものでなくてはならないと納得したことを憶えている。先生には英語の発音の特徴から「ブルフロツグ」とひそかに名を奉つたが、少し冗長で秀作ではない。

数学の岡田先生は昭和五十二年まで後の西高に御勤務であつたが、悪童の奉つた眉間の縦皺による「シワ」は長く通用したとこのことで秀逸なものは長く残ることの実証といえよう。

地理歴史の小山佐吉先生は長野縣屋代中学から來られたが、軽い吃音があまりのためか「どもりの小山」略して「ドモコン」であつた。

物理の板本金治郎先生の「ポリン」については少し説明が必要のようである。当時は生徒の体力増強の必要性からか学校を通してビタミン肝油類が特別配給されることになったようで、それらの品の中にメタポリ

ン、又はメタポリンというのがあつて、授業の前に先生が購入希望者をチェックされた時に「ポリンですか？」と尋ねられたのが原因とか、何とも他愛のないものであつた。

英語の嶺村先生は肌が浅黒く、「ごぼう」と失礼なことになつてしまつた。授業は堅実であつたように記憶している。

戦後の生徒とは異なり、先生方のご自宅にも度々お邪魔して校外授業のように薫陶をうけたのであつた。

当時御新婚であられた高橋一夫先生の三鷹下連雀のお宅では色白の奥様から茶菓の御接待をうけたし、片方の腎臓を手術して剔出してあるなどと驚かされる話をおききした。国語、文法の授業以外に三年生の頃は軍人志望より高等学校・大学へ進み、より高所から国に尽くす方がよいと御指導をいただいた。教室では教えられない種々の問題を、或る日、郊外遠足を何人かと共に誘われたが、何かと理屈をつけてお断りしてしまつたことがあつた。此の事件は現在の境遇を左右した一大分岐点になつたと信じている。高橋先生もその後、外国語大学教授をされたが、何年か前に小生の以前の

勤務先であつた社会保険中央病院で亡くなられたと新聞紙上で拝見した。

狛江の見上保先生のお宅にも何回かお邪魔した。台湾時代の教え子の幼年学校生徒と同席したこともあり、先生からは軍人志願を強くすすめられたのであつた。

牛込におられた長坂亨三先生、下北沢の河野清先生をお訪ねしたが、あまり印象に残ったものがない。

都筑修一先生には公民を教えていただいたが、御指導を仰いだ期間は短かつた。

剣道は当時奥山先生であつたが、六中体育館に段位認定試験に行き、大事な試合に負けて初段を逃してしまった。村上光佑君他二三人合格されたように記憶している。

体育関係では体力章が制定され、二千メートル走、百メートル短距離、手榴弾投擲、懸垂、幅跳び、重量物（三十〜六十キログラムの砂袋）を担いで五十メートル走の時間などの種目でそれぞれ上、中、初級に分けられていた。幅跳びが四・五メートルに達せず、初級に甘んじたが、村上光佑、鈴木光雄両君は上級に合格され襟に金色のバッヂをつけられたのが羨ましかつ

た。中級は銀色、初級は銅色であつた。剣道場の南側にはプールが出来て、その前で撮ったクラスの写真があるが、ここで泳いだ記憶はないし、又当時は泳げなかつた。

三年の秋であつたろうか、多摩丘陵、野猿峠の競歩大会にも参加した思い出がある。今は道路や住宅地に変つて当時の面影は野猿街道という名をとどめていない。

戦局と共に教練も次第にきびしく、時間も増え、新しく足利教官が着任され、配属将校は伊藤少佐から三森中尉に交替された。三森教官の令弟は玉中の三回生が四回生におられたと記憶している。伊藤少佐はその後捕虜収容所に勤務され悲運に遭われた由である。

このような時勢に中、十七年の暮の休みに地理を専攻されていた浅井治平校長と見上先生が主催された伊豆箱根地理勉強旅行に参加させていただいた。同行の諸君の顔ぶれが思い出せない。小田原から登山電車で強羅まで、その後は大涌谷まで登り、芦ノ湖へ下り、芦の湯に一泊した。複式火山の典型としての箱根を見学して歩き回った。曾我兄弟の墓も訪れ、宿舎を早朝

に出発して伊豆へ向かったが手に下げていた手拭が棒のように凍ったことを憶えている。芦ノ湖畔を若いドイツ人が隊伍を組んで歌いつつ行進していたが「ヒツトラージュメント」であろうか、詳細は不明である。双子山、十国峠から熱海へ下り修善寺へ廻り、中伊豆平野とか柱状節理とか教えていただき長岡温泉に一泊して帰ったが、修善寺までの電車の中の電灯は竹の繊維を用いた電球であった。

昭和十八年には四年生に進級した。十八中に因んで四月十八日は創立記念日と定められていたが、前年の四月十八日昼頃高射砲の発射音が数発あり、家の軒先から機影がチラリと見えた。空母ホーネットからのドリットル指揮による帝都初空襲であった。俄然緊張が高まり責任を感じて山本司令長官戦死。昭和十八年四月に国葬が行われた。昭和九年の東郷元帥の国葬の葬列を甲州街道で見送った時とは大変な相違であった。これでも軍国少年の意気は衰えず、先生方の激励もあって七月に兵学校を受験し、更に翌春に備えて乏しくなった食糧事情の下で頑張った。昼は家の縁先で暖をとり夜は火鉢をかかえて学んだと思う。鉛筆の削り屑

が燃える匂いが今も懐しく鼻に残っている。秋になると模擬試験なども再三あり、十中に負けるなど木村君はじめ好成绩を挙げられた。十一月三日海軍機関学校合格の通知を受け当時校長になられていた丸山先生はじめ諸先生に報告し、十一月二十八日舞鶴に向けて夜行列車で東京駅を出発し、玉泉中学とも訣別したのであった。海軍機関学校では一期上に十中の石戸谷、坂根、川田先輩、同期には土屋、佐藤両君がいた。翌年豊城優君と一回下の飯島弘君が入校したが、舞鶴での交遊はない。

昭和十九年夏に帰郷し新しく出来る海軍予科生徒に応募するよう母校を訪ねた。クラスメートはもはや学業どころではなく立川の軍需工場に動員中であり、そちらへ廻って暫く歓談し心の中で永久の別れを告げたのであった。誰と何を話したか全く記憶に残っていない。

終戦で復員、希望もなく廃墟の中で一時は茫然としたが、幸運にも父が大陸から戻り、何時の世にも学問が大切であると諭され、元軍人という白い眼の中、一高に入学した。全寮制度で入った寄宿寮の不潔さと生

徒の不規律な日常生活、これが自由というものかと暫く驚きの連続であつたが、それまで陰性であつたツベルクリン反応が一挙に陽性になったのには更に驚いたが幸いに発病しないで済んだ。

昭和二十一年九月入学時に理科三年に木村寛夫君、文科には坂井安雄君が在籍していたが、ゆつくり話も出来ず、食糧難は深刻の度を加え寮生もなるべく自宅へ、夏休みも二ヶ月の異常な長さであり生活は当時の新語であつた「アルバイト」に精を出して何とか生活している状態であつた。昭和二十一年入学の文科には谷沢豊、西和夫、細越弘康君、理科には玉中二回生の小島三郎君と高橋君、それに小生と総計8名を数えた。菊池十四吉君が時々寮へ遊びに見え一高の帽子を借りて渋谷方面に出掛けられたのも思い出の一つである。

前に御指導をいただいた諸先生の思い出のようなものを記しましたが、その他十中の数学の西山先生、英語の郡司先生、小野先生（酒井昭義君の叔父君）、国語の金田一先生。生物の上島先生、体操の小河原先生、教練の小田（古米）先生など一流の権威であられた。戦後学制の復旧をしようにも先生がないと嘆かざるを

えないのも至極尤もなことである。

あれから五十数年、古稀の齢となつて記憶も定かでないのですが、クラス会の度に参会される級友の数も減り淋しい限りです。玉中の思い出としてお役に立てばと考えて書き連ねました。

学徒動員記

1 期 山崎 信

—— 中学五年生の時期 ——

玉泉中に限らず、昭和十九年から二十年にかけての全国の中学生の生活は「学徒動員」の一年であった。

予想はしていた。戦局は日々苛烈さを加え、「学徒出陣」があり、「学童疎開」があり、理工科系以外の徴兵猶予も撤廃されていた。

そして、十九年五月五日、学徒動員実施要綱が決定し、五年生、四年生は動員。下級生は学びつつ学校工場で働く体制が確立した。

一方で、四年修了時に高専の受験が出来るようになった。何人かは合格しながらも五年に残って高等学校などを受験しようと考えた。

一種の『度胸だめし』でもあり、私も山梨工専には行かない事にしようとした。

これが学校でたいへんな問題になった。

『そんな時代じゃない』『白線帽にあこがれているだけだろ』『親は何を考えているんだ』等々。クダ

クダしい事は書かない。私の場合は母親が呼び出されて（相手は校長先生）、母は『亡くなった夫の遺言です』と強弁（何と私の父は私がゼロオの時に死んでいる）して、やっと「学校に残していただいた」。

この事はさまざまに論評出来よう。担任の中村高樹先生は『好意』的だったが、これも彼が府立高―東大出身の立場からだと言ってしまうとそれだけの事かもしれない。

ただ、新学期が始まってまもなく、職員室に用事があった私に『非国民！』と言葉を投げつけた何人かの先生の表情は今も忘れられない。しかし、じきに進められた動員のさわぎの中に埋没していった。

学徒動員の先は陸軍航空廠。平たくいえば立川飛行場の付属工場のようなもの。当然、飛行場を中心に敷地は広い。最初は青梅線の「東中神」下車。後半は勤め場所が本部に近くなり、立川駅から徒歩十分ほどだ

った。

仕事はいろいろ。発動機の整備や運搬、初歩的な工作機械作業など。土木工事も含めて総じて『雑業』のたぐいである。使う方もまどつただろう。よるらず中途半端な能力しかないんだから。

私たちの直接上司は中高年のベテラン工員たち。中には一部軍人の悪い所だけコピーしたようなふんぞりかえりもいた。その下にこれも中高年の徴用工。八王子あたりの『平和産業』―織物工場から集められた人たちが多かった。たまに若いアンちゃんがいて、どうして兵隊にとられなかったのかと思うと、これが梅毒の何期とかいう手合いで、身体中の吹出物からウミが出ていて、筆でぬり薬をなでつけている気味悪さでありました。

徴用されたおじさん達はみんな苦勞人で、私たちを可愛がつてくれ、私たちも始めて接するような人たちに次第になじんでいった。

私はいまでも貴重な体験だったと考えている。後に教職員組合活動、平和運動に深く関わっていった事と無縁ではない。

私たちの士気を鼓舞するように、「学徒動員の歌」

が発表された。旧五年生の人たちは今でも覚えていると思うが……

「花も蕾（つぼみ）の若桜

五尺の（ごせき）の命ひっさげて

国の大事に殉ずるは

我ら学徒の面目ぞ

ああ紅（くれない）の血は燃ゆる」

尺は「しゃく」と読むのではなく、「せき」で、

一尺は二歳半。つまり五尺は十七・八歳の若者

だとトクトクと友達に説明したのを想い出す。

やがて、軍関係の学校に行く人は工場から去り、ようやく新しい生活にも慣れてきた私たちは、学校に通わなくなった分だけ自分の時間を持つようになった。

私でいえば家の文学全集（世界、日本とも）を読み終えた一年間であつた。

当時、われわれ生徒たちの対応はさまざまだった。かりに翌年一高にはいった坂井安雄君、谷沢豊君、西和夫君でいうと……。坂井君は学校時代と同様の『自

然体』、工場、従業員、友達と等しくうちとけていた。

谷沢君は学校時代をそのままもちこんでの受験体制。

片時の休み時間でも単語帳や参考書を手ばなさかった。

西君はすでにして『大人』の風格があり、何人にもお

かせない独自の空間をもっていた。ことほどさよう

に、それぞれが少年時代から青年時代へと成長しつつ

あった姿を想い出す。また、学校生活だけではわから

なかった個性の発見があつたりした。たとえば無口で

目立たなかったA君が旋盤を持たせると別人のように

生き生きと働らいたり、チャランポランに見えたB君

が土木作業を段取りよく仕切つたりもした。

仕事中によく口ずさんだ歌（職工さんも含めて）

誰か故郷を想わざる

「花摘む野辺に 日は落ちて」

建設の歌

「よろこびあふれる 歌声に」

勘太郎月夜唄

「影か柳か勘太郎さんか」

きらめく星座

「男純情の 愛の星の色」

湖畔の宿

「山の淋しい湖に」

加藤隼戦闘隊

「エンジンの音 轟々と」

若鷺の歌

「若い血潮の予科練の」

軍隊小唄

「いやじゃありませんか 軍隊は」

時折、軍人や監督の職工が見回りになるとハミングをびたりとやめた。

「流行歌をやめろ、ここは民間の工場ではない。」

「軍隊なんだぞ」きまり文句の説教。

休日になると制服に着がえて映画をみた。洋画はほ

とんどドイツだが、調べてまわると掘り出し物もあつ

た。『雪之丞変化』『丹下左膳』などなど。

活動写真派と実演派にわかれていたようにも思う。

後者の人たちはシミキン（清水金一）やモリシン（森

川信）を見に浅草や新宿の劇場に通っていた。

だが、こんな息抜きの生活も空襲がはじまるとピタ

リと止んだ。

すでに秋も深く、B29の来襲がはじまった。八月にサイパン島が落ち、大型爆撃機の侵入が予測されていたとはいえ、私たちが見たはじめての「敵」である。高度一万メートルの上空を飛行機雲を引いて「偵察」していた。

最初のうちは大マジメに防空壕に飛びこんだりしたが、やがてノンビリと見物するようであった。しかし、戦争とはきびしいものだったのだ。

立川から発動機を中島飛行機田無工場に届けた時である。小金井堤で空襲警報になり、土手にひれ伏した。やがて頭上を次々に編隊が通過して行くと、たちまち地軸を揺るがす轟音に耳をふさいだ。あたりが静かになり、トラックに乗って田無工場に行った私たちは、そこに《地獄》を見た。

散乱している死体。バラバラの手や足。私は今でも焼肉屋のウインドの骨つき肉は見ないようにしている。同じ中島飛行機の荻窪工場があったせいか西荻でも被害が出た。私の家の向いは焼夷弾で全焼、隣は爆弾で吹っ飛び、私の家のガラスは爆風でほとんど割れた。隣の松の木が屋根に突きささって、後始末で三日間工

場を休んだ。

それまで私は皆勤、それも無遅刻、無早退、無見学のパーフェクト。藤本先生から「山崎、卒業まであとすこしだ。がんばれよ」と励まされていたのだが、そんな状況ではなかった。

ちなみに、卒業式の総代は坂井君。皆勤賞は竹内維義君だった。

三月十日が東京大空襲。大規模なものは四月、五月と続いた。米側としては陸軍記念日、天長節、海軍記念日を意識していたという説もある。玉泉中関係の被害は五月二十五日のそれが多い。四谷、新宿から中野、杉並にかけてであり、何人かの友人のお見舞に行ったりもしたが、それ等の事は私の分担する部分からはずれる。

三月末、私たち玉泉中学一期生の卒業式は二期の四年生（修了ではない。卒業である）と同時に行われた。そして四月、私は東京高校に入学した。具体的に言えば、立川の陸軍航空廠から足立の日立製作所亀有工場に「転職」した。

玉泉中学の思い出を綴る

1 期 前田 信昭

入学まで

何時の頃から昭和十五年の四月に、杉並区に府立の新設校が出来るという話が耳に入り小学校の先生から、そこをうけたらと勧められ、親とも相談し、第一志望府立十八中、第二志望私立と決め願書を貰いに出掛けた。

自宅を出て南に行き、水道道路（今はこの名前はほとんど使われないが）を東へ、畑の中に建っている新築直後のペンキの臭いが鼻をつく真新しい十中の校舎まで小学校六年生の足で約三十分、障害物がなく北風に吹きさらしの道を歩き寒さが身にしみたことを覚えている。

受験番号は222番、競争率は2倍位だったと記憶しているが、筆記試験は無く内申書身体検査と口頭試問をパスして入学した。

一年生になって

長ズボンをはいて府立の中学生になって一歩大人に

近付いたささやかな誇らしさと、新しい環境、英語・漢文・剣道・教練等々初見の教科を含む授業への緊張と戸惑いの中に何ヶ月かたち、六月には宮城外苑へ勤労奉仕、（肇国奉公隊）村山・山口の貯水池へ遠足、七月夏休みの静浦の臨海学校、十一月の紀元二千六百年式典、毎月二十二日の学校・明治神宮・靖国神社・宮城間の奉拝行軍等の行事も経て、序々に中学生生活にも馴れてきた。

昭和十六年四月二年に進級

後輩が入学して来たり、中学生生活も大分軌道に乗ってきたが国際情勢はますます緊迫し六月にはドイツがソ連に宣戦を布告して時局に配慮して夏休みの臨海・林間の行事も中止になり、野菜の買出しに行くような生活が始まった。

十二月八日には朝七時の臨時ニュースで米英両国と交戦状態に入つたとのアナウンスがあり、非常時という言葉が実感をもってきた。

そして戦争の初期にはハワイ・マレー沖・香港・シンガポール・蘭印と戦果があがり国中勢いが良く数年で敗戦になるとは夢にも思わなかった。

三年に進級した十七年四月の十八日、玉中の創立記念日で休みだったが高橋一夫先生の引率で有志二十人ほどで多摩川にハイキングに行き空襲警報が鳴り驚いたがB25による東京初空襲で、敵の存在が身近に感じられる初めての経験でこの頃から教練・行軍・銃剣術等の授業と体力章検定や査閲の準備の時間が増えた。夏休みに三年生と一年生の希望者が山中湖に岳麓錬成隊と称する十日間の合宿に参加、その間選抜されたもの十数人が富士山に登り八合目で一泊し御来迎を見下山した。

この年から短期の土木工事的な勤労動員が多くなり授業の時間が少なくなった。

十八年、四年生に進級する頃に教育制度の変更で中学が昭和二十年から四年制に短縮と決定され、我々が五年で卒業する時は一年下の人たちと同時に空前の受験競争になる、また五年になると一年間を通してのいわゆる通年動員で勉強はほとんど出来なくなると

いうことが予感され、四年修了で上級校に進むムードがたかまりクラス編成にもそれが表れた。また教練・勤労奉仕の時間がますます多く物資は窮乏し戦争の影響が大きくなった。

十九年三月、我々の同期生百四十数名の内六十名近くが上級校に進んだ。

我々の中学生生活は戦争の影響を受け学業は削られ、勤労奉仕などが多かったが当時の中学生は日本全国同じような生活を過ごしたと思われ、数年年長の人々が学徒動員等で戦死したり傷付いたりしたことに思いを致すと五年生になって空襲で被災した気の毒な友人もいるが比較的戦争の惨禍を受けず、幸せな生活を送ったと感じ、教育熱心な良い恩師に教えを受け、生涯楽しく交際出来る友人を得たことを感謝しなければならぬ。

戦時下の中学校生活と法令等

1期 降旗 経雄

1 強調された教育目的と変更された教育内容

昭和十八年公布の新しい中学校規定（文部省）第一条によると、国体に対する信念、至誠尽忠の精神、皇国民の責務の自覚、協同と勤労、体験学習、自発研究、教育内容の全体的統一など前半は時代を反映しているが、後半には二十一世紀にも適用しそうな文言も見える。（1）

2 時代と校訓、校歌

●校訓 十中——「感謝報恩 克く忠克く孝 強く

清く賢く」

十八中——「感激 修文練武 強く清く賢く」

●校章 十中——学問の神 菅原道真に因んで梅を

形どった図案

十八中——十中と同じ梅に忠臣楠正成（武の神）に因んで菊を重ね合わせた図案

●校歌（共通）『すめらみくにのもののふは

3 陸軍現役將校配属と教練査閲

いかなることをかつとむべき
ただみにもてる まごころを
きみとおやとに つくすまで』

大正十四年一月十日 文政審議会諮問第四号（要約）

学校における数練を振作せしむため中等学校以上の学校に現役將校を配属し学校長の指揮監督の下に教授することは徳育体育・国防能力を高める主旨を満たすと認める。その学校の卒業生は常例の在営年限を相当に短縮できるようにするのがよい。なお実施上の希望条件は次の如し。

●配属將校の監督に関しては文部、陸軍両省の系統を明らかにする（以下略）

（当時陸軍は軍縮のため四箇師団の削減により現役將校の処遇に困っていた）

大正十四年四月十三日陸軍現役將校配属令公布

● 官立公立の師、中、実、高、大予、専、高師……に配属す

● 私立及び大学学部の場合は申請により配属す

● 陸軍大臣は現役将校をして教練実施の状況を査察せしむることを得

etc

この査察（査閲）は学校にとつて極めて重要な意味をもつ行事であつた。真偽の程は詳らかでないが、その評価によつては将来入営後の幹部候補生の採否に影響を与えるといわれていた。何日も前から閱兵や分列行進の練習を徹底的にやらされた。英数国漢地歴物化博物などの教師が学級担任であるためにたとえ高齢や病弱であつても小隊長として指揮をとらされたのである。文句や意見は言えない時代とはいえ不本意で辛い思いに内心悩んだ教師もいたことだろう。また教練の成績が軍隊に入つてからの階級昇進にかかわるという思いは現在の内申書の呪縛に似たものがあつたと思われる。

4. 体力章検定

昭和十四年時局の進展と共に国民の体位の向上が重要な問題となり、政府はその具体的対策として体力章

検定（初 中 上級）を実施することになった。

（数え年十五歳～二十五歳の男子。後には十五歳～二十一歳の女子も） （2）

5. 勅語（青少年学徒）と奉拝行軍

「青少年学徒二賜ハリタル勅語」（昭和十四年五月二十二日）（資料参照）

陸軍現役将校配属令十五周年記念式において全国学生生徒代表三万五千人が宮城前広場（今の皇居前広場）で天皇の御親閲を受けた際に下されたもの。

奉拝行軍

十中、十八中では毎月二十二日（青少年学徒二賜ハリタル勅語を下賜された日）を克己日と定め、杉並区大宮前（今の宮前）の学校から明治神宮、靖国神社に参拝して宮城二重橋まで二十余キロメートルの強行軍が恒例であつた。心身の鍛錬、崇敬祖、戦勝祈願、教練の実地訓練などを目的としていたと思う。街中の人が見守る中を得意？になつて歩いたように思う。色々問題はあるにしても結構楽しかった思い出でもある。

6 『君が代』がきこえる朝の行事

黙想、統念、「君が代」吹奏、勅語朗誦（青少年学徒二・・・）

今という朝のホームルームの時間は黙想、統念からはじまる。目をつぶり無念無想で雑念を払い腹式呼吸をして気持ちを整える。やがてラウドスピーカーから「君が代」が流れてくる。素直で白紙の心理状態になった時に例の勅語の朗誦を聞く。（生徒が交代で奉読）マインドコントロールされやすい状況の演出は見事である。なにやら自己啓発セミナーや新宗教に似た感がなくもない。

7 学徒動員令と立川陸軍航空廠

昭和十八年「学徒戦時動員体制確立要項」の決定、

「教育に関する戦時非常措置方策」の閣議決定そして通達、

同 十九年「緊急学徒動員方策要項」の閣議決定、

「決戦非常措置要項」に基づく学徒勤労動員に関する件」を訓令、「学徒動員令」

「学徒勤労令施行規則」を公布、「動員中の学生生徒の成績査定、修業卒業認定について」の通達、

同 二十年「決戦教育措置要綱」の閣議決定（国民

学校初等科を除いて学校の授業一年間停

止）（三月）

「戦時教育令および同施行規則」の公布（五月）

中学五年の昭和十九年四月下旬から通年で立川の陸軍航空廠で航空機の整備作業に従事した。広々とした飛行場で軍用機とつき合う毎日であった。翼を振りながら沖縄方面へ向かう特攻機（玄武隊など）を見送ったり、本土上空に飛来したB29爆撃機が日本戦闘機に体当たりされ、空中分解して火の玉となって墜落するのを目のあたりにした。その他産業戦士や軍人との付き合いの中で学校では得がたい貴重な体験であったことは事実だが・・・。

1

一・教育ノ全般ニ亘リテ皇国ノ道ヲ修練セシメ国体ニ
 対スル信念ヲ深メ至誠尽忠ノ精神ニ徹セシムベシ
 二・皇国ノ大東亜及世界ニ於ケル使命ヲ明ニシ皇国民
 タルノ責務ヲ自覚セシメ職分ヲ尽シテ奉ルノ信念
 ト実践力トヲ涵養スベシ

三・学行ヲ一体トシテ心身ヲ修練セシメ皇国民タルノ
 徳操識見ヲ陶冶シ創造活用ノ能ヲ養ヒ堅忍不撓ノ
 体力氣力ヲ鍊磨スベシ

四・学校一体修文練武ニカムルノ風ヲ振作シ質実剛健
 ヲ尚ビ協同ト勤勞トヲ重ンズルノ氣風ヲ作興スベ
 シ

五・教育ヲシテ国民生活ノ實際ニ適切ナラシムルト共
 ニ実践体験ニ依ル学習ヲ基礎トシテ自發研究ノ態
 度ヲ育成スベシ

六・教育内容ノ全体的統一ニ意ヲ用ヒ学校内外ノ生活
 ヲ拳ゲテ皇国民鍊成ノ一途ニ歸セシムベシ

教科内容は教科と修練に大別され、教科は次の六科と
 し、その中がいくつかの科目に分れている。

国民科―修身、国語、歴史、地理
 理数科―数学、物象、生物

体鍊科―教練、体操、武道
 芸能科―音楽、書道、図画、工作
 実業科―農業、工業、商業、水産
 外国語科―英語、独逸語、仏蘭西語、支那語、
 マライ語

種目	初級	中級	上級
走	一六秒 九分	一五秒 八分	一四秒 七分三〇秒
跳	四米	四米五〇	四米八〇
投	三五米	四〇米	四五米
運搬	四〇キロ一五秒	五〇キロ一五秒	六〇キロ一五秒
懸垂	五回	七回	一二回

(参考転載資料)

『東京都教育史』通史編四(都立教育研究所1994)

『東京府公立中学校教育史』(桑原三二 1981)

玉泉と私

1 期 竹田 信彦

「親」

「お父さんに宜しく伝えて下さい」と藤本先生から云われた時は嬉しいのと面映ゆい気持ちが複雑に入り交じっていた。校名が「玉泉」、呼び方は「ぎよくせん」でなく「たまいづみ」であると決ったからであり「十八中」の新天地に相応しい名前をと父が提案したものが採用され、所謂「名付け親」となり大変喜んでいました。父は教育熱心な小学校の先生だったようで、わが家には進学相談やその他諸々の相談で父兄や卒業生の方々が訪ねてきたのを微かに記憶している。幼くして私の兄二人を失った両親は三男であるこの私には将来への大きな期待をかけていたようであるが、「親の心子知らず」で至つてのんびりと不勉強だった。私の家の近くに七年制の「東京高校」があつて、そこは一所懸命勉強し努力した人が行ける学校だよと聞かされていた。中学の次は「白線帽」を被つて欲しいとの秘かな願いを抱いていたのであろう。父は休みの日には

よく校歌や寮歌のレコードをかけていたが、その中では特に「嗚呼玉杯に花受けて」を口遊むことが多かった。このような環境にありながらも一年から四年終了迄超低空飛行を続け、「い組」で通し「は組」のお声はかからなかった。「玉泉」名付け親の息子として忸怩たる思いである。

「師」

玉泉の四年間本当に良い先生に恵まれたとの思いを一層強くする。ここでは私の頭に「こつん」としてくれた三人の師を述べたい。

高野正巳先生

「奉拝行軍」で黙々と歩いていた時に何時から私の横に歩調を合わせて語り掛けてこられたのが高野先生だった。この日は新しい帽子を被っていたが、「竹田君良い帽子だね、所で頭の中味はどうかね、こつん!」。これは愛の鞭と見るかどうかは別として、今も高野先生は九十五才のご高齢でも専門分野の研究で

ペンを執られ、さらに短歌のサークルにも加わって近く「歌集」を出版されとのことで、ご長寿の高野先生に肖^{あや}りたいものである。私の小学校「桃園第四（現・中野神明）小学校」の校歌「氷川の杜前にして南に富士の高嶺見る…」は高野先生のご尊父高野辰之先生作詞、信時潔先生作曲である。

土屋長松先生

授業中に何かの拍子で悪巫山戯^{ふざけ}したその時に、先生は「竹田君前に出てきなさい」となり、教壇の前に立つと「何をしているんだ」と云うや否や先生は大切にされているチョーク入れの桐箱で私の頭をこつんと叩かれたが、私の頭が石頭だったのか桐箱はものものごとくに壊れてしまった。頭にきた先生は「廊下に立っている」。いやはや様にならぬ初体験であった。こんな生徒ではあったが後年「玉泉一期の会」でお会いする毎に竹田君「楽しい玉泉の会」有難うと云われ恐縮至極である。

見上 保先生

台北三中から転任されてきた熱血教師、剣道及び居

合道の達人である。中学四年生になる時に進学組の「は組」とその他大勢を二つに分けた「い組」「ろ組」に編成された。私達「い組」の悪童連中は、先生が教室に入ってこられるや否や彼方こちらから「滓・かす・カス」と口遊^{くちず}んだものだから、「何を云ってるんだ、卑屈になってどうする。成せば成るだ」と叱り付けられた。本心は暖かい先生で進学相談では親身になつて指導いただいた。終戦と略時を同じくしてすばつと教職を去られ、その後は実業の世界に転じて活躍されるとともに、地域社会への貢献に尽力された。茅ヶ崎教育長を務められたり、松風館見上道場館長として青少年に剣道、居合道の指導にも力を注がれていた。平成十年十二月逝去された。

「友」

良き師とともに良き友に恵まれたことは本当に有難いことであつた。ここでは多くの友の中から「早く逝つた友」三人を述べたい。

飯田八郎君

父が曾て奉職していた「桃園尋常小学校」の卒業生で家もそう遠くないということから親しくなつ

た。二人でよく多摩川まで泳ぎに行ったりもした。彼の家は青梅街道の鍋屋横丁から少し新宿よりにあった大きな「蕎麦粉製造所」であった。明るくロマンチストで、将来は外国航路のマドロスさんになるとの夢を持ち高等商船に入学したが終戦、乗る船も無く陸に上り先輩の経営する「鈴江組」と云う大きな港湾倉庫会社に務めていた。昭和四十七年頃だったと記憶しているが、私の職場を尋ねて来てくれたことがあって旧交を温めあったものの、その後暫くして彼の訃報が届いた。今日豪華客船が世界一周の旅を競い合っている現状を見聞きする度に彼を思う。

河崎 勲君

かす組仲間の一人、教育熱心なお母さんに育てられ勝負強さも持味だった。長兄が東京商大に行ってられたので負けられないんだとよく口にしていた。下校途中西荻窪の駅に近い彼の家に時々立寄っては空腹を癒してもらったり夢を語り合ったりした。お宅の近所に住む都心の有名高女に通っているお嬢さんの勉強を見ると云ってたが、淡い初恋だったのではないか。そんな彼も高等商船に進み終戦後は長兄に続いて東京商大に進学した。卒業後は三菱商事系の商社で活躍していた。私が渋谷の東横店に勤務していた頃時折立ち寄

ってくれたが、雀荘に行く途中だったようだ。勝負強い彼も病には勝てず平成十一年七月他界した。

村田達雄君

高円寺の大地主の息子さんでかす組の大將で人望厚かった。中野のわが家に帰る途中にちよくちよく立寄ってはご馳走になった。可愛い妹さんがいたのも一因だったかもしれない。彼は東京高等農林に入学したものの、小学校の先生になる夢捨て難く第一師範に入り直した。就職のことで父の所によく来て相談していたようだ。夢も叶って先生になつてから一層向学心が高まり早稲田大学で学んだ。水を得た魚のように名物先生として活躍されたが、彼もまた病に勝てず早く逝ってしまった。

三君への思いは一層深まるばかりである。

「縁」

「玉泉」は学校として独立せずに消えたもののこゝで結ばれた師友の縁そして「玉泉」の名も永久に不滅に語り継がれて行くと信じている。「VIVA・玉泉」も。そしてもう一度叫ぼう「VIVA・玉泉」と。

戦争中僕らが中学で夢見たこと

1期 若林 彰

中国大陆で火をつけた植民地戦争のメドも立たないうちに、今度は太平洋戦争という名のどえらい戦争に日本が飛び込んで行ったのは一九四一年、僕らが中学二年生の時だった。そのニュースを喜んで聞いた者は、僕らの世代では一人もいなかった筈だが、みんな驕のいい子供たちだったので、意見がましいことを口にする者もなく、黙々と授業が続けられて行った。

そんな僕たちの耳に間もなく聞こえて来たのは、やれマニラ陥落だ、シンガポール攻略だと……信じ難いような華々しい勝ち戦のニュースだった。その矢継ぎ早やの勝利の報道に疑い深い僕ら少年の気持も、やっと少し明るさをとり戻したようだったが、それも束の間。次の年の昭和十七年には、次第に反撃に転じたアメリカ軍の動向が伝わって来て、僕らは再び暗い気分になりこんで行った。戦局の転換が日本の社会全体に不安と苛立ちの波動を生み出し、それが僕らの中学の授業内容に二つの変化をもたらした。一つは思い

もかけなかった英語の授業の廃止。それともう一つは、軍部から直接、中学校へ派遣された配属将校による新しい軍事教練の課目であった。前者は何を今更、敵国のことばを学ぶ必要があるのかという珍奇な発想からであり、後者はもちろん一億総軍人の実践だった。

僕ら少年たちにとつては、戦争という国家の異常事態が国民の生活に、ある種の強制や不自由さをもたらすことは止むを得ないことで、それ位の辛抱は当然のことだ、という考え方をいつの間にか教え込まれていったようであるが、それは矢張りある種の誤った教育の結果だったのかも知れない。

一方、誰かに教えられてそうなるのではなく、自身の知的な要求として、少年時代には個人的な傾向として夫々執着するものがあるわけだが、私の場合は中学三年の時、トルストイやレーン・モン・トフなど、ロシア文学に何故か興味を抱いて愛読したものだ。そのロシアの小説、特に貴族階級の小説に年中出てく

るフランス語の会話に、訳もなく好奇心をそそられて、クラスの二人の仲間と三人でフランス語の研究グループを作り、こっそりと勉強を続けたのである。その仲間というのは一人は長谷部利男君、もう一人は坂井実君だった。

人間には夫々、訳もなくやりたいと思うことがあるのは当然だが、今考えるとあの苛烈な太平洋戦争中の最中に、それと縁もゆかりもなさそうなフランス語の勉強など、よくやる気になったものだ、自分でも不思議な位である。教室でこっそり勉強するだけなら未だしも、私などは一人で新宿の映画館へ出かけて行って、フランス映画で発音の学習に夢中だった……。因みにその頃のフランス映画の代表作は「格子なき牢獄」(コリヌ・リュシール主演)や「美しき争い」(アニイ・デュコオ主演)。アメリカやイギリスの映画が上映禁止の時代、フランスとは直接に対立がなかったためお目こぼしだったのである。

それもほんの一時、やがて広島と長崎への原爆投下によって、太平洋戦争は歴史的な敗戦を迎え、日本の苦難の歴史が新しく始まることになるのである。中学

時代、一緒にフランス語をやった長谷部利男君は、その後も勉強を続けて最後は東大の経済学部へ行き、私は三田の慶応・仏文だった。だが卒業後は会う折もなく歳月が流れ、十年ほど前、長谷部君は他界した。そして私のあてどもない言語学探訪旅行は、フランスから遙かピレネ山脈を越えてスペインに入り、そこで識り合ったのがフェルナンド・アラバル(スペイン前衛劇劇作家)だった。彼はフランコ独裁政権を逃れてパリへと亡命、そこでフランス語で数多くのドラマを書きつづけている。その大部分を私が日本語に訳し、これまでに若林訳が二巻、他の翻訳者の訳が二巻、合計四巻まで東京の思潮社から出版されている。代表作は「戦場のピクニック」、「建築家とアッシリア皇帝」。(舞台演出、翻訳家)

私のニーチェ

1期 加藤 茂樹

顧みますと、私は旧制高校時代。理系におりながら哲学的なものばかり読んでいたようです。しかし、お恥かしい次第ですが、結局思弁的な内容はほとんど全部忘れてしまいました。その後も教職についてからは、専ら仕事と余暇の悪用で、思想的向上などはおよそ縁遠いものになりました。

しかし、どういうわけかただ一つニーチェの「ツアラトウストラ」だけは年と共に読み返す機会がふえて、今では私の信念あるいは思い込みの中核になってきている次第です。もともと正直のところ私はニーチェの作品はごくわずかしか読んでおりません。従って私がこれから書くこともほんの「私の自己流のニーチェ観」にすぎませんのでご容赦ください。とはいっても、不思議なもので、言語はほんの一断片でもその人に深い感銘を与え、その人の人生観を決めてしまうことがあり得るようです。私にとってその一節というのはすでによくご存じのところです。私にありますが、第一部序

説の「人間は動物と超人との間に張りわたされた一本の綱なのだ——深淵の上にかかる綱なのだ。（中略）人間における偉大なところ、それは彼が橋であつて自己目的ではないということだ」というところです。

さて、ニーチェはこの超人を「大地の意義」と説明していますが、これは恐らく長年にわたつて『世界の背後を説く者たち』によって作りあげられた旧道徳・形而上学のアンチテーゼとして設定したもののように思われます。しかしながら私は勝手にこの超人を「人類の理想」と考えることにしています。なぜならば、現代ほど国際化が進んでいながら全人類の視点が欠如している状態は、将来全世界にとって極めて危険であると思われるからです。ニーチェもこの考え方には同感してくれることでしょう。というのは、彼は「千の目標と一つの目標」の中で、「まことに多数者の利益の中に自分の利益を求めようとする狡猾な「わたし」という、この薄情なもの、これは集団生活の起源では

なく、それを没落させるものである。(中略)千の国・民族が千の「善」と「悪」を創造した。ただその千の頸を結びつけるくびきだけがいまだにない。人類はまだ一つの目標を持っていない」と述べているからです。(くびきは原理の比喩)

さて、この「橋…」の思想によつて私は「人間各個人は広い世界の一点に、また長い人類・宇宙の歴史の中のほんの一時点にたまたま投げ出されたささやかな存在であり、だから決して自分一人だけで独立存在しているのではなく、各人はその生存中に何かを創造し、それを添えて後世にバトンタッチするべき使命を帯びているのだ」ということに目覚めました。この視点は東洋の世界観に通じるかもしれません。また理論はよく解りませんが、フリッチョフ・カブラが「天才自然学」の中で、「素粒子の世界は統合された世界のさまざまな部分が織りなす『関係のネットワーク』である。従つて「粒子」のような孤立した物理的实在の概念は本質的に意味のない理想化である」と言っていることに意を強くしました。要するにエゴばかりが強調されやすい旧来の原子論的個人主義のままで、今後果た

してよいものかと言いたいのです。

さて昨年十月頃、アメリカ大統領候補者のディベートが行われました。その中で「外交の指導原理は何か」と聞かれて、ブッシュは「その第一はアメリカの national interests である」と答え、ゴアは「それは values すなわち free market, political freedom であり、他の国々にもっと私たちのようになるように手助けすることである」と言っています。前者は何と狭いヴィジョン、後者は何と無反省な思ひ上がりでしょう！彼らには all humankind's interests の視野が全然ないようです。

ところで一方我が国日本ではどうでしょうか。米国追隨を脱皮し、日本独自の平和精神を世界に広める気骨をぜひ持ちたいものです。

教えられる日々の追想

——イエローバッジ感動の合唱祭——

1期 長谷 孝次

。近頃のニュースは顔をそむけたくくなるようなニュースが多い。テレビのチャンネルを思わず回してしまふことも一度や二度ではない。その中で何故か十七歳の若者のニュースが耳にとまる。またか。これからの世の中は大丈夫か。親子の絆はどうなる？学校は？「三ツ子の魂百までも」……幼児期を情感豊かな環境で過ごさせたい。この環境保持に親や社会は精一杯努力しているだろうか。

教育の効果は百年先に見えるという。親も教師も学校も必死に頑張っている。その頑張りに終点はない。頑張り続けてほしい。子どもはまさに地域の宝物である。

いま、ここに学校現場の一断面を追想して、今後とも若者の育成を見つめていきたい。

。教職歴三十年、私の最後の勤務した学校は調布市のB中であつた。若い時十年程お世話になったことも

あり、なつかしさで一杯だつた。しかし美しかった中庭の花畠も雑草とゴミの集積場と化し、牛乳びんさえそこここに突きささり、昔日の面影は全くなかつた。生徒は概して快活だが、全体的にやや落ち着きに乏しい。諸悪の根源は二年のツツパリ軍団にあつた。授業がうるさい。教室から抜け出す。暴言や暴力は対教師にも及んでゐる。この一にぎりのツツパリに学校中が浮き足立ち、その同調者に悩まされている。この二年の学年色が黄色であり、このイエロー軍団には三年生も手を出さなかつたのである。

。着任早々、新任の教頭さんと校内を一巡した。学級の標示板はとられ、トイレや教室のドアはこわされ散々だつた。しかし教頭さんと学校再建の前途に、希望の光を確認し合えたのは何よりの力となつた。

教師、父母、生徒が動き出した。用務員さんや事務職の応援がとくにありがたかつた。破損箇所は次々と

修復されていく。植木職の多い父母には、内外の庭園美化に手を貸していただいた。廊下を飾る花を蹴り倒されることもなくなった。他校から来た中学生が「校長先生、学校中がきれいになりましたね」と声をかけられたのも嬉しかった。

ツッパリ軍団に対する私の役割は、番長の父親と面談することだった。息子と二人暮しで行商をする親は気性もはげしく、学校に対する不信感も強かった。学年の先生から、恐れられ敬遠されていた。学年主任と何度目かの夜の訪問でやっと父親と話をすることが出来た。といっても父親は酒を傾け、テレビスポーツを聞きながら一方通行の話であった。帰り際父親はやおら息子を呼びよせ、ことの真意を問うた。息子は頭をかき、親はすべてを察した。「ご迷惑をおかけしました」の一言が、番長のその後に大きな変化を見せたのである。

○二月下旬、サッカー部のゴールキーパー二年のK君が突然くも膜下出血で倒れた。すでに脳死の宣告を受けていたが、級友たちは必死の形相で千羽鶴を折りはじめた。学年全体が回復を祈り折り続けたが、五日

後に無念の知らせとなった。

葬儀は校旗を先頭に学年全体が取り組んだ。ツッパリが激しく号泣している。教師も声をあげてない。葬送の合唱も声にならない。K君の父親は語る「この合唱祭が皆様と一緒した最後の行事でした。

息子は来年は頑張ると申し出ておりましたが、息子には来年はなかったのです。皆さんは今をしつかり生きてください」切々たる訴えだった。そして更に息子の臓器提供すら申し出ていらしたのである。この父親の言動に強く心を動かされた生徒達は「生命を考える会」を学年で開き、父親を招いて、生徒一人一人の心情を吐露した。この生徒の発表はまさに「透明な心の輝き」であり、親や教師の心を強くゆすつたのである。

○このイエロー達は三年になって大きく変身した。十月の合唱祭は感動と迫力につつまれた。女生徒の作文に「なぜか何時もの雰囲気と違う。張りつめたものがある。しかもなにか淋しさもただよっていて」と述べている。口には出さないが誰しも亡き友の心情を受けとめている。

冒頭の全員合唱「大地讃頌」の心をこめた歌声にも

う参観の父母は涙している。あのイエローバッジの学年がよくぞここまで……親の言葉がとぎれる。「雪が降る……白い十字架を埋めつくす」のクラス合唱で感情は頂点に達した。あのツッパリも微動だにせずタクトのもと心を一つにした合唱の迫力。歌いあげる生徒の姿に大人達はもう我慢しきれない。あとからあとから出る涙。ご参観の小学校の校長さんも目がしらを押えておられる。

○イエローたちは、私達教師に、そして後輩にさわやかな感動を残してくれた。体育館に残る友の死を悼む「木彫り校旗」とともに、イエローの残してくれたさまざまな姿に、私は深く教えられるのである。

印象に残る思い出について

1期 桑原 弘道

思い出は、数々ありますが、私の強く印象に残った思い出に絞って書いてみました。

一・紀元二千六百年（昭和十五年）四月に府立第十八中学校・第一期生として入学した由緒ある生徒でありました。

二・陸軍少佐、伊藤教官についての思い出は、まず東条英機元首相に良く似ておられた事であります。『タカン』の渾名の由来は周知の事実でありますので、敢えて書きません。最も重要な事は、当時の中学校の教官は、全て尉官であり、佐官は旧制高等学校・高等専門学校以上でなければ配属されない慣例になっておりましたので、教練を含めた優秀校と認められた事に誇りと嬉しさを感じ、心を新にした事が思い出されます。

教練の体験訓練で板妻兵舎に行った時や四年生・五年生の学徒動員で立川航空廠・立川航空工廠時代も何かと有利であったことが、他の人から聞かされてなる

ほどと思ったことが多々ありました。

三・ついでながら、教練の体験訓練のことをお話して置きますと、府立十八中にちなんで、竹田さんが、毎年十月十八日の十八時より同窓会を開催されご苦労されている事にあやかるが如く、昭和十八年六月十五日から十八日まで静岡県駿東郡板妻村、板妻兵舎で実施された廠営時の記念写真は、昭和十八年六月十八日に撮影したもので雨曇りの為、富士山が見えなかったのですが、写真屋が後から挿入したものと判りました。

四・勤労奉仕としての思い出は、陸軍が、踏切無しの弾丸道路を首都圏から立川・青梅方面まで通す為に、荻窪の踏切を陸橋にすることとなり当校も奉仕することとなり「もっこ」での土砂運搬に参加し苦労した事が、思い出されますが、荻窪を通る度に「ああ、この一部分に我々の汗の結晶が詰まっているのだな」と感ずるのは、私一人だけでしょうか。

五・岡田先生との終生忘れられぬ思い出について

在学中の私は、少なくとも幾何・数学の先生に名前を覚えられるような、両極端な生徒ではなく、シワちゃんと言うと、少し普通の先生とは違っているくらいにの感触を持って卒業してしまったのでありますが、「縁は、異なもの味なもの」とは良く言ったもので、昭和三十年に、突然、お手紙を頂きましてから、この得難い忘れ得ぬ思い出が始ったのです。お手紙の内容は、「ラジオの事で是非、相談に乗って貰いたい」との事からです。私に手紙を出した経緯や相談の内容は、直接会ってお話したい、間借りで汚くて狭いところですが、久我山駅までお迎えに行きますとの事で、それは固辞したのですが、ちゃんと久我山駅でお待ち下さりご一緒致しました。実は話題に困ったのですが、先生の方から勤務は大変でしょうとか天候の事等の話の間を持たせて下さり、ラジオについての話は一言も出ずにお住まいに着いたわけです。お部屋は離れの一部屋でしたが、整然と整理され掃除の行き届いたお部屋にはびっくり致しました。とかく、学者・文筆家は埃と紙屑と雑然と積まれた書籍に囲まれて威張っている方が多いので、それに近いのではと想像していた私

にとつては、驚きのはじまりでした。渋茶を飲みながら、次のように整然と静かに話し出されました。

私に手紙を送った経緯は、渋谷に出た時、たまたま教え子に会い話の中で感度の良いラジオが欲しいのだがとの話になり、それなら八欧電機(株)製のが良いでしょうとの結論で一致し、では誰か勤務している者を知らないですかと聞いたなら桑原君がいると言われたので早速お願いした。

ラジオの事で相談に乗って貰いたい内容とは、

(a) ラジオには、詳しくないのですが、高感度で、混信の無いラジオが欲しいのですが手に入れるにはどうしたら一番良いのか教えて欲しい。

(b) 出来れば海外放送が聞けるものを希望したい。

2バンドと3バンドの価格はどの位になるのか、

検討して教えて欲しい。

ここで、お互い二時間多くの話のやり取りがありました。いやな感じは、一つも無く、真剣に討議致しました。ここに、ポイントだけを書き並べれば、自然と先生のお人柄が、滲み出てくると思うのですが、紙面の関係で書けないのは残念ですが、私の感じ

た儘の感想を忠実に書き並べてみます。但しどうしても、その後の二十数年のご交誼の感想が、自然に入ってしまう事についてはご勘弁下さい。

威張らず、感情に走らず、師弟関係を意識されず、自分が判ったと相手が判るまでは何度でも質問され、調査・検討事項は、分担区分と日時が決まるまであらゆる角度から検討して双方納得するまでは次に進まない。

非常に気を遣われ、私の勤務に支障のない事を常に確かめられ、ご自分のご希望の方を犠牲にされる。しかしご自分の考えには、誠に正直であり率直に裏表無く話される。喜怒哀楽は、喜と楽を常に優先させ哀は出来るだけ胸に秘め、怒は人間としての節度を外した時と決めておられたようである。

教え子の中には、多くの優秀な電気通信技術者が居られたであろうが、何故私を選ばれたのか未だに根拠が判らないが「大変だろうが頼むよ」「全力を挙げてやります」との事で、二十八歳から人間としての貴重なお教訓を二十数年間身を持って体験出来た事には心

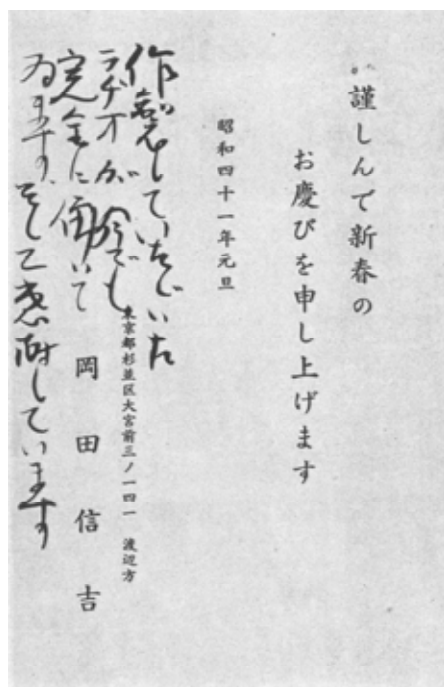
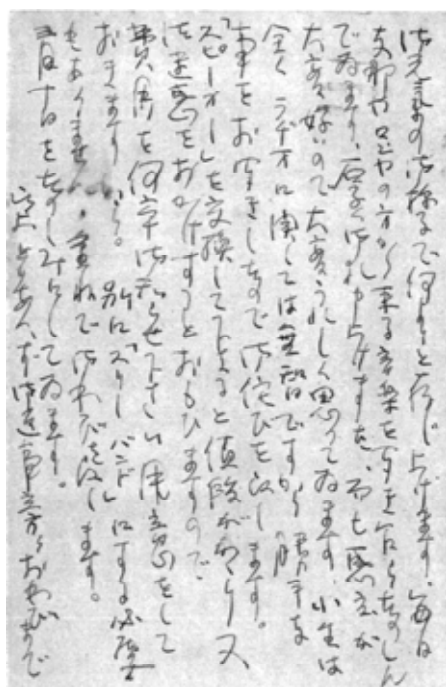


昭和18年6月18日：静岡県駿東郡板妻村：陸軍板妻兵舎前にて

から感謝しております。

昭和三十五年の年賀状は、何回も読み直している内に自然と涙が溢れてきて、しばし止まらなかった事を終生、忘れる事は出来ません。同封のはがきは、抜き出したものですが、毎年、何かしらラジオについての感謝の言葉を頂き、私自身も人間性が変わっていったと自覚しております。

今は亡き先生を偲びつつ、社会貢献を第一に邁進致し、感謝の気持ちでボランティア活動にも勤めております。



恩師の面影

1期 近藤 晴彦

多くの人が口にする言葉であるが、青少年期の追憶は鮮明に残るものだ。この期間に得難い友を得て、半世紀を経た今でも敬語抜きで語り会える人を多く持っていることは有難いことである。玉中の文集も今回が皮切りということで、この得難い友のことは後の愉しみにとつて置いて、まずは先生のことを記してみたい。

小、中、高、大の恩師に其後の社会における『師』を加えればかなりの人数になるが、こと自分の成育に關して大きな意味を持つ文字通りの恩師が玉中に集中している。考えてみると不思議だが、少年期という成育期に關連があるのかもしれない。

筆頭にあげるべきは二年のとき赴任された英語の岡山先生である。皆が覚えていいることだが、「クラウド・リーダー」第二巻の冒頭「ボツブ、デイトド ユウヒヤーゼ アラームクロック? イッツ ハーフ パースト セブン。ユーアー レイト!」のくだりを延々一学期に亘って反復素読、解釈、解説を続

けられた。これは多分、赴任されて生徒に接し、全体の英語把握能力が構成的でなく、曖昧で、中途半端であると察せられたところに発した特殊な教育法であつたと思われる。

私は入学直後の四月十八日の夜腹痛が起り、翌日盲腸炎と診断されて手術を受け、予後の回復が遅かつたので、二ヶ月近く欠席を続けた。そのため、学校に顔を出して困つたのは英語と数学であつた。今のように小学生から塾で英語を習うというようなことは全くなかつたので、いまやっている課程の英文が、意味はもとより発音さえ解らない。グローブのはめかたも知らない者に内野ゴロがとんでくるといった状況であつた。考えてみれば姉も居たことだし、親も少しは心配してもよかつたのではないかと今思うが、そこが我両親の或る意味で有難いところであつて、全くの不干渉だったのである。不意に外国に投げ出された子供のようにあるいは解剖学の蘭書を目の前にした杉田玄白のよう

に、文中における単語の位置を頻度などから考えて『文の構成』を推定するよりほかない。発音記号も知らないで、皆が読む発音から、音節（当時はもちろんその概念を知らない）と発音の関係を経験的に覚えるよりほかない。

こんなことで最初の一年が過ぎてしまった。試験のときは、仕方ないから教科書の英文表記とその和訳にあたるものを丸暗記して、問題が出てから記憶の倉庫を探さなければならない。数学の方も、特に代数が小学校時代の算術と方法が違うので悩まされたが、これとはにかく教科書は日本語で書いてあるので、参考書がなくても、辛うじて後追いができた。

それで、この『ボツプ先生の英語理解基礎講座』は天の恵みと思えるほど有難かった。何しろ「ボツプ」という発音の子音「b」の発音記号から始まって、主語、述語動詞、目的語、補語の組合せによる基礎五構文まで、徹底的な基本ノックを受けたことになる。グロープのはめ方から教えて貰ったわけだ。

大袈裟な表現にみえるかもしれないが、この時以来、岡山先生から受けた高恩を忘れたことがない。同じ時

期に着任された国語の高橋先生から「僕は橋本文法で薫陶を受けた身で」という御言葉と共に授かった橋本文法の論理的な分析、構築方法に一種の美を感じたのと相俟って、玉中時代に思考の核が形成されたようである。高橋先生の方は出た後も御自宅を何度か訪れて啓発されていたのに、大恩のある岡山先生の方は不義理になってしまった。数十年を経てお目にかかり、当時の状況を綿々と話して謝意の一端を呈上したつもりであつたが、残念ながら老境の先生は「あー、そう、そう」と空を打つのみであつた。

佐渡人、土屋長松先生

土屋先生は玉泉中学の創立時に着任され、在学期間フルに薫陶を受けた。教科書を読むだけの授業ではなく、その内容を御自分で充分に咀嚼され、こういう説明ならば、この程度の知能レベルの少年たちによく理解される筈と、受講者の立場に立った授業であつた。代数と幾何の双方を担当されたが、どちらもめりはりが利（き）いてわかり易かつた。今思うと、あのわか

り易い授業を進めるためにかなりの御苦心が秘められていたのではなからうか。幾何の証明問題を解答するときの書式をかなりの時間をかけて例証的に解説されて居られたのが記憶に鮮明である。

御性格は屈折のない明朗素直な方であつた。接続詞の「けれども」を「ケモ」と縮めて発音され、これが綽名（あだな）となつたのだが、あるとき、「ケモがなぜ悪い？簡潔でいいじゃないか」と口を尖らせて抗議された。先生は佐渡の出身だが御郷里のこととなると数学的論理を越えて愛着が露出した。先生が当直の日、学校に長居をして、先生が手ずから炊かれた夕食を宿直室で御馳走になつたが、「これは佐渡の米だ、うまいぞ」と仰言つた言葉が忘れられない。その先生も、一緒に御馳走を受けた級友坂井君も今は亡い。

「ケモ」が佐渡訛りであるか否かは不明だが、佐渡島は斜めに二列の山脈が走り、その間が平野の平行四辺形をなしている。従つて点対称で中心が考えられる。もう一人の知己の佐渡人であり、天才的な詩人的資質の持ち主であつた工氏の言によると、この中心点に一本の松が聳えているそうである。「この松を引き抜い

たら、どうなるかと思ひますよ」と笑つたが、私にはそのひよる長い松を望んで育つたのが先生だと思へた。

回想と未来

1期 神田 芳郎

思い出

少年老い易くと言うが、六十年という歳月はアツと言う間に過ぎて行った感がある。殆どの景色は何処もすっかり変わってしまったが、通学で乗車した東中野の駅のホームに昔の面影を見た。毎朝駆足で電車に飛び乗り、ギシギシと鳴る木造の電車の音を聞き乍ら中野駅の急行のホームに駆け登り乗り換えるのが毎日の日課であつた。

真珠湾の攻撃を知つたのもこのホームでこれからどうなるか、全く判らない思いであつた。六十年後の今が予想出来なかつた様に、六十年先も良かれ悪しかれ更に大きな変化があるかも知れないとも思う。

つつかい棒で倒れるのを防いでいた小学校の校舎と違って、木の香も真新しい新校舎で周囲の麦畑からの臭い田舎の香水も新鮮に感じ、夢膨らませる思いであつた。

しかし戦争色が深まり、寒風吹きすさぶ中での銃剣

術、雑巾掛けで凍った床の上に座らされた剣道、そして「八百長するな」と竹刀で叩かれたり、霜焼けの痛む手を擦り^{ながら}乍らの運動等の強烈な印象がほのかな思い出として残っている。

戦時下であつたので、作業と言う科目があり畠で完熟したトマトを食べその美味しかったことは忘れられず、後にアメリカで生活した時も庭にトマトを植え楽しんだ。

戦争が厳しくなつた頃には、一睡もしないでの夜行軍で居眠りし乍ら歩いたこと。今の横田基地に滑走路を作る為にモッコで土運びをしたが、アメリカはガダルカナルに一夜で滑走路を作つたと聞きこれで勝負になるのかと思つたこと等が思い出される。

とりとめもなく書き始めると色々思い出されるが、眠い目を擦り乍らの勉強は余り印象にない、幸い四年中退で進学できたが、そこでの寮歌祭でバスケットボールの対抗試合を始めて見て、戦時下でも楽しい運動

があるものと眩しく別世界に感じたものであった。

それ程に中学では楽しく盛り上がる行事は記憶にない。しかし育ち盛りで十分に食物がなかった事が長寿の原因であつたと言われる様に、何が幸せな人生かは判らないものである。

将来像

ローマは一日にして成らずと言うが長い間の努力の積み重ねが大切としみじみ思う。無理が通れば道理が引込む現在の世の中でも、経済の原理に合わない事は必ず後で清算されている。

又世界的な人口爆発、この言葉はアメリカに居た時に始めて聞き、身に染みる思いであつたが将来の食料危機に日本は何の対策もなさそうである。そのことは日本人にとって将来への不安の一つとして潜在し、景気にも影響していると思う。

趣味として農業出身のアメリカ夫人から英会話を習っている。教科の中で母国紹介があり、日本はアメリカのカリフォルニア州と同じ面積に一億二千万人が住み、アメリカは殆ど平原だが日本は八五%が山地であり、殆どの人は更に狭い一五%の中に住みその中で生

活している。そしてアメリカでは利用できる所は殆ど活用しているが、日本では残り八五%は有効には使われていないというのが彼女の見解である。

アメリカの方が開拓の余地がありそうなのにと一瞬反論したく思ったが、良く考えて見ると農耕民族と狩猟民族の考え方の違いがあるのだと思った。悲しいことに我々農耕民族は平な土地の利用法しか経済的なノウハウの持ち合わせがない。

確かに日本国内では耕せる十五%の中での議論だけで、八五%の山地の議論は全く聞かれない。耕せば土が流出する傾斜地等は論外なのであろう。農耕民族にはやはり二次元での思考しか生まれないのではないだろうか。

しかし消費者の食文化は狩猟民族との融和で変化しつつあり、米だけの議論では最早や将来の対策にはならない。

彼女の意見を噛みしめると、水がなければ育たない、下手に灌漑すると塩が吹出して直ぐに使えなくなる。太陽が当たらなければ草も生えない。

しかし 日本では雨は良く降るし、太陽の恵みも充

分にある、八五%の国土の欠点は唯一つ傾斜地と言うだけである。山岳地帯のスイスと同じである。観光地の登山電車から乳牛や更に急な斜面では山羊が長閑に草を食んでいるのをスイスを旅行し乍ら誰も見ている光景である。

問題はその産業形態が長年かけて経済性のあるものに育て上げられた結果であり、日本に合う牧草や果樹類を開発したり、経済性のある産業構造を育成しなければならぬ。

現在は觀賞に供される程度のものはあつても、八五%の土地は経済的にも何の役にも立っていないと見られているのである。今は一五%以下の太陽光しか利用していないのだから、あと一五%の太陽を有効に使うことは可能である。

単に食料危機の回避のみならず、死に体の貴重な資源を生かし、新しい農業人口も増え日本全体を豊かにするでしょう。

スイスは昔貧乏で男はドイツやフランスの傭兵として出稼ぎに行き、お互いに殺し合つて生活して来たところで、それを繰り返さない様に家訓として昔の戦争の

悲惨な絵を飾っている。日本もその覚悟で新しい態勢を作る努力を続けられ、貴重な資源の活用により将来は洋々たるものであり明るく展開すること間違いない。現在の安易な補助金政策は働く意欲を殺ぐだけの逆効果でしかない。アメリカが日本の自動車工業を見習つた様に人の意見は謙虚に聞くべきであらう。

先ずは地権的に手掛け安い国有林の開発から手掛け、各地に明治維新の際北海道に酪農を育てたように新しい山岳酪農の見本をスイス等から導入すべきと思う。

尚、良く根の張つた大樹と根を張る牧草の組み合わせは、植林より遙かに土砂の崩壊をも防止する筈である。

思い出すままに

2期 高橋 爽

記念文集の話があり、誠に時宜を得た計画と賛成し、投稿の申し出をしたものの、多忙にかまけて延び延びになり、担当幹事から督促を受けることとなってしまった。我々の中学校時代といえば、何といっても戦争中の暗く、苦しい時代であり、対米英戦の戦士の養成の様な学校生活で終ってしまった印象が大きい。今の時代には思い出したくもないことも多いが、この機会に当時を振り返ってみたい。

(併設校のこと)

当時は併設校とは云わなかったが、玉泉中学校は、伯江の方に新築移転になるのだということで、十中に併設された学校に入学した訳だが、とうとう新築どころか三期生までで十中に吸収統合されてしまった。戦後は高等学校となって他の学校は連綿と続いているが我々の学校は、三期生までで終わっている。誠に寂しい思いがある。当時も次々と中学が新設されたが皆独立して残っている。

私は神奈川の高校に三十年余り勤務したが、高校生の急増対策で百校もの高校が建設されたがこの様な例はない。新設校の開校には、直接予定地に建設して開校するものと、初め既設校に併設開校し、同時に予定地に建設を進め、校舎が竣工すれば移転するものがある。開校に当っては、校長、教頭が開設準備室長、室付として発令され校務の準備をする。併設開校の場合には、校舎の一部に校長室、職員室が設けられ、併設校は肩身の狭い思いをするし、既設校の方は余計なものがあるといった感じがして、お互いに馴染みがよくない。その点我々の場合は、校長が兼任発令されていたし、職員室も両校の職員が同室であり、教室も一部の使用ではあったが、校舎内は何処へでも自由に行けたし全く差別はなかった。まるで当初から将来統合を予定している様にも思えた。

ここで両校の違つところを若干挙げて見ると、校章が我々は「梅と菊」、十中が「梅」、クラスが「いろは」十

中は「ABC」、校訓が「感激」十中は「感謝報恩」、教科書では英語のリーダーが「ニユー・ライト」で十中は「キングス・クラウン」、このリーダーは十中の方がやや難かしかったのではないが。しかし二年生となって副読本に「ロビンソン・クルーソー」が採択されて、ぐつと難しくなったものである。物理や化学の実験室は使わせてもらえなかったが、これはやむを得ない。格技では我々は剣道に限定されていた。教練では、十中には何人かの軍人の教官がいて、互いに連携を持ちながら指導をしていたのが、我々には興教官が一人で頑張っていた。そんなことから分列行進では、我々の方が歩調が速く、十中の方は少々ゆっくりした歩調で堂々としていた様と思う。しかし、この教官達も学年の進行につれて両校隔てなく、森田、足利、小田とまた軍曹の階級を持った下士官の教官にも指導を受けた。配属将校で現役の小柄な伊藤少佐も来たり、十中には若い大尉の配属将校が居たのを思い出すことができる。

特色あるのは校歌である。既設の十中にも校歌がな

ったらしく我々が二年の頃校歌が定められた。両校とも同じ歌を歌わされたが、白沢校長は「皇御国」を採択した。一般に校歌は、著名な作詩家に依頼したり、職員・生徒に公募したり、校長が作るなどであるがこれは校長が独りで決めたのかも知れない。当時この詩の出版などについて説明があった様に思うが、はつきり聞きとれず解らずじまいになっている。ただこの歌詞で黒田節を歌う人もいるし、私の持っている軍歌集にも、頌歌の部に掲載されていて当時の人々にはよく知られている。作曲は誰であるか分らないが、全体指導を音楽の貝増先生が担当し、歌い出しの部分を反復したことを覚えている。その指導の様子を見下げる様な態度で教官が真似たことがあった。当時の音楽の先生の立場を伺わせる場面であった。私は歌が好きな方で、今でも民謡などよくやるが、校歌の類も好きである。今迄に関係した学校の歌はすべて覚えていたが、この校歌は今でも歌うことができる。戦後新しい校歌が制定されるまでこの校歌であったのだろうが、近頃、旧制中学校歌祭が催されているそうで、

同窓会報にも紹介されているが、何を歌うのだろうか。

共通する学校行事に奉拝行軍があった。毎月二十二日頃であったが、我が校が二学年六クラス、向うが五学年二十五クラスで全体で千五百名程の大群で、今の交通事情ではとても実施できなかったろうが、明治神宮を過ぎた頃から東京の町中を歩くことになり、吉祥寺の田舎住まいの私などは、楽しい行事の一つであった。

我々の独自の行事には、狛江の建設予定地へ整備に行つたことが二、三回あったと記憶するが、そこは農地で豆類が植えられており、その草むしりみたいなこともやった訳だが併設校としての居心地もさして悪くもなかったためか、将来ここへ来るんだという様な愛着は特に感じなかった。そこへ行くのに現地に集合したものか、学校から歩いて出掛けたものか記憶が薄れたが、ある時大雨の出水のあとで、田圃の稲が倒れて水浸しとなったところを歩かされた記憶が残っている。

そのうちに戦局も一層厳しくなり、我々も勤労動員に駆り出され校舎新築のことなどすっかり考えられなくな

ってしまった。

（勤労動員のこと）

勤労動員より前には、毎年短期の奉仕活動があった。

ある時は、久我山の岩崎通信機の工場で、また小平の陸軍兵器補給廠で、そして宮城の坂下門を入ったあたりの草むしり、今でもそんなことがあった程度の記憶だが、高井戸小学校のところで軍用品の積み付けの仕事などもあった。戦局の進展に伴い全国的に学徒動員が始まり、世間では「動員学徒の歌」が流れ悲壮感もあった。我々は、四年生の六月頃ではなかったかと思うが動員活動に入った。始めは先生が巡回指導に來られたが、いつの間にか間遠になり、終りの頃は殆んど來られなくなったようだ。陸軍氣象部に集合したとき、我々の身分について問題があった。当時軍属には、技師、技手、雇員、傭人と身分があったが、我々をどこにランク付けするかということであった。雇員の待遇で落ち着いた様だが、実際には傭人と同列で働いた様に思う。しかし多くの中学生が軍需工場で生産活動に従事していたのに較べると、

我々の仕事の内容は知的なものがあつて恵まれていたのではないかと思う。

当時我々は、陸軍気象部と陸軍気象教育部に分けて配属された。私は教育部の方であつたが、教育部では更に教務、観測、予報と三班に分けられ、私は教務班であつた。メンバーは長田、木村、飯島、加藤、久保、横内と私の七名であつたが、気象任務につく学生達の教材の整備（教科書作成、印刷、保管）図書の整理（購入、整理、保管）軍用地図の購入、整理、保管などが仕事であつた。他の観測班や予報班がどんな仕事であつたのか他の部屋には勝手に行くことも出来ないので全然解らずじまいである。軍隊にない家族的ムードもあり、一度教育部全体で奥多摩の方へハイキングに行ったことがある。物のない頃のこと味気なかつたが気分転換になつた。気象部の方へ配属されたグループは、乱数表の記入とか聞いたことがあるが、学年が全体で集つて情報交換することなどないので、仕事の内容は解らずじまいであつた。そのうちに教育部は、福生の方へ移転することになった。

我々は連日引越し作業で、図書類の梱包作業が続いた。教務班には、将校が班長以下四名、下士官二名、軍属が三名位いたが、このうち士官はこんな作業に従事しないので我々と他のメンバーでの作業であり、今考えるとよくやつたなあと思う。このとき覚えた梱包技能は、その後の私の生活でも有効に作用し、現に今専門学校に勤めているが、本を束ねたり、雑誌を括るなど若い職員はとも私にはかなわない。

移転先は福生の陸軍航空審査部の敷地の一隅であつた。バラック校舎が建つていた。航空審査部は軍用機のテスト飛行をやつていて、飛竜、呑竜といった我々には珍しい飛行機が地上攻撃のテストを繰り返していた（戦後は横田基地となつた）。我々は高円寺から福生へ通勤することとなり、気象部のグループとは完全に別ればなれとなつた。福生は立川で青梅線に乗り換えるのだが、途中昭和町には昭和飛行機の工場があり、ここでは海軍の飛行機を作っていたらしく、海軍の軍人と乗り合わせることも多かった。気象教育部は福生の一つ手前の牛浜駅の

方が近く、広大な畑に囲まれていた。

新しい教育部での仕事は梱包をほどこいて整理することであつた。教育を受ける隊員はもう居なかつた様に思う。今考えると戦争末期に近く、気象学を教えて戦地に送り込む様な悠長なことはやっていられなかつたのかも知れない。長坂先生が巡回指導に來られたことがあつた。米軍機の空襲があつて、電車がストップすることがあり歩いて行つたことがある。昭和町から拝島へ向つてゐる途中、昭和飛行機を攻撃したグラマンの機銃の流れ弾を間近に受けたことがあり、見上げた敵機の操縦士が見えたこともあつた。今ならこんな危険なことは絶対許されないだろう。

その頃高円寺の方でも小グループに分かれ各方面に派遣されている様な噂を聞いたが、本当のところは知らされてゐない。勤労働員としては珍らしいと思える体験であつたが、この文集で誰かがはつきりさせて呉れればと思つてゐる。我々は昭和二十年の三月末に卒業式で学校へ戻つたが、勤労働員はその後どうなつたのだろうか。

軍隊の一部であつたのだから解散式とか動員終了の行事があつたのだろうと思うが、これも明らかではない。

（進路のこと）

卒業式は昭和二十年三月末頃に行われ、その日は全員が学校へ戻つた。一期と合同の卒業式だつたと思うが、あの頃の事で卒業後の謝恩会もなかつたので明確な記憶がない。私はその後海兵へ行くことになつていたので気象教育部へ出掛けて班長に申告をして別れた様な記憶がある。同期生には他にも軍関係諸学校へ進んだ者が居た筈だが、その詳細は解つてゐない。それ以外に高等学校、専門学校へと進んだ筈だが、同級生達があの終戦直前にどんな進路に進んだのか全くといつていいほど解つてゐない。

私は、父が下級官吏であつたから官費の学校へ進む積りでゐた。中学に入学する頃は、高等師範への希望を持つてゐた。戦局が進むにつれて志望は軍関係の学校へと變つて行つた。陸軍でも海軍でもよかったが、噂によれば陸軍の方が家系等にうるさかつたらしい。よく海軍の

方が難しいという人がいるが、私には陸士の方が難しかった。物理が難問であつたし、答案は万年筆で書くという方式だから頭の中で整理しておかなければ書けない試験であつた。それに較べ海兵の方は問題も易しく答案も鉛筆で書く普通の試験で取り組み易かつた。現に我々のクラスメートも海兵の方が多いのではないだろうか。

海兵の入試は、四日間位続き伝統の「振るい落とし」方式で毎日が緊張の連続であつた。何とか最終日まで残ることが出来たが、試験場では同級生と出会うこともなかった。今ならグループで出願し、受験番号が連番でお互に情報交換し合うのだろうが、当時は、個人個人で出願したものだから仲間の存在など知る由もなかった。発表は確か動員中で教育部では観測班の松本や予報班の波脇が合格の電報があつた話をしており私には来ておらず、若干気がかりであつたが、その日帰宅して電報を手にし満足と喜びを覚えたことを思い出す。

軍関係といえ、氣象教育部教務班に配属された久保君のことだが、彼は同窓会名簿にも掲載されていない。

つまり卒業していないからだろうが、甲種飛行予科練習生に志願し合格していた。高円寺時代に入隊の日が来て別れたのだが、同級生の見送りがあつたかどうかも解らない。今どうしているか、いつも気になっている。同じ様に卒業前に軍関係に進んだ者の中には、助川君の様に終戦後高等学校に復学し、西高一期生となっている人も居るのだから人生運命はいろいろである。西高同窓会名簿を見ると消息不明者が一番多いクラスとなっているが、我々のクラスが最も苦勞の多かつた時代なのだろう。

私が高校に勤めている頃、ある日、伊藤章君が横須賀へ訪ねてくれた。日刊工業新聞だかに勤めていて海釣りが好きだとか、私に遇うなり「生きていてよかったなあ！」と手を握つたが、其の後数年で彼は居なくなつた。私が海上保安庁の巡視船に乗り組み東北の基地で警備の任に當つていた頃、或る日突然に訪ねてくれたのが遠藤君だ。私も若く船の生活も十分馴れていたとは云えない頃だつたし、彼もゆつくりして居られない様な状況であつたように記憶しているが、接待もせず船を見学させた

だけで別れた。しかし、東北の片隅に居た私を訪ねてくれた好意は今でも忘れない。その頃八木君は九州の方の地方事務所だかに在り、私に便りを呉れたことがあった。海で働く私への激励のような内容であったと思う。どうやって宛先を確認したのか、友達の暖かさを感じた。

その後八木君も転勤があつたろうし、私も海上保安庁内で転勤して交流は途絶えたが、私が船を降りて神奈川の水産高校に勤める様になったある時、県教育庁の幹部の中に彼の名前を見てびっくりした。早速電話しお互いの久闊を叙したが、彼はその後どんどん出世して副知事までになった。私は最後に普通高校に居たが、私の学校のすぐ近くに八木君は家を構えており人生のめぐり合せの様なものを感じる。さまざまな進路を歩んで我々は卒業五十周年を迎えることになる。

(先生のこと)

我々がご指導をいただいた先生方は、英語の前田・岡山・嶺村・都筑(修身)・藤本(教頭)、数学の土屋・岡田、国語の高橋・中村、地歴の小山・牧野・見上、物理

の板本、生物の長坂、体育の竹内、漢文の中込、剣道の奥山、音楽の貝増と図画の滝沢・橋本、書道の山田、教練は前記の諸教官である。英数国漢という様に主要科目の先生方は忘れようがないが、特に岡田先生は印象が濃い。皆でいじめて担任の長坂先生から注意を受けたことなどを思い出すが、戦後西荻あたりに住んでおられたのか、時々お見掛けし、声を掛ければいつでも気さくに答えて呉れた。西高が有名進学校となった頃でも生徒達に聞くと人気があつた様である。

書道の山田先生は恐らく印象の薄い方の先生と思う。私は自分の子供を書道塾に連れて行って、そのまま自分もお習字をやることになってしまった。仕事もあり夢中になることはなかったが、高等学校を定年となり、少し本気になってとうとう毎日書道展に挑戦することになった。書道関係の本も目を通すが、現代書道の先駆者である比田井天来伝を読んで我々の山田先生の名を発見した。天来は日下部鳴鶴の弟子だが、日本書道展を創始した。天来の高弟に現在も生存される金子鷗亭(文化勲

章受賞)や山田先生が居るのである。私の毎日書道展初入選は平成二年だが、その時山田先生は毎日書道展の参与会員として在られた。山田先生は雅号を菱夏といい、我々が指導を受けていた頃は菱花であった。私は恐る恐る手紙を送ったところ激励の返事を頂戴した。その翌年先生は不帰の客となられた。

ご存命の先生方がなくなってしまった中で、土屋先生との出会いは、強い印象として残っている。私が水産高校で勤めている頃のこと、全国水産高校の校長会の会合が私の学校で開催された。佐渡の両津高校にも水産科があり、そこからも校長が参加することになっていたが、当日受付けに居た私の前に現われたのが、土屋先生であった。土屋先生がわざわざ私に遇いに来て呉れた様なものであった。会議のあとでおつきあい願ったが、帰途私の家に立ち寄り、小学生だった息子に励ましの言葉を下さった。

長々と書いて来たが、私は仕事柄同級生とのつきあひも少なく失礼ばかりしていた。しかし、船に乗る前に歯

の治療をしなくてはと、外務省の診療所に居た太田君に親知らずを抜いてもらったり、神奈川の高校に居るときに助川君が訪ねてくれたりと幾人かとの出会いがあり友情を暖めたこともあり忘れられぬ思い出でもある。

今迄に履歴書を何度となく書いた事があるが、その都度「東京都立玉泉中学校卒業」と書くことになるが、これを見た人の中には、「この学校は今どの高校?」と質問をする人もあった。そのたびに先の併設校の話をすることとなったが、もうそろそろそれも終りである。同窓会名簿の三回生までで約三百五十名だが、共通の履歴を持つ者同志、いつまでも交流を続けられたらと思う。

雑 感

2期 光山 慎二郎

玉中卒業五十周年記念文集発行に漕ぎつけられた幹事諸兄の御努力に対し、この紙上をお借りして深く敬意を表します。御苦労様でした。

玉中時代の憶い出をとの事です、私の平々凡々の人生の中で最も影の希薄な時期で多情多感な青春真最中の時期に喜びも悲しみも、又悩み、感動を憶い出せない自分が悲しく成りました。何か参考にと手元に残った、アルバムを調べたところ小学校、工専時代の写真は結構ありましたが、玉中時代のは館山の臨海学校、富士の合同教練。時期不明のクラス全員の写真。の三枚しかありません。貧しく寂しい中学時代であつたなと改めて、感じました。

玉中時代の憶い出の乏しい理由の一つは私感ですが、玉中の四年間は開戦から敗戦への四年間で卒業後も各々進路は違つても最終到着点は戦場へと決められていた訳で、戦時と云う一言で全てが抑圧され無感動になつてい

たのかも知れません。又敗戦で今迄の価値感が全て御破算に成り、その後の急激な変革の嵐の中に捨ててきたのかも知れません。もう一点は玉中の閉校ですね。在学中は動員等で先輩、後輩と面談する機会が尠なく、卒業後は拠所とする母校を失い同窓との繋りも失いました。

此の記念行事を機会に玉中同窓会にと発展させ、皆さんと酒を酌み、懐古談に花を咲かせ度いものです。

昨年五月完全退職し一年に垂んとしてますが日々呑気に過ごして居ります。政治が経済がと毎日報道されていますが、この五十年の間には大小の差こそあれ何度も遭遇した事です。日本の体制は少しも進歩していないと云う事です。而し国民が適切なる措置を採って呉れると信じ老後を楽しむ毎日です。

職去りて気儘に居るや去年今年
平成七年正月の笑句です。

中学時代の思い出

2期 堤 素高

はじめに

玉泉中学卒業後五十年に当たり、往時を振り返り、「タイムスリップ」し当時感じたままをスポット的に取り上げてみた。先に二期生世話人代表の村田兄より送って頂いた趣意書に書かれていた我々の在学中の諸行事をみて、記憶に不確かな面が多々あるのに気付き驚いた。我々の入学したのは開戦の年で、年齢的には今と同じの満十二才であり、卒業は十六才で四年間のうち、登校したのは十五歳半までの僅か三年二ヶ月であった。入学の前年は皇紀二千六百年の国家を挙げての祝賀の年であり、国威宣揚の意識も著しく、世は戦時体制に移行していた時期であった。従って入学時に入手した制服は、従来の詰襟でなく既にカーキ色の国民服スタイルで「スフ」入り独特の光沢はあるが薄い生地で作られていたのが印象に残っている。

(一) 統念について

特に取り上げる程のことではないが、始業ベルを合図に各自、自席で端然と黙想し先生の入室をお待ちする訳だが、入学当初は小学生時代の延長で教室内がザワザワしていると、臆に厳しい先生の時は、クラス全員に注意を受けたものである。この統念は社会人になってからも役立った。特に座禅会に参加した時などは、中学時代の統念を懐かしく思い出された。

(二) 徒歩の時間

毎週一回、午後に徒歩の時間があり、それぞれのクラス毎に縦列で学校の周辺を徒歩するもので楽しいひとときであった。当時校舎は畠に囲まれており、歩くのに極めて環境が適しており、四季それぞれの季節感と土の香り、新鮮な空気が満喫できて、僅か一〜二時間だが待ち遠しい校外授業の一つであった。学校近くの水道道路、五日市街道沿いの春日神社、宮前界隈、久我山、富士見が丘周辺の田園風景は格別であった。

(三) 夏期鍛錬隊に参加

一年生の時は安房館山海岸での水泳、三年生の時は山中湖畔合宿と富士登山に参加した。何れも十日足らずであつたが、楽しい思い出である。館山では海軍航空隊の訓練の爆音が絶えず、また普段は余り見慣れない水上機の離着水を間近に見ることが出来た。また館山湾の狭い部分の横断遠泳に参加したのも思い出に残っている。

山中湖合宿と富士登山は昭和十八年戦争のさなかであり、食糧事情も逼迫してきて一汁一菜は当然としても、毎食の玄米飯は当時食べなれていなかったためか、生徒の多くは腹具合を悪くした。日課の湖水での水泳は水が冷たく辛かった。然し一方では戦中にも拘わらず、当時の友好国ドイツの人達は家族共々湖畔でサイクリング等をしてながら、今日のリゾート感覚で、異国の夏を楽しんでいるかのように思えた。

富士登山は気候的には七月中が最適と地元の人達に聞いていたが、我々は八月早々に登山した。山頂でのご来光の素晴らしさは格別で、今も臉に残っている。然し下

山時に「砂走り」で驟雨に見舞われズブ濡れになり、全員疲れきって宿舎にたどり着いたものである。

(四) 長坂先生の追想

我々二期生の担任は土屋先生、長坂先生、前田先生の三先生であつた。土屋先生には一昨年の同期会の時に久しぶりにお目にかかり、むかしながらの名調子でのご挨拶を頂き感動した。私は一・二年生に長坂先生が担任でご指導頂いた。先生とは学校での諸行事を始め、勤労動員先でも偶々私の所属班に教務室があり、お会いする機会も多く学校の様子などを聞かせて頂いた。厳しさの中に温情に溢れたご薫陶に深く感謝している一人です。先生で思い出されるのは、前に勤務された県立高崎中学の生徒に、後の中曽根首相がおられ、希にみる優秀な生徒であつた由。当時から早くも将来を予見され、必ずや国家を担う人であるとよくお話しされていたことを記憶している。

さるかに合戦のこと

2期 長谷川 草夫

中学校時代のことでも今もとき思い出すのは、入学試験の口頭試問のことです。面接です。私の受けた質問は、「さるかに合戦の原因は何か」というものでした。

面接でできることは、家庭の状況とか、小学校で教えられた学科についてのことばかり思っていた私は、考えてもいなかった質問に、ぐっと詰まってしまいました。そう長い時間ではなかったと思いますが、考えていて時間をつぶすよりは、間違えても何か言った方がいいように思った私は、とっさに一言「柿の種です」と答えました。面接はそれでおわり、その理由などについての質問はありませんでした。

学校からの帰り道、母に面接のことを聞かれ、「柿の種です」と答えたらそれ以上は何も聞かれなかった」と話したところ、「もう少し何とか答えようがあったんじゃないの」といわれたことをよく覚えています。自分では少しは答えになっているように思ったのですが、やっ

ぱりだめかなあ、と思いました。

幸い入学でき、その後ほかの人にはどういう質問があったのか、誰にも聞いてみないまま今まで過ぎてしまいました。今回、記念文集の話がでて、ときどき思い出す「さるかに合戦」のことを、書いてみようと思ったわけです。さるかに合戦の話は小さいときから何度も聞いて大体は知っているつもりだったのですが、いま読むと随分長い話で、突然「原因は」ときかれて、頭の中で始めから終わりまでを瞬時にたどり、原因と考えられるものをいくつか選び出し、その中から適切なものを答えるなどということは、頭の回転のおそい私には今でも難しいように思えます。

この話は、蟹が握り飯と交換した柿の種を木にまで育て、なった実を猿にぶつけられて死ぬところまでと、腹から生まれた子蟹たちが親蟹の仇を討つ、という二つの話からできていて、時代により前後の重みが違うという

ことを、今度はじめて知りました。

室町時代には、汗を流して働く勤勉さと、その汗の結晶は公平に分けるべきだという考えから、前半に重点があつたといわれ、題名も「さるかに」「さるかにむかし」「さるかにばなし」などが使われていたようです。江戸時代中期に入ると、義士の仇討ちなどの影響もあつてか、重点は後半に移り、「さるかに合戦」の題名が多く使われるようになって、これは戦争の終わるまで続きました。

大戦中、蘭領インドシナ、フィリピンを占領した南方総軍の軍政部は、現地住民の教育にこの話を大いに利用しました。悪い猿は、植民地では旧統治者であり、近世の百姓一揆では悪代官になぞらえられたのです。

仇討ちの話が禁じられた戦後しばらくの間を経て、今はまたもとの「さるかに」「さるかにばなし」に戻りました。日本の貧しく、時にはしいたげられた、しかし明るく逞しく生き抜く民衆の姿を描いたというこの話が、時代によっていろいろに解釈され、利用されてきたこと

を知り、勉強になりました。

私の答えた「柿の種」は、教科書の「ハヤク メヲダ セカキノタネ」が頭のどこかにあつて、とっさに口から出たのかも知れません。まさに大戦争の始まるうとしていたあの時期に、試験官の期待した答はどのようなものだったのでしょうか。

五十年の思い出

師であり父のごとき前田松壽先生を偲ぶ

2期 阿部 道夫

あれからもう五十年もたってしまったとは誠に驚きです。それだけ自分も年をとったのだなあとと思うと、改めて驚きの一語に尽きます。中学時代、前田先生とはとくに忘れ得ぬ恩師と尊敬しております。もともと私は「どもり」でした。何度も自分に言い聞かせながら、皆と同じように話ができることを念じてきましたが、なかなかうまくゆきませんでした。小学校から中学へ入学するときも、慈悲深いY先生に代わり嫌な先生が担任となり、「名前も口々に言えないのか」と冷たくされ、自暴自棄の時代が過ぎました。父母兄も随分と心配しておりました。

ビクビクしながら中学の生活が始まった頃、前田先生にめぐり合い、「勇気を持って」と重ねて励まされ、次第に氣力をとりもどし、ゆつくりと発声の練習を行いました。英語の時間、英文を読まれ立ったまま一語も発音

できず、涙がこぼれたこともありました。

大学入試が迫った頃、私はまた暗い気持ちになりました。「アベ」の「ア」ア行、タ行、サ行がとくに言えませんでした。その試験のなかで、二人の入試試験官を今でも忘れません。一人は海軍経理学校、もう一人は慶應義塾大学医学部の試験官でした。

海軍経理学校では、学科試験の最終合格者に対するテストも終わり、なんとなくタドタドしく面接試験も済み（自信全くなし）帰りました。数日後、自宅に憲兵がみえて「どもり」のことは心配しないで、体調（肺結核）を整え（休養一年）、来年入学する様、伝言を受けたことは、今でも頭にこびりついています。

慶応大学医学部の入試では、名前がどうしても言えずまた駄目か・・・と一瞬眼前が真っ暗となり、失望の余り部屋を出ようとしたが、試験官は「阿部君、ゆつく

りでいいから声を出すように、アーベと言ってごらん」と助言され数分（長かった・・・）後、やっとの思いで名前を告げることが出来ました。合格などあきらめていましたが、無事うかつたとき、気配りをしてくれた試験官に感謝の気持で一杯でした。

入学後、まもなく教務課より呼び出されました。合格に何か問題があったのかと不安がつのりましたが、意外にも話は全く別問題でした。

それは恩師前田先生から、私の家庭が少し貧しく、特典制度の恩恵を与えてほしいとの推薦状があった由、大学では入学試験の成績を検討し、特に授業料を半額免除すると通知されました。全額免除二名、半額免除数名の特典を適用したとのこと、前田先生のかくれた温情に改めて感動致しました。

あれから五十年、前田先生と二人の試験官は私の忘れ得ぬ恩人として私の胸から離れることはないでしょう。現在、家族をみな失い、一人身となり気力はやはり戻りません。患者さんのため生きられるだけ強くと思ひなが

らも淋しさは消えません。

《近況》

私も今年、七十二才、労働衛生コンサルタントの活躍中、ウエルネス総合研究所に最高顧問として、六月に招聘されこととなりました。九月にはシルバー・ウエルネスが新しく発足することも本決まりとなり、理事として推薦されました。

高齢者に関するあらゆる部門の研究統合機関ですが、私は医学における最高責任者と云うことで、その課題は申すまでもなく、多岐多難にと云えます。

シユバイツァ博士は医師は七十才にして始めて一人前と教訓、私もこれからが、世界に通ずるドクターと認識しボケかった脳みそに鞭打ちながら、全国に医療の架け橋をしてゆきたいと思っています。

《旧友》

Sさん、Tさん。今どこで、何をしていたらっしゃいますか。健康で、いや少し位体を傷つけても、心爽やかに日々を送って下さるようお願いいたします。

先生と生徒

2期 村田 良雄

前田先生の英語の授業は「イッアペン」から始まった。先生の英語の教え方は『役に立つ英語』を目指しておられたようで、今でも斬新さを失わない。そのためか同級生には英語が得意の者が多いようである。せつかくの優れた先生に出会ったのに、私の英語は惨めだった。戦争が始まり、戦局が不利になってくると、英語は敵性語として排斥されるようになった。先生は「技術者は英語の文献を読みあさっているのだから英語は大切だ」といつておられた。それはわかってはいるのだが、現実の問題としてどうしようもなかった。

数学は土屋先生で代数から始まった。代数は因数分解というやつで、定石を覚えていないとどうにもならない。私はこの手の暗記やひらめきを要するものは得意ではない。三年生のときだったか、数学の教科書が変わり対数を取り入れられ、計算尺を作る授業があった。土屋先生の説明の方法ではうまく行かなかったのが印象深い。後

年、某大学の教授は意識的に間違つて黒板に書き、学生に間違いを捜させて、興味を引き出すのだということを讀んだことがある。土屋先生が意識的にそうされたのかどうかは定かではないが、これがきっかけで、私は数学が好きになってしまった。

私は小学校の頃から技術者になるのが夢だった。小学校の頃は模型飛行機、中学一年では電気機関車、二年生でラジオ、三年生の頃は自動車そして四年生では蒸気機関車と変わっていった。「そんなことばかりしているから成績が悪くなるのだ」といつも親から叱られていた。

勤労動員が始まるとそれは天国だった。勉強はしなくてよいし、気象部にはラジオゾンデの廃品が山と積まれ宝の山だった。海軍兵学校・経理学校に予科が出来、入学試験が数学と物象（物理）だけだったので、先生から受験を勧められた、幸い海経に合格して入校した。入校早々英語が出来ないのが見つかつて、補習授業を受ける

ことになった。ここでの先生は親切で、教室では恥をかかせないと約束され、文法から親切に教えられた。その甲斐あって、英語に興味を覚えるようになり、頭の上を覆っていた暗雲が取り払われた。つくづく生徒の個性にあった教え方が大切だと痛感した次第である。

空襲で中野の家が焼け茨城県に移転したので、戦後復員して高校を受験した。試験問題に温度の摂氏と華氏を換算する問題が出た。気象部に動員中は外国気象報を担当したので、華氏をを摂氏に、気圧のミリバール（今はヘクトパスカル）からmmHgに換算していたので、難なく出来てまんまと合格してしまった。どんな経験も役立つものである。

高校の二年生の時十中にいらした英語の北澤先生が教授として赴任された。先生のお宅には何度かお訪ねして、中学の頃のことを懐かしんだものであるが、十中学校舎が火災で焼けてしまい、私の悪かった成績も灰燼に帰していたので安心してお付き合いできた。

考えてみると、中学時代は勉強もできなかったし、楽

しかった思い出は少ないが、いつのまにか着実に技術者への道を歩んで、夢であったエレクトロニクスの技術者として四十有余年の生活をする事ができた。真空管から始まり、ブラウン管・撮像管などの電子管の開発設計に携わり、終わりにはコンピュータ関連の半導体やら液晶デバイスにまで関係出来た。エレクトロニクスの黎明期からずっと最先端技術にタッチ出来たことは幸せであった。これも先生に海軍を受験するよう勧められたお陰である。更に会社での採用選考や部下の指導・教育にあたっては中学時代の経験がいつも思い出される。仕事の進め方とか部下の指導方法とか人生にとって大切なことを玉中時代に学べたことを感謝している。

思い出すこと等

2期 藤森 明

秀才といわれた方々は玉中時代のことをよく覚えていられるが、私のような鈍才は何しろ五十年の歳月が流れているので、まったく断片的なことしか思い出せない。

先ず入学した年の十二月、鉄塔のある校庭の方で昼だったか、当時の言葉で大東亜戦争に突入したことを、全校の生徒に知らされたことが、なぜか強烈に思い出される。子供の時のこととて、また当時の風潮の故、とうとう戦争かと、ごく淡々として受け入れられたが、まさか我々の青春が踏みにじられ、人生の方向を決められる大事とは、当時誰もが思ってもいなかった。軍国主義盛んな当時であつたから、中学生を洗脳するには誠に容易でもあるし、それが軍国主義を徹底させる方法でもあつた。記憶違いかも知れないが、白沢校長から浅井校長に変わって、急に蛮力ラ思想から紳士思想に変わったのには驚き、校長の力とはずいぶんと影響力があるものと、子供心に感心したものであつた。

中学とは五年の課程と思い込んでいたのが、どうも今思えば三年も満足に学び舎にいなかったのであるから、その後の過程で努力しなかったことを棚上げにしても、学力の無さには後々に嫌という程に思い知らされた。今、医師生活三十有余年やれたことは、当時の経験と戦後の多感な時の貧乏生活が基本になっていることは、皆さん同じ考えと思われる。私は当時通学が一番遠い生徒であつて、遅刻の常習者で何回塀をよじ登ったことか、何回教員室に立たされたか、漸く朝礼に間にあつて安心した途端に、脳貧血を起こしてブツ倒れたとか、試験の日にはう歯の鼻緒が切れて遅れ、温情で教室に入れて貰ったのは良かったが、試験用紙を貰った途端、頭の中がカラッポになつてしまつたとか、変な思い出ばかり出てくるが、それも懐かしい事柄である。

現在唯一の趣味としてゴルフをしているが、富士の良く見える御殿場のゴルフ場に行く都度、滝が原の廠舎の

ことが思い起こされ、現在の飽食時代から振り返ると、よくもあのまずい飯を食ったものと、また御殿場より廠舎迄の行軍で三八歩兵銃は重かったことが思い起こされる。陸軍気象部の動員時代、最後には私どもは福生の飛行場に派遣され、片道三時間半、朝五時半に家を出、八時過ぎに帰る毎日の繰り返しであった。勉強の思いは出でこず、なぜか私には卒業式の記憶がなく、何となく玉中とは縁が切れてしまったようである。

開業している医師には定年は無いといっても、これが幸か不幸か未だに毎日診療に追われ、雑用に追われ、若い頃の時間の余裕というものが無く、寿命を縮めて居る現在である。

日本の社会構造は変換の時期が進行中ですが、急激な老人増加のため何処の国も医療費抑制をしなければ経済が成り立たず、医療社会も構造変換を強いられ、一般社会とは逆行して規制が甚だしくなっている、開業医制度はおそらくどうにもならない形態となり、医療社会は違った形になって行くことであろう。



滝ヶ原演習場にて2期生

思い出

2期 富田 常治

私は武蔵野第三小学校より、わが母校に入学しました。同小学校より高橋爽君が一緒でした。

住まいが西荻窪と吉祥寺との中間（東京女子大学の近く）でしたので、始め徒歩通学で毎日片道四十分の道程を歩きました。西荻窪からは定期券組が隊伍を整え整列登校していますので、途中よりそれに合流していましたが、時には横道にそれて（遠回りして）行ったものでした。其の後自転車通学となり、この整列登校より外れましたが、冬は切られる様な冷たさで辟易しましたが、寝坊と歩くのが嫌いで卒業する迄自転車通学を続けました。徒歩通学の折私の登校道は西荻窪より登校する東京女子大生の道でもあり、道巾一杯に横並びして来るアマゾネス集団に、私等子供は道の端に寄らざるをえず、それを森本君の姉さんに見られていたらしく『いつも端を歩いている』と冷やかされ、それ以来女性に対し嫌悪を持つ様になった次第です。

私は右の様に徒歩・自転車通学でしたので、自然と付き合った方々も同じ様な環境の瀬越・大石・板橋・須知さんと親交を得ました。瀬越君には囲碁・ギターを習い（全然物にならなかった）、私の環境と丸で違った世界を紹介され、見聞を広めたと言うかプロの世界の厳しさ、才能なき者の惨めさをつくづく教え込まれました。

一つ披露しますと、瀬越さんの父憲作名人は『例え神様であつても三目置けば勝つ』と言われ、又呉清源が五才の折碁を打たせたら『定石に打ち込んで来たので入門を認めた』とのこと。この二つとも天才であるが所以で、私如き凡人は到底足もとにも及ばないのでサラリーマンに徹することになりました。最近年と共に歌舞伎の世界を垣間見る機会が多くなりましたが、五十年も前板橋さんが歌舞伎に憧憬し毎月通っていたのには、今思うに、芸術に対する素晴らしい感受性の豊かな方であったのだなあと感じいる次第です。

脱線ばかりでしたが、いざ学校生活となると学業は三年生半ばで終り、クラブ活動もなく、無味乾燥であったでしょう、思い出に乏しく只動員生活のみが蘇ってきます。

小平の陸軍兵器廠そして高円寺の陸軍気象部に行かされましたが、比較的楽な仕事でその点我々は幸いでした。気象部に動員されていた或る日、北陸へ出張を命ぜられ、金沢の近くの河北潟で無線操縦に依る高速艇の試験運転に立合いました。私の仕事は高速艇の上で右や左に旗を振り、それを陸上基地で見て無線を発信し、指示通り動いたか確認する仕事でした。この結果については私ども小者には知る余地ありませんが、その出張時、当時では中々口に出来なかった肉や魚・銀メシを腹一杯食べられ、良き思い出をしたことを覚えています。

この陸軍気象部の経験から、私は将来無線関係が伸びると思い、卒業後東京工業大学専門部に進みましたが、戦後廃墟の中、生産工場も少なく就職先もなく私の考えは挫折し、最後は法律に進学しサラリーマンになった訳

です。

社会に出てからは猛烈社員の一翼を担い海外生活十一年の時期もあつて、皆様と旧交を暖める機会が少なかったで、これからは出来るだけ皆様と共に人の輪を広げたいと思っています。

五十年の昔

2期 片岡 俊夫

昨年の何時の頃か、確かに「玉泉中二期生卒業五十年記念文集趣意書」なるもの拝受し、作文を書くようにとのご要請があったと記憶しています。そして、この件について平成七年に入って同期会の幹事さんから「・・・・その後返事が届いていません・・・・」とお葉書を頂き、これは何か書かねばならないと思った次第です。しかし、五十年も昔のことであり、同期の皆さんも、その後に四十年余の戦後実社会においての奮闘の歴史があり、中学時代の記憶は忘却の彼方に殆ど消え去っていると思います。

私にとっては、特に学業に優れていたわけでもなく、体操や教練に能力を発揮出来たわけでもないの、あまり中学校における日々の生活において記憶に残っていることもありません。

中学時代四年間の思い出といえば、結局は「大東亜戦争」と当時言われていた戦争との係わりとなつてしま

ます。我々昭和一桁の人間の中では、平和を愛し、現行憲法を守ろうと言う声が特に強いと思いますが、これもあの時代の生活の苛酷さを身をもって体験しているからだと思います。

私達が中学一年生となつた昭和十六年は、わが日本にとっては、真に大変な年で、十二月八日には「帝国陸海軍は本八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」との発表があつたのですが、私達が入学した四月から、あのスフ織の国防色の制服となり、小学校は国民学校に改称されたのです。

そして、やがて私達は米国の航空機の攻撃を受けることとなりますが、先ず初めて米機を見ることとなるのは、昭和十七年四月十八日、つまり、私達玉泉中学、つまり府立第十八中学の開校記念日、休業日であり、当時私は下北沢に住んでいましたが、昼頃居室の窓から東北方面の低空を黒い巨大な航空機が飛び去つたと記憶していま

す。B25であったといわれています。

私達の陸軍気象部への動員は昭和十九年六月からと記録されていますが、当初は乱数帳の転記作業の合間に防空壕掘りを懸命に行い、青空の中、銀色に輝くB29、そして、これに体当たりするわが戦闘機を見ていました。秋も深まると、武蔵野の中島飛行機が爆撃を受け、その時の高射砲の音、爆弾の音は腹にこたえました。私達は赤い乱数帳を国防色の背囊に入れ、防空壕に退避しました。しかし、昭和二十年三月十日の東京下町の大空襲の頃になると、宿泊勤務を行っていましたが、あまり防空壕に入った記憶もなく、どうしていたのか定かな記憶はありません。ただ、次の宿明けの日に下町の方へ行ってみようと言うこととなり、お茶の水まで行きましたが、総武線は運転停止で、秋葉原へ向うガード下は未だ燃えていました。5月25日の東京山の手の空襲の時は下北沢の家におり、一晩中ヒュウヒュウという焼夷弾の落下の音に包まれていました。真っ赤になった空の中を真っ黒で巨大なB29が低空を飛ぶ姿は、今でも脳裏を離れ

ません。私の住居は当時、成徳女子商業学校の裏にあり、この学校の講堂に落ちた焼夷弾の一発目を塀をへだてて講堂の硝子窓を通して見ていました。バンと言う音とともに火が出たのですが、塀があつて消しに行けません。火は瞬間的に燃え広がりました。私のしたことは板塀についた火をバケツで水を何杯にかけて消し止めた位なものでした。無力なものでした。翌朝には風の向きの具合で、この地点から中野まで一望の焼野原となっていました。七月になると、私達は、既に三月三十日に中学を卒業していましたので、それぞれ上級学校へ行くことが許されました。

これで、私達の中学の生活は終わったのです。しかし、終戦に至る混乱、終戦後の苦難はまだまだ続きました。このような時代を送ってきた私達としては、これから社会の中で生きて行く人々が、平和な日々を、基本的人権が保障された民主社会の中で過ごして行けるよう切に願っているのです。

オレンジ色の時代

2期 波脇 行義

同期会から、卒業五十周年記念文集の企画のご案内をいただいた。数えてみるとわが中学時代は十二才から十六才までの期間だったと改めて知る。と同時にそんな若い年令だったのかと、特段の理由もなく中学時代「ハイティーン」という思い込みを五年ばかり繰り上げ修正した様な次第。

繰り上げと云えば、我々の年次は卒業自体が一年繰り上げとなって、五年生・四年生合同の卒業式だったことも併せて思い出される。しかも、四年生では一年間を通して、陸軍氣象教育部（前半高円寺、後半福生）で氣象無線の乱数写しに明け暮れていたから、教室で授業を受けた学校生活は実質三年間に過ぎない。

卒業後五十年という時が流れ、ビジネスから身をひくと共に、年金年令にも達した今振り返って見ると、乱数表の一年間を含めて、この四年間の中学時代は真綿に覆われて、ほのぼのとオレンジ色を帯びた時間であった様

に感ずる。この期間がほぼ太平洋戦争の期間に重なっていて、大人達の世界では、様々な困苦に充ちていたのに拘わらず、そんな感想を持つのは、やはり親世代の庇護の下にあるローティーンだったからかも知れない。

今にして思えば、こんな時勢の中で随分と自由な雰囲気、校風だった。それが学校自体の方針だったのか、先生方の人間性だったのか、今知る由もないが、麦畑に囲まれた学び舎で、軍国少年に鍛え上げられることも、又今どきの子供達のように受験地獄に悩まされることもなく、将来必要な知識の基層部分を柔かいローティーンの脳味噌にインプリントして行くことが出来た。実質三年間でもかく微積の入口までは行つたし、最後まで一週六時間を超える英語の授業時間などは、お上からの指導に従順なら、出来なかったのではないかと思われるフシもある。又よく話題になる学校教練も教官のK先生の人間味に随分と救われた。ご存命であれば、お礼の一言でも申

し上げたい。そして最上級生が自主運営していたと聞く昼休み時間の音楽放送。朝は君が代を流す校内放送のスピーカーが、昼休みにはシューベルトやワーグナーやベルディを奏でていたのだ。クラシックの大作曲家は旧枢軸国の人間が多いのも幸いしたかもしれないが。

卒業後も学生時代はなお数年間続くのだが、戦争の激化、敗戦の混乱のなかで、内面の自由は大いに享受したとはいえ、もはやハイティーンであり、成人ともなった身にとって、憂き世の苦勞を家族と共に分かť事は避け得ない。個人的にも終戦一年前に父を亡くした自分に、

オレンジ色は灼熱したが、真綿は取り払われた時間が始まる。

そして五十年。心と時間の余裕を少し取り戻して、振り返って見ると、社会や世代の庇護の下で、それからの人生にとって最小限かつ不可欠の知的基層を作る時期に、あの時勢のなかで、その環境と実行をよくぞ確保してくれたものと思う。母校と先生方、そして朋友に心からの懐旧の念と感謝を捧げる次第である。

編集者注

乱数・乱数表

気象電報は戦時中は暗号で送られた。気象電報は数字の列でできている。場所は「地点番号」として、三桁の数字で、晴れとか曇りとかは二数字で、例えば「快晴」は「00」のようになっていた。平文はこれをそのまま送信するが、敵に気象状況がわからないように暗号化する。暗号化は例えば、平文の数字列の各文字にめちやくちゃに並んだ数字（これを乱数という）をたし算して、下一桁の数字にした数字列に直す。「24801」という文なら乱数を「64976」として「88777」と変換する。

勤労働員の思い出

2期 柴崎 英輔

去年の七月、玉泉中二期生のクラス会があると人づてに聞き、卒業以来四十九年目にして初めて出席したが、

私をご存じない方もおられたようだ。それは、私が三年の時に転入学し、すぐ翌年は勤労働員で皆が職場ごとに分散したため、総ての方々と接する機会がないまま、最後は流れ解散のかたちで終わったからだ。そこで、動員先での仕事や体験はそれぞれ異なったが、みな実態はよく知らないのではないかと思い、筆を執った次第である。

送って戴いた資料によると、われわれが陸軍氣象部に動員されたのは、昭和十九年六月一日とのことである。

私は「整理班？」に配属されたが、ここの業務は短波で敵国の氣象情報を傍受し、暗号を解読して天気図を作成することだった。天気図は二時間ごとの作成で一日を三交代で勤務した。この昭和十九年は、本土空襲も本格化しておらず、まずは平穏だったと思う。例えば、野球好きの見習士官が、よくわれわれを高井戸辺りの運動場ま

で駆け足をさせ、野球をしたこと等を思い出す。翌二十一年になると、もう敗色濃厚となり厳しい局面となる。

先ず三月十日の大空襲である。私はこの日、夜勤だった。目標が下町だったので、ここは無事だったが、夜勤者には下町の住人もいて、現地の情報が全くわからないまま、真つ赤な夜空を仰いで、皆不安な一夜を過ごした。夜勤を終えて帰宅すると自宅の焼失等の災難にあった人もいて、明日はわが身と覚悟を決めたものだ。

記憶は確かでないが、この年の初頭からか、敵国の氣象情報は暗号ではなく、ひら文での送信になった。解読の時間はなくなったが、敗戦が近いことを予感した。氣象業務は陸軍氣象部のほか、海軍氣象部、中央氣象台で行っていたが、今の縦割り行政のように弊害があったのか、竹橋の中央氣象台に三者が集まることになり、私はそこに配転になった。三月十日には高円寺にいた記憶があるので、それ以後のことと思う。そして、ここで五月

二十五日の大空襲に遭うことになる。

三月末に卒業しているはずだが、われわれ学徒が一時にいなくなると仕事が停滞するので、そのまま残されたのだ。五月二十五日、この日もまた夜勤だった。この日の目標は都心で、目の前の皇居内にも焼夷弾が投下され火災を起こす等、周囲は火の海、火事に伴う強風でお濠は白く波立ち、凄まじい光景だった。

私は四月には、横浜工専（現横浜国大）の航空科に入學していたが、気象部から解放されたのは大空襲の後、六月か七月だった。しかしすぐ次の動員で、大船の富士飛行機という工場だった。ここでは、通称「赤トンボ」という布張りの練習機を特攻機に改装していたが、資材が不足していたのと、すぐ終戦になったので、作業をした記憶があまりない。

書きたいことは山程あるが、もう紙面が尽きた。五十年前の記憶にたよって、確かめもせずに書いたので、誤りや思い違いが多いと思う。諸兄のご叱正を戴ければ幸いである。

陸軍気象部にて



戦災の記憶

2期 中島 力

一昨年三月に立教大学を定年退職して以来週一回大学に出掛ける外は自由な時間を過ごしています。退職後は時間を持て余すのではないかという不安もないではなかったのですが、幸いそんな事もなく過ごしています。

専攻の心理学の勉強も続けていますし、もともと読書が好きで、現役の時には多忙もあつて読みたいと思いつながら出来なかつたものを読んだりしていると、結構毎日を充実して送ることができて幸せに思っています。

それでも現役を退くと、やはり過去を振り返って見る機会が増えて、時折中学時代の記憶が頭に浮かんだりすることもあります。ことに最近阪神大震災があつて、これが戦時中の戦災の記憶を呼び覚ます機会になりました。テレビに写る一面焼け野原となつた神戸の街を見て、それが空襲の跡の東京の街の記憶とダブって見えた人は沢山おられたのではないかと思います。

私は昭和二十年の五月の空襲で家を全焼しました。そ

の時家族は疎開して家には私とこれから疎開するという叔父夫婦三人で暮らしていました。大火災に追われて、現在新宿の高層ビル群のあるところが当時淀橋の浄水場で、そこに逃げ込んで一夜を明かしました。翌日焼け跡に戻り呆然とする思いでしたが、とにかく食べるものと寝る所を見つければならず、幸いいま住んでいる荻窪に亡父の時から貸家がある事を思い出して、そこが戦災を免れていることを願いつつ、新宿から荻窪まで歩きました。電車はストップしてましたから。途中高円寺を通るので気象部に立ち寄りました。

この時は既に卒業していたわけですが、戦時中で勤労動員先を移るのは六月以後にするようにということで、先生やクラスの仲間にも会いました。名前は忘れましたが将校の人が私の話を聞いた後で食事はしたかと聞きました。未だだと答えると井のようなものをとって呉れました。夢中で食べましたが、頭の中は真っ白で何を食べ

たか、美味しかったかの記憶さえありません。神戸で震災にあった人の話の中に、直後に大阪に行ったらそこに昨日と変わらない人々の生活があり、まるで別世界を見るようであったというのを聞きましたが、その気持ちは私には実によく分かりました。幸い荻窪の家は無事で、以後五十年そこに住みつくことになりました。

私は三年の時の転校生ですから、二年間しかいなかったのですが、その半分以上が勤労動員で何も勉強らしいことをせず、戦災の記憶などが鮮明に残っているとは、何とも情けない話だと思わざるを得ませんが、またもし平和な時代に普通の中学生生活を送っていれば到底味わうことがなかったであろう経験をしたとも言えるのだと、負け惜しみでなく思います。その後の五十年と共に、我々は実に特異な人生を送ったものだと思います、その意味では今後の人生にも興味津々で行きたいものだと思います。

中央気象台動員の頃の思い出

2期 小林 文雄

昨年村田さんよりのお便りによりますと高円寺の陸軍

気象部に動員されたのは十九年六月の由ですが、私達天気図係のみは確か二十年の四月頃から大手町の中気（中央気象台）に配置替えになったのでした。中気では玉中生らの陸軍班と、海軍の気象隊と、中央気象台の皆と一緒にあって、毎日二十四時間、一時間毎に各地の天気図を作っていました。中気班には確か男子の中学生と、女子は千代田高女（女子の学校だけ覚えています）が動員で来ていました。

中気の電信室と天気図室のあった建物は一屯爆弾でも大丈夫という軍艦みたいなビルで、関東大震災の時十一時五十八分で停ったあの有名な時計台の隣にありました。それらの建物は勿論今はありませんが、現在の竹橋会館ビルのあるところです。二十年五月の空襲で中気の本造の建物は全部焼けましたが、天気図室のあった軍艦ビルは空襲中も流石に停電もせず、電信も停らずで作業は続

けられました。

ところで我々陸軍班は夜勤の時寝るのは軍用毛布でしたが、海軍は布団。我々のその毛布には勿論、着ているシャツや服には虱が居心地よくたかり、天気図を書いてる時には首から足元まで虱のために痒くて痒くて、もう我慢ならず、困りぬきました。ところが海軍班の兵隊さんや中気班の女学生などには虱君がたからなかったのです。天気図作業は右手にペン（インクをつけて書く）を持ち、左手の各指の間には晴れとか曇りとかのゴム印を挟み持っていましたので、痒くても体を掻けないのです。仕事中は仕方なく陸軍班の皆だけが体をくねらし続け、海軍さん等からは訝しげに見られたのでした。

各地の気象電信のうち内地からは印刷電信で受信されていましたが、外地からの暗号無線だけは解読の上電信室から女学生が、まず陸軍の大東亜天気図を書いている担当の机のところに数枚ずつ持って来るのです。だか

思い出したものでした。

ら私達は皆？大東亜担当になるのが楽しみでした。女学生から電信紙を直接受取ることが出来るからです。どういうわけか千代田高女の生徒は全員可愛かった。その中で特に美しかった生徒の制服の胸に由里子という名札がありました。苗字は忘れましたがね。・・・さて六月頃愈々暑くなり虱君は益々暴れ出しました。B29のように。我々はもう頭に来て、空襲で退避するのも忘れてこのホワイトチーチー（と呼んでいました）を海軍の諸兄に伝染させてやろうと思い、犯行に及ぼうとした時、上の学校の動員先に転勤となったのでした。

私と一緒に天気図係には高橋信雄君、高見沢君、柳沢君も居られ、名簿によると亡くなれた由ですが、高橋君は二十八年頃小田急の車内で会したことがあり、気象台に勤められて小笠原の測候所に居ると言って居られました。柳沢君は家が経堂でしたので中気の帰りよく一緒でしたが、学徒として終戦直前満州に行かれました。小生昭和三十五年から約三十年間勤め先が大手町でしたので中気の方へ晝休みに散歩した折には当時をあれこれ

終戦後卒業まで人生は偶然の積重ね

2・4期 内田 進三

昭和二十一年三月二十二日、私は米国の戦時型輸送船、いわゆるリバティ船と称する復員船のデッキにいた。

敗戦から半年を経過した頃台湾から乗船し、漸く広島県大竹港に着いたところだった。それから三日後、広島島の惨状を半ば放心状態で眺め、それでもやっとの思いで辿り着いた祖国の土を踏みしめながら、生きている喜びをかみしめ、大竹駅より東京へ向かう汽車に乗ることが出来た。もう少しで家族に会える、果たして無事だろうかとの不安と、とうとう生きて日本に帰れたという安堵感とが入混じって、超満員の列車も大して気にならなかったことを今でも覚えている。

私は二期生として昭和十六年四月玉中に入校した。三年生を終えた十九年年五月、陸軍特別幹部候補生を志願、台湾に派遣され第八飛行師団隷下の第七対空無線隊で沖縄の航空作戦に参加し、終戦を迎えた。帰宅後、両親の勧めもあって、私はすぐ母校へ行った。教員室で面接を

していただいた先生は、今は亡き長坂先生であった。学力が全く落ちた状態にあった私は、ためらわず四年生に編入していただいた。受持ちは都筑先生であったと思う。但し、編入といっても、既に玉中は廃校の運命が定っていた。十中の四年生になり、玉中四期の皆さんと知り合うことが出来た。それから二年経過後、旧制の東京外事専門学校へ入学、二十六年に旧制最後の卒業生として学業を終え、大和銀行に入行した。三十年間勤務後、東京特殊電線（株）に出向、監査役五期十年、顧問二年を務めて退職、現在は第三の職場、MOLマネジメントサービス（株）（大阪商船三井船舶の百パーセント子会社）の嘱託として勤務している。

思えば長い道を辿って来たわけであるが、復員後の生活は、多分大部分の皆さんと大同小異であり特筆すべき経験話がなかったとは思っていない。勿論苦楽共々あったが、その程度は戦後の皆さんが経験されたことと殆ど変

わりはないと思ってる。しかし、多感な青春時代に何回か生死の境をさまよったことは、いささか特異な経験であった。昭和十九年十二月後半、輸送船に乗って台湾に向かった時は、全く運を天に任せる以外に手はなかった。当時台湾までの海路は、最早制空権も制海権も共になく、寒い海の上を真暗闇の中で、遅い速度で船は進んだ。

敵の魚雷が当たったのが、私の乗っている船ではなく他の僚船であったという偶然で、今の私は生きている。輸送船には、沖縄へ転属する戦友も何人かいたが、もし自分が沖縄組に入っていたらどうなったであろうか。水戸航空通信学校で数ヶ月厳しい訓練を受けた仲間であった彼らとは、台湾まで一緒だった。そのあと彼等は飛行機で沖縄へ行ったが、その後彼等がどうなったか知る由もない。

私は玉中二期の人に遅れること三年（何故ならば二期生は中学四年で卒業）、何とか社会で彼等に遅れまいと専門学校を目指した。早く社会に出て金を稼ぐ身になり

たいと痛切に思ったからである。六十六才を過ぎた今、二期生の集まりからも、四期生の集まりからも声がかかる。お陰で友人が倍増したことになる。玉中三年、十中二年の実績が生んだ結果である。特に後半、十中二年間の時の友人、即ち玉中四期の笹谷和雄君の仲立ちで私は結婚したから、因縁浅からぬものがある。私は誰ともすぐ仲好しになれた。当時私は荻窪に住んでいたから、阿佐ヶ谷、荻窪グループとは毎日下校時一緒に帰った。そのグループに笹谷君がいたのである。彼は今でも小生宅とは百メートルの所に住居を構えており、常時家族ぐるみの付き合いである。有為転変、全くの偶然の重なり合いで、これだから人生は面白いのだといえると思う。卒業後数年して彼の新婚家庭を訪問、そして彼の紹介で今の妻があり、子があり、孫がある。私が二期生のまゝ卒業していたら、笹谷君とは恐らく知り合うこともなく、現在の小生の家庭は別の形をとっていた筈である。

軍隊時代の戦友の集まりからも声がかかる。それも部隊別だから、いくつもあり、また軍隊はあらゆる階層の

人の集まりだから、全く色々の人と友達になれるわけだ。これも偶然の重なり合いでなくて何であろうか。

還暦を過ぎた頃から、友人が懐かしく思われて来る。年をとったせいかなと考えているが、色々の集まりにせつせと顔を出し、家内に笑われている昨今である。

（追記）この回想は玉中四期生の回想録（玉泉）に掲載されたものに補筆加除して同じ題で提出したものである。四期生は集まりがよく結束も固く回想録も数年前に発行済である。今回二期生も遅ればせながら、村田兄のご提案と皆様のご協力で発行の運びになったことは慶賀に堪えず、皆様と共に喜びたいと思います。

五 省

2期 飯島 弘

冬の朝、井の頭線久我山駅に吉祥寺行の電車が着くと、遅刻しそうな登校生達が素足に朴歯の音を轟かせて、凍てついた砂利混りの道を一目散に学校に向って走る、走る。

玉中の思い出として、先ず臉に浮ぶ私の映像である。

夏には体操の時間に薩摩芋掘りで汗をかき、下校後、野っ原が多かった富士見ヶ丘駅への道端で野苺を摘み、喉の乾きを一つ時癒したりした。入校の年に大東亜戦争に突入、戦時色の世相の中の中学時代だった。人生の何たるかを知らず、社会の複雑怪奇なる事も知らず。人間を愛し、人間の営みを愛することも知らなかった十七歳の少年が、若き血に燃え護国に盡そうと目指したものが海軍だった。私は昭和二十年四月、海軍兵学校舞鶴分校に入校する。

シーマンシップ（舟乗り気質）という言葉がある。海や天候などの自然に応じて、船を日常安全に運航し、か

つ運用に万全を期すための体験的に得た「知恵」という意味である。海上武人たる海軍軍人も、この舟乗りの延長線上にある。兵学校では一般軍事教育に先だって、まず舟乗りとしての日常の心構えや生活技術をたたき込まれる。「スマートで目先が利いて几帳面・・・」もそのひとつであろう。そして、とくに正直であれ、嘘をつくな、自己犠牲の尊さなど、ジェントルマンシップを主眼とする躰、訓育教育も徹底して行われた。

厳しい課業の一日が過ぎ、ほっとする自習時間の終りには、分隊全員で五省を黙誦した。

五省

- 一、至誠に悖るなかりしか
- 一、言行に恥づるなかりしか
- 一、氣力に缺くるなかりしか
- 一、努力に憾みなかりしか
- 一、不精に亘るなかりしか

しかし、昭和二十年八月十五日、終戦を迎え、僅か四ヶ月半で第七十七期、最後の海軍将校生徒としてピリオドを打った。

復員後、焼あとだらけの東京で、今は亡き母と一緒に、十人家族の食糧の買い出しによく出かけた。兵学校からもらった二百円の大半はそれで消えたが、それでも半年ばかりよく遊んだ。映画が一円九十銭、芝居の一等席が五円、海藻で作った「かけそば」が一杯五十銭、今から思うと随分安かったものだ。

昭和二十一年四月、小さい時から機械いじりが好きで、小学生の頃から写真を撮っていたこともあり、写真学校（現・東京工芸大学・芸術学部）を受験、卒業後NHKに就職した。昭和二十四年三月十八日、写真のカメラマンとして入社、NHKのど自慢全国大会で荒井恵子が優勝した年である。新橋内幸町にあった放送会館の小さなラジオスタジオを改造した現像室で、私の社会への第一歩が始まった。

その後、モノクロTV放送開始、現天皇の御成婚、デモの取材、カラーTVの放送開始等々 報道カメラマンとして華の時代を過した。昭和四十年代からは、現像専任になり、五十年代にはVTR制作も経験、昭和五十九年五月、三十五年間のNHK生活を終えた。引続き第二、第三の職場でもNHKの番組広報の仕事を続け、平成六年十二月、写真一筋に四十六年間、人生の大半を大過なく送ることが出来た。

振り返ってみると、私にも山あり谷ありの人生ではあった。しかし、写真の仕事を通して、自分なりに思想を固め、人格を形成してこれた底流には、僅か数ヶ月の兵学校での体験と、印象の強烈さの中から、五省の心が密やかに流れていたと思っている。

ほっと一息入れている今、春めいた明るい陽射しの下で、可愛い孫の相手をする日々だが、これからの人生に、いままでの経験と知識を何らかの形で社会に還元することを考えている。

まだまだ死ねないぞ！

老人五省

- 一、姿勢に曲るなかりしか
- 一、言語に纏れなかりしか
- 一、栄養に缺くるなかりしか
- 一、歩行に憾みなかりしか
- 一、頑固に亘るなかりしか

編集者注

米国アナポリス兵学校の五省

Five reflections

Hast thou not gone against sincerity.

Hast thou not felt ashamed of the words and deeds.

Hast thou not lacked vigor.

Hast thou not exerted all possible efforts.

Hast thou not become slothful.

雑感・近況

2期 黒川 泰三

私の場合、皆様と多少異り、昭和十七年九月（二学期）に県立静岡中学から中途転入、今どきの高校生のように一生懸命勉強したという印象も少なく、岩崎通信機、陸軍氣象部の勤労奉仕を経て、海軍兵学校へ入校、敗戦に至るといった状況でした。卒業後五十年経つてみて、旧制中学卒業時点で将来本当に何がやりたいのか、何が向いていそうかぐらいももう少しまじめに考えていればよかったのかなと振り返っております。戦時下の時流にのつて海軍へ行き、戦後は一番就職のよさそうな建築学科に入学しました。

建築という分野には、美術（芸術）の素養の必要な建築デザイン部門、力学・工学的素養の必要な構造設計部門、強電・弱電・機械工学に向けた素養の必要な設備設計部門、それ以外の建築材料・施工部門、建築様式等を学問として深める建築史部門等があり、果して、当時自分には何が向いているのかも確かめずに合格し、入学し

てみて、デザインの方はあまり得手ではなく、設備をやるなら夫々の学科にまかせるとして、とりあえず建築構造を専攻することにしたような次第です。

一男二女という子供たちも、教育は殆んど女房まかせのお陰でまともに成長してくれましたが。これからはマルチメディアの時代、地球環境の時代等我々の時代よりはるかにテンポの速い不透明な時代に対応する必要がある、ある程度個性的なしつかりした意見、方向性をもった青少年時代を過ごすべきではないかなど反省を踏まえて愚考しております。

雑 感

2期 佐藤 健

昭和二十年三月に玉中を卒業して五十年になる。戦中戦後の異常な混乱期を経て、よくもここ迄生きて来たものをつくづく思う。

昭和一桁生れは身体の形成期の育ち盛りに、碌なものを食っていないから長生き出来ないといわれているが、建物でいえば、安物の代用品の材料のみで出来上がったわけであるから、一般論としては、そう長く持たないというのも当然なのかなと思う。

早稲田の高等学院時代、同じクラスにいた親しい友人で四人のグループを作った。お互いに気が合つて所謂親友として五十年来の付き合いを続けて来たが、ここに来て、そのうち二人が相次いで幽明境を異にした。一人は脳溢血、一人は肝臓癌、何れも寿命である。この年になつてからの友人の死は、本当に悲しく寂しい。

玉中の名簿を拝見すると、同期生の中にも相当数の方が鬼籍に入っているが、生き残った吾々にしても、残さ

れた人生所謂余命はそう長くはない。

勤務の関係で大阪、東京、ドイツ、アメリカ、鎌倉と居を変えながら五十年間、我無者羅に働いて今日に至つた。余生はあと何日か、或は何年か、神ならぬ身の知る由もないが、せめてこれからは、自宅周辺の古都鎌倉の社寺の歴史と、仏の教えを勉強しながら、それこそ晴耕雨読、自適の生活を送りたいものと思うこの頃である。

玉中二期会発足への道

2期 倉田 新

昭和六十一年の春、突然我が家に『西高五十周年記念同窓会』の案内状が送られてきた。この一通の案内状が小生に忘却の彼方にあつた十代腕白時代の日々を走馬灯のように浮かび上がらせた。まさに戦争に始まり、戦争で終わった四年間！。

懐かしさ、又同窓生の近況も知りたく早速高輪プリンスホテルの会場にかけつけた。会場には既に大勢の後輩達が夫々卒業期別に用意されたテーブルを囲み談笑している。

その中、一際目立つ形で会場の真中に十中・玉中卒業生のテーブルが用意され、そこには既に三十人位の方々が集まりお互いに肩を叩き談笑にふけていた。小生も同窓の誰かと会える事を期待し近づいたが残念ながらそこには玉中一期・三期生のみで二期生は誰も当日出席しておらず見事に期待を裏切られた。気落ちしていたところ一期の前田先輩（大成建設）が水割り片手に小生の所

に近づき「今日の再開を機会に玉中卒業生の結束を固めたい、一期・三期は何か現在まとまっているが二期が今一つだ、何とか同期の方々に呼び掛けまとめて貰えないか」の要請があり、その場の雰囲気から思わず「出来る限りやって見ましょう」と答えたのを記憶している。

その後、一年位の空白があり、突然前田先輩及び有志の方々の呼び掛けで、『玉中一期・二期・三期合同の同窓会』を開く計画案が提示され、その際の二期生のまとめ役として協力を強く求められた。

早速、同期の板橋・大石両君に相談、手分けして皆に呼び掛け同計画開催への準備を進め、無事六十三年十一月懐かしの西高会館にて盛大に開催、大勢の同期の方々と何十年振りの再会を楽しむことが出来た。

この再会が大きなきっかけとなり『玉中二期生だけの同窓会』を今後継続的に開こうではないかの声が高まり、その開催への準備が積極的に進められる事となった。

直ちに世話役の人選、同窓生の消息の把握、近況のまとめ、名簿の作成等それぞれ分担、組織的に活動が開始され、結果第一回目の同窓会が平成2年秋、小島君の紹介で千代田区学士会館に大勢の同窓生を迎え開催、ここに正式に『玉中二期会』が発足した。

振り返って見ると、戦後の荒廃の環境の中、産業復興の第一線で企業戦士として苦闘、又活躍された諸兄が今後輩にその第一線の場を譲り、静かに第二の人生を夫々の立場で迎えておられる事と思いますが、これを契機に仕事に追われた長い人生の中でこの『玉中二期会』を通じ我々の嵐の中の青春時代を大切な思い出とし、また交友関係を大切に深めて参ることも大事ではないかと思ひます。

最後に、本二期会が発足後昨年まで4回の同窓会が開催されています。開催に当たって大勢の有志の方々が、毎回意欲的に幹事・世話役をサポートご協力をいただいております事、同窓の一人として改めてお礼申し上げます。では再会を楽しみに！。

玉中時代の思い出

2期 上田 一岳

今年（二〇〇一年四月）、二度目の宮仕えを終り現
在は資料（他人様から見たら単なるゴミ）の整理に追
われています。

五十周年文集で、皆様は戦中戦後を通じ良く勉強さ
れたものと感嘆しました。それに引き換え私は何事に
関しても好き嫌いが激しくて、地理・歴史・漢文以外
はずっと低空飛行、要するに怠け者でした。これは今
でも変わっていませんが。動員で配属されたのは、波
脇さんや藤森さん林（帰台）さん、その他の方達と共
に気象教育部予報班で、仕事は教育資料としての天気
図、その他の作成や気象教育の助手でした。それまで
の勤労働員は一番嫌いな草取りが殆どだったので、天
気図を書き、乱数表の転記やその他の解析資料作成も、
得意な地理の知識が役立って学校よりも楽しかったで
す。時には甲幹の人達の天気図演習の助手として地点
を教える係もしました。朝晩の入出門に気象神社を遙
拝する以外は要領良くすればそれだけで済むから居心

地は良かったです。

予報班の班長、公文少佐はもともと気象台予報官養
成所の教官で物静かで学究肌の方で、動員後間もなく
ですが、昼食の時ドンブリを持って我々の所に来られ
て半分食わないか、とおっしゃったり又ある時は天気
図に等圧線を書き入れると言われ、波脇さんと私の作
品を見てこの台風は飛行機より早いねとコメントされ
たりしました。気温と気圧に相関があると思うか、と
問われ苦し紛れに波脇さんがボイルシャルルの法則と
答えたら大笑いされました。家に帰ってからありつた
けの物理の本を調べた記憶があります。

直接指導して下さった村山軍曹は南方帰りで弟の様
に接して下さった。一度だけ整列して全員殴られた事
がありました。が猛スピードで痛くなかった。要するに
派手に、しかし力はいれずに殴ってくれたからです。
（痛かった人は御免）

西候補生（成城高校）は朝鮮出身の雇、傭人の人達

から朝鮮語を教わっていました、人柄の良い方で言語学が好きだからと言っておられたが、そんな事が出来たのも軍隊と言うよりも学校であって、当時でありながら班長以下スタッフが学ぶ事には自由があった為と思います。

福生に行ってから見習士官の人が「一〇〇万人の数学」を教科書に微分の講義を下さった。一高文甲の出身の為か汽車の速度の例で原文の通りロンドン・エンジンバラの間と説明されたのが今でも思い出されます。

福生は今の横田基地で立川・所沢の飛行場にも近く、そのうちグラマンが送迎してくれるようになりました。電車が立川に着くなり駅前の素掘りの防空壕に避難した事があります。飛行場めがけて急降下して銃撃し、丁度頭上で反転する米軍機に最初は小さくなっていたのですが、その内相手も未熟と見えてひたすら先導機の通りの行動をしている事に気付き、恐る恐る頭を上げて見るとパイロットのマフラーの鮮明な青い色が目に焼き付きました。

サイパンの気象データが、ある日突然消滅してから

数日後玉砕の発表があったり、敵方の気象データが暗号を使わない生データに変わったと言う情報を耳にしても、いよいよ死ぬ時が近づいた、としか感じませんでした。

父も兄も戦地で生死不明、疎開する田舎の無い母と私とが持つ直参旗本の遺伝子の故だったのかも知れません。

私の玉中時代に得た物は丈夫な足と、動員の中で私と波長の合う、個性豊かな方々によって啓発された生き方だったと思います。

気象神社紀行

2 期 片岡 俊夫

ある日、夜十時のNHKニュースによつて陸軍気象部ゆかりの気象神社が高円寺にあることを知りました。一度参拝したいものと思つており、平成十三年八月三十一日午後に出掛けました。

出不精の小生にとつては、一大紀行であり、高円寺近辺にお住まいの方々にとつては、見慣れた風景かもしれません。小生にとりましては、勤労動員以来五十六年ぶりの感激でありました。

先ず、高円寺駅北口に降り、駅前交番に行きました。小生の保有する地図では、旧陸軍気象部の所在地あたりに気象庁とあるので、気象庁に行く道を尋ねましたところ、そこには現在は気象庁の住宅があるとのことでした。当方からその近辺に気象神社があると思うので、そこに行くと言いましたところ、NHKニュースが報道したため、最近多くの人から尋ねられるが、その神社は何故が南口の氷川神社にあるとお話があり、二つの場所についてお教え頂きました。

そこで、思い出多い旧陸軍気象部所在地（旧馬橋四丁目、現高円寺北四丁目周辺）から訪ねることとしました。

北口広場の左端の道（中央線下り方向）、中通り商店街に入ります。この商店街は、最近はずいぶん商店街が多いと聞きますが、なかなか活気があります。歩行者天国の時間帯もかなりあるようで戦時中のことを考えて歩きました。当時は売買する商品もなく、古本屋を訪ねるのが唯一の楽しみでしたが、時々立ち寄ったあたりに都丸書店という大きな店がありました。当時、お世話になったお店かなと思ひながら通りました。商店街が終わり、右へ少し行くと左に突然広い道が現れます。五十年余の昔はとても広い道の感じで、五百メートルも行くと右に曲がるようになります。何か未完成のまま終わった計画道路の一部のように思えるものでした。現状は上下各一車線、右側歩道、左側ガーレールです。この道を少し行くとNTT高円寺ビル、

続いて八階建て秀和高円寺レジデンスがあります。この裏に気象庁の住宅が四・五階建てで計四棟ありました。

さらに広い道を進むと次は馬橋小学校、その裏一帯が馬橋公園となります。この辺りが旧陸軍気象部所在地と想像しますが、その頃のことを尋ねてお答えを頂けるような古老も見当たらず、気象庁の住宅を唯一ゆかりのものとも考えておく以外にないようです。

次に気象神社を訪ねることとしました。

中通り商店街を駅まで戻り、南口広場に出て左端（中央線上り方向）二番目の道を少し行くと氷川神社がありました。

高円寺氷川神社の由来の掲示を読みますと、

「この神社は旧高円寺村小名原の鎮守で・・・境内には三社の末社が祀られていますがなかでも気象神社（祭神 八心思比頸命やつこころおもいかねのみこと）は全国でも比少なく非常に珍しい神社です。この社は戦時中旧馬橋四丁目にあった陸軍気象部内に祀られたものですが戦後関係者の要請で当社に遷されました」

境内を拝見したところ、かなり大きな社務所や数基のお神輿の展示場もありましたが、独立した気象神社の社殿のようなものはないようです。本殿に参拝しました。参拝者は小生の前に女性一人、後に女性二人であり、参詣者は増えているのではないかと考えました。

ここで、陸軍気象部内にあった神社が、戦後に陸軍の解体によって関係者の要請で遷される経過について、また、わが国の何処に気象神社の基があり、何処と何処に末社があるのか知りたいところです。当日は社務所の受付は閉まっており、女性のお一人は社務所内に入って行かれましたが、当方は時間の都合があったので帰途につきました。また機会があれば勉強しましょう。関心のある同期生にもお願いします。

そこで、陸軍気象部のどの辺に気象神社があったかを考えることになりましたが、小生の記憶では表門を入り、正面に本館、その向かって右の高等官・判任官集会所の前あたりに小さな社殿があったのではないかと思います。

私の心の中で生き続ける玉泉中学校

2期 本間 雄二郎

昭和十五年一月 東京府立第十八中学校創立（同年四月一期生百五十三名 入学）

十六年四月 東京府立玉泉中学校と改称

十八年七月 東京都立玉泉中学校と改称

二十年三月 東京都立玉泉中学校 第一期・第二期生同時卒業

二十一年三月 東京都立第十中学校に統合（玉泉中学校三期生卒業）

二十三年四月 東京都立第十新制高等学校と改称

二十五年一月 東京都立西高等学校と改称

以上は、西高五〇年誌から抜粋した私の母校である玉泉中学校の略歴である。この流れの中で私は昭和一六年府立第十八中学校を受験したが、入学式には府立玉泉中学校となっていた。

更に昭和二十年三月 第一期生と同時卒業となり、卒業一年後の昭和二十一年には都立第十中学校との統

合が決まり、玉泉中学校は第三期卒業生を最後に短い校歴を残して消えてしまった。

私は学校のある杉並区へ、目黒区祐天寺から久我山駅まで、私鉄を乗り継いで通学した。

高学年になってからは豊島区池袋に移り、山手線・中央線と乗り継いで西荻窪駅から通学した為に友人も少なく、早くから都会の雑踏に飲み込まれていた。

更に昭和十六年十二月、即ち中学一年生の時に太平洋戦争（第二次世界大戦）が起こり、二十年八月敗戦となるまで中学時代を体験した。昭和十九年学徒勤労動員が行われ、私は高円寺にあつた陸軍氣象部に学徒動員となり、毎日朝から晩まで氣象暗号の解読に勉めることになった。その間に東京大空襲も体験している。この様な激動の時代を生き抜いた中学時代の思い出は、灰色に包まれている。大学を卒業して大昭和製紙に入社、勤務地である静岡県富士市での生活が始まった。東京という大都会から地方の田舎都市に移って驚いた

事は、地元名門中学校の先輩・後輩の強い絆であった。静岡県東部には伊豆半島と三島市を地盤とする菰山中学校と沼津吉原地区を地盤とする沼津中学校、富士・富士宮地区を地盤とする富士中学校がそれぞれの地区の名門校として、百年近い歴史を持つており、各々の地区でこれらの名門校卒業生がOB人脈を形成して役所、商店街、企業の中核となつて重要ポストを支配していた。

地元の住民も伝統あるこれらの中学校（現在は高等学校）の重みを充分に受け止めて、自分の子供をこれらの名門校に入学させるべく、小学校の頃から気配りをしている。

この環境に身を置いて、私は校名の消えた玉泉中学校と灰色の学生時代を思い出して淋しい日々を送っていた。こんなある日、東京支社に出張した際に、突然新入社員の一人から「同窓会名簿でみましたが、本間さんは西高の卒業なのですね。私も西高です。」と声をかけられた。あまりにも突然だったので一瞬戸惑い、「西高先輩と言われても、今は校名のない玉泉中学校では肩身が狭いです。」と答えると、今度は相手が当

惑気味な顔をして「西高は十中と玉中の統合によって出来た学校です。従つて玉中とか十中とかにこだわることはないのではないのでしょうか。私達は両中学校共に同じ先輩として考えています。」と言われた。その後、本社に転勤して社外の方々との交際が増すにつれて、色々なところで「私も先輩と同じ西高卒業です」と自己紹介される様になり、わだかまりは少しずつ薄れてくると共に母校玉泉中学校を統合して出来た西高卒業生が予想以上に東大・一橋大・早稲田・慶応という日本の一流有名校に進学して、日本の社会に重要な地位を築きつつあることを知った。私はこれらの西高卒業生に出会うことによって、母校玉泉中学校イコール西高という気持ちが少しずつ芽生えて来た。また後輩の活躍に対して、先輩として恥じない人生を築かなければならないという気持ちになった。

当時、私は不十分な学生時代を補うために技術士の資格に挑戦して、最も社会で注目されていた生産管理部門の資格を取得していたが、更に中小企業診断士の資格を取得して西高先輩としての品位を高めることを意図した。この資格試験は大変な難関で二度不合格と

なったが、通算七年の年月をかけて漸く三回目の受験で合格できた。技術士・中小企業診断士は共に法定職業資格ではないので、資格があるから仕事ぐるの弁護士・弁理士とは違う。その為か技術士・中小企業診断士の資格は生活に役立つのかと質問をたびたび受けるが、この様な質問をする人の多くに受験する気持ちはなく、受験しても合格する可能性は極めて薄い。資格というものは取得してはじめて価値が判るのであつて、資格を持たないものが外から眺めて単細胞視野で色々いうことは本質をあまりやすい。

私は定年退職後十五年になるが、今も現役として社会の第一線におり、海外技術援助・国内の中小企業のアドバイザー業務を行っている。この仕事を陰で支えているのが、会社在职中に得た資格なのである。現在、静岡県内で技術士と中小企業診断士の両方の資格を取得している人は十数人しかいない。資格というものは役立つものではなく、役立たせるものなのである。

例えば一流企業の取締役であつても、退職すれば自分の名刺に記入する肩書きはなく、氏名だけの名刺になる。日本の社会では氏名だけの名刺で通用するのは

有名人のみで、一般の人は受け入れられない。

このような場合に国家資格は職業として、名刺の肩書きとして十分な働きをしてくれる。また有有限会社とか株式会社とか作る必要はなく、弁護士事務所と同様に技術士事務所・診断士事務所として社会で充分に存在を認めてくれる。

税金も法律で源泉徴収義務を支払い側に強制しているので、依頼主の方で一〇%の税を引いて支払つてくるので、確定申告も極めて簡単である。更に資格取得者は独立した個人であつても日本技術士会・中小企業診断士会という社団法人の保護下にあるので、大きな支援と人脈を持つことができる。企業を離れた場合、日本の社会で個人組織を作ることとは容易なことではない。

企業に在籍している時、企業の知名度や業界での業績が個人の仕事の支えとなっていることを忘れている人は、一人で社会を泳いで行けると思いがちになるが、現実には甘くない。一流企業をやめて独立した人が、退職後四、五年で社会から消えていく人が多いのである。この傾向は現在のような小規模企業優遇時代であつて

も変化はみられない。友人や同級生が支えてくれるのも七十才までで、大部分の人は職業を失い家庭に入るようになる。

以上の様な流れの中でも、私は西高の後輩の皆様に支えられて生涯現役の道を歩んでいるが、玉泉中学校の玉泉という名称に対して不思議なつながりがあつて、いつまでも身近なものとして心の支えを得ている。玉泉（タマイズミ）という名は、玉泉中学校が設立された時に校地として予定された現在の狛江市にある和多摩川から由来し、狛江地区に湧いていた泉に玉という美称をつけたと校名由来に記せられている。

私が早稲田大学を卒業して、当時本社の所在地であった富士市の大昭和製紙に入社した。社宅の近くにあったオーナーの斉藤家の菩提寺に参詣したところ、玉泉寺という寺であった。呼び名はギョクセンジでタマイズミとは異なっているが、漢字が同じなので非常に親しみを感じると共に玉泉という母校の名で東京から離れた富士市の片田舎で再会したことに不思議な縁を感じ、愛着を深くしている。玉泉という文字には、美しさと清らかさを感じさせるものがある。玉泉中学校

は三期生を最後に第十中学校に統合してしまったが、統合先の第十中学校も七期生で終わっている。東京都立西高等学校は本年度で五十三期生を世に送り出している。西高卒業生からみれば半世紀前の出来事は風化して、西高先輩と一括処理されても不思議ではない。

私も玉泉中学校へのこだわりは捨てて、西高の為に生きるべきであるが、年と共に古い苦難の時代に思いを寄せる老人としては玉泉中学校への思いは捨て難く、年々強く心の中に蘇るのを禁じ得ない。

西高同窓会名簿が取り持つ縁

大昭和製紙に入社して会社の幹部となったある日、会社の後輩から同窓会名簿で拝見しましたが、本間さんは西高の大先輩ですと、大変親しげに話しかけられた。当時の西高は東京都でも名門の高等学校として、東大進学率も抜群の実績を残し、所謂秀才校として卒業生は高いプライドをもっていた。玉泉中学校も西高の前身と言え、間違いなく前身となるが、当時の難易度で考える

と肩身が狭く、先輩と呼ばれる事についても、一種のこだわりを持ち続けていたが、私の目の前に現れた後輩は少しのこだわりも無く、西高の大先輩として受け入れていた。冷静になって考えてみると、高等学校の前身の中学校のことであるので、玉泉中であろうが十中であろうが凡て西高先輩として、後輩達が認めるのは当然のこと、古いこだわりを持ち続けている私の方が、間違っていると気がついた。従ってこの事があってからは、従来このこだわりを捨てて、西高先輩として割り切って、同窓会名簿も出来る限り近況を登録する様に努めた。

経営コンサルタントとして独立後、間もなく取引先である川崎化成工業の西沢部長から、私も西高の卒業生ですよと紹介された。それ以来今日まで公私共に大変にお世話になり、西高の大先輩として大きな恩恵を受けている。

平成に入ったある日、玉中二期生同窓会会合の通知が舞い込んで来た。私は職業柄色々と会合を持ち、世話役も手広く引き受けているので、同窓会の開催について在

京幹事の方々の並々ならぬ苦勞を感じたので、多くのためらいもあったが、幹事の努力に報いなければならないと決意して、出席の通知を送った。会合を重ねるうちに中学の同窓会は、非常に幅広い社会人の集まりとなってきた。特に自由業を選択した友人達の長い年月に亘る力強い活動には、敬服を感じている。また既に故人となつた人も多く、我々の世代の歩いた道の厳しさを見直すと共に、残る人生を大切にしたいと思っている。

振り返って考えてみると、我々の世代は激動の時代を夢中で生きる事を強いられた。その為に私は遊び心を失ってしまった。在職中に技術士、中小企業診断士の資格を取り、定年と同時にコンサルタントとして自由業の社会に入った。そして十年、海外の仕事を中心に業績を重ねて、現在では多くの人から、貴方はコンサルタントが趣味とまで言われる様になってしまった。しかし人生は、八十年と呼ばれる時代を迎えつつある。コンサルタント業を八十才迄、続けることは難しい。遊び心を失った人間は、今にして大いに悩んでいる。

勤労働員のこと

陸軍気象部での十五ヶ月

中学時代のことを考えると、頭に浮かぶことの一つに陸軍気象部での勤務がある。私の場合、昭和十九年六月から二十年八月まで十五ヶ月間勤務したので、在学期間四十八ヶ月の四分ノ一以上に当たる時をそこで過ごしたことになる。陸軍気象部とはどういふところだったのか、そこで私達はどのような仕事をしたのかということを知る範囲で書いておこうと思う。

陸軍気象部の沿革

航空機の飛行、砲兵の射撃、瓦斯防護等のため、気象研究の必要性が高まり、昭和十年五月、牛込区若松町にあった陸軍砲工学校内に気象部（教育總監部下）が新設された。

・昭和十三年四月、砲工学校気象部は勅令二四〇号、陸気令一〇号により陸軍大臣隷下の陸軍気象部として独立。兵要気象に関する調査、統計その他気象勤

2期 長谷川 草夫

務を掌り、且つ気象器材の研究及び試験、並びに航空兵器に属する気象器材の審査を行う部処と定められた。当初の編成は、総務課（庶務班、経理班、医務班、研究班、統計班、検定班）第一課（庶務班、予報班、観測班、通信班）第二課（学生班、教材班）よりなり、別に観測所、飛行班があつた。

・同時に、陸軍気象部内に陸軍大臣直属の機関として気象教育部（陸気第二課）が新設され、兵要気象に関する学術及び気象観測に必要な学科の習得、幹部候補生、軍属に対する教育が実施された。

・昭和十四年二月、陸軍気象部は杉並区馬橋の陸軍通信学校跡（総面積一万五千四百二十八坪）に移転、他に天沼、中野に分室を置いた。

・昭和十六年七月、関東軍特殊演習（関特演）に際し、参謀本部長隷下の陸軍中央気象部が臨時編成され、陸軍気象部長以下が兼務する。

- ・昭和十八年四月、陸軍気象部は陸軍航空本部長の隷下となる。気象部と中央気象部という二位一体の組織は終戦まで続いた。気象部は気象業務を統括、予報・放送、研究開発など気象技術の中樞を担い、また、中央気象部は、軍・師団の気象部、気象聯隊、気象隊、野戦気象隊などをその指揮下に置いた。
 - ・昭和十九年、気象部は部隊名・風二九六五四部隊となる。
 - ・昭和十九年五月、教育部（陸気教育課）は気象部より独立、陸軍気象教育部（風二九六五五部隊）が編成され、気象教育の全てを担当、十月福生に移転、更に、二十年四月には本部を埼玉県小川町に移した。
 - ・昭和二十年四月十三日二十三時過ぎB29の投弾により、本部建屋の三割、気象神社等を焼失した。
 - ・昭和二十年八月二十七日、残務整理要員を残し復員完了。
 - ・昭和二十年八月十六日、陸軍気象部長竹内善次少将は藤原咲平中央気象台長に対し、気象部の施設、人員の受入れを要請、台長は快諾した。九月二十二日 中気より陸気施設の使用に関し、連合軍総司令部に申請書を提出、十月十三日付覚書にて承認された。
 - ・十月二十日極東空軍気象司令官立会いのもとに、陸軍気象部の研究施設、人員約三百二十名（うち研究者百四十一名）が中央気象台に移管され、翌年二月一日気象研究部に統合された。
 - ・昭和二十年十月三十一日陸軍気象部閉部
 - ・昭和二十年八月十五日現在の人員数（含派遣者）
将官一、佐官四十、尉官百七十二、その他約二千九百名
- 気象部業務に関連ある機関の状況
- 中央気象台（中気）の予報業務
 - ・昭和十二年十二月十三日、全国気象機関の戦時体制に関する陸海軍協定が成立。
 - ・昭和十六年八月十五日以降、戦時緊急時、中央気象台長は陸海軍大臣の指揮を受けることとなる。この時期竹平町にコンクリート造りの現業用防弾建屋が完成し、軍関係者は書庫と南側木造建家に設けた特別予報作業室で開戦に備えた。
 - ・昭和十六年十一月三十日より気象管制に入り、気象

情報は暗号化され、天気図は秘扱いとなった。

- ・昭和二十年八月二十一日、気象管制が解除され天気予報が復活した。

○中央気象台の被災

- ・昭和二十年二月二十五日十四時過ぎ、神田錦町付近に被弾、本館総務部、観測部、養成所などが焼失。

一部は学士会館、厚生省庁舎に移転した。

- ・昭和二十年五月二十五日二十三時三十分過ぎ、一ツ橋、神田橋、錦町付近に被弾、大手町庁舎、竹平町測器工場、予報現業事務室などを焼失。

○海軍気象部

- ・昭和六年、水路部第一課が気象業務を管理することとなり、昭和八年以降千島、南方諸島に観測所を多数開設した。

- ・昭和十七年三月三十一日、中気内の水路部分室に気象部を置き、中気予報課と協力体制をとる。

- ・昭和十九年四月十日、海軍気象部は水路部分室より独立して、本部を神田駿河台YWC A内に置く。他に大倉山ほか六分室があった。

○陸海軍気象部及び中央気象台の合同勤務

気象業務の効率化を図るため、三者合同勤務要領が

昭和十九年十月十二日付及び十二月二十日付で発令され、二十年一月中旬より実施された。作業は竹平

町予報庁舎において、最盛期には中気、陸気、海気の作業者計千八百名、常時六百名が三交替で勤務した。一日一回三者の予報会議が開かれた。当時、気象放送は七系統二十四波を使い、検見川通信所から東亜全域に送信された。気象放送用の暗号強度は相当強く、米軍も遂に解き得なかったといわれる。

○大本営気象部設置案

昭和二十年六月、本土決戦に備え合同勤務体制の強化を企図するため、大本営気象部設置案が陸軍より提案された。内容は、陸気、海気の編成はそのままとし、陸気、海気、中気の現業部門を統合するものであった。海軍は賛成、中央気象台長は大本営陸海軍参謀部付として発令された。編成の細部は八月十日発令の予定であったが、終戦により実現しなかった。

陸軍気象部の研究、開発業務

我々に関係のあったものの一部をあげる。

○ラジオゾンデによる高層観測（研究班）

昭和七年ころより実用化研究が始まり、陸軍科学研究所は昭和九年、ループアンテナによるトラッキングを開始、昭和十年二月国府津で行われた総合演習で、ラジオゾンデは正式機材として採用された。昭和十年十一月には、気圧、気温の高層観測記録をとることに成功、翌年、湿度を含む三元観測が可能になった。

気象部開設後機材の制式化が進み、所謂三式ゾンデ、三式温湿発振器、四式測風発振器、四式方向探知器等が日常業務に使用された。十八年には昼間用測雲ゾンデを部隊配備、夜間用も二十年一月には略完成の域に達した。また、米軍に先駆けて日本上空の偏西風帯、ジェット気流の存在を確認、防空作戦、ふ号作戦等に寄与した。

○空電方向探知機の研究（研究班）

台風の早期発見、台風内の空電の方位測定を目的とし、海気は十九年八月、二十八台を試作したが実用化には至らなかった。陸気に於ても名大金原教授の指導で研究に着手したが、完成を見ず終戦を迎えた。

○投下式雲通報装置の開発（研究班）

作戦地域の雲の状態を入手するため、航空機で目的地に投下、観測と無線通報を行う装置で、空の状態を、晴れ、断雲、連続雲、降雨の四段階に判別できた。陸気では投下口ボットと称し、高円寺、福生で実験を重ね実用化を急いだが、工場の被災等で配備に至らなかった。海軍は非投下式試作機三十台を松下電器に発注、性能は良好で沖ノ鳥島に設置を試みたが、米機の妨害で不成功に終わった。

○雲霧人工消散法の研究（研究班）

霧による飛行場の使用不能を改善する研究で、電気的方式（超高压電流による霧粒捕捉法）、化学的方式（塩化Ca法）、潜熱方式等が検討されたが着手されなかった。昭和二十年初頭、電気的方式を応用した飛行機雲消散に関する予備実験を行ったが、成果を得られなかった。

○赤外線等応用の誘導装置の実験（研究班ほか）

目標艦船のだす赤外線を探知して、これを追尾する兵器が兵器行政本部に採用され、開発はケ号研究と称して昭和十九年八月より本格化、陸軍技術研究所、大学等多数の研究機関が実用化に取組んだ。

陸氣に於ても、二十年一月より浜名湖館山寺、遠州灘で、反射波を利用した誘導装置の投下実験を行ったが実用化には至らず終戦を迎えた。

○ふ号作戦に対する協力（観測班、研究班）

昭和十八年春、偏西風中に自由氣球を浮遊させ、これの米本土到達の可能性が指摘された。十八年八月兵器行政本部より研究命令が下り、海軍は十八年夏、小田原海岸と大分航空隊で実験、十九年八月陸氣も同様の実験を富士吉田で行い、ゾンデによる実験で、高度十千での電波を七十時間以上受信することに成功。放球場所、氣象条件等を調査、十月千葉一ノ宮海岸で放流実験、氣球連隊が十一月より約九千四百個の風船爆弾を放流した。

○宇宙線強度観測の研究（研究班）

宇宙線強度の連続精密観測により上空大氣の平均気温、氣圧の変化を考察するもので、理化学研究所（長岡研）に研究を委託。陸氣に於ても理化学研究所石井氏が、大型電離函による連続観測の準備をしていた。戦後、氣象研電磁研究室が継承。

戦後の氣象業務に関する占領軍の管理

○中央氣象台、地方氣象台、測候所の管理に関するフリーノートが発せられ、予算、施設、人員の削減を厳しく迫った。観測所、海洋研等が閉鎖された。

○陸軍氣象部の業務継承についての極東空軍の対応は緩やかで、中央氣象台氣象研究部への人員、設備、土地建屋の移管、研究の継続等を勧告。また、賠償対象設備、機材に対する解除申請を承認するなど終始好意的であつた。

学徒勤労働員

○中央氣象台（暗号電文翻訳、天氣図作成等の補助）
十八年、和洋女子学院、市立一中、十九年、都立第五高女、共立女子高女、二十年、早稲田実業、桜陰高女、都立玉泉中

○陸軍氣象部（暗号電文翻訳、天氣図作成、研究実験等の補助）

十九年、東京女子高等師範、東京女子大、都立玉泉中、立正高女、桜水高女

○海軍氣象部（暗号電文翻訳）十九年、千代田高女ほか

玉泉中学校二期生の勤労働員

私達二期生が、どこに配属され、どのような仕事をしたかを書く段になったが、何しろ五十七年も前の事で、小人数に分かれての勤務ということもあって、連絡のとれた方々の記憶も完全ではなく、不明のことも多かった。ここでは統計班、予報班、研究班を主に、勤員中のことを書くことにする。

勤員は昭和十九年六月九日より始まり、多くの人がはじめ統計班に配属された。

○統計班は研究班事務所と低温実験室の間の平屋にあり、南側に植えられたプラタナスの木が、窓に日陰を作っていた。作業は主としてソ連から傍受した、シベリア・中東方面の暗号電報の整理であった。

六月十五日夜、北九州地区が成都基地から飛来したB29の初空襲を受け、急遽待避壕を掘ることとなり、建屋の前に素堀りの壕を掘った。その間、福生分室と飛行班の保有機九式偵察機の見学、天気図作成の実習があった。七月サイパン島玉砕。この頃、昼休みには職員を交えて、バレーボールが盛んだった。

十月、班名が調査班に変わり、敷地東側教育部二階の教室に移転。十一月一日にはB29による初の写真偵察があり、十一月二十四日を皮切りに本格的空襲が始まった。天気の良い日には十六時になると、資料庫屋上で見習士官指導の軍歌演習があり、一寸した息抜きになった。また、このころ査閲に備えて、気象部北六百米、妙正寺川近くの大和国民学校々庭で、何度か密集戦闘教練を行った。査閲官の講評は「良好」であった。十一月末、調査班の作業は打切られ、夫々予報班、観測班、研究班などへ転属になった。

○予報班は本館第三棟の一階西側で通信班の隣、二階に仮眠室があり、西側に二階建の別棟があった。統計班から移った人が多いと思っただ、直接入ったと記憶している人もいる。

作業は大別して、乱数表を用いた暗号電文の翻訳、等圧線、気圧、天気・風力記号の記入など天気図の作成、記録整理等であったが、暗号だけ、暗号と天気図、天気図だけ、など分担は様々だった。敵信の場合は気圧、温度の換算もあった。

天気図には、北太平洋天気図、東亜天気図、欧亜天気図などの一般天気図と、高層天気図があり、地上、下層、高層に分かれていた。また、現業の天気図作成の外に、天気図・データの記録、保存などの整理作業が別棟で行われた。

安藤、飯島弘、池田、岩崎、宇山、大石、片岡、小島、小菅、小林、斎藤満、市東、須知、高橋信雄、高野、高見沢、武井、徳田、中島力、中野、永井、西村、広瀬、藤井、古沢、本間、宮村、村田、柳沢、山家、脇坂君など全員で五十名余りが、これらの作業に従事した。予報班の現業部隊には夜勤があり、夜間空襲時の勤務もあった。

このグループは二十年三月二十一日、三者合同勤務により中気大手町庁舎に移り、中気、海気部員と共に引続き天気図の作成に従事した。この頃はB29の暗号気象報の他、音声交信から得た気象データも利用された。当時、軍の作業者と中気作業者とは、夜食にも大差があったそうである。空襲の激化で作業は防弾建屋で行われ、入口は土嚢で囲われ、窓には暗幕が引かれて、暑さの中での勤務であった。

○観測班は第三棟の東側と観測塔周辺で、西側に通信班、予報班があった。統計班から飯村、板橋、富田君ほか数名が移った。ゾンデによる定時観測が主な仕事で、放球の準備、ゾンデの追跡などを行った。また、観測のための地方出張があった。

○検定班には佐藤健、高橋秀夫君の二名が移り、計測器メーカーに出向いて、自記記録計などの立会検査に携わった。

○研究班は敷地奥北側の平屋建二棟、その裏の二階建一棟、バラックの器材倉庫、低温実験室、天沼、中野分室に分かれていて、研究テーマごとに数名ずつ配属になった。

・お関係の実験

倉田、栗山君の二名は白井少佐、大野少佐の下で、二十年一月から浜名湖館山寺に出張、滑空式弾体を標的に誘導する装置の実験を行った。ゾンデの発信機、受信機を改造し、標的からの赤外波を捕らえて、滑空体を標的に誘導するもので、館山寺での機器組立、浜松基地での滑空体への装着、呑龍からの投下

実験の観測などに従事した。成田君も同じく射撃係で、牛込余丁町の兵器行政本部、金沢工專などに出張勤務した。

・投下ロボットの開発

三松、海老原、初見、寺田君の四名は、林大尉の下で、光電管を用いた測雲装置の開発を担当。馬橋、読売落下傘塔、福生で、落下傘の分離、アンテナの展開、時計の起動、電波の伝播など、装置の作動に関する調整、各種試験に携わった。

・飛行機雲消散の実験

才賀君と私は中島大尉の下で、電気集塵機の原理を応用し、雲の核となるエンジン排気中の粒子状物質を補足する実験を、零下四十度の低温室で行った。

電極に煤状のものを補足できず、実験は六月で中止になった。その後、天候別夜間視程の調査を蔵王分室で行う準備中終戦となった。

・藤岡君の部屋は殆どの人が出張してをり、その人達の留守を預かっていたが、仕事の内容は判らなかつたとのことである。

・天沼分室には統計班から森本君ほか五、六名が移り黒川君も一緒だったとのこと。断熱線図、諸元経過図、等圧線図等、ゾンデによる高層の調査に従事、局地観測のため、酒田、宇都宮などにも出張した。

・中野分室には日戸君ほか数名が移り、風洞実験のデータ整理などをした。

・気象教育部には教務、予報、観測の三班に六名づつ計十八名が直接配属された。

・教務班では高橋爽、太田、加藤、久保、長田、横内君の六名が、教程の作成、教材の整備、教育資料の編纂、校正などに従事した。

・予報班には波脇君ほか五名、観測班は松本君ほか五名が配属された。

陸士、海兵など軍関係の学校に進んだ人達は、十九年十一月から二十年四月までに職場を離れたが、高等学校、大学予科、専門学校に進んだ人達は、四月以降も入学指示のあるまで、引き続き勤務した。

終戦の日は早朝から艦上機の来襲があったが、第三波の主力は正午前に洋上に退去しつつあった。十一時

五十分、各班は指示により本部舎前や池の前に整列して、玉音放送を待った。直前の情報放送は、「十一時五十分現在、関東西部に敵小型二編隊ある外、関東甲駿両地区上空に敵機を認めず。未だ警報発令中なるも東部防空情報一時中止す」というものであった。

玉音放送はスピーカーの音が小さく、聞きとれぬところもあったが、戦争に敗けたことは解った。将校や下士官が、非常に冷静だったことが印象的だった。解散して暫くしたとき、西の空に高射砲の音が響き、弾幕が見えたが、すぐに静かになった。十四時三十分帰宅の指示が出た。翌日は一日中、書類の焼却、器材の廃棄、運搬などをした。十七日には、雇員、傭員、勤労学徒に、抽選で被服、靴、雑嚢などが支給された。動員は十九日で終わった。

○元上司との再会

私は戦後、社内打合せで、思いがけず元上司の中島松太郎大尉に会った。戦後一旦九大に戻り、その後富士通に入って、無線の伝播調査をしているとのこと、陸気での実験をまとめた冊子を買ったが、実験の失敗には触れていなかった。つくづくと世間は狭いもので

あることを痛感したが、同じような経験をした人がほかにもいる。

・小島君は一高三年のとき、ドイツ語副読本の教官が、偶然に第一課庶務係の原田義人少尉であった。気象部の話をして、後に何度か自宅を訪ねた。ドイツ文学者、文芸評論家としても知られたが、昭和三十五年八月、四十一歳の若さで亡くなった。少尉には統計班、研究班に所属した人達はお世話になった。

・高橋爽君は海上保安庁時代、幹部研修の折、海上保安大学校で上司の教育部教官能沢源右衛門少佐（十五年東北大）に会い、改めて気象学を教わった。

・初見、三松、寺田、海老原君の四名は、林誠大尉ほか昔一緒に働いた人々と今も交際を続け、二年ほど前にも中華街で会食をしたとのことである。

○東宝との縁

戦争が激しくなり、映画関係者も徴傭を逃れて外部で働くようになって、研究班にも東宝から美術の人達が通って来ていた。高久さんという年配の人と女の人で、雲の絵を描いていると聞いた。写真があるのに、と思ったが、色が表せない、ということであった。

そういう縁もあつてか、東宝から慰問隊が来て、高等官集会所で演芸会が開かれた。晴れた暖かい日で、少しなら見てきてよい、と許しがあつて、人垣の後ろから背伸びをして、高峰秀子、岸井明のデュエット「煙草屋の看板娘」を聞いたことを覚えている。娯楽の少ない時だったから、士官も職員も大喜びだった。

二十年の春、東宝が氣象部の協力を得て「北の三人」という戦意高揚映画を作った。北方の航空基地で働く三人の女性の献身的な奮闘と、航空通信兵達の生活を描いた映画で、原節子、山根寿子、高峰秀子、佐分利信、藤田進の共演。B24、P38の来襲シーンは、円谷英二監督による東宝得意の特撮であつた。撮影には百式輸送機が使われ、百葉箱、風力計、風信器などの観測器材が貸し出された。実機の撮影は福生の飛行班で、三人の吹雪のなかでの観測シーンは、セツトで撮影されたものと思われる。八月五日封切で、是非見るようにとの指示があり、八月十一日焼け残った日比谷映画劇場まで出かけた。原爆が落とされ、降伏交渉が始められた時期で、今考えると、何か不思議な気がする。

同期の人達と氣象部の話をするとき、殆どの人が、私達の動員は恵まれていた、と言います。接した幹部の多くが技術士官で、親切に仕事を教えられたこと、戦時中にもかかわらず、休憩時には見習士官や職員と一緒に、バレーボール、野球、テニスなどをして、あまり軍隊の野蛮さなど感じなかったからかも知れません。

調べて見ると、昭和十二年からの五年間に、氣象部に採用された技術将校は四十三名で、東大十五、京大十五、東北大五、阪大三、他五名となっています。二十年までに教育部（馬橋）を出た将校学生は三百四十名、甲種幹部候補生は六百三十七名で、成績優秀な人は氣象部に残りました。山岡大佐、白井少佐、日下部中佐などは、十六年に技師から現役に進んだ人達です。氣象部の雰囲気、学校の延長のように感じられたのも、こういう人達を上司にもったからではないでしょうか。

また、学徒は雇員扱いということ一人で一人前に扱われ、外部との折衝など、仕事の上で困るようなことは、殆

どありませんでした。あの頃の経験は、私達が社会に出てから、大いに役に立ったと思っています。

私達が当時担当した仕事の内容、同僚の名前について、飯島、板橋、片岡、小林、小島、倉田、栗山、佐藤、斎藤満、市東、高橋爽、成田、初見、日戸、三松、村田、森本の諸氏から、話を伺うことができ、大変助かりました。厚くお礼申し上げます。

編集者注

気象神社については片岡君が書いていますが高円寺氷川神社の宮司さんは西高同窓生です。



高円寺駅付近図

中学校時代の思い出

3期 針谷 和夫

齢七十となり、昔のことを思い出すといろいろとありますが、特に中学生時代は、戦時中から敗戦にかけてのことでもあり、随分と変化に富んだ期間でした。

受験前は、今のように塾に通ったこともなく、思いっきり遊んでいました。当時入学テストは口頭試験だけでした。十八中を選んだのは、小学校の担任の先生にすすめられたからでした。

無事合格し、四月の入学式の際藤本教頭先生に呼ばれ、何事かと、別室で待っている間中不安でした。先生は、「今日校長先生から『校章』が渡されるが、君が総代として受け取るように」と言われたのでした。本当にびっくりしました。という訳で、皆の代表として校章をいただいたのでした。このときの事は今でもよく覚えています。

勉強はあまり好きではなかったせいもあって、心に残る授業はありませんでした。

小学生の頃は習字を習っていたので、上野の美術館

での、三楽書道会主催展覧会に出展して賞をいただいたので、早速教員室に持参、書道の山田先生に見ていただいた処、「これは自分の教えた事と違う」と、けなされて恥ずかしい思いをしました。その時、担任の中込競先生が山田先生に激しく抗議して呉れたことは、今もって忘れられないことです。

学業のことは別として、往復の電車には楽しい思い出があります。もともと小さい頃から電車が大好きでしたが、帝都線の多数の運転手や車掌に友達が出来たことで、今では考えられない、「運転台」に入れてもらっていました。

学徒動員時代はつまらぬ年月でしたが、現場から検査室に移ってから、先任の女子大生に大変可愛がってもらっていたので楽しい毎日で、また卒業後も彼女らの何人かとお付き合いをしていました。

持病の痔疾を患い、切除手術で休んでいる間に終戦を迎えました。

その後のことは余り覚えていませんが、四修のため卒業式もなく証書も頂かずに卒業し、医大へと進みました。

今にして、多くの先生方の良き御指導をいただいたことに心から感謝しております。

現在、体調がすぐれず日常を過ごしておりますが、それでも毎日休まずに仕事を続けています。

年に一度ですが、同期会（いづみ会）で昔の仲間と会うことが出来るのは、本当に嬉しい事です。

会員諸氏、ご健勝で、「いづみ会」をよろしく願っています。

岡田先生のこと

3期 鈴木 茂男

我々が玉中一年生に入学の昭和十七年春に、岡田先生が就任されました。

当時岡田先生の居宅は、先生の兄上の留守宅で、小生が四才まで過ごした世田谷区太子堂の家の前隣りだったのでした。

以来、先生から何かと目をかけて頂けるようになりました。家が近くだったので数学の質問に行ったり、大掃除の手伝いに行ったりしたこともありました。

昭和二十年三月に小生は予科練に入りましたが、先生が戦災を受けるまで、母が私の分だと言って夕餉の惣菜を届けたとのことでした。

卒業後、有志の会にお招きすることで、一度ならず西荻のアパートを訪ねたりしましたが、退官後、病を得られ入院されたことを知り、鎌ヶ谷市の入院先へお見舞いにも伺いましたが、昭和六十一年二月に逝去されました。

先生の思い出には「こんどのつぎはこのつぎのこと

だよ」と言って生徒にヤジられたことなど多々ありますが、（しわちゃん）の愛称による先生の人柄は、卒業後年を経ると共になつかしく、良い先生だったと思い出すのは、多くの人の感ずる処と思います。

心から先生のご冥福をいのります。

玉泉中―思い出の英語の先生

3期 島村 馨

一九四八年（昭和二十三年）に旧制中学を卒業して、今年でほぼ半世紀（四十八年）の歳月が流れ去った（*Vita brevis, ars longa*）。社会にでてから、現在に至るまで、英語教師として暮らしを立ててきた私にとって、教えをうけた英語の先生―玉中で教わった英語の先生のことを、ときおり思い出す。先生方に対して、学恩と敬愛の情とともに、消し去り難い思い出が残っているのである。失礼にわたるおそれもあり、断片的な記憶にすぎないが、懐旧の情の表白として思い出の英語の先生のプロフィールを綴らせて頂く。

岡山 茂 先生

中学に入学して、*New Light Readers* などの教科書で、初めて英語を習うようになった。（英語のペン習字帳にあった、新しい香りと当時のイギリス作家のサインが記憶にある）。岡山先生（ボブ）から既に授業をうけていた上級生から「ボブは教え方がうまいぞ」

という噂をきいていたが、その通りだった。二年生から岡山先生の授業を受けた。リーダーの英文の文法的関係を黒板で明解に説明されて、リーダーの文章に下線や四角を付したり、ノートしたり、英語文章の骨組みをしつかりと教えてくださり、授業の進行は明瞭でムダがなかった。先生は後年、大学の教壇で英語教育の専門家として活躍されたが、比較的早い時期に薰陶をうけたのは幸いであった。（本年、先生は長逝されたとき。謹んでご冥福をお祈りする）。

中川（河野）清先生

黒板に書かれる英字の美しさ、定期的に課される英語のディクテーションのテスト、ジョーク、漱石の逸話などが印象に残っているが、長身で潑刺としておられ、旧制八高・東大英文料出身の青年教師そのままの感じであった。私の思い出は、英語の発音で「二」と「三」の区別について先生から質問されて、巻き舌の

「こを、舌巻きの」こと返答して、教室中の爆笑をかったことだ。

英語史の研究者である先生は、碁、チェス、将棋などのゲームでも秀才であり、愛酒家でもある。（これは後年知ったこと）。

藤本 純助 先生

教頭であられ、外見的にも重厚であつた。戦後勤労動員が終わり、学校へ復帰した上級学年になつてから、二〜三回英文法の授業で教室に見えた。英文法の叙法の説明で英文法学者細江逸記の説を熱をこめて語られた。

前田先生

副読本の Robinson Crusoe の授業をうけた。先生のリーディングの、先生独特のイントネーションがまだ耳に残っている。噂では、英会話がたくみで、戦後、駐留軍関係の仕事で活躍されたときく。

嶺村先生

十中で英語の授業をされていた。一度教室にみえられ、持参された英語の原書の話をしたことがある。青山学院のご出身ときいた。もっと授業をうけてみたい気がした。

爆笑授業

3期 榎本 勝起

「いつ死ぬか、… When - die…」と

その詩集にもある中村高樹先生の授業を、またまた台無しにした失敗談である。

春―夕焼け―善意、一途のままで 逝きしを―と

その兄、中村草田男氏が詠んだ程の中村先生を立ち往生させた授業である。例によって、国語の時間。例によって、音読させられている筆者。

内容は、夏から秋への北海道の風物詩であった。

例によって、予習の目は、心は一度もその活字の上を、なぞってはいなかった。

運も悪かった。

ニツコリ笑って、スマなそうに生徒を指す、先生のその指が、顔の前に徐行して来て止まった。

きまって、目尻を下げた先生は、肩で一息ついて読み始めるのを待つ。

音読は、小学校五・六年生の頃から、熟れているつもりであった。

運が悪かったとは、この時の事である。

机の左に座っていたのは、クラス代表のキレル男。

右側は、筆者と同列の親しめる奴。

左側の秀才には、ニガイ想い出があった。

漢文の時間に、慙愧という字が読めなかった時、授業が終って、冷やかにチラッと、ながめられた記憶がある。

そこで、初めてお目にかかる（漢字、三文字の読み方）を、右隣の奴に聞いた。

彼は、国語の本でその口を隠す様にして、それでも堂々と自信をもって教えてくれた。

一瞬の間をおいて、声を更に大きく読みあげた瞬間に、教室は爆笑の、破裂音に、どよめいた。

内容はこうである。

――夏の北海道は、またたく間に、過ぎる。秋が早い。大自然が、長い冬への準備を始める前、人間を含めて、動物達の食欲が動く。大通りにイカ焼の二オイ

が流れ、玉蜀黍の、つけ焼きの香りも、涼風に――ここでもよめいた。

ナンと声を大にして「タマネギ」のつけ焼きと読んだのだ。「とうもろこし（玉蜀黍）のつけ焼き」が出まわる季節となると、困ったような中村先生の、肩が少し下がった顔と、「タマネギツ」と胸はって教えてくれた友を想い出す。

（優越を感じた時、人は笑う）という、笑いのルールの一つがある。

今は、マイクロフォンの前で、時として使う、笑いのテクニックである。

教室を爆笑のミキサーに投入してしまった小生は、中村先生の重荷であつたにちがいない。きつと。

玉蜀黍をタマネギと教えてくれたT君ももういない。

――元TBSアナウンス部長・現在「お早う榎さん」に活躍中――

追 憶

3期 濱本 昭郎

——朝礼そして奉拝行軍のことなど——

ドーン・チャツチャツチャツと、朝礼を終えた全校生徒は、素足に草履の上履きで、それぞれ教室へ向う第一歩を号令と共に力強く踏み出すことが慣わしとなっていた。その前、宮城に向つての遥拝及び家庭に挨拶等、海兵・陸幼の生徒と同じことをしていた。軍国主義華やかなりし頃の中学生である。「青少年学徒に賜わりたる勅語」の發布された五月二十二日を記念して毎月二十二日に学校（久我山）から宮城（皇居）まで、隊列を組んで、軍歌「歩兵の本領」や「ああ、紅の血は燃ゆる」を歌いながらの行軍約二十キロの行程である。水道道路を西永福、今の井ノ頭通りから明治神宮を経て外苑へ、議事堂を見ながら警視庁前桜田門、再び歩調を整えて二重橋前へ、全校生徒集合の下、天皇陛下万歳を三唱して日比谷公園で解散するのが例であった。時には驟雨に逢い、ズブ濡れになつての行軍もあった。途中永福町辺りで第一回の休憩がある。U

君の水筒にはきまつてカルピスが入っていた。一口づつ周りの者に分けてくれるのを飲んで「ああおいしー」と味わったものだ。言い当てて妙、「初恋の味」が忘れられない。

解散後、都電で渋谷方面に帰る途中、青山御所を通過する時は、今度は明治神宮に向つて進行中の電車の中での車掌の「只今通過中であります。遥拝して下さい」の掛声で椅子に座っている人も立っている人も脱帽してお辞儀をする（させられる）ことに何の不思議も感じない時代であった。戦後昭和二十一年正月、改めて人間宣言をしなければならなかった夫々、陛下の像である。

紀元二千六百年の式典の後、今は美しく松が飾られている皇居前広場も、都内の中学生、女学生等の勤勞奉仕で整備したことがある。楠公や和氣清麻呂の銅像もこの五十年その位置で黙って見ている。

——街角より——

大手町・神田・皇居前・東京駅

平成十二年一月二十一日（金）午後、都営地下鉄三田線大手町ホームで、三戸森襄治君に邂逅した。写真家の彼は、仕事の帰りで両手に紙袋を提げていた。年齢を取ったのはお互い様、一瞬見分けが着かなかった。私も去年古希を迎えたのを機に手にした東京都シルバークラスを、あまり使わないので今日は寒中でもあり、勤務先（JPSA）のある神田須田町へ戻るのに次の神保町乗換え、岩本町まで利用しようとした際である。彼とは遅くまで痛飲したことがあったが、今は主治医針谷和夫君から固く禁じられているという。いづみ会の名簿等を入れた鞆を街で搔つ払われたと嘆いていた。

玉中入学時、皆で二重橋前で撮った記念写真のことなど想い出し、話し合った。僅かな間だったが固い握手で再会を約した。

神保町靖国通りは昔の俣の古書店街と新しい運動具店・楽器店が並び、常に雑多な人通りで賑わっている。突然、北方領土返還を叫ぶ右翼宣伝車が列をなして通

る。「花も蕾の若桜、五尺の命ひっさげて、国の大事に殉ずるは、我等学徒の面目ぞ。ああ紅の血は燃ゆる。（学徒動員の歌・野村俊夫作詞・明本京静作曲）後に続けと兄の声、今こそ筆を擲（なげう）って、勝利揺るがぬ生産に、勇み立ちたるつわものぞ……」車はスピーカー一杯に音量をたてて走り行く。豊饒な世にどつぷり浸かった男女は全くの無関心である。

あの苦難の動員生活、軍国少年時代、玉中時代を鮮明に想いださせたが、振り返って何故か明るく自由な青天井があつた様な気がする。君に忠・親に孝・先生は教師として、生徒は学生として持ち分を弁（わきま）えていたからだろうか。

有為転変。東京駅前の国鉄本社ビル、嘗て古澤達一郎君が活躍した旅客指令室も、先年一般公開見学会を最後に取り壊され、旧丸ビル跡地、七十余年の歴史をもつ瀟洒な日本工業倶楽部ビルと其の辺りに寂寥感を漂わしている。

間もなく二十一世紀に向けて超高層ビルが林立する計画といわれている。

昭和十八年、中学二年の時、二重橋前楠正成銅像周辺で都内中等学校生徒による勤労奉仕で、一日簣（もっこ）を担ぎ、今の皇居前広場の造園をしたことがある。直接の教科は「作業」。二人で一つの簣を担ぎ土を運んだ。天秤の相手は故三浦明弘君、戦後疎開先の佐賀、鳥栖で早逝した。慣れない作業で大いに疲れた。その後南方の島々が次々と陥落し、一夜にしてブルトナーで飛行場が完成するという機動力は知る由もなかった頃である。

館山・葉山

玉中一年（昭和十七年）二年（同十八年）の夏休み、それぞれ心身を鍛練する名目で十日間の合宿に参加した。両国駅を発った列車は、途中沿線の習志野練兵場を始め多くの軍事機密保護の為、車窓は銃戸で遮蔽され全く外の景色は見られない俤、館山へ。

館山航空隊を始め海軍色の濃い街。北条海岸で初めて軍艦を観た。迷彩を施した巡洋艦駆逐艦等が停泊していた。勝利に酔い痴れていた頃であるが戦場がすぐ近くにあることを知った。

今年の正月ファミリを伴って房総に遊んだが、海岸に立ち、赤帽、赤禪（あかふん）で遠泳を憶えた往時の一齣を語った。

二年の時は葉山。小林敏男君などと一緒だったかと思うが、当時の写真・日記類は昭和二十年五月二十五日、東京夜間大空襲で被災、全て灰燼に帰して了つたので全くの記憶でしかない。満福寺という寺院で朝夕の食事は正座し、「舍利飯裡別所」（しやりはんりべつしよ）に向かわず」とか唱え、夢中で食事をしていたことを微かに憶えている。夕食後に試肝会（度胸試し）が催されたことがある。

人情味のある配属将校の輿教官の戦場での幽霊話の後、自分の名札をお堂に置いてくるのだが途中牧野先生などがぼろ傘などで威し掛け、前後ギャグワーという大声も聞いている。ご用邸をはじめ多くの文人墨客の保養地としてきた由緒ある葉山も、近代化、開発の名の下、道路は狭い俤マンション・ファミリーマート・レストランが乱立し、全く昔日の面影はない。

この春、中高一貫校に入学した初孫は、学帽に金釦の制服、嘗ての自分を見るようである。

戦闘帽に巻脚絆（ゲートル）に変わることなく平穩に学業に勤（いそ）しんで欲しいものである。

登校時は右肩から左へ、下校時は左肩から右へ、学靴を下げて通った少年達の姿は今はない。

喧嘩と殴られた思い出

3期 蜂須賀 幸三

1 「兄貴風を吹かせやがって」、「弟の分際で生意気な奴め」。一回り以上年長で剣道の有段者の兄の拳が伸びて来る前に、子供の頃から相撲の選手であった私が兄の懷に飛び込んでの取っ組み合いとなった。兄弟喧嘩である。此方は少し背が高く、向こうは体格が上回っているが、此方の方が組手が良く腰深くの組合

せなので「勝った」と思ったが瞬間、「兄貴を投げ飛ばしたら面子をつぶすかナ」と思った所、心のゆるみがあったのだろう逆に浴びせ倒されてしまった。或いはそれ以上に兄の馬鹿力があつたのかも知れない。丁度、母や姉が物音に気付き割って入った事もあり、そのまま収まったが、「弟が敗けて良かった」の想いも……。争いの発端は忘れたが戦後間もない頃のことである。

2 背丈も同じ、剣道の實力も同じ、更に頭腦の方（？）も。休み時間の出来事である。

これも発端が思い出せぬが、取っ組み合いの喧嘩と

なつた。どちらが優勢で、誰が仲裁に入つたのかも思い出せない。彼には強烈な思い出として残っているかも……。と今になって悔やんでいる。そのひとは、現在一番心を許せる友の一人、鈴木茂男君だったのである。今は、多少性格も落ち着いたと自分では思っているが、昔は相当に短気な性分であつたと反省しきりである。

3 「査閲」 学校専属の軍事教官にとつて、中央（？）から来臨する現役の上級將校が、年一回学生の軍事教練の成果を視察する会は最も大事な行事であつた筈である。その日の数日前、全校生徒を集めてのリハーサルの時の事だつた。朝礼台を前に、横数列に並んでの整列訓練があつた。百名になんなんとする隊列が横一列に並ぶのは至難の技で、教官が列間を走り廻って隊列を匡正していた。トットツと私の列の後を走って来たな、と思つた瞬間、「グワン」とサーベル（演習用の指揮刀）で後頭部を殴られた。頭の中に火花が散つて、目眩がした。痛かつた。私の辺りから列

が曲がっていたらしい。日頃可愛がられていた教官先生からやられた、その思いは忘れられないが、不思議と懐かしい思い出として残っている。

4 『高坂、蜂須賀、前に出てこい』 偶々離れた席間で顔を見合わせ笑みを交わした途端にとがめられたのだ。教壇の前に跪ずかされ、大地図を掛ける竹竿の太い部分でビシッと一発ずつ、かまされた。今思えば良くもまあタンコブで済んだものだと思う程の体罰であつた。後日、この先生の「自分史」を拝見する機会があり、軍隊時代の思い出の頁に「納得のいかないビシタは今でも忘れられない」と記されていた。

近頃の世の中の親子間或いは友人間、特に若者の間の紛争を見聞きするにつれ、年代差や人の意識の違い、できる我慢の範囲、道德感の差異を自分の時代と思い較べて、日本人の人間性の変わり様をつくづく思い知らされている。

そして、私の体験をほろ苦く、けれども懐かしく思い出している今日この頃である。

私と玉中

3期 安永 和夫

玉泉中の一年生の年、四月十八日に最初の空襲があった。その日は創立記念日で休みで家にいた事を覚えている。幼年学校や海兵に進んだ先輩（十中の・・・）が訪れ、何人かが受験する事になった。そして二年生になる四月に私は仙台の幼年学校に進んだ。二十年八月に終戦。九月にカーキ色の軍服で玉中に復員。翌年春一高を受けてみた。和文英訳が全然出来ず、発表も見に行かなかった。

五年生の時、社会生活連盟という中学生の組織が生まれ、荻窪高女やら豊多摩中等から委員が出て、引揚者援助の街頭募金や東京女子大で文化講演会をやった。十中からは秋山隆君が委員となっていた。その後その組織は消滅したのだろうか・・・？ 学校に記録があれば読んでみたい。

二年半の間中抜きであるが、玉中は私の母校である。荏原第一尋常高等小学校は若林国民学校・若林小学校に変わり、玉泉中は十中となつてから西高になった。

幼年学校は消滅して四十八年になる。
戦争中のこと――玉中のこと――をもっともっと知りたいと思っている。

勤労働員の思い出

3期 高田 健一

文章を作ることが苦手の私ですが、いざとなると四百字と言うのは一寸短いような気がしました。断片的ですが、あれこれ正に走馬灯の様に思い出が沸いてきます。もつとも思い違いの部分もあると思いますが。

何回かの会合に出席しても、私の方がとつても懐かしく声をかけても全然反応が無かったり、反対に懐かしそうにあれこれ昔話を語りかけられても全然思い出さなかったり。

その中で確か講堂に近くの校舎の二階での「補修科」の薄く髭の生えた先輩が怖かった事。

じゃがいも・ボブさん・ノンカさん・ちよくしえん・扇風機等々、先生の渾名と共に、職員室に入るときに姓名申告をして用事のある先生の御名前を大きな声で言わなくてはならないのに、どうしても渾名しか思い浮かばず立ち往生した事。

確か二月頃だと思うが東京に珍らしく大雪が降って、一緒に動員で仕事をしていた日本女子大の方二人を私

の家にお泊めした事。

空襲が激しくなり、まだ人家の少なかった富士見ヶ丘の私の家に土屋先生が荷物を疎開され、そのとき妹さんの嫁入り道具の鏡台の鏡が壊れ先生が物凄く落胆された事。

五尺の命ひっさげて、国の大事に殉ずるは我ら学徒の本分と・・・

「学徒動員の歌」を歌いながら、隊列を組んで下連雀の日本無線から井の頭街道を吉祥寺までの帰路が何故か一番に思い出される。それも隣の友の顔も定かでない真つ暗やみがこの歌には良く似合う。そして、国民服にきちんと巻脚半を巻いた中込先生、それに較べると一寸だらしない土屋先生（先生すみません）が思い出される。今だから時効で口外することも許されると思うが、闇討ち未遂事件と言う事があった。某君が非行の疑いがあると言う事で、正義感に燃える同級生

の一部が襲うという噂を聞いて不安になった私と安富君で先生に相談し、警戒に当たったが結局何もなかった。

又、土曜日・日曜日の登校日にだけ学校に行って授業を受けられるのが、我々の最大の楽しみだった。

今では、本当に懐かしい思い出と共に私はその時代を過ごした学生生活に悔いはない。

思い出すままにいろいろ書きつづりましたが、こんな昔を思い出させて頂いた事もこんな機会を与えて頂いた結果です。

これからも健康でいつまでも昔の話に時を忘れないものです。お互いに。

勤労働員の思い出と・・

3期 斎田 秀雄

私は、日本無線の試作工場で作機機械を担当していました。今、考えると何を作っていたか定かではありませんが少年ながらよくやったと思います。小生のみならず他の友にもあったことですが、或る日、ミーリングでベークライトの加工をしていました。仕上げのため削り取り線を確認するのに右中指で切りくずを払いのけようとして、爪もろ共エンドミルに巻き込まれ怪我をしたことがありました。未だに爪が少し変形しております。

また、或る時には、プレーナーで定盤を削っていて、機械を止めずにテーブル下の潤滑油を回収しようとして右手をテーブルに挟まれてしまいました。定盤が小さかったのが幸で大きな定盤であつたら右手首から切り取られていたと思うと今でもぞっとします。怪我をしても休まず通院しながらよく頑張つたと思います。寧ろ工作機械の勉強をかなりさせてもらった様な気がします。

社会人になつて計らずも設備関係の業務を担当した時、工作機械の整備等には案外役に立ちました。

それから営業を担当する様になり、偶々日本無線に電子管の販売に行った時、資材部長さんはじめ関係の皆様は「私は終戦の日をこの日本無線で迎えました」とお話ししましたら皆さんビックリされると同時に親近感をもつて頂き仕事が大変スムーズに進み大成功でした。勤労働員の経験が以外のところで役に立つたと思います。

御指導頂きました先生方をはじめ友人の皆様に改めて感謝する次第であります。

終戦の頃

3期 山内 彬正

我々の年代は、戦前から戦争へ、戦中の空襲体験、戦後の教育方針の百八十度転換、そして高度成長期と価値観がいろいろ変る世の中で貴重な経験をしてきました。その中でも中学時代の勤労動員、終戦という時期での体験、特に動員先の日本無線の工場では、真空管の検査等の仕事でありましたが、わからないままにただやるだけで、全く空しい日々の連続であつたように思います。それでも空襲により井の頭線の永福町車庫が全焼し、電車がなくなり自宅から歩いて日本無線まで行つたのは、少しは責任感があつたせいでしょうか。二十年の八月初めに八月二十三日付で航空士官学校への入隊通知をうけとつた時は、これで動員から解放されると喜びましたが、半月足らずで終戦をむかえてしまいました。八月十五日の正午の天皇陛下の詔勅のラジオ放送は今でも鮮明に思い出します。この日はグラマン等による空襲もなく、工場の片隅で、多少聞きとりにくかったのですが、「堪え難きを堪え、万世

の為に太平を開かんと欲す」というお言葉が聞こえました。工場の人達も呆然としていましたし、これからどうなるのか見当もつきませんでした。その後は先生方が一番あわてていたように思います。

あれから五十年、まさに光陰矢の如しですが、還暦を過ぎて也未だ元気で働いております。早く、残りの貴重な時間は自分で自由に使いたいというのが現在の心境です。

海軍甲種飛行予科練習生

3期 古澤 達一郎

昭和二十年三月初旬、日本無線（株）真研六課（我々玉泉中三年生が配属されていた職場である）のベルが鳴った。鈴木君と私は、表題の試験に合格しており、同課の事務室に入隊挨拶をして帰ろうとしている時だった。事務室勤務の境澤君が言った。「こんな時期でなんにもできないけれど、せめてお別れの式くらいはやらせてよ」と言うような意味だったと思う。

鈴木君も私も晴れがましが嫌いだだったので、（さりげなく征こう）と申し合わせていたのだったが、課長以下職長、班長、他のプロパーとクラスの皆が集まってきた。こうなつては仕方がない、とどまって式にのぞんだ。物資不足の折だったから私も鈴木君も下駄履きに足袋姿だった。課長が送る言葉を述べて出征者が挨拶するのだが、急なことで打合せもしていなかったのをよいことに、黙っている私にたまりかねて、ひとの良い鈴木君が口を切ってくれて、「私たちがいった後も、皆さんお元気でお国の為によい仕事をしてください、それがお別れに際しての私たちの唯一の望みであります」と結んだ。

入隊日前夜、境澤、大栗、久芳君達と家で送別会、私が（皆に堅苦しい思いをさせたくないから）といっておいたので、父は専ら裏方のコックに徹してくれた。当時は息子の入隊に親が反対できる様な風潮ではなかったから、無理をしてその振りをしていたのかもしれないが、父は意外と恬淡としていたので安心した。

東京大空襲の余燼消えやらぬ都庁前に集合、常磐線の列車に乗り、土浦海軍航空隊に入隊した。「第十六期甲種飛行予科練習生 兵籍番号横志飛六八五九七 海軍二等飛行兵 古澤達一郎」の誕生である。十六期生は四十一、四十四の四個分隊、一分隊約百名で私は四十一分隊だった。仲間は東京、千葉、神奈川、山梨、長野、静岡等出身の中学三、四年生が殆どだった。

娑婆（軍隊の外の意）ではできなかった学業（英語だけは無かった）のほか、無線通信、手旗信号、海軍体操、陸戦訓練等で鍛えられ、なかでも霞が浦湖上での短艇訓練は尻にまめができる程きつかったが、学徒動員の工場作業より数段楽しく感じられた。下士官の班長達はきびしかった。陰湿ないじめはなかったが制

裁はあった。たるんでいると「足を開け——歯をくいしばれ——」と予備学生出身の分隊士から拳で顎を殴られた。ひとりだけが目を付けられた場合でも、全員がやられた。たまに班長が班員を精神棒（野球用より太くて長いバット）で尻打ちした。二カ月間の訓練の総仕上げで、学科試験と航空隊司令の閲兵式があり、練習生全員「一等飛行兵」に進級した。記念写真を家に送ったが、最初はどれが私か判らなかつたそうである。目付き、顔つきがきびしく変っていたのだという。

土浦航空隊は米艦載機の空襲を受け、私の班の一人が戦死し、一人が右手を負傷入院した。私はたまたま当番勤務だったので、近くの山の上で友人を茶毘に付した。悲しかった。遺髪と爪をと思ったが、身じまいが良くそれぞれ短かくて果せなかつた。感心した私は以来不精をせずに身綺麗にすることに心がけるようにした。海軍では（スマートなのが海軍々人）といった気風もあった。空襲で兵舎が焼失し住む処が無くなつた私達は、千葉県の茂原航空隊に転属になった。教育航空隊ではなく、零戦、彗星艦爆がいる首都防衛基地である。当然のことながら、教育訓練はなくなり、畑や田園をつぶして零戦の掩体壕や誘導路をつくる土木作業に従事した。つまらなかつた。

終戦の詔勅は茂原で聞いた。即土浦に戻つて「飛行兵長」に進級し除隊になった。世間は我々のことを復員軍人と呼んでいた。七つボタンの軍服で近所へ挨拶に廻つたら、前の佐藤さんの奥さんが涙をこぼして喜んでくれたのは感激した。復学のお願いに玉中を訪れ、教員室入室の際、ついくせがでて「古澤復学のお願いにまいりました。入ります」と大声で申告したものだから、その声に居合わせた先生方はびっくりされ、岡田先生が「おおよく帰ってきた。すっかり軍人らしくなつて——」と声をかけて下さつた。

お恥かしい程短い兵役期間だつたけれど、この経験はその後の私の人生に大きく影響を及ぼしていると思う。「やる気」という、ものごとに対する集中心の大切さを覚え、戦死した仲間のぶんまで生きよう、飛行機乗りにはなれなかつたけれど、そのかわり何かお役にたつことをしようという思い入れが、復学・卒業後の国鉄入社のおかげになった。中村先生が「仲間の軍人に古澤君と同じ動機で国鉄にはいった者がいるよ。」と教えてくださり、励みになった。私の三十五年にわたる国鉄生活はこうして始まつたのである。

釣床 (つりどこ)

3期 鈴木 茂男

昭和二十年四月一日に海軍飛行豫科練習生として土浦海軍航空隊に入隊した。「豫科練に行った」というと、大方の人から「飛行機に乗ったか」と聞かれるが「飛行兵になるための豫科だから、基礎訓練のみであり、いきなり飛行機には乗れない」と答えると、それ以上の興味はないという顔をされる。

あれから五十有余年経た、いま想うと、当時風雲急を感じ、勤労働員で機械油の染みた南京袋のような服で作業しているよりも、もっとお国の為に盡くしたい気持ちは確かにあったと断言できるが、反面、七つ釘を着て飛行機が操縦できることに憧れたことも否めない。

そんな気持ちは、特攻隊で命を捧げた先輩に申し訳なかったと、心から思っている。

豫科練に入って判ったことは、約二年で卒業後、本当の飛行練習生となり、ここで約一年半みっちり飛行訓練を経た後、各航空隊に配属されるのであるが、そ

の時の階級は、二等飛行兵曹（陸軍の伍長）で、士官ではなくて下士官であることだった。短い期間の軍隊生活であったが、そこは、世間では考えもつかない「階級絶対制」の世界であることを知るのに時間はかからなかった。

豫科練の寝具は、兵隊並みの釣床（ハンモック）である。これは、収納場所が少なくすみ、海戦の際には、艦艇の重要部分を砲弾から防護するのにも使用されるもので、頑丈なキャンバス（帆布）の両端に取付けられたロープを、水平に固定されたビーム間のフックに引掛けて釣るようになっていて、構造上は、木陰などに使う市販の網のハンモックと同じである。

海軍の釣床は、わら布団の上に黒毛布を畳んで敷き、その上に白毛布を状袋のように掛けて寝る様になっていた。起床後、外側のキャンバスで中身を包みこんで筒状に巻き、一本のロープで縦一筋横六筋に緊縛、一抱えの棒状（約二十kg）にして、兵舎（甲板）入口

側・出口側二ヶ所の衣桁棚上にある収納所（ネットイング）に格納することになっていた。

豫科練の一日は、釣床訓練で始まり、釣床訓練で終わる。十五名二十名で班を構成、一班八班で一個分隊を編成する。一班が一行に並んで釣床に寝ている。

五時五十五分、拡声器が「総員起し五分前」と告げると、釣床内の練習生はもそもそと動きだす。着ているのは支給のメリヤス肌着と越中褌、足元の作業服上衣・下衣を着て身仕度するのである。このとき無意識に「伸び」をすると大変なことになる。練習生は日常はすべて駆け足が原則（屋外で歩くことを許されるのは食卓番だけ）なので、前日の疲労が残り、往々にして「こむらがえり」を起して動けなくなるのである。

六時、タンタカタタタターと起床喇叭が鳴り、「総員起し」の号令一下、釣床から飛出し、下の食卓に裸足で乗って、毛布をまるめ、キャンバスをロープで括り、フックを外して、まとめて揃える。その間、当直教員が分隊兵舎中央に仁王立ちで、手にしたバット（精神棒）で床を叩きながら「おっそい（遅い）、おっそい」と怒鳴りながら「十秒、十五秒、二十

秒・・・」と叫ぶ。一言も言葉を交わす余裕はなく、力一杯の作業である。一フロアー約百五十人が一斉に動きだしての響きはものすごく、終了した班から、「三班」、「七班」、「一班」と大声で報告する。急ぐあまり、ロープ掛けが緩いままとめると、後で収納時に中のアンコがはみ出て、ぐずぐずに解けてしまい、尻にバットを食らい、やり直しということになる。

初めは完了までに約三分間を要したが、教員の叩くバットの音と「急げ、急げ」に追いまくられて、約一カ月後には、なんと三十秒で完了するまでに上達せられた。

釣床を収納した後、洗面所への狭い階段は駆け足二段跳びで追いまくられ、歯磨き洗面（洗面器はなく、直接蛇口からの流水で洗う）を約五分で済ませて、やっと朝食となる。

日中は、手旗信号、短艇、陸戦、体操、無線通信、学科などの課業で、夕食後、朝の逆に釣床を釣る訓練をやった後、やっと就寝ラッパを聴き、くたくたになつていたから、その後の巡検ラッパ、当直将校の巡検の声はいつも夢うつつで聞いていた。

後日、土浦航空隊から茂原航空隊へ転属となり、床の上に寝た当初は、釣床に慣れた背骨には、副木を当てられたように感じられて寝苦しかった。

今想い出して、若いとはいえ、よくやったものだ

真研六研機械班の人々

3期 鈴木 茂男

いづみ第七号に金澤君が日本無線での思いでを詳しく記されているのを読んで、真研六課三二六号棟の工場での様々なことが思い出された。工場中央の通路をはさんで、片側が仕上げ班で、反対側の北側半分が旋盤班で、南側半分が機械班であり、小生は機械班に配属された。

思い出されることは多々あるが、今は全く連絡不能な当時の職場の人々に関することを記してみたい。

田中班長・・・機械班はフライス盤が過半数で、その他にセーパー、プレーナーなど十数台があり、従業員七、八人の班長で三十才台だったろうか、やせ形のもの静かな人で、いつもゲートルを巻いて現場の一角

思うが、背の低い者、体力のない者には全くの苦痛であつたろう。

釣床に関しては、まだまだ記したいことがあるが、紙数を超えたので、いずれの機会としたい。

の事務机で執務していたことが思い出される。

朝礼とか、学生たちを集めて注意するときなどにじろじろ見回すので「ジンジロリン」と渾名していた。

石川伍長・・・がっしりした体格の人で、いつも手拭い（タオルだったか）を幅広にたたんで鉢巻きにして、結び目なしで坊主頭に巻き付けていた印象が残っている。

新鋭の小型のスロッターが導入されたとき、電源スイツチのオン・オフを一つの釦で出来るように改造したのが、子供心にわからなかった。今ではテレビのスイツチなど多くの電源スイツチがこの方式であり、別にむずかしいことではないが、当時の工作機械のスイ

ツチの殆どは赤色鉛がオンで、オフはその下の黒色鉛を押すものだったので、すごい人だと思ったものだった。

このスロッターで、B29の電波探知機に搭載されていた直径二十耗位の梅鉢形電極と同じものを作るのに、約一耗の縦溝を中心公差±0.1一耗以下で加工するのに苦しんでいたことが思い出される。

歌丸さん・・・個人商店の人で、徴用されてきたと聞いた。珍しい名前だと思ったが、ベークライト板などを切るバンドソーの仕事をさぼって、時勢の悪いことを嘆いてばかりいた。

若林さん・・・われわれ中学生に対する偏見が強く、いじわるで、雑談となると助平なことばかり話す実によいやな男だった。ハの字眉毛の顔付きから「おかめ」と渾名し、陰で蔑んでいた。

片爪城さん・・・若くて小柄で元気な人だった。兄の片爪潔さんが旋盤にいた。玉泉中、十中のことをよく知っていると思ったら、なんと学校の西側の畑の向こう側の養鶏場の人だった。勤労動員前の一年生、二年生の通学のとき、あの臭い匂いには閉口だった。

片爪さんとは親しく接し易かったので「ツメさん」と渾名した。われわれが「ツメさん」「ツメさん」というので、岡田先生は「づめさん」が名字だと思ったと云って笑っておられた。

この人には、私が受け持たされた旧型のベルト掛け、ミールリングの操作を、種々教えられた。三メートル位の棒の先に付いた鉤で、回転しているプリーにベルトを掛けたり外したりする要領とか、ミールリングのアルムに取り付けたメタルソーを外して、バーチカル装置を組み立ててエンドミルを操作する要領とか、上下、前後、左右に動くハンドル操作などなど。

ムセン数え歌「七つとせー、泣くよりつらいフライス工、ハンドル回しの猛訓練、そいつぁ剛気だねー、スツチンチョン」の通りだった。おかげで、支給された南豆袋のような生地 of 国防色の作業服は、油がしみてべつとりと黒光りしていた。このべつとり黒光りした服を着た毎日がいやで豫科練に入ったようなものだった。

終戦で豫科練から復学直後に、学校の西側の片爪さ

んを訪ねたら、養鶏場の片隅でムセンから払い下げてもらった機械で、ライターの部品の製造などをしていたが、間も無く養鶏場はなくなり、片爪さん一家は行方不明となった。今頃どうしていることが。

後年、縁あって品川の電気部品製造会社へ行くことになって工場に行ったら、勤労働員のときのもっと全

六十五才を迎えて

3期 鈴木 茂男

平成六年八月で小生も六十五才を迎えた。

中学時代に毎日通学に利用した井の頭線（昔は帝都線と言った）を今も通勤に利用しており、しばしば昔を想い今を考える。

中学時代には大体二両編成で十二分間隔だった。雨が降るとよく代田二丁目（新代田）と明大前で排水が悪くて不通となったが、現在は五両編成でラッシュ時には二三分間隔で、下北沢、明大前、永福町、久我山のみ停車する急行が各駅停車と交互に運転されている。

く同一のベルト掛けミールリングがあり、現場の工員さんより手際良く操作してみせたら、驚かれたり呆れられたりした。その他、真研六課には、米沢工専の学生や、日本女子大生などの人々がおられ、これらの方々に関したことも思い出される。

戦災で永福町の車庫が焼け、再生車両の窓は板張り、で、座席の上に土足で立つほどの殺人的混雑だったが、現在は100%クーラー付きのステンレス車両で、コンクリート製枕木の上のロングレール上を、横揺れも少なく快適に運転されている。

半世紀も経てば変わるのとは当然のことと言えば言えるが、勤労働員に駆り出され敗戦となった頃を思い出すと、全く良き時代が変わったものだと思えざるを得ない。現在の繁栄は国民の勤勉な努力の結果と考えてよいのであるが、それと共に戦時中祖国の繁栄を願う

て命を捧げた方々が犠牲となつてゐることを忘れてはならないと思つてゐる。

小生は、創刊号の古沢君の寄稿のとおり予科練生として土浦航空隊に入隊し僅かの間一応軍隊生活を経験したのだが、今の齡になつて、しみじみ戦死された方々の冥福を祈る心境で、毎年六月に行われる土浦航空隊関係の戦没者の慰霊祭に参加している。

土浦航空隊の跡地は、現在自衛隊の武器学校となつてゐるが、その一角に予科練記念館があり、予科練出身の戦死者の遺品・遺書が展示されており、慰霊祭の後必ず立寄つてくることにしている。（誰でも何時でも参観由）

小生より二、三年先輩である当時二十才前後の、今なら青春を謳歌する年頃で、特攻隊として散つてゐた方々の残したのを見ると、全く純粋な心、戦争への懷疑、死への恐怖等々が窺え、毎回涙を禁じ得ず、ややもすれば怠惰となり勝ちな気持ちを改めさせられる感一人である。

約半年で終戦となつた甲種十六期が最後の予科練生で、その我々が既に齡六十五才を迎えており次第に先

輩も減つて来つつあるが、永久に顕彰の灯を消さぬことが我々の務めであると思ひ細やかながら努力していることをお知らせする次第である。

リヤカーで家まで運んでくれた人は

3期 石橋 昭彦

戦局急を告げ、真研六課の機械の一部がどこかに疎開されて、硝子工場に配置替になった直後のことだ。

直径一センチメートル位、長さ一メートル程の硝子のパイプを山積にしたリヤカーを硝子工場から別の工場に運んでいるときの出来事だった。

三人一組（？）私はリヤカーを右横から押していたが、押すバランスが悪かったのかリヤカーが右側へ大きく傾いてしまった。向きを立て直そうと思ったが、どうにもならず、私はリヤカーと工場の壁の間に挟まれてしまった。

不思議なことに痛みは全く覚えなかったが、立上ろうとしても左脚が動かない。どうしたのかとズボンに手をやると裂けたズボンにガラス管が突きささっていて、血がしたゝり落ちていた。情けないことに、気の小さい私はここで殆ど意識を失ってしまった。気がつくと手術台に横になり大腿部のところの縫合の最中で、中込先生の心配そうな大きな顔が横に見えたこと

をはっきり覚えていた。

それから・・・

当時は今のようにタクシーや救急車を直ぐ呼べる時代でもない。私を、日本無線から自宅まで片道五キロメートルの道程をリヤカーに乗せて運んでくれた友人がいた。

不肖私はそれが誰であつたのか全く記憶にない。後年心当りの人に聞いたが「その人」はまだ見付かかっていない。

それからもう半世紀、いつも気になりながらお礼も云えずに居ることが申し訳なくもあり情けなくもあると思っている。

五十年前の工場体験

3期 溝部 衡志

我々が動員された日本無線とは、私は妙に因縁がある。私の甥が、現在技術屋として勤務しており、二十三年前同僚だったケンウツドの監査役平野氏ほ、日本無線の専務をされた方だった。私が日本無線に『職工』―今はこんな言葉は使わないが―だったと言うと、二人とも一瞬びっくりし、話を聞いて「なんだ」ということになる。

『職工経験』は、その後かなり役立った。はんだ鋸を使ったり、家の電気配線を一寸いじったり、時には鑢を使って細工ができたのもそのお蔭だ。しかし、あの『職工経験』が何だったかは良く分からないままだった。私は、銀行を「卒業」して電子機械メーカーに入って、物作りが少し分かって来るにつれ、あの『職工経験』が何だったかがわかるようになった。

生産部門の月次損益報告書などが廻って来ると、大きな金額の「金型」の償却があり、「治具」「工具」等の計上がある。工場や機械が、大きな設備投資だとす

ると、これらは小さな設備投資であって、これがなければ物は作れない。量産以外にも、研究開発費の中に、研究開発用の「金型」の償却や「治具」「工具」等はいっている。

研究開発用の「金型」「治具」「工具」などは、今でも手作りでやる部分も多い。始めて現場の実際を見に行った時に、我々が昔、日本無線でやっていたことが、これだったのかと改めて発見した思いがした。

我々が配属された真研六課は、私の記憶に誤りなければ、正式には「真空管研究第六課」で航空無線機用の試作真空管開発のための「治具」「工具」の製作工場だった。手作りといっても、今は小型の自動機械を使っていることを、技術経験もない十五、六の中学生に殆ど百%、文字通り手作りでやらせた当時の日本無線は、軍需用無線機の開発が本当にできたのだろう。今や世界に冠たるエレクトロニクス工業の片隅に身をおいて、思う此の頃である。

表彰状と賞杯

3期 蜂須賀 幸三

五十年振りに訪れた当時の学徒動員先である日本無線三鷹製作所は正門左の守衛所、その奥に在る稲荷（？）神社、正面のモルタル造りの本部事務所、さすがに玄関両側の針葉樹は大木となっていたが昔の位置のままであった。

玄関を入り左右に分かれた回廊階段を上って右手の会議室に入ると外に面して縦長の窓。

「建物は昔のままだが此処には始めて上ったナ」の声が出た中で、「確かに此処は見覚えがある」の記憶がよみ返った。（当時は持場である作業場と昼の食堂の往復位で多忙（？）と機密上から殆んどの者は他の職場を覗く事も出来なかった。）

会社古籍中の転勤や家の改築時に学校の成績表等と共に日本無線から何か頂いたものがあつた事を思い出し家に帰ってやっと探し出したのは薄く黄ばんだ一枚の紙片。表彰状である。

文面には「右の者出勤以来ヨク学徒ノ本文ヲ守リ精励恪勤、生産増強ニ寄与スル処大ニシテ衆ノ模範タル・・・」の文面。末尾に取締役社長と並んで右に生

産責任者と併記されてあるのが時代と共に当時のメーカーの在り方を表して居る。当時の一少年がただ毎日休み無く勤めた事丈と思うが、何人が対象となつたのかの記憶もなく、只国民服を着込んだ中込先生が付添つて居られた事が、かすかに部屋の様子と共に思い出された。賞状末尾に印された昭和十九年十二月八日が開戦日を記念して社員一同の鼓舞のためにその日を定め発行したものと思われるが、その満五十年目が間もなくやって来る。

又残念ながら当時の職場を語る写真は全く存在しないが、日産厚生園での集合写真が一枚残って居り、楽しかった一日の出来事がよみがえる。多忙と空襲の合間に開催された学校対抗の運動会のもので、リレーのメンバーの一人として出場し、優勝してアルミ製のカップ（飯炊釜だった様に思うが）を取得した時のもので、どの様に選抜されたか？又相手校の記憶も無く、誰が撮つたものか。勿論カップの行方の知る由もない。当時のもう一つの思い出である。

工場見学・感想記

3期 齋田 秀雄

小生仕事の関係で卒業後社会人になって幾度か日本無線(株)を訪問しておりますが、今回の工場見学会での訪問は全く別でした。

当日は、JRC正門前に初老の年令とは思えぬ程生き生きとした笑顔が揃い、多分当時のことを思い起しながら集ったことと思います。

又、土曜日の休日にも拘らず会社側から取締役人事部長の赤坂様はじめ多くの方々にお出迎え頂き、会社の歴史並びに現況の説明と工場構内の案内をして頂き本当に恐縮致しました。

何んと云つても工場正門前の本館事務棟が全く昔と変わらず歴史と重みのある建家として残っており大変懐しく思いました。そして動員中、毎朝隊を組んで入場したことを思い出しました。

『玄関前の社長(多分中島社長)に向かって・頭―右』の挨拶をして現場に向った事でした。現在、工場敷地内は昔とは変っていることは当然ですが唯一ノコ

ギリ形の屋根の工場が一棟残っており、昔の工場の雰囲気を感じられました。

戦時中の生産品は船舶用無線機とその真空管等の軍需工場でしたが、今や船舶用のみならず陸上用、航空用の機器、システム、更には電子部品からその応用機器、音響機器等、巾広い製品に今後は更に進んだハイテク分野の開発に進まれると思います。

最後に日本無線株式会社の益々の御繁栄を祈念し、工場見学の印象を書き記しました。

わが人生に思うこと

3期 山田 國雄

いづみ会での交流を終え再会を約して別れた後、一人になって改めて来し方五十年の重みに思いを致すのも自分丈ではないと思う。

戦時中は鬼畜といわれた米英人を戦後は進駐軍として迎え、実際に接触するにつれて彼等に対する悪感情や恐怖感が消え失せ自分にはいつしかアメリカン・ドリームの感覚が入り来んでいた。一方幼時から興味の中心であった自動車との関わりを目標として進学、同時に自動車部に所属し授業そちのけで油だらけになつて一日中ガタピシ車の整備に取り組んでいた。その甲斐あつて、その年の夏休みには免許証を取得したが学業継続と生活面の理由から、この免許証を活用し自動車とアメリカン・ドリームを結び付ける最も手っ取り早い手段として進駐軍キャンプの運転手を選択し結局卒業するまで続けてしまった。

卒業後、紆余曲折はあつたにせよ運よく自動車会社に就職でき、更に海外での自動車生産工場の担当にな

り前後三回、通算十七年に及ぶ海外生活を体験してきた。気温摂氏四十七度という気違いじみた暑い最中に長男誕生、駐在手当ではクーラーも買えず夜中でも体温を下げるため水に浸けたり、脱水症から守るため水を大量に飲ませたり塩分を補給すると言ったことや、また標高二千五百米で酸素不足を補うため毎週低地には空気を吸いに行ったり、半年間は霧で太陽が出ず週末にはアンデス山脈を登って雲の上に出て太陽を浴びに行く等、仕事と同時に日本では考えられないような生活環境の厳しさをも存分に味わつて来た。

そしていま、決して平穩ではなかったものの好きであつたがゆえに、やりたいことを精一杯やってきた積りの自分の自動車屋人生もあと半年余で終りを告げる。しかし人間としての義務感からか、未だやらなければならぬやりに残したことがあるような気がしてならない。第二の人生に自分の能力を生かし、納得できることは何かを摸索するこの頃である。

異常な体験

3期 山田 國雄

全く異常な体験をしたものである。夜毎の空襲、熾

れることが出来ない。

烈な対空砲火を防空壕にも入らず屋根に上って見物気分、焼土と化した街角に転がる黒焦げ死体に何の関心もなく、次は自分が死ぬかも知れないとの恐怖心も全く無い。友は次々と軍隊に行く、自分も早くしないと命を捧げる機会に後れをとるのではないかとの焦り、それもこれもその日を以て全てが終わった。八月十五日、暑い日であった。

そして今度は生きるための苦しみが始まった。ズイキ、芋の蔓、道端の雑草、豆の搾り滓、玉蜀黍の芯等々およそ口に出来るものは何んでも食べざるを得なかった。例外なく誰もの胸が洗濯板のようにアバラ骨が浮き出て見える。やつと茶碗で白い御飯が食べられるようになったのは、戦後四年位経ってからのことではなかっただろうか。

この戦中戦後の異常で苦しい時期をいづみ会の友人達と共に過してきたと言う特別の思いを、私は生涯忘

あの一と、このひと

3期 小池 玲爾

蜂須賀兄に原稿を頼まれたものの、古い詰だし、もととボーツと過ごしていたから断片的なものしか浮かんでこない。それでも思い出して書いてみよう。

先生方にはユニークな方が多かったように思えるが、中でも中村先生は若かったし一寸違っていた。違っていたと思ったのは、まず名前、「高樹」というのは現在でこそ普通だが当時では珍しかったように思う。それにモジャモジャ頭（我々が通称していたキャベツ）ズボン吊りに、うつむき加減で体を少し揺すりながら歩く癖と、ややカン高い話し方などなど。戦争が次第に深刻になっていく中でも、あまり大きな変化はなかった。つまり、武張った形ばかりが目立ったなかで、モダンというかりべラルといった雰囲気があったのだろう。勝手な想像だが、中村先生ご自身もさることながら先生のご家庭もそうだったのであろう。また、新婚の時に生徒に冷やかされて（当時の中学生の冷やしなど他愛ないものだったが）顔を赤くしていたのも

育ちの良さだったのではなかったか。では、中村先生の授業の中身はどうだったかということになると、誠に申し訳ないことながらあまりはつきりとは覚えていない。ただ戦後に、国語の文法を英語の文法と比較して説明していて興味深かったことなどは印象に残っている。

印象といえば、自分に比べて大人びた態度というか、雰囲気を持った友人がたくさんいた。

小西安芸生兄は、既に亡くなられてしまったが、そうした一人だった。もちろん、最初の東京空襲でご家族を亡くされて苦労したことも、理由の一つではあるうが物に動じないところがあつたと思う。もつとも、一方ではユーモアがあり、物に動じない態度で純粋な東京弁ではなく朴訥な感じのするアクセントでチョコツと言うことが面白かった。卒業してから、彼が既に東村山の病院に就職していた頃に、東京から自転車で彼の家に遊びにいったことがあつた。彼はいろいろな

話をしていたが、その合間に「東京から自転車でごんな所までやって来るなんて、変わった奴だなア」と何度も感心するのだが、それがチヨットも感心しているように聞こえないのがいかに彼らしくて面白かったことをよく覚えていた。

黒沢敏夫兄は若くして亡くなられたが、小西兄とは違った形の大人びたというか悠々とした態度があったような印象がある。動員先では真研六課の北側の端の仕上げ部門にいて仕事中によく遊び(?)に行ったものだった。社会に出てから、飲むといろいろとよく喋っていたが、東京郵政局の地図係、つまり郵便屋さんが郵便物を届けに行く道の調査で関東一円、伊豆七島をくまなく歩いて、面白い話を、黒い縁の太い眼鏡を指で押し上げながらやや口を尖らせるようにして聞かせてくれて、山歩きや旅行が好きだった自分は羨ましく思ったものだったが、健康だった筈なのに郵政局の運動会かなにかでボツクリと亡くなられてしまった。中学生のときから野球が好きだったから、野球大会での出来事だったかもしれない。注

思い出してみると少しづつ記憶がクリヤーになって

は来るものの、その程度は知れたものだ。小説家でもないから、そんな断片的でしかも同じ事でも友人の間で記憶が違っていてお互いが自説を主張するところあたりが一番よいのだろうと勝手な理屈をつけておしまいにする。

編集者注 黒澤君の死因についてですが、彼は当時東京郵政局局所係で各郵便局の建物管理担当でした。

その頃田園調布局の工事を手掛けていた黒澤君は休みにもかかわらず覚えてたの自転車で現場を見に行つたまま消息不明になりました。結局、近くの病院で亡くなっていました。事故ではなく急病だった(母上談)そうです。責任感の強い、黒澤君らしいお話でした。昭和五十二年三月二十九日のことでした。

思い出二つ

3期 境澤 和男

さいきん、自分の昔のことを思い出すがひどく恥ずかしく感じられて触れたくないという心境になっています。これは私だけのことでしょうか。会報に書くようにお勧めを受け承諾はしたものの、もう何年もサボっていたのはそのためでした。でももう先がない。

幹事諸兄の献身的なお世話に報いるためにも、思い直して責を果たすことにしました。

玉中時代の思い出は数々あり、時が経つにつれて鮮明さを増して来るのですが、如何にせん、そのどれもが断片的で詳しく書くことが出来ません。昨年、我々とピツタリ同世代の妹尾河童氏の「少年H」を読んで、その記憶力と文才に脱帽すると共に、戦中戦後の色々な経験を改めて思い出しました。今回は二つのことを書きたいと思います。誰か私の記憶を補ってくれるといいのですが・・・

その一 工場に出勤すると間もなく、決まって空襲警報、そして退避命令。そんなことが日課のように

繰り返されていたある日、我々が木の陰から見上げていたB29の編隊の中の一機が突然機首を傾けたと思うと、あれよあれよと言う間に地上に向かって真逆さまに落下し始めた。火を噴いていたわけでもなく、また煙も見えない。銀色の機体は全く無傷のまま見る見る大きくなって、まるで模型のように見えた。奇妙に美しいその形が薄い青色の空とともに私の脳裏に焼き付いている。もちろんその後我々は間もなく轟音と共に、かなり近い場所に黒煙が高く立ち昇るのを見たのだが、何とも不思議な光景であった。その時側にいた仲間と何事が話したのは間違いない。誰と一緒にいたか覚えがないが、高射砲の砲弾の破片が機体の急所に命中したのではないかというのが我々の推測であった。その印象が余りに強く、興味をそられたものが、その後私は墜落の現場を見に行っている。私が行った時はすでに騒ぎは収まっていて閑静な住宅街の一角に墜落の直撃を受けた住宅が無残な姿を曝していた。噂

では機体と共に搭乗員の遺体が放置されていたということであった。終戦後、進駐軍が全国のこのような場所を探索調査したというのを何かで知り、私の見たその件がどうなったのか気になったことがあったが、その後の消息は聞かないまま、いつの間にか忘れてしまった。

その二 敗戦後我々は工場から戦災を免れた学校に戻って、毎日毎時間先生方の指示に従って教科書の切り取りや墨塗りをやらされていたのであるが、そんなある日、体操の桑原先生（当時まだ非常にお若く二十歳代に見え、キビキビした動作が印象に残っている）の指揮で我がクラスは校庭に大きな穴を掘り、銃器庫に保管されていた三八式歩兵銃をすべて（すくなくとも一クラス分位の数はあった。）その穴に放りこんで埋めた。残念ながら前後の事情や作業の具体的な有様は全く覚えがない。しかしこの事実だけは消しようもなく記憶に残り続けている。

「少年H」では、四五年十月、連合軍の査察官が日本の警察と一緒にやって来て、トラックに積み込んで持ち去ったとある（下巻、二五七頁）。この件、我々

の学校ではその後どうなったものか、もし何かの事情で発覚せずそのままになったとしたら、今もその場所で残骸が掘り出せるかも知れない。（1998・2・2）

噫！私の玉中

3期 金澤 良樹

浄書者から 金澤君の寄稿は『旧漢字・旧かな遣い』で、特に「原文どおりに」との希望があつたので、ワープロ機能の許す限り忠実に変換してみました。編集会議の際、原文に当用漢字のままの箇所があることに気付いた者がいて、それなら、いつそれも旧漢字にしようと、作業が増えました。ワープロ使用者はお察しでしょうが、機材辞書を第二水準漢字まで呼び出して対応するなど、現代文に較べて数倍の時間を費やしています。手数がかかりましたが、懐かしい回想文だったこともあって、楽しい仕事でした。私達も玉中時代にはこんな書き方をしていたのか、と感慨無量でした。会員諸兄、懐かしくお読みいただけたら浄書者冥利につきる次第です。

一 入試

東京都立玉泉中學校——創立当初は東京府立第十八中學校と謂った由。今はもうない。

これが私の、私たちの母校であり、少年期、青年期前期の私たちの腕白道場だった。

玉中のことは不思議と、入學の前からもう思ひ出がある。帝都線に乗って、久我山驛で降りて、麥畠に沿ひつゝ霜に凍る小徑を踏んで、入學願書を貰ひに行つたのである。茶色で印刷した厚紙だった。印刷物と言へば黒インクのものしか知らなかった私は、茶色の印刷だけで何か此の學校に新鮮さを感じてしまった。さう言へば、私が玉中を受けることにした理由も、その「新しい」と謂ふ處にあつた。それも良い意味ではなくて、悪い意味で。

私は世田谷區にあつた東京市三宿國民學校から玉中に入つた。一緒に入つたのは「は組」の磯田正幸だけである。擔任の訓導は仰言つた、「君は勉強は好いけど、體操は駄目だ。玉泉中學校は間借りの新設校だから、體育の用具は持つてゐないだろう」そこが附け目だ。

體操の試験さへ無ければ君は受かるよ」。さう奨められて玉中にしたのである。通信簿の體操はずっと乙か丙ばかりだったから。

別の日、願書を出しに來た時、受附事務室のカウン

ターで前の人——これは父親が出しに来てゐた——のを見た。保護者の所に西五郎と書いて捺印してあつた。入つてから仲良き友となつた西英夫のだった。入學試験は面接のことしか憶えてゐない。あとから考へて、あれは中込競先生だった。

幾つかの間取りを示した図面を見せ、「何処に電燈を置いたら最も効率良い照明か」といふ様な御質問だった。私が狼狽へて指す指が所定まらなかつたので、ゴメさんの眼が陰しく光つた。私は、吁！不合格だと思つた。

二 入學

入學して最初に驚いたのは、體育館——我々はこれを「修練堂」と呼んでゐた——での朝禮が終つた時だった。「何年何組、前へ進め！」の號令一閃、その學級の者たちが一齊に第一歩を強く勢い良く踏むのである。木張りの床だから「どん！カツカツカ」と響く。「ドン！夏 夏 夏、ドン！夏 夏 夏」——各クラス毎に潮騒の様に退いて行く軍國少年たちの歩調の音が今も耳朶に甦る。國民學校の校庭には無かつた音だ。

「統念」といふのも耳新しい言葉だった。毎朝課業

に入る前に、これと「青少年学徒二賜ハリタル勅語」と謂うのを奉讀させられた。「國本二培ヒ、国力ヲ養ヒ」と言う出だしの文句は未だに腦漿にこびり附いてゐる。その時一番こわいのが通稱クンクン、生物学の長坂享三先生だった。冊子を捧げ持つ腕が真直ぐにのびてゐないとパタツと叩かれて、あの神経質な面長の御顔から罵言が飛んだ。

不思議な言葉の第二は「ジコ・タイソウ」といふ語だった。「自校體操」と解つたのは何年も経つてからだった。のちには高坂寛君たちが喇叭を吹いて、軍國時代もなかなか恰好の良い雰圍氣を作つてくれた。

入學当初の面影で、その後消えたのが何人かある。

私の「い組」で言ふと橋本正之。

「無論さうだよ」と言ふのが口癖だった。板谷といふのが居て、彼が入學試験第一位だと聞いたが、入つてみたら余りバツとした成績でなかつたらしい。紺野太郎——父親が海軍少將で海軍經理學校校長とか聞いた良い奴だった。菅谷昭次——三森紀（兄さんだから）叔父さんだかがイナセな配屬將校中尉だったが、ご本人は甲州の山猿とかかはれてゐた——、坂本のりやす（のりやす）——鈴木雄作（玉電の士、房州千倉に疎開した筈である）、多仁稔——この人は、ある時授業中に便

意を催したのはマア仕方がないが、教室内の悪乗り連中みんなから「藝者に煙管の雨」ならぬトイレット・ペーパーの雨が降って、授業を爆笑に導いた。勿論父^{ちゃん}の授業だったことは間違ひない。

思い出し始めると、疾うの昔に記憶から消え去ってしまった筈の級友たちが走馬燈の様に或ひは亡霊の様に髣髴して来る。その亡霊の様な^{おもかげ} 倂に、背の高い級友で田中秀穂君といふのがゐた。溫和しい人で、私は口を利いたこともなかったが、昭和二十九年洞爺丸が顛覆した時、遭難者の中にこの名前を発見して驚いたことがある。彼なのか。思いなしか船室の群衆の遺影の中にあの長身を見た氣がした。もう止めやう。とめどなく思ひ泛ぶ舊友たちのことは、文中でその都度觸れよう。

三 教室

どうしても真つ先に目に浮かぶのは、先程の「父^{ちゃん}」先生だ。だがこれは私たちが奉つた渾名ではない。數多教師たちの渾名のうちこれだけは吾々悪童どもの作ではなくて、私の記憶に間違ひなければ、隣の「ろ」組の擔任の牧野太郎先生が名付け元である。

「い」組の私どもの悪戯——もう早々から始まつて

ゐた——を見兼ねて、「喃中村（高樹）先生はお前たちのクラスの父^{ちゃん}だからな！」と厳めしく戒めて宜^{のたま}ふた。それが忽ちにして全クラス、全学年に行き亘つたのである。私の荊妻は西高第十期、その兄は第四期、甥は第二十一期だが、訊くと「父^{ちゃん}」の渾名はその頃でも脈々と西高傳統の中に受け継がれて、「皺ぢやん」と俱に生きてゐた由だ。だが生徒たちが「父^{ちゃん}」に諛^{おこ}つた渾名も實はあつたのである。「キャベツ」とか。知る人も少ないだらうが、だいいち廣まることなく終つた。

「父^{ちゃん}」が皆んなの悪戯を誘發したのは、その情けなささうな表情にもあつた。

それに、毎回『廣辭苑』のやうな馬鹿厚い辭書やら何やらを出前持ちの蕎麥屋のやうに掲げ持つて教室に御入來なさる。悪戯坊主どもはもう何かを画策して待つてゐて、何か飛んでもない事が起こりさうな氣配は濃厚に漂つてゐる。机と一體になつた木の椅子の上に膝を屈めて静坐風に坐つてゐる奴がある。そいつの頭だけがびよこんと高い。「父^{ちゃん}」が手を拳にして叩き合わせ乍ら、「おばさんみたいに坐らないで！」と上摺つた聲で注意する。これが爆笑の前哨戦だつた。

聴^{やがて}授業の進行中に「父^{ちゃん}」が黒板に向かつて一生懸命

板書きを始めると、その間四、五秒、悪戯坊主の誰かが突然すつくと立ち上がるや「父」の背中に向かって両腕を伸縮する運動。危^{あや}い瞬間にもう坐^まつてゐて、「父」が向き直った時にはもう何事も無い。たゞ爆笑鳴り止まず、「父」には何事が解らず怪訝な顔で狼狽^{うろたへ}ながら悪童どもを制するが、餘り効果はない。そのうちに此の珍なる曲藝が流行りだして、ひどい時には教師の板書の轉瞬の間に四、五人がプレイを始める始末、私も首謀者か追隨者かだったが、或る時失敗して黒板脇に立たされた。退屈し乍ら立つてゐたが、見るとクラス中の竹刀がきちんと並べて立ててある。これにちよつと指を觸れたから、あとは音をたててドミノ倒れ。教室は又々混亂に陥った。

四 配屬將校

あの頃配屬將校といふ出向^{しゅつかう}軍人の教官が何人もをられた。十中には小田教官といふ寔^{まこと}に嚴しいのがゐて、私たちを慄^{おそ}へあがらせてゐたし、足利といふのもやに反つくり反つた教官もいた。いちばん位が高かつたし御老輩^{ごらうはい}だったのは伊藤少佐で、この人は悪い人ではなかつたが、十中四年生のある生徒を矢たらし褒め上げて、強烈な依怙^{いこ}鼻^{はな}屑^{くせ}をしてゐた。伊藤少佐の口

癖は、拳を振り上げて「恐いところの・・・云云」といふ句で、いつも聲を張りあげて亢奮した口調で「至誠」を説いてをられた。いつの間にか御姿が見えなくなつたと思つてゐたら、敗戦後知つたところでは、何でも南方の捕虜收容所長として轉出され、それが禍いして現地でC級戦犯として刑死されたとか聞いた。御冥福を祈るばかりである。一方純情苛烈にマインドコントロールされてゐた前述の生徒は——朝禮臺上で鯨鯨張つてゐた小柄な姿が今でも髣髴するが——海軍兵學校へ進まれた由。朝禮臺といふいつも思ひ出すのが、よく週番長をやつてゐた十中の上級生。少年の私はこの時初めて「上番」「下番^か」といふ、あの頃は不思議に響いた言葉を覺えた。伊藤教官の向ふを張つた譯では無からうが、先きの小田中尉は私たちに「純一無雜」といふ事を御説法なさつた。ところが恐怖の此のビンタ魔教官殿は國が敗るるや一轉御郷里の中學校國語教員に變身（既に姓も易へてをられたが）、亜いで土地の中學校長に迄榮進なさつたとか。知つた時には、あらためて社稷の成り下がり^{なりくだがり}を私は痛感したものだつた。

前回に觸れたお洒落めいてゐるだけで無害だつた三森中尉や、直きに去られた好々爺の佐藤准尉のやうな

例もあるが、概して十中の配屬將校が異常な、或ひは昂ぶった軍人たちだったのとは對蹠的に、私たちの幸せは、玉中の配屬將校は誰方も實に温厚な、人情深い教官ばかりだったことである。輿教官、森田教官、岡村兵長、稲垣少尉等々――。

私は玉中の配屬將校が手を上げて生徒を殴ったといふ記憶を持つてゐない。あの小田教官などは、不動の姿勢の時に眼玉が動いたと謂ふだけで、ツカツカと寄つて來ては鬢打をくれたといふのに。また「菱花」の號が御自慢の、書道の山田政喜先生も、軍人でもないのに矢鱈とビンタした。

森田教官は御年配といふこともあつたらうが優しく、或るとき教練半ばに私たちを暫し日向ぼっこをさせて下さつたし、軍事教練中に立ち小便に抜け出した渾名ダツクの中澤昭一と渾名金魚の河田宗達とを怒りもせず、呆れた面持ちをなさつただけだった。岡村「兵長」に至つては軍事教練どころか詩吟を唸つて私たちにも練習させる始末。ほかの授業の記憶は薄れても、「サンセンソーモクウ……セエバア……」の突拍子もない怒鳴りを忘れる人は、我がクラスメートにはあるまい。私たちは同教官を輕んじて「兵長」と呼んでゐたが、山内彬正君の父上が

閣下（少將以上）だと聞かされて、「兵長」はビビつてゐた。でも埼玉の田舎丸出しの好人物で、この人も生徒を殴つたりなどはしなかった。心持ち背中を丸めて歩く「兵長」が懐しい。

私たちを最後に教練してくれたのは稲垣少尉だが、それが何と最早自校の校庭ではなくて、勤勞動員先きの「日本無線」から程近い明星學園の敷地であった。「眞研六課」や「硝研」で働かされて、トンと學業など何もやらされてゐない私たちに與へられた唯一の授業が『學校教練』だったとは。而も背中に彈藥函を背負つてゐると假定して、駆けて行つて敵戰車の前に伏す、いや轢かれる、といふ訓練である。この一事だけはどんなことがあつても私たち軍國少年の記録の中に残してをいて、平和呆けた現今及び後世に語り繼がねばならない。「一人克く一臺の戰車を殲せ」といふ發想である。實際、軍が呼號してゐた本土決戦に進んでゐたら、私たち學徒は少年兵として此の様に「草す」ことになつてゐたのである。戰爭を知らぬ今の若者どもが劇畫で空想してゐる様な戦闘ではない。敗色濃い日々の苛烈な教練に在つても、若い稲垣少尉亦私たちにビンタを食らはすやうな人ではなかった。

然し此の様に嚴しい軍國主義下にあつても、私たち

の少年時代は意外と明るかった。お國に盡くす、これが當然と思ひ、辛いとは思はなかった。民主主義とは何んだらう。人權至上の今日に於いて、そして能力の格差が露わになることを怖れては横並び平等主義を無上とする今日の「事勿れ」學校教育に於いて、却つて個人は偏差値とかの物指しによつて輪切りにされ、校庭には苛めが蔓り、少年殺人が絶えない。心の張つた戦争中を知らぬ輕佻な今日人は、想像で描いて軍國主義時代を定めし暗かつた時代だと決めて掛かつてゐる。だが真綿で首を締められるやうな經濟優先の管理社会・管理教育よりは、逆説的乍ら私たちの軍國主義少年時代の方が遙かに明るく、カラツとしてゐた様に私には思はれる。豊饒・浮薄の今日よりも、貧しく虚飾の無い昔の日本が頻りに懷しまれるのである。

五 先生点描 (い)

話の節々に「・・・ネエ」を連發なさるので、ゴメさんの漢文で習ひ覺えた「寧靜子」(本當は「寧靜子曰く云々」と續く發句だ)の渾名が早速この先生に奉られた。常時浦和市からお通いの都筑修一先生。諄々と「アリストテレスはねエ」と御説きになる難有き修身講話の先生かと思つてゐたら、翌年は富士見ヶ丘の

農場で堆肥作りの『作業』教科の百姓先生。その時「テール天井」といふ摩訶不思議なる言葉に接した。一同疲れたので小休止、「テール天井やるだ」と宜^{のたまふ}て立ち姿の儘双手を天高く突き上げて、グルリと一回轉、二回轉。大空を掃く仕草である。驚いたな、もう。でも素晴らしい健康體操だと思ふ。

然し堆肥作りは、またその翌年にお見えになつた梅野先生の方が本格的だつた。それはさうだろつ、何しろ都立園藝から見えた先生だと聞いてゐた。口を絶えずモグモグさせてゐるので、忽ち「もぐ」といふ渾名になつた。「本格的」といふことは怖い事で此の先生、積み上げて行く藁の層の間に本當の糞を撒かせるのである。その為に私たち生徒は、エラい目に遭つてしまつた。両端に肥えたごを吊した天秤を二人して擔いで、富士見ヶ丘の畠道からの長い長い道のりを、本校舎を大迂回して裏手便所の便壺から臭い黄金液を汲み取り、二往復・三往復させられた。ピチャピチャと悪臭の汁が樽桶から撥ね出る。あゝ堪らなかつた。驚いたことにこの「モグチ」が或る時、定期試験の『英語』の監督に現れて、「君らに答を教へてやる」と言ひざま黒板に何か精一杯に書き出した。「獨逸語だよ。これが英語の問題の答だ。解るやつは百點だ

よ」と得意氣だった。不思議なお爺さんだった。農學の實力はあったのかも知れない。

六 通 學

帝都線——今は「井の頭線」と呼び名まで變つてしまつたが、かなりの玉中生はこれを通つてゐたと思ふ。尤も昭和二十年五月二十五日の空襲で永福町の車庫が焼けてしまつて車輛も少なくなり、惨めな路線に成り果ててしまつたので、私は敗戦の學舎に戻つた頃には西荻からの省線に切り換へてしまつてゐた。そこでは梶山晋君と屢々歸路を共にしたことが、思ひ出される。いま「呼び名まで變つてしまつた」と言つたがそれ以上に、沿線の景觀の變り態^{さま}は寔に凄じい有様で、昔を偲ばせる俳の名残は何もない。「駒場」はその名の通りに、私はホヤホヤの通學生當初あの邊りの車窓から、草を食む三々五々の牛どもを見た微かな記憶がある。流石にその風景は、昭和十七年でも須臾にして消えたが。

明大前の「制限二〇！」を出て間もなく、永福町への途中に小川があつて歸路の車中ではよく二宮裕や西村卓一郎らの茶目グループが豫め永福町驛で拾つてをいた小石を爆撃^{さな}恰らに、走る車窓から小川に命中さ

せやうと懸命になつてゐた姿を、先日何十年ぶりかで「井の頭線」に乗つた折に髣髴したが、肝腎の小川は、びつしりと密集した家屋の蔭に隠れて、牧歌的な往時の片鱗すらなかつた。

玉葱の頭のやうに頂點を尖らせた「永福町」電車區のドームも消え失せて、ただノツペラ坊のバス溜りに變身してゐたのも無惨な驚きだった。永福町電車區と言へば、上り電車にそこから交代して乗り込む高橋と言つた運轉手の面貌が思ひ出される。我々は「ガマさん」と呼んでゐた。「出發進行！」と張り切つた^{だみこえこれだか}濁聲聲高にノツチを入れる。今は我が泉會會長なる長身の針谷和夫少年が類稀なる電車氣違ひで、どう「ガマ」を籠絡したのは判らないが、いつの間にか禁制の運轉室に入り込んでゐるのを走る車席で目撃したのも一再ならずだった。

時には私たちがみたいな幼なつばい連中に話し掛けて来る車掌も居て、或る時とんでもない怖しい自慢話を聴かされた。鈴木といふ名札をつけた未だ紅顔の若僧車掌だったが、中支戦線からの除隊と覺しく、戦地での慰みに、捕まへた中国人女性に行つた悪業を得々と喋るヤツがゐた。純情おくての私にはそんな事は想像外のこともあつたし、だいいち可能かどうかの判断

もつかない。不快な一事として耳朶から棄て去った筈だったが、戦後南京大虐殺の疑惑が囂しくなった頃遽かに思ひ出し、結果的にその皇軍大犯罪を今日私が確信する根據になってしまった。

朝の帝都線は、私には駆け込みの連日だった。澁谷驛七時三十六分だったら成功だが――そしてその電車で行くと東松原のプラットフォームに猪狩君の姿が見えるのが定番だったが――、次の四十八分だとアウトになる。久我山驛からの坂道を上り、木立ちや麥畠を直ひたし走り続けるといつも、脚のお悪い十中の先生に追ひ附くのだった。これは遅刻の朝、定刻内の時は、自然と隊伍を組んでの整列登校だった。當時のヨタったのは、右肩から掛ける白ズツクの通學鞆を思ひ切り長く垂らし、裾高に穿いたズボンの折り返しでゲートルを短く匿すといふものだったが、流石に十中や玉中の上級生たちにはそんな恰好の者は居なかった。

同じく澁谷から出る東横線――そちらは緑塗装だが――に似せて、だがあんなに大仰な函のやうなものでない小さな目廂を運轉窓正面に突出させた茶色の車體――。私は少年の日々に通學した「過去の」帝都線を未だにこよなく追懷してゐる。

七 先生点描（ろ）

世の中は軍國一色だといふのに私たちの學舎には、意外にも軍國を突き撥ねるハイカラな、文弱な先生方が何人もゐらっしゃった。

抑々擔任の「父」がさうだったが、貝増善次郎といふ音樂の先生が傑出してゐた。威嚴のない「ソヤロ」といふ言葉で少々輕かったが、私はこの先生の中に却つて英語の教師にもない西洋的なものを感じ取った。「新しき帽子新しき徽章。今日よりは此處に楽しく學ぶよ」とか「籠の小鳥、何を啼くか終日。友達戀ひて、野山を戀ひて淋しさを」、「友と連れ遠近、花に遊ぶ胡蝶よ。葉袖輕く觸れ合ふて、蜜に酔ひてひらひら」、「國の中の大御國、天地と共に實祚は榮え、月日と俱に御代は進む」などが授業で憶えた主な唱歌だが、「神進びて聳り立つ、富士の高嶺。頂に雪の在るよし、山の尾に雲の在るよし」に至つて我々生徒はこれを、「頂に皺の有るヨーンし」と變へてしまった。岡田信吉先生を茶化した次第だが、貝増善次郎には勿論何の惡戯か解らなかつたらう。然しこんな長閑な音樂の授業も程なく何も歌はなくなり、毎回毎回がピアノの三鍵打、即ちH・D・G、C・F・A、E・G・Cなどアメリカ爆

撃機のエンジン音の聴き分け練習などといふ不粋なものになって行つた。そのうちに、善チヤンは「日響」のヴィオラ奏者に轉出なさつたとかの噂を耳にしたが、それが勤勞動員前のことだつたのか戦後になつてからの事だつたのか、私には茫漠としてゐる。

ただ、先生は矢張り眞物ほんものだつたのだ、偉かつたのだといふ感懐が残るのみである。

だが弱々しく見えた先生がたの第一位は何といつても多分ポリンだらう。それも情けない程に。化学御擔當の枚本金次郎先生――「メスシリンダー・・・、ネスレル試薬・・・」などと司祭の如く宜のたまふ蚊細い聲が私の鼓膜に残つてゐる。この先生、私たちが勤勞動員に出拂つたあと應召なさつたらしく、敗戦の學舎で授業が再開された時、先生が弱兵として如何に軍隊で不條理に苛め抜かれたかを痛々しく切々と訴へてをられた。生徒たちは誰も耳を藉してゐなかつたやうだが。そしてポリンとは全く對照的に佐藤晃といふ見馴れぬ先生が――多分物理を擔當に教室に見えたのだと記憶するが――授業はそつちのけで我が海軍の零式戰闘機ゼロ（先生の口調では終始「ゼロファイター」だつたが）が如何に優秀であつたかを熱っぽく蛇々と講釋なさつた。物理學は何を教はつたのか、皆目憶えてゐな

い。因みに、戦時下軍艦マニ狂の横山新次郎君の薰陶で周邊の級友たちは米艦・米機に就いては可成り通じたものだつたが、肝腎の友軍機に就いては却つて當時の一般は何も知らなかつたのではなからうか。

下級學年の頃と敗戦を隔てた動員復歸後とは此のやうに、私たち生徒同志の間でも消えた者（疎開）・現れた者（復員）が激しかつたが先生がたも同様で、牧野先生がいつしか去られて歴史は田口先生に、體操はメンちゃん（竹内先生）から「輕業師」の桑原先生に、圖畫は「挨拶しませうオ」の瀧澤清先生から關口ゴーギヤンへといふ風に知らぬ間に風景がすっかり變つてゐたのである。

八 勤勞動員

いつだつたか一夕、舊交ある玉中四人が落ち合つてビールで久闊を叙したことがあつたが、その中のひとり濱本昭郎君が、「僕は戦争末期に知立ちりふに疎開・轉校したんだが、轉校なんてものぢやない。日本無線から愛知縣の別の工場に職場を易かへただけの話さ」と笑つたのが妙に生々しく耳に残つた。實際私たちの螢雪回顧は、學窓の思ひ出などはちつぽけな部分で、青春前期の大切な日々が工場といふ無機質な空間で費やされ

たのだった。

なのに「無線」の日々が未だに私たちの友情の瀬になっ
てゐる。

抑々勤勞動員は、その最初は私の記憶では玉中三年
生になった時、帝都線高井戸驛——その名の通り高い
段々の上にあつたが——北外れの高井戸第一小學校に
赴いて、大量の罐詰運びかなんかをやらされた事だつ
た氣がする。その近所に石橋昭彦君や江口幸一君（故
人）の家があつた、と思ふ。その暫く後で本格的な學
徒動員が始まつたのだから、中學でフルに勉強したの
はたつた二年生迄だつたのだ。

「無線」に移つてからは、私たち同期の櫻は職場や
工場棟ごとに仲間同士の體験が違つてしまつた。過半
の「る組」や「は組」は一つ向ふの三二六棟「眞研六
課」に行つてしまつたが、私たち「い組」は三一五棟
で、中でも私は十數人の友と共にSTEM屋になつた。

大栗・濱本・立田諸兄など今日に続く續く友情は、
STEM屋として一層培われた次第。小林路也といふ壽
司職人徴用の若やいだ班長が剩餘な男だつたので、職
場は明るかつた。尤も守山とか言ふちよつと惡めいた
おつかな風の哥兄さんもゐたが、私たちとは全く關係
なかつた。他方「茂木ヤン」と呼ばれた年長の工員は、

私たち動員學徒に大變面倒見が良かつた。秋谷さんと
いふ些かインテリめいた工員は、己れを「自分は、自
分は、」と呼ぶ軍隊調の喋り方をした。矢島といふ日
本名を持つ無口の半島人——當時はさういふ呼び方を
した——もゐた。年若いのは殆どが長野縣からの集團
的徴用工で、硝子管を切つてゐた少女たちもさうだつ
た。鋸屋根の廣大な棟内を仕切つた向ふには「無線
班」があつて、女子挺身隊員らが働いてゐた。

作業の號令は萬事海軍調で、長野縣徴用の伊藤とい
ふ長が「作業やめ用意五分前！」などと張り切つた聲
を響かせてゐた。腰塚といふ制服の海軍少尉が時々見
廻りに來て、或る時STEM（茎の意。小型受信管エ
イコン（團栗）の受け底）のチップを逆さまに上に保持
する改良を工夫したが、その程度が新機軸なので、私
は却つて自分たちが従事してゐる兵器生産のチャチさ
に不安を覺えた。その下の受け臺に載せられた硝子の
切り輪の中に、ジューメツト線といふ電導線を何本かづ
つ立て並べるのが私たちの仕事だつたのだ。

STEM班は驪て別の木造建物に移動した。そこでは
私は小泉剛や足立啓・林武智らの諸士と組むことに
なつて、初めて三君らと親交を得た。

林ムチは感激家で、情熱を罩めて私に色々な事を語

ってくれた。特に、廣澤虎造の『五百石船』を唸るのが得意で、私は彼によって初めて浪花節といふものを知った。氣の毒にも、事もあらうに樺太に疎開して、敗戦後の蘇聯領下で嘸かし苦しい日々を送つてゐるのではないか、とずっと側隠の情を持ち續けてゐたが嘗て名簿で福島縣田村郡に引き揚げて來られたことを知つて、やつと安堵した。一番會ひたい舊友が彼と先きの小泉君であるが、後者には往年不圖熱海驛で見懸けたことがあるのに聲を掛けずに見失つてしまったことが悔やまれてならない。

いつ頃からか私も眞研六課の棟に持場が變り、そこでは梶山君と作業を俱にした。排氣室では大曾根昇君が送信管NF2を扱つてゐた。また野俣富彌君が手遊すまびに小さな硝子細工を幾つか作つてくれたりした。聽て屢々B29の晝間大空襲があるやうになり、空襲警報が鳴ると私は必ず将棋の駒と盤の板とを携へて防空壕に急ぎ、壕内で守屋俊和君に手合せをして貰ふので空襲が楽しみとなつた。低空で飛來する怖しいけれども恰好の良いP51も見だし、或る時B29が大翼を左右に振り乍らゆつくりと墜落して行くのを眺めた時には、飛行機も木の葉のように舞ひ落ちるものなのか、と仰天した。即刻數人の友らと墜落現場を探しに駆け

つけ、燃え燦るB29を此の目で見たが、石油混りのあの何とも形容し難い焦げ臭いは、鼻を衝いて今日猶忘れずに憶えてゐる。女の飛行士も居たと聞いて、日本軍にはあり得ないだけに再度吃驚した。「鍾馗」が體當りで落としたらしいが、友軍機の墜落現場に駆けつけた者たちはこつぴどく叱られた、と後刻聞いた。

終戦の玉音放送を聴いたのは、更に配置換へされて硝子研究室に居た時だった。何度か職場をずらかつて歸宅したのがばれてゴメさんに諄々と説諭され、暫らくの日々反省日誌を書かされたが、脱走の罰——ゴメさんは否と注記下さつたが——として其處「ガラ研」に移されたのだつた。とは言つても、ガラ研——種々の硝子棒を加熱装置に入れて膨張測定をする——の方が是れ迄の工員たちとの作業現場より遙かに高級だし、第一、電氣工專や日本女子大の兄上姉上學生さんたちとだけの環境である。上々だった。我々は外ほかに大曲、江口、西垣、武部の面々だった。西垣修君は空き時間に偶に空地で遊ぶ海戦ごっこ（水雷艦隊）で實に恰好よく走る御仁だった。

電氣工專の人びとは皆親切だったが、中に自分で「硝研大居士」の位牌を作つて供へてゐる人が居た。この人はあの日の正午、雑音で全く聴き取り難い玉音

放送のあと、「あゝ良かった！戦争に負けて之で日本は良い國になるよ」と私たちに語ったので、ラジオの内容もよく理解できなかった私は、何を此の非国民めが！と今迄の尊敬が逆轉して憤りを覺えた。遙か後日になって熟々思えば、少年期から一途に國策マインドコントロールされ續けて來た私たち軍國少國民と數歳年長のガラ研居士氏とは、僅かだけ年齒が上に突き出てゐただけで是れ程も理性や批判精神や世界觀が長じてゐたのか、と愕然たる思ひに打たれたのであつた。然しそれだけではない。反證が數週後に起こる。「鬼畜米英」を吹き込まれて單純に軍國少年化し、敗戦後も猶抗米的衿持に呪縛されてゐた私たち凡庸なる級友らに對して、あの關矢孫信君の逆舌^{バラドクス}「アメリカ野郎どもには思ふさま媚びて、阿^{おもね}つて安心させた方がいいんだよ。そのあと引つ繰り返すのさ」と。吁、私なんかとは頭の質が違ふんだ、と敬仰を新にした。ジエレーシヨンの差ではない。大人びてゐた關矢君は今どうしてゐるのか。東大からゼネラル物産に行った筈だが。

話を戻すと、各職場で聴いた意味模糊としたラジオの内容を、改めて私たち全員を集めて説明し訓諭なさつたのが土屋先生だつた。その場所は眞研六課の裏

手に離れた小高い土山の所で、其處には足下に水溜りの様な池があつてこの連中が拵へたのか丸太を組んだ筏まであり、それ迄私たちは暇を盗んでは三々伍々筏遊びに來てゐた。それに跳び乗り損なつて衣^きの着の儘池の中を、皆なに囃され乍ら泳ぎ回つた厭な思ひ出が私にはあつた場所である。ノンカの訓示のあと眞研六課の棟に戻つたら、いつもドビンちゃんと渾名されてゐた工員が敗戦の報に興奮してゐて私たちに、これから相模灣に急行し、艇を連ねて米軍に體當りしよう杯と激した。そんな八月十五日だつた。

九 先生寸描（は）

いま述べた土屋長松先生。物理學校御卒業の數學擔任。私たちは二年生になつて掛谷宗一著の『代數學』を繙きつつ先生の御指南を受けた。手釋^{ほど}きは兎も角、茶色表紙の良い教科書だつた。佐渡の訛りか、「・・・するのンかア？」と問ひなさるので「ノンカ」の渾名が附いた。外^{ほか}に御口癖に、私たちの怠慢を御叱りの時「そんな事なら学校罷めてさんギョウせんシになつてしまえ」と謂うのがあつた。ものゝ見事に私たちは全員、さきほど見たやうに日本無線の産業戰士になつてしまつた譯である。先生は黒い上ツ張りを

靡かせて、革底の硬い校内履きをドタン、ドタンとだらし無く木張りの廊下に音立て、教室に御入來なさる。或る時その廊下を、「何だ、未だあんな所をやつてゐるのか」と覗き見しつつ聲高かに喋り合ひ乍ら歩き去る十中生がゐた。長松さんの怒るまいことが——忽ち廊下に素つ飛んで行つて彼らで大喝。私たちにも居候少數民のコンプレックスはあつたが、眞に長松先生は玉中愛校心の権化^{ごんげ}だった。教頭の藤本ドンちゃんにもそれが見られたが。私は頹齡^{たいれい}近くなつて、任地上越教育大卒の大學院熱烈志望者——生憎中止なさつたが——の或る中年女性の進學相談を受け、當人が土屋先生玉中辭任後の佐渡兩津高校最初の教へ子だったことに談到り、奇縁に驚いたことがある。勿論我々同様土屋先生禮賛者だった。序でに、奇縁と迄は行かないが曩^{さき}の日本無縁に遡ると、しやくれ顔の安岡部長や無愛想な濱田課長らの知人とも私は嘗て高知在任中に知己を得たことがある。兩者とも高知縣出身の謂はゞ「星」で、さう言えば両姓とも高知縣には多い。世の中は狭いと申すべきか。

十 制服

戦後讚美歌・舊二〇二番でアイザック・ウォッツの作曲（一七一九年）と知つたが、貝増善次郎先生への恩ひ出と共に「新しき帽子、新しき徽章・」の新訂中學校唱歌の一節の通り、私は——或いは私たちは——黒い學帽や黒い詰襟・長ズボン（小學生の時は半ズボンだったから）の制服を期待して玉泉中學校に入つて來たのに、待つてゐたものはカーキ色の戦闘帽——それも上級生たちのもののやうな上品な纖維の物ではなくて、最早厚ぼつたい粗地のボテボテしたものとして同じくカーキ色の上下制服だった。片方の肩から懸けおろす通學鞆^{ふた}にしてからが、真白とは言へない粗目の布地で、蓋布^{ふた}の左手隅に黒く菊梅の意匠の校章が刺繍してあるのが纔かに慰めだった。おまけに、これも粗布のゲートルを装着して毎日の通學姿となる。夢が少し潰れたやうな氣がした。奉拝行軍（五月二十二日）の折などに垂佩する軍事教練用小囊^{のう}（現今なら差し詰め女の子のポシェット）が附いて、これで軍國中學生の制服四点セットとなる。

戦時教育下には教科の名稱にも妙なのが出來て、それが『物象』要するに物理と化学とを統合した心算^{つもり}なのだらう。（知的體系として全く異質の哲學・倫理や

經濟や地理などを一緒に「社會科」などとしてゐる今日の愚よりはましかも知れないが。長坂クンクン先生は御自分の教科『生物』といふ呼稱を罵つてさへをられた。

学級クラスの名稱も敵性語を排するつもりか「い組」・「ろ組」・「は組」。この點は一足早く軍狂時代の前に發足した十中が羨しかった。ところが妙なもので、私は今日ずっと私信の便箋に番號を振らず、頁附けを「い・ろ・は・・・」で勵行してゐる。少年時の洗脳は怖いものである。

二階の教室の廊下を鉤の手に曲つて行くと、廊下の左側にへばりついて小さな賣店があつた。當時もう大した學用品は品薄だったが、「い」組の襟章はそこで買ったし、今でも私の古物庫の中には、その賣店で買った用器画製圖帳みたいな一冊が現存している。何よりも、店番が大變氣心の好い半島人の哥兄おにいちゃんで、濁音が半濁になつてしまふ珍日本語が楽しみで、買物もないのによく賣店素見ひやかしに寄つたものだ。

割り当てに與る制服は益々粗悪なものになつて行つた。その最後の極はもう、今日想像を絶するひどい代物しろで、メリケン粉の袋を茶色く染めて縫裁したもので、透かさなくとも処どころに粉袋時代のマークや印刷字

が黒く浮いて見えた。釦がまた何と瀬戸物！現在まで藏つてあつたら、博物館ものだらう。それを着て皆が工場往還していた姿が目に見え、

舊蘭印占領統治の軍屬（通譯）から復歸して來られ、私たちに『ロビンソン・クルウソー』副讀本を聊か獨特の抑揚で教へて下さつた前田松壽先生が最初に私の眼を驚かせたのは、寔に浅ましい嘶ながら、ピカピカに光つた真新しい橙褐色の編上げ靴だった。貧しい銃後の生活からは想像も出来ない様な占領地軍政の豊かさが目に見え、印象を與へた。登校靴と言へば、一度どうしたことが昭和十九年にもなつて私は當時としては珍しいほど立派な、ちゃんとした黒皮短靴が學校からの——と言つても日本無線の工場に居てだ——配給で當つて、嬉々としてそれを履いて「豫科兵」の第二次選衡に江田島まで、大栗君たちと一行を組んで中央本線經由の遠い旅をしたことがある。當時はもう東海道本線は空襲で危なかつたのだらう。戦局が進むとその後はもう登校靴の配給は、指の岐われた護謨底こむの地下足袋となつてしまつた。敗戦後勤勞動員から學窓に戻つて校庭のプール前で撮つた組クラスごとの集合寫真には級友たちの、こんな土方どかためいた履物の足が何本も見えている。こんな遣り繰りの服装で終つた

私たちの中學生時代だったが、私は特に貧しく見えたらしく、「シンク」(辛苦?) 杯といふ難有からぬ渾名が附いてしまったのだった。

十一 先生寸措 (に)

先生がたの中には「活力」御常連が何人がいらつしやつて、皺チヤン(故人)や河野(中川)先生や見上先生(故人)など獨身の御數人は久我山驛前の「活力食堂」を晝食の卓としてをられた。毎度打ち揃つて御歸館のお姿を一年い組の腕白坊主どもが、二階の窓から見おろしては燥ぐのである。中でもおつちよこちよいの私は或時、「見上クーン!」と呼び懸けたらどうだろう、と提案して、これ亦輕率な數人が忽ち附和雷同し聲を合せて二階から本當に呼び懸けてしまった。聽て憤怒の相物凄く、教室に駆けあがつて來られた見上先生に一同ボカリツと先生常習の野蠻な長棒で強か頭の天邊を殴られ、そのまゝ命ぜられて職員室前にずらりと立ち並ばされた。あとを引き取つて下さった中込競先生に懇々と諭され、「お前はもう國民學校に戻れ」と言はれた時に初めて泪が泛んだ。

その見上先生の御出身の立正大學——先生は舊・專

門部だが——に今、私が教へる身にならうとは。

私たちが玉泉中に入つた最初は、地理の授業は小山佐吉先生だった。見上先生とは全く異なる地味な、温厚な紳士だった。物静かな御口調で樺太の地誌を教へて下さつた記憶が残つてゐる。程なく信州佐久の方に轉出なさつた。

そのあと見えたのが見上先生で、何でも臺灣の四方八方が御自慢の様だった。残念ながら「い組」は前述の「見上クーン事件」が祟つてその儀に及んで戴けなかった。

それ以後今日まで舊「い組」の舊友たちには申し譯なかった、とずつと思つてゐる。何を教はつたのかそつちの方は完で記憶も留めていないが、先生の授業には飛んでもない禍いの副産物があつた。『東京南西部』以下數葉の「參謀本部五萬分の一」地圖に邑域は赤、水田は緑、畠は黄色、桑畑は橙色などと實に微細な目數に色を塗つて分布圖に仕上げるのだが、この課業が私を近視にしてしまった。小學校までは視力が一五だつたのに。中途半端に終つた恨みの地圖は、探せば未だ納戸にある。

十二 活力食堂

前述した「活力食堂」跡に昨年行ってみた。六月二十四日、「玉中会」に出て欲しいと言われていたので久我山驛に降り立ったからである。第三回「いづみ会」（昭和五十九年）の折、昔を偲んで「活力食堂」*で開催と案内されていたが、その頃私は新潟縣に赴任して（上越教育大学）遠路参会できず、心残りとなっていた。それと覚しき陋亭はラーメン屋「唐來軒」と看板が出ているけれど閉^{しま}っている、薄汚い階段を上がってみたら二階は居住部分となっていて、お姐^{かみ}らしき女が顔を出した。胡散臭^{かみ}そうな視線で、「そう言えば爺さんが『活力食堂』とかをやっていた」との返事。今は「唐來軒」も廃業したと言う。そうならば第三回「いづみ会」は何処でやったのか。少年期懐かしき昔の悌は、日本中とこ限なくもうどこにも無い。豈、ご自慢の都立西高新ビル校舎のみならんや。

——玉中の よすが 氣^けもなく 西高舎——

（浄書者から）ご自慢「同日金澤さんが西高新校舎を訪れた際、案内してくれた同高の英語教師は、金澤さんが懐舊の念止みがたく、何処かに昔の悌がないかと探したけれど何ひとつ見附けられなくて慥然としていたのですが、そんな氣持には氣附かず（当たり前のことですが）専ら近代的設備がご自慢であつたそうです。

*「活力食堂」のあつたと思われる処の料理屋「松栄」で開催されたもの（注記）

防衛宿直二題

3期 佐藤 清一郎

「いづみ会報」第五号の境澤和男君の『思い出二つ』を拝見して、私にも似た様な記憶を思い出した。

玉中の西側にB29が墜落

日本無線に勤労働員中、当番で母校の防衛宿直に吉田総一郎君と衛生室で一夜を共にしたことがある。夜中に警戒警報が出、下番直前に空襲警報が出て、そのまま学校に残り、外庭で真つ青な青空を監視していた。その中、西から東へB29の大編隊が続々と飛来して来たので、校庭の東側の鉄棒傍にあった防空壕の入り口に待機して空を見守っていた。すると一機が心もち編隊から遅れ出し、更に高度を下げはじめ、煙も出さずに旋回し始めた（旋回直径五百メートル位か）。

二回位旋回すると機首が東に翼の右端が学校の真上となり、胴体の爆弾倉がはつきり開いているのが見えた。この次ぎの旋回では間違いなく学校に落ちると覚悟していたら、西の木陰に姿を消した。「それっ」とばかりに吉田君と墜落した方向（高井戸第二国民学校付近）に走った。戦災で日記が焼失したため、後日出入りの業者に聞いたところ二十年四月だった由。

B29は林の中の茅葺き農家の屋根を掠めて納屋の上に落ちていた。B29の垂直尾翼の上端は農家の屋根より遙かに高く、B29の大きさに改めて驚いた。

しかし墜落しても火も噴かずであったが、水平尾翼が千切れて無く、後尾銃座は墜落の時に完全に潰れていた。その銃座付近から四方八方に無数の白煙を曳きながら火花の様に銃弾が飛び散っていた。それを拾おうと近づくと軍隊経験のありそうな警防団員が「危ないから引き下がり」と引き留められた。それでは機体の方を見ようとしたら、憲兵が到着し、団員に立ち入り禁止の荒縄を張らせて居り、憲兵の来る早さに驚いたものだった。

その時、壊れた真空管の破片を見つけて拾い、日本無線に持ち帰ろうとしたが、警防団員に元の場所に引き戻された。バルブ（真空管の硝子）の厚さや代用線（バルブの中に通す導線）の太さが倍以上の径で、これでは多少の衝撃でも故障しないのではないかと思つた。それは以前私は、「は」組で製作三課にあつて、真空管FM2Aの「封じ」工程を担当していたが、代

用線の封じの手作業では、ガスバーナーの当て方が悪いと、真空管が変形したり代用線が焼き切れることがあった事を思い出す。

間近に見た飛翔中の戦闘機「飛燕」

勤労動員前の事だったので、多分二年生の冬頃から、皆が三鷹台の立教女学院の警備やら高井戸の二、三の小学校へ、勤労奉仕に派遣されるようになった。私は吉祥寺駅から歩いて二十分位の所にある善福寺浄水場に何回か派遣された。灯火管制の夜が更けて狭い事務室の机上を片付けて巻脚絆、編上靴を着用の俵、寝台がわりに寝たが固くて寝辛かった。浄水場の係員が事務室の片隅に大きなごつつい電気ストーブを一晚中点けてくれた。始めは分からなかったが、昼夜を分かつたに浄水ポンプが運転する音が腹の底に響く低音の振動であった。何回か派遣されると周り一面畠の浄水場の周囲も分かる様になり、夜は善福寺池の森の梟の鳴き声が淋しく聞こえたり、朝は郭公の鳴き声が周辺に聞こえたりしていた。

ある日、直径三十米以上もある浄水池の周囲の洗い砂の山に胡麻塩の様に沢山の黒い斑点があり、よく見たら小指の爪先程の蛙の亡骸だった。係員の話では、

「夜中に這上がった河鹿が昼間のねつすなで干乾になったのだろう」と砂を篩っていた。水深一米程の水面上は空の雲が映るほど静かで水底の砂が良く見えていたので、手で掬おうと腹這いになったら係員に制止された（余談だがこの係員から後で工業専門学校で水道学の講義を受けることになった）浄水は一昼夜かけて濾過し、その後平時は〇・〇一%、空襲で街に被害があった時は一%の塩素殺菌をして配水するとの事だった（現在は残留塩素が問題になる事もあるが当時はこの様な状況であった）。

曇りのある日、退屈しのぎに給水塔の鉄梯子を球形のタンク下まで昇ったところ、係員から「落ちないよ」に気をつける」と注意されて間もなく、突然善福寺池の森の方から「キーン」と轟音がして、目を向けると迷彩を施した戦闘機の「飛燕」一機が給水塔間近の西側を矢の様に南に飛び去った。その余波で鉄梯子から振落されそうになった。多分五十米程度しか離れてはいなかったのではないだろうか、瞬間だが飛行眼鏡を掛け操縦している飛行兵の姿が間近に見えた。映画では良く見る操縦兵の姿だが現実に見たのは生涯で唯一これ一度丈だろう。

水道道路

3期 佐藤 清一郎

十二月下旬の亡妻の命日や彼岸・お盆など一年に何回か一人で墓地の植木の剪定・除草を兼ねて墓参に出掛けており、時折、娘や倅の自動車に帰途便乗させて貰う事もあるが、新青梅街道が渋滞で水道道路（井の頭街道）や人見街道（久我山通り）に迂回する事もあり、その都度、玉中時代を思い出している。

行軍の隊形

当時、行軍は右肩から図囊、左肩から水筒を掛け、その上をベルトで留めて、足には巻脚絆を巻き、常に体の大きい五年生が先頭で、クラスでは背の高い順に四列縦隊だったので背の低い生徒はついて行くのに大変だったと思う。この並び順はマラソンのスタートの時も上級生が前列、下級生は後列でクラスでも背の低い生徒は常に最後尾だった。

水道道路と吉祥寺通り

i 唯一回だけの遠足（葉桜見物）

一年生の四月の終わり頃、「花見に遠足」と言われ、貸切り電車で桜の花見に遠足と、期待したが、初めて右肩から図囊・左肩から水筒を掛けての四列縦隊

の往復行軍だった。花見の名所の小金井に行ったが既に桜は終わり、葉桜だった。玉川上水の手で大休止して握飯を食べてその俣行軍で帰校した。「遠足」とは字の通り、遠くへ足で行く事だと改めて実感したが、遠足はこの葉桜見物の一回だけだったような気がする。

宮城奉拝行軍

当時の水道道路は一部荒れていたが路面の上一車線ずつは舗装されていたが両端は砂利道だった。毎朝奉唱していた「青少年学徒二賜リタル勅語」の下賜日の月詣での毎月二十二日は全校生徒の宮城奉拝行軍だった。途中永福町から明大前辺りで休憩し次に和田堀浄水所脇を通って明治神宮表参道を一の鳥居で遙拝し、東宮御所側の神宮外苑で再度休憩後二重橋前に全校生徒二千人が集合、宮城奉拝をした。

三年生の時は小銃を担つての行軍のため、担い方が不慣れで歩く都度肩の上で銃が弾み漸く着いた永福町付近の小休止で又銃してほっとした。二重橋前では着剣の小銃で捧げつつしたが、三年生以上千二百人の銃の着剣が一斉に太陽の光を受け輝いて実に壮観だった。

解散後は仲間と電車で学校に戻り銃器庫で銃の手入れをし銃架に収めて、はじめて解散になった。低学年の頃は、二重橋前で解散だったが、三年生の時は勤労動員で三回だけだったが、途中降雨の時は銃に錆が出るので銃の手入れが大変だった。

戦局が厳しくなり始めた三年生の時は外苑絵画館前の広場は道路沿いに葦簾が張られ中が見えず休憩なしだった。この葦簾張りは多分帝都防衛の探照灯が高射砲の陣地になっていたのかも知れない。

体力検定

三年生の時に始めて全校生に体力検定が実施された。合格者は級に応じたバツジが渡された。初級の基準は百米走十六秒、手榴弾投擲三十米、土嚢三十匁運搬五十米を、また二千米走は水道道路を高井戸付近までの往復で走った。私は手榴弾投擲では及ばず、土嚢運搬では肩まで持ち上がらず、百米走り、二千米走では中級相当だったが、胸にバツジを付け颯爽としていた級友が羨ましかった。

余談だが玉中では出来なかった五十匁の運搬が、マツカーサー元帥が解任された頃、静岡の籠坂峠で百五十匁のセメント袋の運搬が出来た。当日は予定外の入荷で工夫の手配不能のため私達若い者が急遽動員され、

背中への乗せ降ろしは本職がしてくれたが、トラックから二百米離れた倉庫までの十数回、運搬出来た。

全校マラソン

全校マラソンは各生徒の着順で点数が付けられるクラス対抗で、学校前の水道道路がコースだった。一・二年生の八百人は八千米で、東向きに走り明大前の阿部君の家近くでの折り返しコース。一年生の頃はおしやべりしながら走って、道路の端の砂利面に踏み込み足に痛みを覚えて遅れをとり、折り返して来た級友に励まされたが、ゴールした時は後ろから五十番位だったのでクラスに迷惑を掛けてしまった。

三・五年生千二百人の時は十二軒で、西向きに走り「吉祥寺通り」新川の航空研究所前で折り返しのコース。三年の時はこのコースで、吉祥寺位迄は車道中央をほぼ一列になって走っていた。折り返し玉川上水近くまで戻って来ても未だ折り返しの方に向かって行く生徒があり、今度はクラスに迷惑は掛けないで済むと安堵しながら走った。前方に斉田君の後ろ姿が目に入り、何人が抜いて彼のすぐ後に付いて行ったら六十番位であった。一年生の時の借りを返した気分になったが、後刻斉田君から「後ろに着かれたので離そうとしたが急いでも遅くしても付いて来たね」と言われた。

勤労働員

三年生の八月五日から日本無線に勤労働員され、始めのころは吉祥寺駅前の空き地に八時に集合、下連雀迄「吉祥寺通り」を隊伍を組んで「ラバウル海軍航空隊」等の軍歌を歌いながら行進して、下連雀交差点で左折し勤務する工場に向かった。日本無線正門の守衛に六尺三寸の大男の元横綱、男女の川がいかめしい顔で立っていた事もあった。帰路は陽が暮れて森に囲まれた真つ暗な井の頭公園際では前を行く級友の靴の踵の浜が路上の石と擦れて火花が散つたのを思い出す。

秋頃と思うが二年終了で陸軍少年飛行兵になったおとなしかった坂井君が凛々しい軍服姿で駅前空き地に集合した我々の前で生産増強を鼓舞していた事を思い出した。

人見街道（久我山通り）
十里行軍

一年生の冬休みに入った十二月二十六日、全校生徒で十里行軍が行われた。行きは奉拝行軍と同様水道道を永福町まで行き小休止があり、以後四軒毎に小休止があった。明大前からは甲州街道を府中に、大國魂神社に詣でて大休止、此処で昼食になった。

帰路は一年生からクラス毎に三十秒間隔で出発し、

学年毎の学校到着時間を争う事になった。しばらく行くと二年生が追い抜いて行き、更に三年生も追い抜いて行つた。戦時中の事、陽が暮れると灯火管制下でもあったため鼻をつままれても解らぬ暗さの中で、競争の為小休止どころか半分駆け足で、疲れて遅れ勝ちの仲間を交替で押したり曳いたりして走つた。落伍すれば減点の対象になるので一生懸命に走つた。幸い落伍者を出さずに済んだ。

学校で解散後帰宅までの距離を入れると十一里以上歩いた事になる。駅から帰宅途中の急坂を、疲れてやっと昇つたが、小田急の架線のスパークが稲妻のように光っていたのを思い出す。また林の側を通つた時「ほう・ほう」と梟が鳴き、寂しさと共に一層疲れが出た事を覚えている。

七十一歳の今にして思うと、一年生の十三歳の若さだから歩けたが、時代の流れとは言え、当時、ご年配の先生方は十里行軍に限らず、宮城奉拝行軍等生徒と行動を共にされ、さぞかしお疲れの事だったろうと改めて思う。

思い出に残る二人の友について

3期 宇津木 一

人生に七転び八起きという諺がありますが、長生きしていると色々な面白い事件とか、悲しい事件とかに遭遇して、笑ったり泣いたりした経験が数多くありました。

私にとって玉泉中の五年間は、波瀾万丈の輝いた青春であり、思い出の多い日々でした。

松井雄勝君のことも強烈に脳裏に残っている思い出のひとつです。当時彼の家は小生の近く経堂にあり、父君は小説家で、かなり名の売れた方であり、日本作家協会の副会長をされていたと記憶しています。

私は彼とは何となく気が合って、よく彼の家に入り浸っていました。松井君は母上がいらない上に一人っ子で、兄弟姉妹八人の賑やかな小生とは全く別世界の環境にあり、非常に羨ましい限りでした。

その上、何処から仕入れて来るのか、性知識が実に豊富で、「へえー」と驚くことが多く、後年その知識は私にとって大いに役立ったものです。実際に見たわ

けでは勿論ありませんでしたが、彼は特別に精力的で、日に五・六回マスターベーションをしないと行けないと豪語し、その毎回出るものが出ると言うので、驚いたり感心したりしていました。

その彼は大層な癪癪持ちで、教練で長時間屋外に立っていると、しばしば発作を起こし、口から泡を吹いては突然倒れるのです。

彼は大体私の隣にいたので、最初は何が起きたのか解らず、本当に吃驚したものです。その彼が、医務室に運ばれて三〇分もすると、しゃんとして何でもなかったかに振る舞うのにも再度驚かされました。

現在、松井君の消息は全くなく、今何をしているのかと思うことしばしばです。どなたか彼の情報をお持ちの方は、是非お知らせください。

もう一人、金田芳男君も忘れられない親友でした。当会の名簿の物故者欄に早くから名前がありますが、彼とは小学校からの付き合いで、住まいも近くでした。

彼は大変な努力家な一方、とても淋しがり屋でした。その彼は東京工業大学に進学して、そのパーティーに私を盛んに誘うので行ってみたら、何ととても可愛い女性を同伴しているではありませんか。小生は大いに驚き、且つ、なかなかやるもんだ、とほのぼのとしたものを感じました。後で知ったことですが、彼は母ひとりと、子ひとりの家庭で、実の父親を知らない境遇にあった様です。その所為かどうか、当時から女性不信の念が根強くあり、私は、この男に普通の恋愛は難しいのではないかとずっと心配していたものですから余計に嬉しかったのでした。その晩のパーティーは大いに盛り上がり、彼と天下国家を論じ、お互いの夢を語り、翌日になるまで口角泡を飛ばして杯を傾けました。その結果、お互いの同伴者は大変な男達の犠牲になり、翌早朝やつと送り届けられた次第でした。

ところがその数日後、彼の母親が泣きながら小生宅に駆け込み、さっき息子が死んだ、と言うので、とるものもとりのあえす駆け付けてみると、実に平和な死顔で寝ているではありませんか。前日の晩、遅くまで勉強して就寝し、早朝「ううん」という叫び声があったの

で、驚いて部屋に行ってみたら既に息絶えていたとのこと。心臓下の大動脈が破れたとか、変死で司法解剖の結果判った事でした。

同君を始め、名簿物故者欄の多数の方々に對して、深く深くそのご冥福をお祈り申し上げます。

歴史の見方を学ぶ

3期 土川 政夫

敗戦の年、私は勤労働員で身体を壊して、しばらく休んでいました。そして久しぶりに学校に戻ったとき、教えられる歴史の内容がまったく違っていたのに驚きました。すっかり混乱した私は、職員室に牧野先生を訪ねて、こんな質問をしました。「先生、いままでに習った歴史と、いま習っている歴史と、どっちが正しいのでしょうか」と。

しばらく瞑目して考えておられた先生は、こんな話をなさいました。「君たちのように頭が柔軟で魂が成長する時期に、二つの異なる歴史観を学ぶということは、非常に幸せなことだよ。史実は一つでもすべて物事には二つ以上の見方ができる。それを君たちは、身をもって体験しているんだ。」

そのときは、正直にいつて、はぐらかされた感じがしました。先生のこの言葉の本当の意味がわかったのは、だいぶ後のことでした。

高等学校では、いままでの価値観を否定し、それに

代わるものとして、三つの思想が渦巻いていました。マルキシズム、実存哲学、そしてキリスト教でした。それはクラスが三派に分かれて争っていたというよりも、一人ひとりが、この三つの間を駆け巡っていたという方が正しいでしょう。実存哲学には歴史観がなく、というよりも「今」を大切にして歴史観を拒否するようなところがありますが、マルクス、エンゲルスの唯物史観、キリスト教の救済史観にも触れました。また物理学でアインシュタインの相対性原理、ハッブルのビッグバン説から始まる宇宙観を改めて学び、地質学で生命の発生と進化を学びますと、その延長としての人類の歴史という見方も出てきます。救済史観はスケールが違いすぎて比較になりませんが、最初の皇国史観を含めて、いろいろな歴史観に遭遇しますと、牧野先生のおっしゃった言葉が思い出され、またその重みがわかってきました。

二年生の半ばまでは、地球物理や地質への興味

方が強かったのですが、ある本との出会いが転機になって、結局は化学を専攻しました。そして、指導教授の机の上にあった、沸騰水に入れても変質せず、燃やすとシリカの白い粉になるえたいの知れないゴムとの出会い（それがシリコーンゴムでした）から、その工業生産を始めかけていた電機会社に入つて、シリコーンをやることになりました。

電機会社ですから、物理屋さん、電気屋さん、機械屋さんとの接触は、仕事のうえでも個人的にも生じます。一つの現象に対して、また仕事の組立て方についても、お互いの発想の違いに、最初は戸惑いました。電気屋さんは、どちらかといえば、重電の回路設計でもエレクトロニクスでも、方程式が立てば仕事は半分終わったようなもので、実験はその検証のために行なうもの、また実験の結果が予想に反したら、予期しなかった要因が働いたとして、理論を始めから見直すという傾向が強いようです。それに対して化学屋、とくに有機合成や高分子合成の分野では、やってみなければわからない、だから実験結果を組み合わせる理論づけをしていくという傾向があります。そこで、両者が

共同で、新しい材料を用いる新技術を開発するときに、相互の発想法の違いから、開発の手順が混乱することもありました。

しかし、このような共同開発は、相手の発想法を学ぶことで、いつの間にか自分たちで形成していたパラダイムの限界を越える、よい機会になりました。えてして陥りやすい主導権争いは不毛で、単に相手の立場を尊重して、足して二で割るやり方はエネルギーの分散にしかありませんが、たがいに相手から学ぶ姿勢があれば、成果もあがるし、自分たちの成長にもなります。ここでも、牧野先生の、二つの見方という教えを思い起こしました。

シリコーン事業は、一つの合成反応で同時に生成する複数の中間体から、バランスよく多角的に最終製品にしていくことなど、石油化学に近い要素が多く、装置産業でもあるので、電機会社の中で事業を進めるには限界がありました。そこで、一九七一年に、米国の技術と資本を入れて独立しました。日本と米国の電機会社どうしの合弁会社ですから、両者のよい点を組み合わせ、理想的な経営と、技術の集積が行なえるは

ずでしたが、企業文化の違いで、それは必ずしも成功したとはいえません。しかしここでも、仕事に対する日米の考え方の差を、その善悪は別として体験しました。

シリコーンの独立で、私の仕事も変わりました。技術管理、特許、法規制関係など、技術と法律の両面から抑える分野が、私の仕事の中心になりました。またそれとともに、技術屋と事務屋の両方と接触する必要が増えました。そうなる、今度は事務屋さんの発想の仕方を理解する必要が出てきました。

今は特許事務所で、特許明細書の作成から、特許権の取得に至るまでの、一つの発明を技術と法律の両面から見る仕事をしています。また外国からの仕事も入りますから、それぞれの国の制度と、日本の特許法や審査のプラクティスとの差を念頭に入れて、必要に応じてクライアントに説明したり、明細書の内容の追加・修正を行ったりしています。ここでも、個々の発明を複数の視点から見ていくことが、日常のことになっています。

歴史に話を戻しますと、私はここ数年、古代史に興

味をもっています。日本の古代史における数々の謎を解く鍵としては、東アジア諸民族の歴史、とくに騎馬民族の歴史や中国の史書が重要ですが、古事記や日本書紀（あわせて記紀といいますが、再び注目されてきています。それも、記紀神話を、それが編集された七〜八世紀の政治情勢を考察する鍵として用いようというのです。たとえば、朝鮮半島の古代国家には、多くの天子降臨伝説がありますが、なぜ日本の記紀だけが天孫降臨なのでしょう。しかも、アマテラスは女神になっています。それは、持統、文武、元明、聖武と、自分の孫に皇位を継がせたい女帝が続いたからと説明されます。そして、記紀の隠れたゴーストライターとして、その編集によって、壬申の乱の後の天武、持統政権の安泰と、元来は小氏族にすぎなかった中臣藤原氏の正当化とを同時に計った藤原不比等がクロイズアップされてきました。

このような説を最初に提案したのは、梅原猛さん、上山春平さんといった京都の哲学者たちでした。実際、古代史において独創的な説を展開された方々には、中には騎馬民族王朝説の江上波夫さんのような歴史学者

もいますが、むしろ、上記の二人の哲学者をはじめとして、松本清張さん、黒岩重吾さんのような文学者、久保田穰さんのような法律家などが名を連ねています。また、日本の古代史からは離れますが、地球物理学者の竹内均さんは、モーゼに率いられたユダヤ民族のエジプト脱出の物語を、聖書学者のいうBC一二五〇頃ではなく、サントリニ島の大爆発のあったBC一四〇〇頃と推定しています。それはこれらの方々が、実証的な学風の歴史学者よりも自由な発想が出来るからとも考えられます。

これは物理屋さんや電気屋さんに比べて実証的な有機化学屋の、偽らざる実感です。

それにしても、あの時の牧野先生のひと言が、後になつていろいろな場面で私の指針となりました。今となつて、深い感謝とともに思い出されますが、あの時は、よくわからないままに、お礼も申し上げなかつたようです。改めて、ありがとうございました。

君の思い出～消えた親友

3期 島村 響

いづみ会会員名簿（2000年の月判）を開けると、彼の氏名は今年も確かに載っている。しかし自宅住所・勤務先の欄はいつもブランクだ。七年前に名簿がまとめられてから、ずっとこの状態が続いている。

彼の名を記せば、「ああ、彼のことか」と、遥かに遠く消えかかった記憶の中から彼のイメージを思い出す人も何人かは残っているだろう。

彼は小柄な方で身長は150cm位だったか？短軀ではあったが、何時もバイタリティーに溢れて、頭脳の回転が素早く、饒舌でもあった。出身の小学校が同じだったので、どこからか転校して来た彼となんとなく親しくなった。それは高井戸第二小学校で、後に国民学校に変わっての時である。彼の家は大宮前五丁目でお互いに行き来するようになった。

冬の寒風の吹きすさぶ畠の中で、彼となんども、なんども相撲をとった。

彼には東大生の長兄と予科練に入隊する次兄がいた

が、彼の家ではその兄たちと顔を合わせたことがない。彼は兄たちが居たせい、私よりかなりマセていたように思う。なぜか彼も私に親しみを感じてくれて、小学校五・六年から中学二年の頃まで、何時も一緒に登校、下校をしていたように思う。麦畑の道だった。中学の教室の座席も教壇に近い前方で、お互いに近い所にいた。中込競先生の漢文の時間は、昼休み後の時間で昼食後のため、いつも睡魔に襲われる。君の座席は私の前だったので、或るとき、彼は針のついているコンパスを私に渡してこの漢文の時間中、居眠りをしていようと思ったら、コンパスの針を背中に刺してくれと頼んだ。私は頃を見計らってコンパスの針を刺した。彼はガタツと音を立てて目を覚ました。教壇から先生はチラツとこちらをご覧になったが、なにも言われなかった。

君は全般的に成績が良く級長だったが、私の得意な理数系にも強く、中川先生の英単語、デイクテー

ションも良かった。彼の内面はいつもエネルギーと情熱が燃えているようだった。突然のことだったが、彼の一家が松江に移ることになり、彼も転校することになった。お互いに毛筆で別れの辞を書き、交換した。

二年の終わりの頃だったので、日本無線への勤労働員には彼の姿はなかった。そのあと、まったく音信が絶えて終戦になった。専門学校・大学への進学では私は旧制度の最後へ滑り込んだ。京都の大学の英文科のクラスメートに旧制松江高校出身の者が居た。それとなく、君の動静を聞いてみた。「彼は学生運動で活躍しているよ」とのことだったが、それ以上はなにも語ってはくれなかった。その後の彼は、彼はどうしているのか？その名は磯田正幸君。

東京空襲のころ

思い出から

過日美術会の会合があり、たまたま話題が戦争中の空襲の話になり、副会長のK女史が私はあの東京の大空襲の時に火の中にいたのですよと言われ、「本当ですか、それにしても良く助かりましたね」ということから話が五十六年前に戻って、当時の思い出を尽きる事なく話したものです。私もそうでしたが、「あの悲惨な地獄絵図を語るとは出来なかった」と言うK女史は、「この頃は年のせいかな、むしろ皆に伝えたいと思う様になりました」と、当時の事を昨日の事のように話してくれました。

私にも意識的に思い出したくない、忘却という名の屑籠の中に捨ててしまっていた悲惨な思い出もあります。その一つが昭和二十年三月の東京大空襲の直後に、下町を歩いたときの目の奥に焼き付いた若き乙女の一系列わぬ焼死体の姿です。

その報われぬことの無い悲しい想いに、せめてレクイエムの詩なりとも書き残さねばとの考えに到ったの

です。

学徒動員

戦争も激しくなり学問どころではないと、学徒動員令が出され、学校はそっちのけで今日から勤労動員です。動員先の日本無線の社長とやらが、中学生を集めて訓示を垂れました。

「・・・我が社のため一生懸命に働くように・・・」
おやおや！国のための働きに来たつもりだったんだけど、将来企業優遇このうえない日本の体質が、もう芽生えていたのかもしれない。

地震

「天竜橋が落ちたんだってさ！」「大勢の人が死んだって？」「そうらしいけど、戦意を喪失するから話してはいけないんだってさ！」

敗戦間近の新聞は、タブロイド版とかいって、今の新聞の1/4枚しかないちっけなものでした。なったって、物資不足の時代です、新聞紙だって貴重なも

3期 太田 富治夫

のでした。その新聞に小さく、東海道線の天竜川に架かっている鉄橋が落ちて、汽車が通れないことが載っていました。何故だと言うことは全く記事になっていませんでした。

その二日前のことです。わたしは日本無線の工場のグラインダーで鉄を削っていた時、急に体がフワッと浮いた様な気がしたと思ったら、グラインダーから体が離れてしまい、びっくりして周りを見回したら、工員さんが「地震だ！」と言うので、工場の出入り口の所迄避難しました。肢を拡げる様にしてバランスを保ち、立っているのがやっとでした。建物の壁にひびが入ったのを見たのは初めてでした。後で指がグラインダーに触れていたは大変だったと思います。天竜の橋が落ちたのは勿論地震のためだったのです。

教育勅語

勤員でのこと、昼休みに、近くの広場で数人の者と休んでいる時に、こちらの数倍程の数の他校の生徒に殴り込みを掛けられたことがあります。喧嘩の原因は私は知りませんし、怪我をしてはとも思ひ、抵抗もせずうずくまっていたら相手はそのまま行ってしまう

いましたので、その場は事なきを得ました。ところが翌日になって、その時現場にいた全員が呼び出されたのです。恐らく相手の学校の配属将校かと思われる軍人と、その付き人の様な人がいて、喧嘩についての調べをしていましたが、いきなりその将校がこちらの一人に「貴様！教育勅語を暗唱してみろ」と言ったのです。可哀想にその指名された友人は、しどろもどろになって途中で間違えてしまいました。「教育勅語も暗唱出来ない様だな、貴様たちが悪いに決まっている！」。相手のいない欠席裁判でした。

初空襲

昭和十八年四月十八日、学校の創立記念日で我々の中学は休みでした。昼頃だったと思いますが、いきなり花火の様な炸裂音がしましたので、二階の物干し台に出て空を見ると見慣れない双発の爆撃機が一機飛んでいて、大分はなれた処に高射砲の煙が浮かんでいました。空襲警報のサイレンが鳴ったのは、その後だったと記憶しています。東京が初めて空襲された日の経験でした。

東京大空襲

日本の敗色が濃厚になってきた、昭和十九年暮頃から、B29の単独機による夜間空襲が連日のように続いていました。空襲で明けた昭和二十年も三月になり、慣れっこになったとは言え、その被害は次第に拡がって、軍の上層部も神風を頼りにしだした頃だったと思います。忘れもしません、九日の夜、敵機襲来の警戒警報が鳴った時、私はまた単独機によるいつもの空襲だと思ったのですが、側に居た兄が「今夜は沢山来るぞ!」と言うのです。何となく不安になって私は兄に聞きました。「どうして判るの?」兄は答えました。「毎晩一機ずつ来ているのがもう八十機位になっているだろう、あれはきつと訓練に来ていたんじゃないかと思うんだ、だから、そろそろまとまって来るんじゃないかと思うんだ。」そして付け加えて「警報の音が何となく、いつもと違うんだ。」私には音の違いは解りませんでした、不安がつうつて来たのを覚えて居ります。

兄の予感通り、その夜、東京の下町は多数のB29の編隊によつての大空襲になり、私の住んでいた世田

谷の家の二階から見ると、東の方は夕焼けの様に真っ赤に染まり、灯火管制で明かりもないのに新聞の見出しが読めるほどでした。

その頃父は、下町の江東橋(今の墨田区)で小さい医院を開業していましたが、B29の落とす焼夷弾の空中で燃える火、そして燃えさかる街の炎、そしてやがては、真っ黒な人の脳を思わせる巨大な雲(原爆の時だけでは無く、東京でも黒い雨が降ったのです)を見て居て、母が「錦糸町は大丈夫かしらねえ」と心配そうにつぶやいたのが印象に残っています。

翌日の昼頃、煤けて真っ黒な顔で父と看護婦さんが帰って来ました。生きて帰れたのは、奇跡に近いことだったようです。

翌十一日、私は父と一緒に焼け跡を見に行きました。中央線は不通ではなかった、神田まで行き、そこからはまだ、煙があちこち立ち上がっている焼け跡を錦糸町まで歩いたのですが、屍体が転がっている他は行き交う人も無く、一度憲兵さんに事情を聞かれただけで、本当に街は死んでしまっていました。

警報機も焼けてしまったのでしょつかサイレンも無

い不気味な静寂の中を、戦果を偵察に來たのでしょうか、超低空を音もなくB29が一機飛んで行くのを見たのは、幻だったのかも知れません。裸のマネキン人形が道端に転がされ、放置された裸の人形・・・本当に最初はそう思ったのです。でも、あちこち転がっているのを見た時初めて気が付いたのです。褐色から炭の様になって骨が見えるものまで、地獄絵図そのままです。その先にも焼屍体が、墨田川の河岸も悲惨の限りでした。錦糸町の父の診療所も跡形も有りませんでした。薬瓶は硝子の塊となっていました。家から持参のおむすびも食べられなかった事を覚えています。

あれから五十年余り過ぎました私の心の中で、今まで話さないで來た過去の思い出が、この頃強くなつて來たのは、あの天真爛漫な姿のまま昇天した乙女達が何かを叫んで居るかも知れません。

帝都線

学校まで帝都線（現在の井の頭線）で通っていたのですが五月の空襲だったと思いますが、永福町の車庫がやられ三十一両あった電車が五両、その内の二両は事故で使えないと言う訳で、一週間あまり下北沢から

吉祥寺の動員先頭を歩いて通いました。休むこと相成らぬお達しで、朝早く線路上を歩き着いたら昼近く、やる仕事もないまま、また歩いて帰ると言う始末、合理性を無視したその考えの中に、日本の敗戦が決まっていたと言えるのではないのでしょうか。

時間が風化してゆく中で、敗戦の創跡、飢餓、スイトン、南瓜の蔓、脱脂大豆、冠水芋、の思い出・・・

嗚呼

オペラ・音楽に傾倒した我が半世紀

3期 梶山 晋

昨年五月に古希を迎え、五十数年間如何にオペラ・音楽に心酔して生き続けて来たかと、自らを改めて振り返った次第です。

兄弟が無く、幼少の頃より童謡のレコードを蒐集した時点より現在まで、綿々と引き継がれて来たことを痛感する。「芸術」といったら大袈裟と思われそうだが、オペラ・音楽が七十年の人生の紆余曲折を支えて来てくれたものと心から感謝している。

思い出すと、玉中の音楽の授業は広い講堂の前方で行なわれ、貝増善次郎先生が音感教育に重点をおいて指導していた。毎回音感教育のテストがあり、私は常時満点で、自分の音感には自信を保つことが出来た。

昭和十八年、神田須田町のリズム社で輸入盤（中古）のブルーノワルター指揮、ウィーンフィルハーモニーのモーツァルト「交響曲第四十一番（ジュピター）」の四枚セットを買い求め、その演奏の素晴らしさに感激したことがこの道に入る発端となった。

昭和十八年の秋に貝増先生が玉中を退職して松竹交響楽団に入団されたので、日比谷公会堂のコンサート

（指揮斎藤秀雄）に行き、初めてオーケストラの生演奏を聴きその素晴らしさに驚嘆した。その後貝増先生は日響（現在N響）に移籍され、ヴィオラのトップ奏者としてコンサートで演奏されていた。大学時代にもそれを聴き続けたことも私の懐かしい思い出となっている。

当時は日響がトップオーケストラで、名指揮者尾高尚忠、マンフレットグルリットに惹かれ、昭和十九年八月勤労動員に駆り出されるまで、日比谷公会堂のコンサートにゲートルを巻いて三回行ったことも鮮明に記憶している。

一九五一年頃よりレコードの発売が徐々に増加し、一九五三年にLPが発売され録音もSP時代とは格段に改善され、安月給にも拘らずオーケストラ、協奏曲、室内楽、バロック音楽、宗教音楽、オペラ、歌曲、と夫々のジャンルを蒐集し、十年後にはLP千五百枚の在庫となった。

その間、一九四八年に父が脳梗塞で倒れ入院を繰返し、一九五五年に没するまで介護に明け暮れ、心身

共に疲れ果ててしまったが、何時も心を慰めてくれたのはすべて音楽であった。一九五五年頃より蒐集はオペラが主となり、一九五六年九月NHKイタリアオペラが発足し、イタリアから一流歌手を招いて日本に於ける本格的なオペラ上演が鑑賞出来る様になり、オペラ熱に拍車がかかり自制することが出来なくなってしまう。

更に一九六一年東京文化会館が第三回イタリアオペラ公演でオープンし、超一流のレナータ・テバルディ（ソプラノ）、マリオ・デル・モナコ（テノール）、ジュリエッタ・シミオナート（メゾソプラノ）の三大イタリア歌手が来日して全公演を鑑賞、最高の満足感に浸り、更に一段とオペラにのめり込む結果となった。特に愛好するヴェルディおよびベルリーニのオペラの蒐集は膨大なものになった。

一九八六年よりLPからCDに移行、録音技術も日進月歩に向上し、更にヴィデュアルの時代となりビデオ・レーザーディスクによるオペラ鑑賞が出来る時代ともなり、ハイビジョンで生々しく感動に浸れることは最高の喜びである。

過去二十一年間にミラノ・スカラ座、ウィーン国立歌劇場、メトロポリタンオペラ、コヴェントガーデン王

立オペラ、ポリシヨイオペラ、ベルリン・ドイツオペラ、キーロフ・オペラ等々、世界の一流オペラを鑑賞出来たことは夢想だにできなかったことであった。

外来歌手の歌曲のコンサートもオペラと並行して漸増し、特に大好きなシューベルトのリート（芸術歌曲）も存分に堪能出来た次第である。オペラ歌手の変わりは目まぐるしいものがあり、歌唱法も年代的に変化して行くもので、一九〇〇年初頭より二〇〇〇年代の歌手を追い駆けて行くことは可成の努力が必要とされるものであった。約百曲のオペラをこの悪い頭に凡て記憶させて行くためには、ボケる暇もなく今日に至っている。

通常オペラ歌手は、オペラを歌いつくして声が疲れたところ引退して、リート歌手に転じることが多いが、昨年九〇歳で亡くなったドイツのバス・バリトン歌手ハンス・ホッター（一九〇九―一九九九）は一九四〇年代より一九七七年までオペラとリートを両立出来た偉大な歌手であった。特にシューベルトの「冬の旅」を得意とし、一九四三年より一九七三年までに同曲を四回録音しており、私は凡てを蒐集したが、同一歌手が同一曲を歌っても、ピアノ伴奏と声帯の変化で夫々テンポも表現も異なっていることは明らかで、人間

の声の偉大さに脱帽する次第である。

一九七七年に没したイタリアの歌手マリア・カラス（ソプラノ）にも夢中になり、ヴェルディの「椿姫」を八種類蒐集したが、指揮者、オーケストラ、相手役のテノールが変わると同一のオペラにも夫々異なる感動を得られるのも亦オペラの醍醐味である。

大学では第二外国語はドイツ語を選択したのでドイツオペラ、リートは理解出来たが、「好きこそもの上手なれ」という格言の通り、懸命に努力した結果オペラ音楽に関してはイタリア、フランスの言語も何とか解釈出来るようになった。

長いオペラ遍歴を経て来た過程で、オペラ歌手十数人ととの交流も深まり、一昨年十一月より昨年四月まで（亜）腸閉塞で東京医大病院に三回の入退院を繰り返した間に、数人のオペラ歌手が見舞に訪れて、最新録音のCDの差入等もあり感激した次第であった。四年間に再三の入院生活を余儀なくされたが、見舞に来てくれるのはオペラ愛好会の同志の友人が多く、オペラの内外の最新情報も持参して慰めてくれた。

前述の通り音楽は凡てのジャンルを聴いてきたが、オペラは音楽の総合芸術であり、その舞台上演を鑑賞することに最大の感激がある。寝食を忘れるまでの趣

味は一朝一夕で得られるものではなく、それなりに時間と努力と忍耐を要するが、精神的苦悩を解消し生きる期待へと誘導してくれる魔力を秘めているものと信じている。

以上の様にオペラ三昧を続けて、残り少ない人生をより有意義に過ごせることを念願している。

これまでの世紀に蒐集したアナログは二万一千枚、CDが八千五百枚、外に膨大な数のビデオとレザードイスクがあり、死ぬまでにもう一度全部を聴き鑑賞することは到底不可能であることは自覚していても、新しい録音のものが出れば欲しくなるといふ苦しみ、音楽の偉大さと深さを認めざるを得ず、この魔力は或いは罪深いものかとも思われる。

長生きをしましょう

3期 小川 久

十七歳のころ、学校でいくつか英語の短文を棒暗記させられ(?)た。あれからもう五十年を超えるから、その記憶も染みついたり、薄汚れてしまったりしているが、この暗記した短文だけを手掛かりに、じつに三年の月日をかけて、作者名と、掲載された作品の本を捜しあてた。《快隠居》がいる。

昨年十一月の昼下がり、このいわば大海の一粟をみごと捕らえた同君から、数人と一緒に、その苦労話をうかがった。

何故こんな苦労の多いことを始める気になったのか。「昔から気懸かりだったのだが、やっと仕事から自由の身になったので、気力のあるうちに・・」といったという。それに、憶えた英語の単語に旧い言葉がなかったから、彼の言葉を借りれば、「その英文の匂いからして」十九世紀から二十世紀前半の作品と見当がついていたからだそうだ。

いちばん手間暇がかかり、ときにギブアップしようと思つたことのあつたのは、この短文が、果たして、小説、戯曲、詩歌、あるいは論文、はたまた講義など、何れのジャンルに属するか、この検索であつたという。日本はもとよりイギリスの図書館に脚を運び、また専門家に問い合わせのレターを出したが、図書館員の親切には驚きもし、また感謝していた。なにぶんこちらの記憶がいまひとつ頼りないので、核心にまでいたらず、切齒扼腕したそう。ずいぶん沢山のそして虚しい試行錯誤を繰り返した。そのプロセスを、なんとか乗り越えられたのは、「閃きと運、それが幾つも重なつたお陰」だそうである。

それだけに、この短文が詩の一節だと分かつた時の喜びは大きく、跳び上がって欣んだ。二三日はそれこそまさに鼻唄まじりだったという。「後の工程は、近代詩のカテゴリの中から、糸を手繰る、いわば根気だけの作業だからネ。またこの詩の載つた本を手にし

たときは感激がじわじわと拡がってきた。正直にいつて、君たちに連絡した時は、有頂点だった」そうだ。いろいろ話があちこちへ跳んだあげく、この日の会は、結局、亡くなった先生が霊界から手を差し伸べてくれた、その御蔭だナーということで、お開きとなった。

存在していた、そしてそこから小説の、結果として映画のタイトルが引き出されていた（？）ことを、初めて知った。長生きはするものである。
《するすると手からぬけゆく弥生かな》

それから二週間ほどして、一冊の岩波文庫が届けられた。先日御馳走になったお礼だという。開封したら、「イギリス名詞選」(平井正穂編、邦訳付)が出て来た。久しぶりの英詩なので、べらべらめくっていたら、十九世紀終わりに、僅か三十三年の生涯を閉じたアーネスト・ダウソンの詩が目にとまった。そこに、
Gone With the Wind なる一節があるではないか。

このフリーズはかのマーガレット・ミッチェルの「風と共に去りぬ」(一九三六年)であって、ヴィヴィアン・リーとクラーク・ゲーブルが主役を演じ一九四〇年二月の第十二回アカデミー賞を獲得した映画のそれである。戦後、あの映画をみたとき内容の素晴らしさのもとより、心を撃つタイトルだナーと感激したそのタイトルが、じつに半世紀も前に詩の一節として

座談会

いづみ会発足の頃

3期生

平成六年九月十日（夕） 二子玉川「海幸」にて

針谷・宇津木・鈴木・三戸森・石橋・蜂須賀・浜本

針谷 いづみ会が、いつからどのような経過を辿ったか。特に発足当時は記録されていないんですね、記憶をたどると。双手に分れて、それぞれが会合をもっていた時代があったのですよ。一番最初に僕等が集ったのは、昭和二十二年の春、二子玉川の宝亭の二階だった。何人出席したのか定かでないのだが、広い座敷が一杯になったから二、三十名位だったのではないかと先生方も喜んで来られ、特に中込先生はお孫さん（八郎先生のお子さん）が生まれたばかりの時で「帰ったら『いづみ』という名前にするように言おう」と御機嫌で帰られたことを思い出しますね。当時宝亭は高級料亭でしたね。僕等学生だったのに何故出来たかと云うと親戚みたいなつき合いだったので特別に計らってくれたんだが詳しくは覚えていない。会の名は校名からとって「いづみ」に決った。その翌年はやらず明けて二十四年、渋谷の亀八寿司で、二回目の会合を開いた。当時の寿司屋の二階の宴会だったから安かった。

———という処までは記憶があるんですが、その後やっ
たか何人かで集ったか僕はハッキリしません。

宇津木 僕にはお呼びでは無かったなあ。

各々 戦後は皆の住所が判らなかつたし名簿も無かつた。消息不明が多く、整理もつかなかつた。

針谷 本当に知っている者だけだったから。その後、偶々蜂須賀の方でも集っているということを聞きましてね。そのことをどうぞ。

蜂須賀 日記だとか会社の記録等をひつ張り出して見てまとめて見たが当時（鈴木のパックアップもあるのだが）、我々はグループとして昭和三十五年からやっていた。丁度その頃僕は製品開発をやっているのですよ。又転勤で東京・大阪間を四往復しているのですよ。その間東京に帰って来た度（たび）に僕等のグループが集っていた。僕・鈴木・古沢、亡くなった黒沢（敏）・斎田・高坂・堀田・小池・山内・（故）小西・尾崎・都留、この十二人。これはね、卒業式に鉄塔下で土屋先生を

囲んで写真を撮ったグループだった。都留はアメリカへ行き、尾崎は一回位出たのかな、実際集っていたのは十人ですね。この十人が三十五年から四十四年の十年間に五回集った。最多の八人から最小四人、それでも先生はちゃんと来られているのだよ。中村先生と中込先生と一緒に呼んだり、中村先生と岡田先生を呼んだり、お一人の時もあったりと。土屋先生だけは何故かお呼びしていなかった。

浜本 たしか土屋先生は佐渡の方に行かれていたのでは？（そうその声）

針谷 僕等は中込先生、岡田先生など非常に親しくして下さった先生を中心に呼んでいる。一年生の時から中村先生、中込先生は受持ちだったからね。その先生方が両方に呼ばれている筈なのに何故か一言も他のグループのことを言ってくれない。お互い知らずにやっていったわけ。

蜂須賀 そうなのだ。会場は当時会社で使っていた料亭だとか、古沢の国鉄の寮、黒沢の郵政の寮だとか、そういう処をぐるぐる廻りながらやっていったわけですよ。そして昭和五十三年の事、僕の勤め先と同じビルの一階に佐藤泰造があり、ジャパンエキスプレス東京事務所長をして居って、僕はそのビルの七階にいたの

だが、全く知らなかった。ところがある日、偶然、正面玄関でバツタリ出喰わして、「やあやあ」とたまたま、針谷等が同窓会をやっていることを知ってねえ。

「先生も先生だが、我々も我々だったなあ」と。実はその前に、中村先生が亡くなられた時に、誰かが呼び掛けてくれ「志」を出しているのだが、その時も「いづみ会」の話は全く出て来なかった。この間に、佐藤と針谷等あたりが中心に集りを一、二回やっていた様だが、その時「一緒にやろうや」の一言でまとまった。

針谷 その翌年昭和五十四年六月二十三日に、横浜「氷川丸」で第一回合同いづみ会が催されたと云う訳。
宇津木 第一回の出席者は何人だったね。

針谷 三十二名だ。土屋・岡田・見上先生が出席された。榎さんがプロとしての司会をやっているのが印象に残っている。席上で東京オリンピックの回顧放送もやったしね。

石橋 ところで昔は鈴木と蜂須賀が中心にやっていったの。

鈴木 中心というとおかしいのだが、黒沢等と中込先生を囲んでやっても「針谷と会っているよ」というだけで、僕等の方は名称もなかったが先生方はいづみ会が出来ていることを知っていて両方の会にちゃんと

出ていた様だ。我々の方はその都度の写真が全部残っている。

宇津木 後日、僕が土屋先生に聞いたしたら先生は両方には出ていなかったが、両方がそれぞれやっていることを知っていた。仲が悪くて別々にやっているのだと思っていたようだね。

針谷 そんな風に考えていたみたいね。

宇津木 お互いにお互いの情報を知らせない方がいい。針谷グループと蜂須賀グループは違うのだ、という理解であつたらしい。(全員へえー)

針谷 昭和二十二年、最初に開いた時、中込先生は喜んで来て下さったが、当時の事を確認をとるため昨日(九月九日)、養子の中込先生の奥様(中込さんのお嬢さん)に電話をして見たら「確かその時でしたね。父が帰って来て、生まれた子には『いづみ』にするのだと言っていましたわ。」(一同爆笑)二十四年の時は五、六人だったが、岡田先生は毎回喜んで来てくれた。

蜂須賀 此方も四人位の時があつたが、その時も岡田先生は喜んで出て来られた。

針谷 昭和五十四年六月の第一回横浜「氷川丸」から三年とんで、第二回は昭和五十七年六月、目黒「雅

叙園」だった。最高の四十名の出席があり先生も三人だった。

蜂須賀 その間は僕が大阪へ転勤していたので、僕が此方に帰って来た時の昭和五十九年六月に学校の近くの久我山「松栄」で開いた。三十八名の出席と土屋先生が出られた。第二回が三年飛んだ以外は毎年六月に催しているわけです。

針谷 お陰様で毎年盛大に続けられるようになりました。ところで今年は学徒動員五十周年で日本無線工場訪問と吉祥寺「東急イン」でにぎやかでしたが、いろいろな反響があつたね。来年は終戦五十周年、種々の企画が各地で催されるでしょう。「いづみ会」もいい企画を宿題にして第十四回を盛大に。(「一泊旅行もいいなあ」の声が内外から聞こえてくるよ。)

一同 バラバラにやっていたことは紀元前のお話。(爆笑)、いい記録になりました。これから毎年毎に活発にやりましょう。皆さんのご協力を得ながら。

文責〃浜本

玉中入試の思い出

4期 中西 健一

もう随分昔になるが、玉中入学試験のことが、自分でも不思議なことに、今でも印象に残っている。この際その一部でも書き残しておくこととしたい。

入学試験といっても、当時は体育と口頭試験だけの簡単なもので、私の受験番号は確か一八六番であつた。お断わりしておくが、試験は二組に分かれ、日を別に行われたため、後半の組が私と同じ問題で、前半の組は別の問題であつたと聞いている。

午前に簡単な体育テストが行われ、その中に平行棒を使った懸垂があつた。当時私は脊が小さかつたため、ここ一番精一杯とび上がって漸く手が届いたことを記憶している。午後には面接試験があり、場所は第一室と第二室が中庭東側二階、第三室が北側二階の室で、番号順に一名づつ中に入り試験が行われた。各室の様子は次の通り。

第一室：「今日よりはかへりみなくて大君の・・・」の和歌が机の上に貼つてある。先生は五名程度。中川

先生、故中村先生が居られたように思う。「これを読んで下さい」「訳して下さい」「どのような心が歌われていますか」「この歌についての感想は」「戦争に勝つために特別に何かやっていますか」程度のやりとりであつた。

第二室：机の上に東京の地図、磁石、物指が置いてある。先生は五名程度。主に見上先生が質問されたように記憶している。磁石を指して、「これは何か」「何に使うのか」「どちらが北か」、地図を指して「北はどちらか」「ここが学校、ここが宮城である。地図の向きを磁石に合わせ、宮城に向かって気を付けの姿勢で立て」、物指を渡して「ここが粕江の土地。学校からの距離はどの位あるか」等であつた。

第三室：先生は四名程度。二名の軍事教官（一名は森田教官）が中心になって質問された。（一室、二室の結果が既に届けられているように見受けられた。）「面接試験は出来たと思うか」「学校で級長や委員を

やったことがあるか」「その際、級の生徒はよく言うことを聞いたか」「聞かないときはどうしたか」程度で簡単に済んだ。

私がどのように答えたかは想像にお任せして記述は略すが、たまたま私の知っている内容であったため、自分でいうのもおかしいが可成り満足のゆく出来であったように思っている。昭和十八年といえば戦争の丁度真只中で、時代、試験の方法等は現在と大きく異なるが、それでも幼い小学（当時は国民学校）生から中学生に、一歩大人へ育つ過程における最初の選抜試験を体験し、新しく中学生となった瑞々しい新鮮な喜びと感動、将来への期待等を精一杯感じたものである。

最後に、今から思うと、当時教えを受けた諸先生は大変高いレベルの立派な先生が揃っておられ、厳しい時代の中で本当に誠心誠意よく教えていただいたことに対し感謝している。

私の中の玉泉

4期 鈴木 文男

「けふよりは かへりみなくて おほきみの・・・」。入学試験のとき、この和歌が目に入って、私の緊張感は一気にほぐれて行った。「今日以後は一身一家を顧みることなく・・・」という国語教科書の一節を思い出し、ほっとしたからである。そして今、還暦を前にして、自分史を辿ってみると、この防人の歌を地で行った人生だったか、と合点出来るのである。「かへりみはせじ」で一番苦労させられたのが家族であると気付くと、今更ながらこの入試の日を深く想わざるを得ない。そういえば、あの第二面接室で磁石の南北を迷ったとき、さつと窓に陽が差し込んで来たので、地図を針に合わせる事が出来た。あの時、私はこの学校に入りたいと願ったのである。

私にとって、玉泉の二年間だけが何故か悪童の時代だった。疎開先では勿論、小学校、高校、大学、何れの時も「異邦人」であった私が、越境入学した玉泉だけは生地で通せたのは不思議というほかはない。入学

して先ず環境の差異に驚いた。遠足で行ったことのない地域から来る級友達の話題も珍しかった。柏木君、仁藤君等は私にとり大人でしかなかった。計算の速い平川（友視）君、絵の天才児水野君、性教育のABCは専ら松久君に教わった。生まれ育った新宿とは大違い、世田谷、杉並のお坊っちゃん連も居れば、多摩川周辺の餓鬼大将も居る。毎日通る竹藪や畑、そして藁葺き屋根の農家の庭先での四季の変化、私には刺激の多いものばかりであった。「二・二六事件は正しかったと思うか」と矢部君に尋ねられた時も吃驚した。私にとりあの日は戸山ヶ原で大勢のスキーヤー達を眺めていた楽しい一日であり、父が興奮して帰って来た異常な一日でしかなかった。

先生方も多様であった。歴史の試験に「武士道について」と出題されて、生まれて初めて白紙の答案を出し、以来歴史を暗記課目から外したことも忘れられない。皆新しい学校作りに情熱を燃やされていた先生は

かりであつた。我々生徒達も明るく、仲良く、我武者羅に応えていた。あの苦手の教練でさえ、軍服姿の森田教官の慈眼だけは親しいものであつた。

だから、もしかしたら、私だけが悪童であつたのではなく、大多数の者が、時代の暗さも知らず、泥んこになつて、新しい体験をぶつけ合つていたのかも知れない。一方では何時でも「散兵戦の華と散る」覚悟を持ちながら、他方では絶えず試行錯誤を繰返しつつ、他所では得られぬ知的満足を得ていた場所、これが私の中の「玉泉」である。

恩師の思い出

4期 吉田 哲夫

憧れの玉中に入学して、何といっても嬉しかったことは、先生方の授業内容の素晴らしさだった。限られた字数なので三人の恩師の思い出を記す。

見上保先生。「地理」の授業内容の贅沢さはもとより、私達生徒に対して全身からほとばしる情熱をモロにぶつつけてのレッスンは、何事にも代え難い貴重な体験であった。何も知らない小生にとつて、地理学の初歩の解説、例えば中部地方で本州を横断する「フォッサ・マグナ」を語る先生の気合いは、未だに強烈なパンチとして残っているし、また玉中魂を説き、四期生の連帯感を植え付けて下さった特訓は、私の脳裡に焼き付いている。

一年では、ろ組に配属されたが、級主任は国語の中村高樹先生であった。授業を通して語る先生の文学についての造詣の深さは、少年の私にも理解できる水準の高さで、今にして思えば旧制中学の生徒には勿体ない随分立派な先生に教えを受けたわけで、生徒から

「チャン」と呼ばれた、シャイなご性格の暖かい人柄が、不運にも早逝されたことと相いまって、たまらなく懐かしく思われる。

英語の「シャモ」こと河野（中川）清先生のベランメ工調の早口英語の授業は、そのレベルの高度さで生徒を圧倒するとともに、こまめに廃物利用？の用紙を使つてデイクテーシヨンのテストまで労を厭わずなさつて下さったことは誠に有難いことであつた。また先生は、英語の教師らしく？妻ならぬワイフ愛称コロちゃんゝをめとられたことを生徒に照れながらのけられたことも心温まる出来事であつた。先生はその後旧制八高の教授となつて玉中を去られたが、私共玉中生の受けた授業内容の密度の濃さも成程とうなずけることであつた。

告白

4期 大山 博

「岡田」という数学の教師がいた。あだ名は「シワチャン」。彼の眉間には縦に三本の巨大な皺が刻まれていて、新人生といえども一目でその呼び名の妥当性につき得心したのである。

さて、以前からいささか絵に自信のあったOは、或る日の数学の授業中、机の下に隠した画用紙にシワチャンの顔を写生し始めた。勿論その皺の部分は殊更に際立たせ、充分なふくらみと陰影をつけたことは申すまでもない。ほど完成に近付いた時である。彼の斜め後に坐っていたMが、プーッと吹き出してしまったのだ。シワチャンの眼がキッとMを睨めた。「M君、何を笑っているんだ？」ヤバイ……。問い詰められたMはやむなく「O君の書いた絵をみてつい……。」「と白状した。「O！それをここへ持って来なさい。」「Oには最早それをすりかえるゆとりもなかった。似顔絵を一瞥したシワチャンの顔面が一瞬ひきつり、さながらえんま大王の形相へと変わった。クルナ！と思った瞬

間、猛烈なビンタがOを見舞い、Oは教室の隅っこまでふっとばされた。「廊下へ出て立つてろ……。」「

やがて終業のベルが鳴った。ところが教室内の授業は仲々終わらない。Oは気が気でなかった、シワチャンが故意に引延ばしをしているに違いない。他の教室からは既に授業を終えた生徒がドヤドヤと廊下へ溢れてきた。「何だお前！何してるんだ？」「誰の授業？どうして立たされたんだ？」と次々に聞く。下手な返事は出来ない。それを承知で悪ガキ共は、「大体あのシワチャンは生意気だよ……。」「等とわざと教室内へ聞こえるように「シワチャン」を連呼したのである。

以後、Oに対するシワチャンの攻勢が始まった。授業中必ず毎回指される。これにはOも参った。何か方法はないかとあれこれ考えた揚句、Oは小学校の同級で他の公立中へ通っている連中に数学の授業の進み具合を聞いて回った。（幸いなことに、当時公立中の教科書は共通であつた。）その結果、千歳中の授業がO

のクラスより2、3回程テンポが早いことを発見した。しかもその友人Kの家は、Oのところから走つてものの五分とかからなかった。あとは説明する迄もない。数学の授業のある前の晩、Kの家へ一走りすれば万事OK。授業中のOは指される度にサッソウと解答し続けたのであつた。

数年後、既に大学生だつたOは、疎開先から帰京した弟の転入学を依頼すべく母校を訪ねた。その時である。廊下で目ざとくOをみかけた岡田先生は「やあO君じゃないか！元氣かい・・・そういえばいつか僕は君をひどくぶつたことがあつたね。しかしあれ以来、君は数学が断然出来るようになったね・・・」と懐しそくに話しかけて来た。

今でもOは数学が大の苦手である。

心に太陽を

4期 筒井 隆

回想録執筆の依頼を受けて、私の心は直ちに十五の春にタイムスリップした。

当時、学校から久我山駅への通学路をわざわざ富士見丘迄遠回りし、といっても十分そこその距離だが、吉野君と一時間もかけてブラブラ歩いて帰る。初見君が、お前達まだ道草喰っているなと冷やかしながら追い越して行く。揚げヒバリ名のり出づる田園風景がそこにあった。

不来方（こずかた）のお城の草に寝ころびて空に吸われし十五の心

啄木

玉中受験の日、試験の合間の休憩時間、未だ中川姓となられる前の河野先生が小国民文庫の一冊「発明物語と科学手工」——だったと思う——を開いて、所載の「心に太陽を、唇に歌を持って」の詩を例のギョロ目とドデカイ声で朗読された。受験生をリラックスさせようというお気持だったか——。此の本には色々な話

が載っており、高柳健次郎博士が端緒をつけたテレビジョンの話とか、天然色写真——と当時は言った——等、こういうものが将来実現したらスバラシイと言うような記事があった。

入学して「一年は組」の担任がその中川先生だったので、何とも嬉しかった。中川先生は結婚前後、一時目黒に住んでおられたと思う。悪童共に冷やかされて、時に顔を赤らめておられた当時の先生の初々しく（！）りりしい顔が今でも脳裡に浮ぶ。

見上先生にはイタズラしたり宿題を忘れたりで何度か立たされた。或る時罰として（？）職員室に大きな地図を取りに行かされたことが子供心にヤケに嬉しかった。キビシイが暖かい先生のもとには今でも往時の（老）悪童共が群れている。

空襲警報が発令されると中学生は鷹研から早目に帰されたから、あれは鷹研の帰りだったか、ヤハリ周囲は青々とした麦畑だった高井戸駅の近くでひとしきり

空中戦の後、上空から空中分解した戦闘機の翼と思しきものが大きく弧を描いて頭上に落ちて来た。チビ仲間の、中西、矢部、山谷、成田、船越（稔）君達が一緒だったと思う、ソレ逃ゲロとテンでにアサッテの方に逃げ回ったが、実際には四〇五〇メートル離れた畑の中に落下した。後で、墜ちたのは日本軍の戦闘機だったと聞いた。

飛燕だったのだろうか、迎撃戦闘機がB29の尾部に体当たりするのを何度か見た。体当たりされ尾翼を損傷したB29はそのまま墜落することはなく、乗員は相模湾あたりに待機した潜水艦に救助されるのだと聞いた。

グラマンの機銃掃射は、B29の爆弾よりも恐ろしかった。家の陰からいきなり飛来して銃撃されるので、そのたび青梅街道の処々に掘ってあった防空壕に飛び込んで息を殺していた。爆弾の場合、直撃されれば一瞬で痛いも何もないし、相当至近距離でも伏せていれば何とかなると子供心にタ力をくくっていた。

私は終戦の年、信州の飯田へ疎開し、そこでも多くの心の友を得た。

表を宣伝カーが拡声器で「海征かば」の騒音を撒き散らして行く。私は現実に引き戻された。「海征かば」は、少なくとも我々世代の者には戦死者を送る調べであった。

戦後四十年、他の軍歌はとも角、私は未だ一度も「海征かば」だけは唄ったことがない。今でもそのメロディーを想い浮かべるだけで目頭が熱くなる。たった五、六行のこの曲を涙なくして唄うことが出来ないから。

日本人はかつての感性、デリカシーをどこへやってしまったのか——それは我々の責任でもあるう。

観光地のみではないスピーカーの騒音のことはここではいわぬ。

「海征かば」の調べを騒音として撒き散らして行く風潮を私は許せない。

雑 感

4期 栗田 年

玉泉中学時代の思い出を書くように言われて、改めて記憶を辿ってみたが、殆ど思い出せない。国民学校時代、特に昭和十六年の開戦の日や、B25による東京初空襲などは鮮明に覚えているのだが。きっと戦争たけなわの時期の入学や、勤労動員から敗戦までのばたばたした時代があつという間に過ぎたためか、嫌な記憶は忘れたいという自浄作用のためかであろう。

私の父親は職業軍人で、当時大陸の南京にいた。そのため特別の情報も入っていたのであろう。成城学園前の住宅地に住み、砧国民学校に通学していた私は、進学の際にも、家から近くの中学という理由で強く勧められて玉中へ入学した。玉中は当時の計画では、久我山から狛江へ移る筈だったからである。しかし、学校の移転より戦争の激化が早く、僅か一年で地方へ疎開する羽目になった。

東京での中学時代の記憶が薄いのは、私が玉中に一年間しか在籍しなかったことにもよる。十九年四月に

父母の郷里である松山（愛媛県）に疎開したことによって、他の仲間とは違った道を辿ることになった。松山では、学校も家も空襲で焼け、再び大洲に移ってその中学に転校したが、一方東京時代の家も玉中も、戦争で焼けることもなく、東京を逃げ出したことによって学校も家も失って放浪する羽目になったのだから、人間の運命とは奇妙なものだと思う。

一～二年生の頃

4期 並河 淳一

「今日は玉中の入学式。朝早くから家を出て行つたが、電車はぎゅうぎゅう詰めだった。校長先生の訓話がよく聞き取れなかったし、売店も一ぱいの人で、なかなか買えなかった。午後から入校時訓練があつたが、その時の先生の注意「(一) 名札を正しくつけること (二) 服やズボンなどにも名前をつけること (三) 明日、定期券のお金を必ずもつてくること (四) 乾布摩擦用に手拭を持つてくること (五) 爪が伸びていたら切つておくこと (六) 鞆の代りにはフロシキでないものに入れてくること (七) 毎日日誌をつけて、決められた日に必ず提出すること (八) お金は必要以外、五十銭以上はもつてこないこと。」

以上は、私が保管している(七七)にある) 玉中一年生時代の日誌の第一ページです。

私が在学したのは翌十九年七月までの一年四か月間ですが、玉中への通学は自宅のあった小田急線世田谷中原(現・世田谷代田)から下北沢へ出て、そこで帝都線(現・井の頭線)に乗換え久我山駅まで、日誌にありますように満員電車に苦しみの毎日でした。

久我山駅前で我々は隊列を組んで登校し、独身組の岡田先生達は「活力食堂」へと入って行かれました。学校までの通学路は、雨が降ると又カルミになる田舎道でしたが、春には両側の麦畑に揚げ雲雀の音が聞かれ、冬には藪の竹が雪にシなつて進路を塞いだのを憶えてえています。

今、この日誌を読み返してみしても、日々の学校生活で脳裡に浮かぶのは極く少なく、しかも断片的に過ぎません。僅かに残る記憶の彼方に浮かぶ学友の姿も十三歳の少年のままであります。当時、玉中は十中に居候をしていた恰好で、四月十日には玉中の建設予定地を見に多摩川の近くまで行軍しましたが、着いた用地は雑草が生い茂つて、些かガツカリしました。しかし、地学者の浅井校長先生が命名なさった周辺の多摩丘陵には、紅いモモの花が満開で美しかったことは憶えています。

その年の七月一日に東京府は東京都に衣替えし、それにつれて府立玉中も都立玉中となり、府立の文字を都立と書き替えさせられたわけですが、当日の午後、

五時間目に中庭で体操中、大きな地震があり、地面が上下し、校舎が倒れて来そうな感じで、指導の竹内先生が真つ青になられた顔は今も忘れません。

夏休み明けの八月二十一日（土曜日）に、それまで我々「は組」の担任であった河野先生に代わって、新しく着任された北川先生が担任になりました。河野先生には、七月三十一日から八月十日までの山中湖畔での「鍛錬」で大変お世話になりましたので、寂しい思いをしました。河野先生は後に結婚されて中川姓に変わりましたが、新婚時代に奥様がよく下北沢駅の改札口までお迎えに来ておられ、お二人で肩を並べてご帰宅なさる後姿を、我々（伊藤榮一兄、故渡邊榮一兄、初見清兄ら）はプラットホームから羨ましげに見送ったものです。

二年生時代の日誌は、どうした訳か残っていませんので、記憶を呼び戻す法ありません。只、池袋駅から電車に乗って練馬の先の東久留米方面へ農家の手伝いに行ったことを僅かに思い出します。

それともう一つ、マンガ絵のフクちゃんを上手に書いた水野浩兄が、岡田先生の授業中に先生の似顔絵をノートに書き、殆ど書き終ったところで岡田先生に見つかりました。先生は烈火の如く怒り、その絵を取り

上げて「後で教務室迄来い！」と言いついて、教室から出て行かれました。しかし、流石に先生もその絵は持ち帰らず、教卓の上に置いたままでしたので、水野兄に断わって記念に私が貰い受けました。ところが数年前（昭和六十年頃）偶々我が家を移転するため荷物を整理中に、思いもかけずその絵が出て参りました。色鉛筆で彩色してあり、「皺猿の君三十二才」（注、シワ三十二の意）と水野兄の筆で記入してあります。私は昭和十九年七月、食糧難と空襲を避けて、北海道へと東京を去りました。



教官に敬礼

4期 青井 徹

「教官殿に敬礼、かしらー中！」。教官は二列横隊に整列した我々に対して、右端から左端まで挙手で答礼する。「直れ！」のかかるまで教練の時はせいぜい四〇五秒間がふつうなのだが、「作業」の時間の梅野先生の場合は違った。十二十三秒間を要するのである。この間が我々にとってはまさに「忍」の正念場であつた。理由は時間の長短ではない。今にして思えば全く他愛のない話なのだが、「如何にして笑いをこらえるか」が問題だったのである。

軍国調一色であつた当時は、先生方は皆「教官」とよばれて「国防色」の服、戦闘帽、巻脚絆の着用が強制され、着帽時は拳手の礼という時代であつた。しかし、当時すでにご年配であられた梅野教官殿のそれは甚だ失礼ながら、どうにも様にならないものであつた。極端な阿弥陀かぶりの戦闘帽、今にもほどこけるのではとハラハラさせられる「たけのこ巻き」の脚絆、入れ歯の頬をモグモグさせながら、半ばずり落ちた眼

鏡など気にもかけない様子で、招き猫のような答礼をのんびりなさるのだからたまつたものではない。男子と言えども中一ぐらいの頃はやはり笑いたい盛りである。ちよつとでもおかしいと思えば笑わずにはいられない年代だ。「何とかがまん」と思うのだが至難の技だつた。幸い私は後列に並ぶことが多かつた。

「中！」でかしらは先生の方へ向けても目は可能な限り「招き猫」から外らして「畏れ多くも・・・」と無理に天皇陛下の事を考えたりしながら早く「直れ！」のかゝるのを待つのだが、その間がまことに長い。

「天皇陛下」の効き目もそろそろあやしくなり出すと、つい「前列の連中はさぞ・・・」と思つたりする。それが引き金になつて、今にも腹の方から波がせり上げて来そうになる。と、「がまん」の限界は大体皆同じと見えて、目の前の友だちの肩がかすかにヒクヒク始まる。もういけない。誰か一人二人「プスッ」とやると、それをきっかけに一度に堰が切れてしまふのだ。

はじめや礼儀に特にうるさかった当時の事、当然厳しく叱られた筈なのだが、不思議とその辺りの記憶はない。またそのような事を何回位繰り返したのかも覚えてはいないが、「悪ガキ」時代のなつかしい思い出の
一こまである。

奇遇ふたたび

4期 渡邊 卓

——家内が、受験生に数学を教えるようになって、間もない頃のことである。

「貴方の中学のころに、荻原さんというお友だちいた？」

全く思いがけない名前である。——たしかに、中学校の頃、祖師ヶ谷の自転車屋の息子に荻原君という人がいた。

しかし、彼とはもう一別いらい三十年以上も会っていない。風の便りにきくうわさでは、奥さんと娘さん達を残してブラジルに出掛けたままになっているとか……。

中学時代、彼と私たちは動員で中島飛行機研究所のプレス部門で働いていた。

その頃のことである——。

たまたま、休み時間に、すもうをとって遊んでいた彼が、なにかのはずみで、骨折したことがあった。しばらく工場を休んでいたのを覚えているが、その後ど

うしたのか……。

ともあれ、私の記憶にある荻原君というと、口数の少ない、どこか寂しげな感じのする少年で、その後の彼は別人としか思えないのだ。——その荻原君のお嬢さんが家内の生徒になるとは、全くの奇遇であつた。

駆け足で話を進めると、それからまた十年の歳月がたつている。今では荻原君のお嬢さんは立派な社会人で、お母さんとお二人の生活も大変幸せときいている。ところで、私は今ひそかに、ひとつの奇遇を夢見ている。それは、荻原君が、お嬢さんのように、ひよっこりと、私たちの前に姿を現わしたら——ということである。

嘗ての中学生の私たちも、いつしか還暦を迎え、人生の斜陽に向かいつつある。

荻原君！そろそろ、そんな奇遇が私たちにあつてもよいではないか。

音楽の先生

4期 吉野 一

——えーと杉並区荻窪四・一八・二〇、確かこの辺だな、あー此処だ。

ピンポーン。

貝増善次郎先生はご在宅ですか？

「はい、私ですが。」

——実はこの度玉泉中四回生で文集を出す事になりました。先生が私にとって最も思い出深い方の一人なので、当時のお話を伺いに参りました。

「そうですか。どうぞお上がり下さい。」

——早速ですが、当時大変お若くて都会的なご様子は、軍国主義の風潮の中で、縁無し眼鏡、背広と相まって、一際新鮮でした。

「眼鏡については、はつきりしません、着ていたのは、国民服だったと思います。実は武蔵野を出て、すぐ就職したのが府立十中で、併せて玉中の皆さんにも教える事となったのです。講堂に当時としては珍しくグランドピアノがあり、これを土埃から守るのに気

を遣いました。」

——確かに春先などの風の強い日は、正に黄塵万丈で、一瞬太陽が黒く見えた時がありましたが、入学して間もなくの新緑のある日、その講堂で、月光の曲を聞かせて頂きました。私が一番前のベンチで、初めて聞く曲の玄妙さに呆然として、先生が「何だ。

こいつ、うっとりしてやがらー」と同時に額をつつかれました。私も我に帰って恥ずかしくなり、照れ隠しに後ろを振り返ったら、入学祝い？の万年筆を何本も胸に差した佐伯君と、バツタリ眼が合ったのを覚えています。

「何しろ神田猿樂町の生まれで、ベランメーなので、今でも近くが火事だとなると、表に飛び出す有様です。」

——先生が出征される前の短い期間でしたが、河野先生の英語、中込先生の漢文と共に、忘れられない授業でした。

戦後、N響のピオラ奏者としてのご活躍は、新聞等で拝見して居りましたが、現在はいかがですか。

「演奏以外に指揮者として、ステージに立つ機会も多く、併せて日本指揮者協会の事務局長として、忙しく過ごして居ります。」

——今日はお話を有難うございました。

「皆様にどうか宜しく。」

岡田信吉先生のこと

4期 水野 浩

私が昭和十八年四月、玉泉中学に入学した時の数学担任が岡田信吉先生でした。その特徴のあるご容貌の為に、生徒達から「シワチャン」というニックネームを奉られていました。当時から独身で、河野先生と一緒に、毎朝、久我山駅前の活力食堂で朝飯を召し上がっており、生意気盛りの私達から何かと話題の種にされていました。

この文集でも何人かの方々が触れておられますが、当時、私は漫画をかくのが好きで、授業中、先生の似顔絵をスケッチしては回覧して、皆を笑わせていました。一度、先生に見つかって、顔が腫れ上がる程叩かれたこともあります。いずれにせよ、当時十三歳の少年だった私にとっては、そのちよつと滑稽な容姿によって、先生の存在は、唯単純に嘲笑の対象でしかなかったのです。

一年生の時か二年生の時だったか、記憶が定かではないのですが、当時、クラス委員だった私は持回りで、

朝礼の時、壇上に立つて挨拶をすることがありました。少しは緊張していたのでしよう、余り出来ばえが良かったとは到底思えません、あとで、村岡君から「水野、さっきの朝礼の時、岡田先生がお前のことをいかにも心配そうに見つめながら、『少し声が小さいな。もう少し大きい声で話せば良く聞こえるのに』とつぶやきながら、ハラハラしていたぞ」といわれて、びっくりした記憶があります。

昭和二十三年三月、旧制中学最後の五年生として卒業した訳ですが、特に卒業式とか卒業証書を買ったという記憶は全くありません。慶応の二年生の時、昔の玉中の仲間に出会いはつたり出会い、「西高に行くと卒業免状をくれるぞ。」という話を聞いて、杉並に用事があった時、久しぶりに母校を訪れました。教員室に入ると、岡田先生と国語の中村高樹先生が「やあ、水野じゃないか、元気そうだな。」と声をかけて下さり、まさに駆け出すような勢いで私に近寄り、色々と

質問を浴びせかけてくれ、大変な歓迎ぶりでした。まるで、実家を出た子供が久しぶりに帰って来たのを迎えるような有様で、自分の出た中学校に対して、大した愛着を持っていなかった私には、これは全く予想もしなかった意外な出来事でした。学校や先生の存在を見直す気持ちになったのもその時からだったと思います。話は岡田先生の想い出から少し離れます。私が中学一年の時のクラス担任は英語の河野（その後、結婚されて中川姓）先生でした。やや甲高いお声で洒落たお話を沢山して下さいました。地下鉄サムとか、高浜虚子の話とか、“You night or more head today’s something.”などは今も記憶に残っています。生意気な言い方を許して頂けるならば、どちらかというと私の好きなタイプの先生でした。

玉中会名簿のお陰で、先生の名古屋のご住所を発見しました。何となく懐かしくなつて久しぶりに年賀状を書きました。何を書いたか、余り覚えていないのですが、多分、「一別以来十数年の歳月が流れました。もう外ですれ違つても、もしかしたら、お互いに気がつかないかも知れませんか。」といった意味のことを

書き記したような気がします。

すると先生から「懐かしい。是非、一度会いたい。」といった内容のお返事を頂きました。その年の夏だったと思います。例によって村岡君から連絡があり、「中川先生が所用があつて上京されるが、その時、玉中四期生の人達と会いたいとおっしゃっている。」とのことで、確か新宿の高野フルーツパーラーの前で昼間何人かが待ち合わせました。先生は例のやゝ甲高いお声も相変わらずで、大変お元気そうに、世界卓球大会でスウェーデンに行ったとか、色々近況をお話しして下さいました。長い歓談のあと、今度は久我山の藤本先生のお宅に押しかけ、また延々とお喋りを続けました。しかし、私はその日の夕方、何かのパーティの先約があり、途中で先生に失礼をお詫びしながら、さつさとパーティに出かけてしまいました。その後、村岡君から、「先生は、本当はお前とゆつくり昔話をしたかったんだぞ。」といわれて、ひどく心苦しい想いをしたことを未だに憶えています。

話は再び玉中会と岡田先生の出会いに戻ります。村岡君の殆ど個人的な努力によって創り上げられた玉中

会はようやく軌道に乗り、二年に一回、定期会合が開催され、再び岡田先生との何回かの出会いが始まりました。少しお齡を召され、白髪も目立つようになりましたが、まだお元気で、私がご挨拶に行きますと、本当に嬉しそうに色々と昔の想い出話をして下さいました。

何回目の時だったでしょうか。それぞれの現在の人生観みたいな話になった時、ちょっと恥ずかしそうなお顔をなさりながら、「ねえ、水野君、僕は昔からこの言葉が好きなんだよ。」とおっしゃって、傍の空の箆袋の裏側にすらすると「男の子やも空しかるべき萬世に語りつぐべき名は立てずして」とお書きになり、「これは山上憶良の和歌なんだよ」と、子供が悪戯をして見つかった時のような、含羞んだお顔つきで付け加えられました。

この和歌に対しては、色々な解釈が出来るでしょうし、また、私は和歌に大して関心を持っている訳でもありません。そして、山上憶良がどんな状況の時に、この歌を詠んだかも、全く知りません。しかし、この言葉を聞いた時、私は大変失礼な表現かも知れませんが、

が、余りお幸せでもなかったかも知れない岡田先生の、自らの人生に対する切ないような想い入れを感じて、私は唯言葉もなく、黙りこくってしまったのです。

岡田先生のお兄様から先生の訃報がもたらされたのは、それから一、二年後のまだ薄ら寒い二月のことでした。含羞んだようなお顔つきで書いて下さった空の箆袋は、いまでも私の一番大事にしている貴重品箱の中に入っています。

男の子やも空しかるべき萬世に

語りつぐべき名は立てずして

岡田先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。合掌

鷹研の思い出

4期 溝部 澄男

勤労働員の時期は、昭和十九年十一月から終戦の昭和二十年八月迄の約九か月の、今から振り返ると短い間であつたが、当時の実感としては相当の長期間であつた。それは「月月火水木金」と休日が殆どなかつた戦時体制下、実際より長く感じた為とも思う。

昭和十九年には東京上空にB29が連日飛来し、本格的な爆撃が開始されて、小学生の疎開が始まつており、戦争は末期で将に敗色濃厚という状況であつた。勉強もおちおち出来ず、勉強を止めて工場動員に行くことには何の抵抗もなく、むしろ勉強も試験もない生活となることを歓迎する空気もあつた。勤労働員の行先が中島飛行機三鷹研究所と決定し、発表された時は、クラス一同歓声をあげて喜んだ記憶がある。当時この研究所は「鷹研」と略称されていたが、鷹研に配属されたその日か直後に兄弟工場である中島飛行機武蔵工場が、B29による初めての編隊集中爆弾攻撃により壊滅した。多数の勤労働員学生がその爆撃の犠牲にな

つたことを噂で聞いた。大変ショッキングな出来事であつた筈だが、毎日戦争の悲惨なニュースに慣らされてもおり、また厳しい報道管制もあり、当時はさほど大きな出来事として人々の口に上らなかつたように思う。

小生が配属されたのは、研究本館（現在も国際基督教大学の主校舎として使用されている）の正面向かつて左側の一階治工具部であつた。確か、十時、齋藤（英）、宮澤、三ッ橋、平川、廣瀬の諸兄と一緒にた筈である（記憶の誤りあるかも知れず、ご容赦乞う）。中学二年生ではプロの工員さんの足手まといに過ぎなかつたと思うが、先ず基礎訓練だつたのだろう、鋼板の切端を万力に挟み、朝から晩までやすり掛けの練習ばかりさせられた。また、ハンマーとのみで鋼板を削る作業や、ボーリング機で鋼板に穴をあける仕事もあつた。火の気は殆どなく寒さもこたえたが、空腹にも閉口し、昼食時は、食堂迄全力疾走した。飛行機

工場ということで食料は優先的に配給されたのだろうか、毎日十分とは言えないが、欠食ということがなかったのは幸いだった。

空襲は益々激しくなったが、中学二年生は学徒最年少ということで、空襲の都度、工場の外の林の中に退避させられた。上空でB29を迎撃する我が戦闘機の空中戦もこの林の外れで望観し、機首をもがれたB29がふらふら落下するのを見て歓声をあげたこともあった。武蔵野の自然がそのままの環境の中に工場があり、殆ど身の危険がなかったことは有難かったと思う。

硫黄島が落ち、本土決戦も予想される事態となり、鷹研も岩手県の水沢へ工場疎開となって、機械の梱包やら運搬の手伝いをさせられた。親しくしてもらった工員さんともお別れし、する仕事がなくなったので、今度は工場の空地を開墾することとなった。一生懸命働いたが、監督さんが出張で不在の時は、こっそりと野川に一同で出掛け、一日中ふな釣りをしてさぼったこともあった。この頃になると、艦載機の攻撃も始まり、多摩線沿いに低空銃撃した敵機が突然目の前に現われたこともあった。白面金髪のアメリカ飛行士の横

顔がはつきりと見えた。マリアナ通信という伝単も米軍機により撒かれるようになった。その頃は、東京はもう既に焼野が原となっていたが、「神州不滅」と教えられていた当時は敗戦など夢にも考えていなかった。八月十五日は重大放送があるからと職場から早退させられた。玉音放送は、はつきりと聞こえた。中でも「耐へ難キヲ耐へ忍ビ難キヲ忍ビ」という天皇のお言葉が印象的で、これからどういう事になるのか大きな不安を感じた。これで勤労働員も終わったのだと思った。

勤労動員の思い出

4期 吉田 恵一

太平洋戦争末期の昭和十九年、玉中二年の夏、それは勤労奉仕という形で始まった。記憶は定かではないが、多分西武線東久留米駅近くの農家の手伝いであった。そこは水田の多い農村地帯であったが、現在ではすでに市街地になっていることであろう。記憶にあるのは、夏の田の草取りの辛さと、ご馳走になったゆでジャガイモのうまさだけである。

昭和十九年十一月一日、東京上空にB29一機がマリアナから飛来したが、そのとき的情況は、今でも鮮明に覚えている。学校の帰路見上げたB29は、銀色というよりか、南極の氷のように透き通る美しいブルーで、雲一つない一万メートルの上空を音もなく淡く細い飛行機雲を引きながら南から北へ一直線に飛んで行った。美しいと思うと同時に、これは大変なことになるなと感じたものである。

そのころになると、太平洋戦争の戦況も相当厳しいと肌で感じられたが、とうとう十一月初旬、勤労動員

が決まった。そのとき我々は歓声をあげたものである。その様を見て長坂先生（生物）は、「上級生は悲愴な思いで学校を去り工場に行ったのに・・・君等は喜ぶなんて何たることか！」といった嘆いた。しかし、我々の大方の気持は、戦況が不利になるに従って学業にいま一つ身が入らず、また軍事教官岡村兵長の教練もいささかマンネリで、一刻も早くこの状態から逃れたいという思いと、早くお国の為に役立ちたいという当時の少年の純粋な思いが混り合って、あの歓声になったように思う。

動員先は中島飛行機三鷹研究所であった。そこは中央線武蔵境駅から南方徒歩約三十分のところであり、現在は国際基督教大学（ICU）と富士重工業の工場になっているそうである。

当時、三鷹研究所では陸軍のB29迎撃戦闘機キハ七の試作をしていた。「幻の戦闘機」（碇 義郎著、サンケイ出版）の記事を要約すれば、「キハ七のねら

いは、アメリカのP47（サンダーボルト）に対抗できる高々度戦闘機であつたが、状況変化により対B29用になつたものである。陸軍からの試作指示は、昭和十七年八月であるが、初の高々度戦闘機ということもあり、さすがの中島設計陣も手古ずり設計が終つたのは二年後の昭和十九年十一月であつた。試作三機、増加試作七機が要求されたが、完成したのは昭和二十年二月の一号機のみで、終戦時に二号機が完成間近という実情であつた。

全幅一三・四三メートル、全長一一・八二メートル、翼面積二六平方メートル、総重量六一〇〇キログラムで、日本の単発戦闘機としては異例の重量級大型戦闘機であつた」としている。

さて、三鷹研究所は、研究本館、機体工場、発動機工場からなり、我々は機体工場に配属された。職場は、本人の希望と要求人数を勘案して決められたようである。最も人気があつたのは飛行実験班で、石坂元雄君、初見 清君、糸井秀夫君等が幸運にも選ばれ、飛行帽を冠つて意気揚々としていた。

私は設計班を希望したが、栗田 晋君、井上一夫君

と三人で木型班に配置された。木型班というのは、設計図に基づいて木で実物大の飛行機を作る班である。班の編成は、紺野班長、神戸（かんべ）伍長、他工員七、八名で、我々学徒は彼等の助手として雑用を受持つたわけである。お陰で、鋸の引き方、鉋のかけ方、刃物のとき方などは素人ばなれの腕となり、後日大いに役に立った。

毎朝、工場へは、武蔵境駅前に集合し、霜柱の立つ道や、それが解けた泥んこ道を歩いて出勤した。それから皆とドラム缶の薪ストーブを囲んで駄弁つたり、暖をとつてから、やあら作業という段取りであつた。私は工場の作業は辛くはなく、むしろ楽しかったと思つている。

昼食は食堂で給食を受けたが、さすがは軍需工場で、赤い高粱飯ではあるが、当時としては質量ともに満足すべきもので、食堂通いが楽しみの一つでもあつた。帰りは、研究本館前に集合し、四列縦隊になつて軍歌を合唱しながら寒い冬の道を防空頭巾を冠つて歩いた。今の中学二年生と較べて当時の我々はなんと健気で純情であつたことが。

或る日、撃墜された米軍飛行機の機体の一部が本館前に展示された。その表面は凹凸のない流れるような曲線で、我々が作っている機体の表面と較べて言い知れぬ技術の差を感じたものであった。

年が明け、昭和二十年になると、米軍爆撃機や艦載機による空襲が激しくなり、最早平常の作業が不可能な状態となつて、工場疎開の噂も流れるようになった。我々の木型班も、工場内での疎開という形で、機体工場から離れた木造の小屋に移り、そこでなんとか作業をしていたが、気分は沈滞気味であつた。それでも昭和二十年二月、試作一号機が完成し、機体工場前で太田テストパイロットにより試運転が行われたときは、やはり感激したが、反面量産不可能なことを知り、なんとも言えぬ失望感を味わつたことも事実であつた。

私は、昭和二十年四月に疎開のためこの工場を去つた。その当時一緒に働いた工員さんはすでに七十、八十歳の年齢と思うが、どうして居られるだろうか。

勤労働員・想い出されるままに

4期 初見 清

「大東亜戦争も今や酣（たけなわ）となり、我等学徒はこの聖戦遂行の一翼を担うため・・・」。鷹研への入所式で読んだ宣誓文の出だしはこんなことだったと思います。たしか昭和十九年十一月二十四日朝のことでした。武蔵境の駅から二軒余りの道を、隊伍を組み軍歌を歌いながら行進してこの入所式に臨んだ私達は、一体どんな目をしていたのでしょか。戦局の展開が著しく不利になっていることは漠然と気付きながらも、この戦争に負けるなどとは誰一人思わず、ある種の使命感を抱きつつも、学校の授業や試験から逃れて、新しい毎日が展開されることへの期待に胸をふくらませていたようにさえ思われます。

今考えるとこの時期に米軍は、占領後急造したサイパンの航空基地にB29を集結し、日本本土空襲の為にシャトル体制の構築を完了していたのですから、戦争は『酣』どころか、この時期を境に日本の敗戦に向かって雪崩のように展開していったのでした。

入所式が終わった直後に警戒警報が、そして間もなく空襲警報が広い構内に鳴りひびきました。B29の本土初飛来です。「学生は防空壕に入れ！」という大声で私達は地面にぼっかり開いた入口から壕に入りました。防空壕とはいっても、地下を素掘りしただけのトンネルで、明かり一つありません。先頭に立つて入った私は真暗闇の中、足許に気をつけながら泥の壁を手探りしながら奥に進みました。間もなく、反対側から女性らしい集団がこちらに向かってくる気配がしました。「待て待て、向こうから誰か来るぞ」と叫びましたが、後続百余名の圧力は緩みません。遂に手探りの私の手が掴まえたのは柔らかく温かい女性の手でした。生まれてこの方、年頃の女性の手握ったのはこれが初めてですから、それこそ全身が硬直する程のショックでした。後で聞くと、私達と略々同時に入所した武蔵野女子学院の生徒が、トンネルの反対側から私達同様手探りで突進して来ていたのです。

その後どうこの事態を收拾したのかどうしても思い出せません。とんでもないことでも起っていれば間違いないく覚えているでしょうから、多分幼い戦士として恥ずかしくない対応をとったのでしょうか。

なお、当日の空襲では、鷹研は無傷でしたが、中島飛行機の武蔵工場では爆撃により被害が出たとあとで聞きました。

勤労動員の初日はこんな風に波乱含みでスタートしました。

それから八か月余、大岡昇平の小説の舞台にもなったあの構内の美しい雑木林の中で、グラマンやP51の急襲から逃れる為に走り回ったり、女子挺身隊（防空壕の女学生達をたしかこう呼んだ筈）とのささやかな交流に胸を轟かせたり、年上で世知にたけた工員さん方ときわどい歌を歌ったり、正に戦争と青春が凝縮された毎日でした。

以下は数々のきわどい歌の中で最も高尚なもの——
ここで別れちゃ未練が残る　せめて調布の駅までも
送りましょか送られましょか　甲州街道は恋の道
想えば、海軍士官を父にもった関係か、自らも何と

なく選良と位置づけし、またひたすら規律を守ること
を至上と信じていた鼻もちならない私に「人の世」に
対する目を開かせてくれた貴重な貴重な動員八か月で
した。

夏空と黒煙と

(玉中時代の思い出・一)

「鷹研」。我々にとって決して忘れられないこの言葉は、勤労働員に行った中島飛行機三鷹研究所の略称である。鷹研への勤労働員は昭和十九年十一月二十四日から始まった。入所式中島乙未平所長の訓示を聞いている最中に警戒警報のサイレンが鳴り、引き続き空襲警報が発令されたが、これがB29の東京初空襲で、頭上で高射砲弾が炸裂するという、極めて象徴的な波乱のスタートとなった。

私の配属先は研究本館一階の材料研究部隊。塗料などの品質テストをする班だった。別の班には野崎君と森君がいた。塗料のテストといっても、あまり本格的なものではなく、いきおい私も殆ど仕事がなかったが、福田さんという職員が「アメリカの塗料は品質が良くて、飛行機に塗ってもいつまでももつが、日本の一度海の上を飛んだりするとボロボロになってしまふ」と口惜しそうに言っていたのを思い出す。

4期 村岡 精一

はじめのうちは、空襲警報のたびに防空壕に待避し、待避の回数に応じて若干の手当が支給されたが、空襲が頻繁になったためか、中学三年になったせいかわつしかそれもなくなくなった。昼食ははじめのうち正門近くの第一食堂で、あとでは機体工場南側の第二食堂で、麦飯や高粱飯を食べたりしていたが、第一食堂では時折そばでトラックがエンジンをふかすことがあり、代用燃料に使っていたピリジン（本来は金属研磨用の薬品）の刺激性の悪臭が辺りに立ちこめて、とても食べるどころではなく、食器を持って逃げ回ることもあったりして閉口した。その他、空襲のあと、防空壕の中に首を出した不発弾を恐る恐る見に行ったり、五月の高空襲で鉄道が不通になり、南武線回りで通勤したり、色々な体験をした。その中で、特に強烈な印象が残っているのは、戦闘機の襲撃を受けたときと、終戦のときのことである。

二十年に入り、戦局逼迫と共に、機密保持のためか鷹研機体工場は「皇国第三〇四五工場」と呼ばれることになったが、その頃工場の一部が疎開することになって、連日機械類に木札をつけて送り出す作業が続いた。我々玉中生は残ることになったが、職場がなくなった治工具部の仲間が十人程集って「農耕隊」ができ、工場内の空地を耕して芋などを作っていたので、私もお願いしてそこに入れて貰った。六、七月だったろうか、警戒警報は出ていたが、当時既に警報は出っ放しに近い状態で、特に意識しなくせがついていたので、仕事の合間に数人の仲間と芝生に寝そべって駄弁っていたところ、突如ガンガンという高射砲の音と共に戦闘機が一機、低空で迫って来た。流石に驚いてそばの茂みに飛び込み、伏せて息を殺した。敵機は急上昇して飛去り、事なきを得たが、茂みに飛込んだ時、某君が思わず「声を出すな」と叫んだので、あとで大笑いしたのを覚えている。確かに、声を出すと敵に聞こえるかも知れない、そんな切迫した雰囲気だった。

八月に入ると戦局は一段と緊迫、昼夜を問わずB29が飛来した。農耕隊のリーダーは矢根軍一さんとい

う人で、どんな経歴だったのか、今にして思えばリベラルな思想の持主だった。どこで仕入れて来るのか政府の動きなど、あとで考えると確度の高い情報を持っており、近衛公がソ連を間にたてて米英と和平交渉をしているそうだが、などと時折聞かせてくれた。八月十五日の朝、工場に行くと、矢根さんが皆を集め、「今日の陛下のご放送は、日本が降伏するという内容のものだ。放送があれば、どんな混乱が起きるか判らない。

家に帰れなくなるかも知れないから、君達は今すぐ家に帰れ」と言い渡した。私達は半信半疑だったが、時間中に裏手の線路を伝って「脱走」するのは慣れていたもので、その手を使って帰宅し、正午には家のラジオで玉音放送を聞いた。予備知識のお陰で内容も大体把握できた。虚脱した気持だった。

翌日（翌々日だったか？）工場へ行くと、都筑先生が皆を本館裏の空地に集め、「こういうことになって本当に残念だ。天皇陛下もお若いのであるから、我々は今度はしっかりやって、陛下にご安心願わなければならない。」と訓示された。「今度はしっかりやる」とは何なのか。今でもはっきりしないが、当時の軍国

少年としては、もう一度戦争をやって、今度こそ米英に勝つことだ、と単純に思い込んでしまったのも、あながち笑えぬ話といえよう。

工場内では、敵の手に渡すよりは、と色々な書類や作りかけの飛行機などを空地に運び出し、次々と燃やし、二、三日の間真夏の青空に黒煙が上り続けた。ジュラルミンが払底したため鉄板を使った「剣一」、皆がつい先頃まで精魂込めて作ってきたこの特攻機の胴体が、リベットだけ溶け、鉄板は折れ曲り、黒焦げの無残な姿をさらしていたのが、今も脳裡に焼きついて離れない。戦争に負けるというのは、こういうことなんだな、とつくづく思った。剣一については、他の諸君が色々触れているので繰返さないが、改めて平和の尊さを噛みしめる次第である。

こうして我々の勤労働員は終った。約九か月。はじめ三組、百五十人いた生徒は、疎開などで百人強に減っていた。

十九年の秋

4期 藤田 益生

一九九〇年の今、会社付き合いを早目に切り上げ帰宅した日、テレビでは中国天安門広場が放映されていた。八九年、ゴルバチョフのペレストロイカと共に民主化の波が押寄せた暑い夏、鄧小平に代表される中国当局は戦車の轍で大衆の願いを秋の彼方に追いやった。画面は北京大学学生のその後の教育の一齣で、共產思想の強化のため軍事教練の真最中のシーンだったが、カラーテレビをモノクロフィルムに置き替えば、それはそのまま五十年前の我々世代の姿であった。

萬朶の桜か 襟の色

桜（はな）は吉野に 嵐吹く

軍歌が次から次と甦える。

昭和十九年十一月二十四日、都立玉泉中学校二年組の私共は、中島飛行機三鷹研究所に学徒動員されたのだった。中央線武蔵境駅から四列縦隊に隊伍を組み、国防色（カーキ色）の学生服に編上げの靴、その上にゲートルを巻いて靴音高く軍歌を斉唱しながら、曲がりくねった砂利道を工場へ通っていた。帰りは、配属された工場の班単位で、二両つなぎの多摩線を使い、

それこそ全員総立ちの工員列車に揺られて帰って来る日々が続いた。

三鷹研究所は、武蔵野の雑木林の中に広がる、航空機を試作生産する工場であった。南側に森が続く中に、東西に白い滑走路をもつ調布飛行場があり、西方は多摩墓地があった。研究所ではB29を迎撃するキハ七戦闘機を試作していた。私が配属されたのは部品製作担当班で、ろ組の仲間が五、六人おり、近藤、永井（悟）、大竹の諸君が一緒だったように思う。

昭和二十年に入って、三月十日の東京下町のB29による焼夷弾攻撃を皮切りに、空襲は熾烈を極め、艦載機のグラマンや双胴のP38を含め、三日をあけず飛来していた。暑い初夏の青空の広がる日中の空襲で、研究所の周辺に爆弾が落ち、横浜工専の動員生に連れられて、爆風で飛んだ七、八メートル位の摺鉢型の跡地を怖いもの知らずで見に行った。この辺は昼休み時間、「L」の襟章をつけた宇佐美という東京帝大文学部の学生とよく来た所であった。青葉の萌える五月頃だったと思う。宇佐美さんは端正な顔の上に角帽をキ

チンと冠り、木と木の間に腰を下し、その周囲を木の葉を折って走り回っている私達に、「勉強しろよ」、「勉強しないと「負けるぞ」と力をこめて言った。それから間もなく、「勉強するんだよ」と言い残してみえなくなった。多分学徒出陣したのだと思う。工專の学生は、宇佐美さんの言い残した「勉強しろよ」を毎日実行していた。同時に我々にも二次方程式だの因数分解だのを教えてくれた。工場は非常に忙しく、キハ七試作機の試験飛行が始まった途端、特攻機の試作を手掛けたように思えた。

戦局は次第に八月十五日に向かって動いていたのだ。私には工員さん達の中で囁かれている「戦争は終りだ」ということと敗戦とが結び付かなかった。日本は戦争には必ず勝つと信じて疑わなかった。高円寺の住家の近くまで焼夷弾を浴び、近くの米屋さんから焼けた米をもらって石の混った雑炊を食べ、盲腸が再発するよと両親が笑っていた。そしてお国のために工場で働き、食べたい盛り、配給米で白いご飯を食べたことがなく、常に空腹の中で育ち、それでも「一億火の玉」でお国がまとまって戦争遂行に専念していた時代、敗戦が目前にあったがそれに気付かない私共国民。八月上旬、私はこのような東京から、父の勤める

国民学校の学童疎開と共に一家族東北に向かった。東北本線から支線に乗り替え陸前古川駅で降り、数日後そこで終戦を迎えた。

時は流れ、新聞やテレビなど情報過剰の今日、「人類みんな兄弟だ」とテレビで叫んでいる人もいるし、「日の丸掲揚」が卒業式で何パーセントになったと喜んでいる人もいる。人々、また国々それぞれ考え方は多様化し、更に多岐に亘っている。それだからと言って、個人だけでは生活していけない社会の仕組と、国と国との関係になっっている。それぞれの進んでいる道筋に、これだという結論はない筈。我々がある程度の幸せを味わい、お互いに相手を尊重し、少なくとも今が我慢出来、その中に楽しさを見つけ生きていければと思うこの頃である。「L」の襟章を付けた宇佐美さんが言った「勉強しろよ、しないと負けるぞ」は、今でも耳許に残っている。それは終生変わらない我々日本の生きていく道しるべであろうと思う。恐らく精励をやめた時、二十一世紀かその次世紀には我々もまた「天安門」へ落ちていくかも知れない。このような中で私は還暦を迎える年齢となった。

皆様のご活躍とご壮健を祈るや切である。

鷹研のこと

4 期
山原
茂一

玉泉中に入学した昭和十八年といえば、戦争の真只中。玉中の思い出はやはり中島の三鷹研究所への勤労働員だった。キハ七という新鋭機を作る為に、昭和十九年の秋、中央線武蔵境駅より工場まで約二十分、稲垣軍事教官に教わった軍歌を歌いながら、隊を作って行進した。毎日毎日がやはり寒かった。工場に着いても我々はたぎ集めが日課だった。昭和二十年になり、空襲が激しくなると、工場にまとまっていたは危ないというので、疎開が始まった。多摩線という変った汽車に乗ったのも思い出だった。そして戦争は終わった。一からやり直すこと、それは食糧を作ることだった。そして一生の仕事として開拓を始め、現在に至っている。

青春一瞬の夢（勤労働員時代）

4期 小澤 一智

B29が最初の東京空襲を開始した昭和十九年（一九四四）十一月に、玉泉中学四期生・い、ろ、は組（約百六十名）は、中島飛行機三鷹研究所（現在・国際基督教大学・富士重工業）での勤労働員の生活を始めた。

当初は中央線武蔵境駅北口に集合し、点呼をとり、日の丸に「神風」と書かれた鉢巻をしめ、軍歌「萬葉の桜か衿の色・・・」「花も蕾の若桜・・・我等学徒の面目ぞ ああ紅の血は燃ゆる」を歌いながら工場へ行進した。声が大きいということで、小生は初見、篠田君と共に中隊長に選ばれ、駅前で大声をはりあげ号令をかけた記憶がある。当時武蔵境駅には若杉国民学校（杉並区）同期の女性が都立武蔵高等女学校に通学しており、よく出会ったので、一層大声で格好良くやったものだ。丁度色気の出始める年頃であつたのだ。我々は、工場では特攻機の部品作りに精を出した。福島県出身の少年工の人達と一緒にあって、ヤスリが

けやらボール盤等の作業をさせられた。オシヤカ品を作り、心配したこともあつた。お国の為にと一生懸命働いた積りだが、どの位お役に立てたのか。食糧事情は極めて悪く、我々にも給食券が特別配給された。少年工の間では食券の盗難が多発して、食事が出来ない人が出る状況もあつた。小生は弁当を持参し、食券を少年工にあげた思いもある。食事はジャガイモ四〇五個とコーリヤン飯（我々はお赤飯とも言つていた）で、今では全く想像も出来ないものであつた。

空襲警報のサイレンで大きな横穴の防空壕へ待避したのを想い出す。空襲が益々激しくなり、我々部品製造関係部門は多磨墓地周辺の墓石屋さんの店に疎開した。小さな店で部品を作っている、戦争は勝てると思ひ込んで頑張った。それからは武蔵小金井駅から帰宅するようになった。その途中、現在の小金井街道前原坂上の四つ角（現・茶月すし店）に小澤パン店（家業）小金井支店があつた。その看板の「パン」の

字が「パソ」と読めたので、小生は「パソ」と呼ばれるようになった。確か、フクチャンマンガの上手だった水野君が名付親だったと思う。

現在、小生は小金井市に住んでいるので、度々戦中思い出の場所を散策するが、全く昔の面影もない。昔お世話になった墓石屋さんも思い出せなかった。世の中の変わりようと歳月のたつ早さには唯々驚くばかりである。

先日、靖国神社の遊就館を拝観し、大東亜戦争で特攻作戦に殉じたご祭神（十九〜二十歳代）の遺品や史料を拝見して、誠に胸の痛む思いであった。英霊に感謝し、戦争の悲惨を知り、今の豊かさを知る機会を得た。

我々の勤労働員時代も、戦時中の軍国少年・青春一瞬の夢であった。還暦を迎えた我々のこれからの人生を、お互いに元気に大事に生きて行きたいと思う。

勤労働員時代の思い出

4期 宮澤 文雄

愈々戦争も激しくなった中学二年の後半から、私達も勤労働員に工場に出ることになりました。ハンマー、ヤスリの使い方を実習するため、最初の一週間位は青年学校に通いました。鑽（たがね）を左手に持ち、右手の半拳大のハンマーで、笛の合図とともに万力に挟んだ鉄板を切つてゆきます。ピツ、ピツ。うっかりすると自分の左手指をしたたか打つてしまいます。ヤスリかけはハンマーより難しかったです。ヤスリの先端に左手をあて、右手掌で体重をかけながら強くヤスリを押し出すのですが、左手に体重をかけ過ぎると鉄板の切口が丸くなつてしまいます。直角ゲージを当てながら、切口が水平になるためには、かなりの熟練が必要でした。左手の人差し指と親指は傷だらけ、右手掌はヤスリの柄の当る部分に忽ち肉刺（まめ）が出来、水泡となつてしまいました。

旋盤とかドリルとかいった工作機械を使う仕事に着きたいと願つたのですが、七、八名の学友と一緒に配

属されたのが、何と治工具班で、朝から晩までハンマー振りとヤスリかけによる当て板作りが私達の仕事となつたのです。当て板とは、飛行機の機体のアルミ板に自動ハンマーで鋲打ちをする時、突き抜けないように後に当てる厚い鉄板のことで、複雑な場所の当て板には複雑な格好をしたものが必要となります。毎日が鉄板を挟み込んだ万力との格闘で、右手掌の肉刺は潰れては出来、また潰れる。一か所に三十個位は出来たと記憶しています。その部分の皮膚はなめし革のように厚くなりましたが、その後は出来なくなりました。左手人差し指と親指は誤つてハンマーで打つために二、三倍に腫れ上がり、手袋が入らなくなる程でしたが、その内に慣れ、自分の手指を叩くことも少なくなりました。

そんなある日、同じ研究所に動員されていた女学生が先方から通路を歩いて来たのですが、チラツとその方を見た瞬間、自分の指を叩き、血が飛び散りました。

女学生の「アッ」といって目を覆うのがわかりましたが、女の子の前です。私は痛いのも我慢して作業を続けたりしたこともあります。こんなことを鮮明に憶えているのは、その頃私も年頃の男の子で、女の子を意識していたのですネ。

ある冬の日、膝上にも達する大雪が降り、電車が止まってしまいました。朝早く家を出て、雪をかき分け、世田谷の三軒茶屋から三鷹まで歩いて行ったのですが、研究所に着いたのがお昼頃でした。そこには中川先生がお見えになり、「おお、宮澤君、よく来た。今日はすぐ帰りなさい。」そう言っただけで靴の配給券を下さいました。当時の革靴は豚革で千鳥の足跡のように毛穴があり、水がすぐしみ込んで来るような粗悪なものでしたが、靴一足も容易に手に入る時代ではなく、有難く戴きました。もつと感激したのは、先生が率先して雪中を工場までいらっしやっていたことです。

空襲は毎日に激しくなり、電車が動かない時はいつも歩いて出勤しました。自慢話になりますが、中学卒業時に戴いたのは卒業証書のみで、皆勤賞というのはありませんでしたが、そんな時代の無欠席者は、若し

かすると私だけでも知れませんか。

ヤスリかけは段々と熟練し、多くのものをこなせるようになったある日、厚さ二ミリの鉄板で仲間と一緒に三角定規を作る競争をしました。二十ミリの定規ですが、切口を真つ直ぐにし、かつ平面に対して直角にすると、平らな所に立つようになります。名称は忘れましたが碁盤のような鉄台の上で、定規に朱肉をつけてこすります。朱肉のとれた所は出っぱっている訳ですから、直角ゲージを使いながら精密ヤスリをかけていく。こんな操作を何百回と繰返し、遂に台の上に立てることが出来た時には本当に嬉しく、その定規は現在でも私の宝物としてしまっておりあります。

そのうち工場の大部分が岩手県の水沢、黒沢尻の方に移転し、私達治工具班は農耕隊となったのです。畑仕事のため鋤を作ることはお手のものでした。鉄板を切り、形をつけて焼きを入れ、柄をつければそれで出来上りです。本当のお百姓さんの鋤のように立派に出来上りました。畑は笹の生えた荒地を耕す大変な作業でしたが、時には桜の木にのぼって小さな桜んぼをとり、桑畑に入って桑の実を食べるなど、自由な時間

が結構あつて楽しい毎日でした。

自分達の植えたサツマイモ畑で草取りをしていた時、銀紙のテープのようなものが太陽光を受けながらキラキラと上空から沢山落ちてきました。電波妨害をするためのものです。日本の戦況が悪く、降伏するようにと書かれた桃色の紙も舞ってきました。それからどの位時間が経過したでしょうか。南の方から「ゴ—」という大爆音が聞こえ、B29の大編隊が次から次と空を埋めつくすように、それもあり低空で私達の頭上を通り過ぎていったのです。高射砲の音はほとんどなく、また迎撃する日本の戦闘機の姿は一機もありませんでした。それが確か終戦の前日であつたのでしょうか。

今、国際基督教大学の付近を通る度に、当時のことを思い出します。B29を迎撃し、小さな日本の戦闘機飛燕が体当たりをしていく姿、必死に紐を引くが、落下傘が開かず、落ちていく飛行士、それらを目のあたりに見て、今の私達の平和が、その人達の犠牲の上にあることを考えると、心から冥福を祈らざるを得ません。

勤労動員時代

4 期 金網 繁男

昭和二十年の初頭、中島飛行機・三鷹研究所（鷹研）の機体工場で。

第一話

キ八七が、ジュラルミンに輝く勇姿を現わしつゝあった。翼と胴体が結合され、各種の艤装が行われ始めた。中学二年生の我々も一生懸命働いた。時に日本本土はB29による爆撃が熾烈になりつゝあり、迎撃に飛び立つ日本機は、高々度で飛来する敵機に近付くとさえ出来ない性能のものが主であった。

大東亜決戦機と命名された四式戦・キ八四疾風（はやて）の伝統を受け継ぎ、そのスタイルはキ八七に引き継がれていた。製作のため太田工場から転動してきた社員は、「八七は八四よりひとまわり大きい」と話をしてくれた。当時の日本としては、最大級の戦闘機であった。排気タービンを持ち、強制冷却の星型エンジンが当時の最高水準のエンジンとなる筈であり、キ八七が量産されていればB29をバツタバツタと撃ち落

とす筈であった。が、現実には甘くなかった。二十年三月に完成し、試験飛行を調布の飛行場で行なったが、実戦に参加する迄の道は遥かに遠かった。

数回の試験飛行を行なったのみで八月十五日を迎えたキ八七は、可哀想な試作機であった。

第二話

現寸の青写真が組立班に届いた。昭和二十年一月の厳寒の朝、熟練工のS班長はキ一一五（剣一）の丸型断面の胴体青写真を拡げ、治具（JIG）の製作を開始した。我々中学生も、出来る仕事を手伝った。キ八七とキ一一五の並行作業であった。

キ一一五は、主翼と胴体を亜鉛メッキの鉄板で作り、尾翼は木材の骨組にベニヤ板を釘で打ち、布を糊で貼り、銀色の塗料を塗って仕上げるものであった。アルミ合金を節約するため考えられた、今では信じられない方法であった。胴体下面は爆弾をボルトで固定するための凹みがあり、車輪は離陸後捨てて二度と戻れな

い特攻機である。突貫工事で三月に試作一号機完成。キハ七と同PHASEでテストを開始、調布飛行場を飛び立った。増加試作が日本全国の工場で行われ、約百機程作られたと戦後の出版物で読んだが、実戦には一度も出なかったとのことである。

エピソード

時移り、場所変わらず。正門から真直にキャンパス内を広い道路が西へ。学生達は「昔、滑走路だったそうですね」と言っていたが・・・鷹研の正門はICU（国際基督教大学）の校門となり、校舎へのアプローチの周辺の芝生には男女学生が集い、平和そのものである。昔、中学生の我々が学業をなげうってお国のためにと働いた場所も、今の若者にはこの程度の認識しかないらしい。昔飛行機工場だったことを知っているだけましかなと納得。昭和十九年十一月から二十年八月まで足かけ十か月、我々はキハ七とキ一五に全力を投入したが、結果は戦局に全然関係せず、単なる「骨折り損のくたびれ儲け」。

しかし、私個人として振り返ってみると、戦後航空再開により航空会社に職を得て、旅客機の整備の仕事を

三十余年やって来て、鷹研で得た知識と技術はプラスになっていると実感している。三クラス百五十人の他の方々のご意見と違うと思うが、今振り返ると、あの十か月が私の一生に大きな影響を与えてくれているのは事実である。

新入社員が来ると、「俺は中学二、三年のとき、勤労働員で中島に行き、打ったリベットは五万本だ」とハタタリをかますことが出来るのも、勤労働員のお陰である。職務上、ダグラスとボーイングの工場へ新造機を見学に行く機会があったが、飛行機の製造は、（そのスケールや精密さ、作業効率などの違いはあるが）基本的には鷹研でやっていた事と変わりが無いと思った。

十五歳の青春

4期 毛利 英康

「花も蕾の若桜 五尺の命ひっさげて・」。ゲートルに戦闘帽というカーキ色づくしの姿で、武蔵境駅から鷹研へと声高らかに軍歌を唄って幾度堂々の？行進を繰返した事か。顧みれば、紅顔の美少年？だった多くの友や恩師の面影が今、走馬燈の様に自分の脳裏をよぎっている。就中、修身担当であった都筑教諭の訓話もさることながら、青々とした髭の剃り跡と、眼光の鋭い独特の厳格な雰囲気は何故か忘れられない。先生には、後へは一步も引かない力強さがあつた。

昭和十九年の半ば過ぎから、日本は坂道を転がり落ちるが如く敗戦への道のりを確実に辿っていた事など知る由も無く、我々は天皇陛下の御為に学徒動員の後方戦士として氣力を奮い立たせ、一機でも多くの飛行機を前線へ送る事を誇りに思つて、日々与えられた業務に励んだものだった。当時、自分も小さな命をかけて祖国に忠誠を尽くそうとする燃ゆる思いがあつたのを、今も鮮烈に記憶している。生と死のはざまに立つ

た時、悠久の大義に生きるとは何かを真剣に考えて泣いた十五の春であつた。此の頃の純粋な心情を思うと、之を書きながら臉に滲むものを押さえることが出来ない。

試作機キ八七。工場のえらい人から、「今までにない秀れた戦闘機であり、日本が制空権を握るには之を増産するのが早道だ」という様な事を聞かされ、見よう見まねで銀色のジュラルミンの穴に黄色いリベットをエアハンマーで何回となく打ち込み、指先に血が滲んだりしても頑張つた。始めは中々うまくゆかず、リベットが曲つたり、潰れたりして怒鳴られやり直しの連続で疲れ果てた事もあつた。そんな時親切に何くれとなく面倒を見て呉れた工員の中島さん、どうしていいだろうか。懐かしい人である。

昭和二十年三月十日の東京大空襲を契機として、B29の焼夷弾投下とグラマンに依る機銃掃射が一段と烈しくなつて来た。自分は当時東横沿線に住んでいた

ので、前夜の空襲で私鉄も省線も全て不通になった時などは、暗い内に起き、渋谷経由で鉄道を延々と歩いて鷹研へ辿り着いた事もある。今から思えば恐るべき？ 気力と体力であり、産業戦士としての面目躍如たるものがあつた。町々が焼野原になって残り火が燃え、黒焦げの死体がそこに放置されて異臭を放ち、それはまぎれも無い悲惨な光景だつた。又、空襲警報の最中を歩いている時、突如低空にやって来たグラマンの機銃弾を浴びて、危うく命を落しそうになった事もあつた。自分はアメリカを心から憎んだ。そして日本人は彼等へ必ず報復しなければならないと思つた。

しかしその祈りも空しく八月十五日がやって来た。拭いても拭いても汗がしたたる、猛烈に暑い日であつた。陛下の玉音放送は殆ど聞き取れなかつたし、特に敗戦という実感も湧かなかつたが、とにかくブツンと糸の切れた虚脱感と、前線で戦死した人達に申し訳ないという無念さがあつた。その日の夕方、自分は一人吉祥寺の町をあてどなく歩いてゐた。暮れなづむ晩夏の井の頭公園の空にくれなゐの夕焼雲がたなびくさまを唯ぼんやりと見つめていた。

茜染む南の空に散りゆきし

我が同胞（はらから）の御魂（みたま）おろがむ

あれから茫々の四十五年、日本人は働き続け、GNP三百三十六兆円で世界第二位、曾つては憎しみ合つた米国に対する貿易黒字が五百億ドルを越える巨大な経済大国となつた日本。そして今我々は残照の還暦を迎える。

動員時代のスケッチ

4期 柏木 正史

研究所の人々

正門を入って幅の広い道を行くと、左側に灰色のストレートで囲まれたデッキカイ建物があった。ここには我々と同じように女学生が動員で働きに来ていた。この建物は、何故か明かり取りの窓が高いところだけにあり、しかもそれは曇りガラスで、建物は発動機工場だった。女学生は我々と同じようなカーキ色の上着を着て、同じ色のズボンをはき、皆が黒い腕力バーをつけていた。

工員同士は、発動機工場と機体工場とではとても仲が悪いという話であった。

発動機工場を過ぎると、右側に食堂があった。この厨房で働いている人は殆ど女の人で、皆ころころとよく太っていた。冬でも腕まくりをして、大きな声でガヤガヤと喋っていてとても元気がよかった。食事をするには、まず行列の後に並んで、自分の番が来たら食券を出すと、大豆のいっぱい入った飯や、お赤飯だ

と思ったら高梁のいっぱい入った飯をドンブリに盛ってくれるのだが、はじめにドンブリにいっぱい入れて計りに乗せてゴツソリ減らすのを見て、いつもあーあと嘆いていた。オカズはひじきの煮たのが多かった。

職場の人々

私の配属された職場は、組長（？）が和田さんという年配の（当時五十歳位のおじさん、と思われた）脊の高い頭の光っている人で、いつもダイダイ色の作業衣を着、黒いゲートルを巻いて紺の足袋を履いていた。また、いつも近くの焚火にあたっていて、我々に燃し木を採ってこいとはかり言っていた。その下が稲葉さんという、和田さんに近い年齢だが、真面目で芯が強いけれど、小柄で物静かな親父さんタイプの人だった。クタビレた背広を着て、普通のゲートルを巻き、黒の短靴を履いていた。

鈴木さん（？）。稲葉さんより少し若い人で、少し足の具合が悪いようだった。いつもブツブツ文句を言

っていることが多かったが、木工の仕事に強い人で、黒っぽいズボンに足袋に下駄を履いていた。ある日、燃し木用に採ってきた角材を万力に噛ませて鋸で切り、鉋で削ってドリルで三つ穴を開け、本物と同じ下駄を作り、和田さんとその上の人（度の強い眼鏡をかけていた）にあげていた。

加瀬さん。兵隊検査前の若い人で、高円寺か阿佐ヶ谷にあった寮に住んでいたが、少し調子の良い人で、千葉県旭町（現・旭市）から出てきた徴用工といわれ、アルミ板の加工作業が得意だった。

我々より二歳位年上の湯本さん。東北の方から来た、小柄な純朴な人で、色白で冬になると手が霜焼けで女の子の手みたいにプツクリとふくらんで、所々ヒビ割れてとても痛そうだった。彼とは何となく気が合って、彼の部屋と一緒に鉱石ラジオを作ったりした。この湯本さんと同じ位で、横浜高専から学徒動員で来ていた人がいたけれど、どうしても名前が思い出せない。この人もとても真面目な人だった。

我々和田組の仕事は、試作機の燃料タンクを二種類作ることだった。使う機械は電気ドリルとボール盤と、

手で回す小さなプレス機とエアークランマーだけで、作業はすべて手作業だった。

ここで覚えた手作業が今の日曜大工に大いに役立っている。

花と稲葉さん

ある日、空襲警報が発令されて、機体工場の裏側の雑木林の方に避難して行つた。林の終りに多摩線の線路があり、この線路を越えて西の方に行くと、ポツンと農家があつて、ガラスで作った本格的な温室があつた。そこでは、驚いたことに小さな鉢植えの草花を作っていた。大豆の絞り粕や高粱をまぜた飯を食っていた時代で、花など飾っていると非国民呼ばわりされる時節だったけれど、ポカポカと暖かい温室の中で赤や黄や白い小さな花を見ていると、毎日何かに追われているような中で体の芯からゆつたりと安らぎを感じた。農家の人は、ちん入して来た我々に秘密を見られて困惑したような感じだったが、断わりはしなかった。そして一緒だった稲葉さんは二鉢買って、「家へ持って行け」といって一鉢をくれた。二人は温室のあったことや、そこで花を買ったことは秘密にして、買った花

は新聞紙に包んでそつと持ち帰らなければならない雰
囲気だった。

工場の疎開

空襲も多くなり、B29の他に艦載機のグラマンや
P51が度々来襲するようになって、機体工場の中の
我々のような小物を作る班は、多磨墓地の入口に並ん
でいる石屋さんの作業場に疎開することになった。作
業台やプレス、ボール盤といった大きい物は、荷車に
載せ、それを牛に引かせての一見のんびりした引越し
だったが、人が持てる物は皆で毎日々々背負って運ん
だ。

この石屋さんの作業場へ歩いて行くのには、機体工
場の裏の雑木林の中を通って多磨線の線路に降り、少
し先の鉄橋の枕木の上を渡り、線路に沿って多磨墓地
へ行くのが近道だった。日に何度も往復するのは楽で
はなかった。いつの時代にも知患者はいるもので、
我々の隣の班では、研究所内の防空壕を掘るところで
使っていたトロッコを改造して車輪を多磨線の線路の
幅に合うように拡げ、荷台もバラバラにして人が手で
運べるようにして草陰に隠しておき、汽車の通らない

時間を見計らって手早くトロッコを組立て、荷物をそ
れに載せて勾配を利用し、面白いように走り去って行
ったりした。我々はそれを眺めながら、背の荷をゆす
り上げて一汗拭いていた。

石屋の作業場

多磨墓地の入口の両側には、玉川、立花等と書き込
んだガラス格子の石屋さんが軒を並べていた。それぞ
れの店の裏手にある、墓石を削ったり磨いたりする作
業場に、工場から牛車で運んだ作業台を置き、外から
内部が見えないようにするのと風よけのため、杉皮
をトタン板の代わりに張りめぐらせた。ここでは引越
しに明け暮れている間も、和田さんはよく焚火に当っ
ていた。我々の仕事は、毎日ブリキで作った蓋付きの
丸い容器を持って、遠く離れた工場の食堂に昼飯をと
りに行くことだった。そんな毎日で、作業らしい作業
をした記憶はない。空襲警報が出ると、すぐ隣の多磨
墓地の中へ避難した。墓地の中はキッチンと区画されて
いて、桜がとても美しく咲いていた。墓石は大小いろ
いろあり、形も様で、植木も手入れが良く、お墓と
いう暗さは全くなって、美しく気分の落着ける所だっ

た。いろいろな人のお墓があり、一つ一つ見て回ると珍しくて、またいろいろと発見があり、空襲も忘れ、時のたつのも忘れてしまうようだった。墓石に刻んだ名前が朱色に染めてあるのは、まだ生きている人のものだということを知ったのもこの頃だった。

武蔵境駅

錆色をした省線電車で武蔵境駅北口へ降りて駅前で隊列を整え、北口から南口へ出る踏切を渡り、毎日軍歌を唄いながら鷹研へと歩いた。秋から翌年まで歩いたのに、何故かどんよりと曇った日しか浮かんで来ない。駅には省線の他に多摩線の引込線があり、煙突の長い小型の蒸気機関車がいつも踏切のそばにいて、石炭を釜にくべる音や「シュー」という力強い蒸気の音をさせていたが、いざ走り出すときは「ポーツ」という小型蒸気機関車特有の可愛い汽笛の音を残して、小さな客車二両を引いて軽快に走り去るのだった。

勤労動員、疎開そして終戦

4期 藤井 安彦

私が昭和二十年八月十五日の終戦を迎えたのは、疎開していた愛知県蒲郡市西浦町であった。よく聞き取れず、意味もよく分からなかった天皇陛下の玉音放送を聴き、戦争が終ったことを知ったのは、勤労動員中の兵器工場の倉庫の中であった。その工場は、岡崎市の近くの幸田という所にあり、主に機関銃を製造していた。

これより前の昭和十九年十一月、玉中二年生るとき、中島飛行機三鷹研究所へ勤労動員に駆り出された。武蔵境駅から遠い道のりを、寒さと空腹を抱えながら通ったことを鮮やかに覚えている。それは、懐かしさは程遠い辛い思い出である。

初冬のある晴れた日、B29の襲来を受けたことがあった。いつもの通り勤労動員の仕事を終えて、西荻窪駅で降り自宅へ向かう途中、ただならぬ雰囲気があったりに漂っていた。私は自宅のそばまで来た時、思わず立ちすくんだ。自宅の横の空地に大きな穴がポツカ

りと開いているではないか。そしてその横の家は、瓦はふつ飛び、家が傾いていた。群がっている人に「一体どうしたんですか」と尋ねたところ、B29が爆弾を落としていったのだという。その向こうの我が家の方に目を向けると、二階の窓ガラスがメチャメチャに割れているのが目に入った。「こりや大変だ!」と心臓をドキドキさせながら我が家へ飛び込むや否や、

「オーイ、みんな大丈夫か、生きているか」と大声で叫んだ。家の中から母がうす汚れた顔を出して、「いやあ全く命拾いをしたよ。アメリカの飛行士がもう一瞬爆弾の投下ボタンを早く押したら、我が家は全滅だったのよ」と、興奮で青ざめた顔をしながら話した。数軒先の家は直撃され、一家四人死んだとのことだった。荻窪にある中島飛行機工場を狙ったのが、それと落ちたとのことであった。

このことがあってから、疎開を真剣に考えるようになった。翌二十年二月、現在私が住んでいる松本市の

叔父（医師）の所へ、母と妹と三人で一時疎開することになった。しかしそこには既に数世帯の疎開者が入っていたため、約一か月後、私ひとり兄嫁の実家のある西浦町へ移った。

西浦は、気候温暖で空襲の心配もなく、海が近く魚が新鮮な上、ミカンなどの果物も豊富で、食べ物には不自由しなかった。兄が岡崎中（現在の岡崎高）の教師をしていた関係で、私は岡中へ編入させて貰った。学校は殆ど授業らしい授業もなく、幸田の兵器工場へ通勤した。

八月十五日、終戦を迎え、日本が敗れたことを知ったが、別に悲しい想いはなく、何かホッとした開放感を覚えた。その日は列車が不通となつて、幸田から蒲郡まで友達と線路の上をトボトボと歩いて帰った。鉄橋の上を歩く時、川の中に吸い込まれそうな恐怖感を覚え、スリルがあった。家に着いたら深夜となり、義姉やその母である小母さんが心配して待つていてくれた。「事故にでも逢ったかと思つて、それは心配し、何度も駅へ迎えに行ったのよ。」その言葉を聞いたトタン、空腹、疲れ、寂しさ、それに鉄橋を渡った時の

恐怖感が頭の中で交差して、思わず涙が溢れてきた。一生忘れられない終戦の日の想い出である。

その年の十月、いろいろお世話下さった兄嫁と小母さんに見送られ、私は西浦を後に東京へ帰ることになった。ぎゅう詰めめの列車の窓から、秋の陽光に輝く三河湾の海を眺めながら、一路東京へ向かった。小母さんが握つてくれた、梅干入りの真白なおにぎりのうまかったこと。約一年ぶりに見る東京は、一面焼野が原で、まさに「国敗れて山河あり」であつた。我が家のある西荻窪は、戦災にも逢わず無事であつた。食糧難でろくに食べ物はなく、箸も立たない雑炊をすすりながら、東京での生活が始まつた。闇市で空腹を抱えながらリンゴの歌を聞き、鬼畜と思つていたアメリカ進駐軍のカッコいい姿を物珍らしげに見ながら、私の戦後の一ページは始まつたのである。

そして懐かしい玉中へ復学した。

鷹研日記より

4期 田中 昭

俺は今、鶴川の奥の広袴という所に住んでいる。夜空の星がきれいに澄んで、寢室の窓からは月が眺められる、まことに環境の良い所だ。車で五、六分の野津田には、今や鶴川の名士・近藤徳彌君がおり、歩いて五、六分の真光寺には、一年先輩のTBSアナウンサー・榎本さんが住んでいる。そこに長男夫婦と孫一人、もちろん女房も一緒に暮らしている。こんな生活の中で、玉中時代に中島飛行機に勤労働員で行ったときのことか思い出される。

ではその時の話を二つ、三つ……

「おい田中、それから川崎（工員）、ちよつと来い。」神田班長が俺達を呼んでいる。何事かと行くと、「お前達、目方が軽そうだから、この胴体の中へ、よいと言いつた入っている。」俺は何が何だか判らなかつたが、その工員と一緒にキ八七の機体にモグリ込んだ。暫くすると、機体がブルブル揺れ出した。俺は何となくその工員と顔を見合わせた。「川崎さん、どうしたんだろっかね？」と俺が聞くと、彼は事もなげに、「そうか、お前は初めてか。俺達は今エンジン実験の重し

にされているんだよ。」と言う。「何だつて？ そんなじゃあ、今エンジンかかっている訳か？」と俺。「そうだよ。」と彼。そのうちにだんだん尾翼の方が浮き上つて来るような感じた。俺は何となく怖くなつて来た。機体もゴトゴトゆれている。俺は心細くなつて「まさかこのまま飛び上がるんじゃないやあねえだろうな。」と言うと、彼は「そんな事あんめえがよ。この飛行機はまだ完成してねえんだから。」と澄ましている。俺はダンダン気分が悪くなつて来た。今考えて見ると、こんな呑気なテストの仕方をやっていたんでは、当時最新鋭と言われて評判の高かつたキ八七も飛べるわけがないよね。

キーン！！ プスッ！！ プスッ！！ ヒュン！！ ヒュン！！ 何だこれは？？ 空襲警報はまだ出ていない筈だ。俺は思わず空を見上げた。するとそこにはグラマンが二、三機飛び交っている。大変だ！！俺は夢中でそばのあじさいの植込みに潜り込んだ。暫くして静かになったので、酒井雄學君と約束してあつた是政多摩川へ向かつた。俺はよく作業をサバつて多

摩川へ泳ぎに行ったもんだ。翌日工場へ出ると、皆がキハ七の周りで騒いでいる。仲間の永井哲男君にどうしたのか尋ねたら、昨日の空襲の時、飛行機を出しっぱなしで皆逃げちゃったんで、エンジンに穴をあけられちゃったんだということだ。キハ七が実戦に間に合わなかったのは、これが直接的な原因らしい。

今日は朝から空襲警報だ。北の方の空が真っ黒になっている。あれは中島の田無か武蔵工場がやられてるんだってよ、と工員達がわめいている。ああそうか、あつちは大変なんだなと思っていたら、学徒は今日は作業を中止して早く帰宅しろという命令が出た。シメタとばかりに俺はすぐ帰ることにしたが、先刻の空襲で中央線は不通だということだ。だが俺は南武線回りだから関係ない。稲田多摩川（現・登戸）まで行くと、今度は小田急が不通だ。さあ困った。これは多摩川の浅いところでも渡って帰るかと考えていたら、渡部力君に会った。どうする、と彼に相談すると、彼は小田急の線路を歩いて行けばよい、と澄ましている。以前歩いたそうである。ああそうか、電車は不通なんだから危なくはないんだな、ということだ、俺はワントン（渡部君）の後からノコノコ歩き始めた。ところが！ところが、である。暫く歩くと線路は多摩川の鉄橋に

さしかかる。ワントンはヒヨヒヨイ先に行くが、俺はダンダン足がすくんで来た。うっかり下を見たら、もう河原の上だ！水があれば大丈夫と思うが、夏場の多摩川は石コロだらけだ。流石の俺もすっかり怖くなってしまった。ワントンはもう大分先に行って、川の中程だ。俺はとうとう観念して、肩から下げていたカバンを斜めに背負い直して、枕木に四つん這いになり這いずり出した。ワントンが遠くで何か怒鳴っている下を見るなどとも言っているんだろ。だがもう間に合わない。遙か下の河原の石コロを見てしまったんだから。鉄橋の上の川風は涼しい筈なんだが、俺は全身汗ビツショリでやつと渡り終えると、渡部君が待っていてくれた。喧嘩度胸でも体力でも、俺の方がずっと上だと思っていたが、こりゃあワントンにはかなわねえと思った。それから俺は、口には出さないが、ワントんに一目置いている。今もそうだ。

勤労動員時代

4期 天谷 芳夫

戦局急を告げる中で、昭和十九年、二学期の末には、遂に我々二年生も勤労動員で中島飛行機三鷹研究所に出向くことになった。学校を離れることの切実感の反面、本土決戦が叫ばれ『一機でも多く』の情勢の中で、飛行機に直接関わることが出来るということに、大きな期待をもって臨んだものだった。

入所は十一月二十四日で、奇しくもこの日が、B29による本格的な日本本土爆撃が開始された最初の日であった。午前中、一通り入所式や説明を済ませた昼過ぎに、警戒警報から空襲警報に入った。我々は初めは本館前の雑木林の中に避難した。今まで見たこともない編隊を組んだB29が、高射砲の弾幕や豆粒のような迎撃戦闘機を寄せつけず、東寄りの上空を次々と北上しつつ、キラキラ光る機体から爆弾を投下する瞬間がはつきりと目撃された。そのあと我々は、地下道となっている真つ暗な防空壕に再避難した。この初空襲で、三鷹にある同じ中島飛行機の武蔵製作所がやら

れ、死者多数を出す被害を蒙ったのであった。この日を皮切りに空襲は帝都をはじめ全土に拡がり、終戦まで続くことになるうとは全く考えも及ばなかった。

この日、玉中の他に、工業学校と高等女学校（杉並高女）も一緒に動員であった。既に研究所では、東大、航空工専、女子美術、工業学校の上級生等が勤労動員で働いていた。

入所訓練時の講話では、創業・草分け時代のこと等が話され、中島知久平のこと、利根川河川敷を飛行場としたこと等を聞いた覚えがある。その後、短期間の基礎実習のコースを、近くの青年学校で受けた。ヤスリがけで掌に豆を作ったり、タガネでのハツリで、自分の打ち下ろすハンマーで痛い思いをした。この見習の期間にも、また空襲警報の避難で中断させられたこともあった。（この時、迎撃を終えて調布飛行場に着陸してゆく戦闘機の中に、片翼がないのを一瞬見たと青柳君らが言い出して、まさか、いや本当だ、とやり

合ったりした。新聞に、B29に勇敢な体当りをして無事に生還したとの記事が出て、やっぱり、となったことが思い出される。）

職場は、玉中が機体工場、工業学校が発動機工場で、配属の前に一通りの説明があり、希望をとったが、飛行実験、組立、設計などに人気があった。我々は小澤君と共に「部品」班に決まり、佐野君（故人）も同じ班の隣の組となった。鉄骨の大きな格納庫の、機体工場の入口近くが組立、奥の方が部品の職場で、中間には電気、左側には現図、右側には荷重試験の職場などが配置されていた。

鷹研の規模の広大さには驚かされた。武蔵野の雑木林に囲まれ、『工場』のイメージとは全く違った恵まれた環境にあった、まだ素掘りの地下壕に潜ってみた、工事中の大格納庫の足場から屋根に上って、飛行場を一望したりした。

工場では、キ八七高々度戦闘機の試作が進められていて、図面の上の桁に870×××の番号がついていた。部品の職場では、飛行機のイメージからは程遠い部品ばかりであったが、それでも操縦桿のアセンブリ

ーなどが来た時は、とても嬉しかったものだ。組立職場の方では、機体リベット打ちのエヤハンマーの音や、板金加工、エヤコンプレッサーの音などで、かなり騒々しかった。試作工場のことであってもか、軍需工場では普通であった昼夜兼行、休日なしといった緊張感はなく、初めのうちはこれだよいかんという感じを抱いたこともあった。試作の個別生産ということもあったのだろう、金鋸、やすり、ボール盤、ハンドプレス、ハンマー、定盤、ケガキ、それに型、治具などの、比較的簡単な工具、道具で、熟練工が部品を作り出してゆく腕前には感心させられた。

通勤では、初めは武蔵境駅から隊伍を組み、時には軍歌行進で、三十分以上かけていたが、先生方の配慮で多摩線新小金井まで乗るようになって、随分と楽になった。旧式SLに箱型の客車で、車掌は女性が当たっていた。発車の時ドアを中から閉めてしまう悪戯などして面白がったものだった。この年昭和二十年の冬は大雪が多く、電車の遅延で杉並の家まで歩いて帰ったこともあった。遠方の方はさぞ大変だったと思う。

キ八七の一号機が完成したのは、二十年二月であつ

た。長く組立て台上で手がけられてきた機体が工場前の広場に引き出されて、地上運転が行われた。手がけた部品もどこかに組込まれていることを思うと、嬉しかった。翼や引込脚のカバーの形、胴体側面の排気タービンなど、特徴のあるスタイルであった。車輪止めをかませたのエンジン全開テストで、取り付いていた作業員を吹き飛ばしてしまった場面が思い出される。その後、試験飛行を見上げたことがあった。特徴のある高い金属音で、脚は開放しのままの姿であった。

キ八七が完了したあとに、次の新しい機種が入って来た。本土決戦体制が決定的となり、特攻戦術のためのキ一一五「剣一」なのであった。工場内の左側のエリアに機体の組立治具が並び出し、間もなく飛行機の姿が現われてきたように記憶する。キ八七に比べて遙かに小型、単純で、しかも物資不足のためか、機体や翼に亜鉛引き鉄板、ベニヤ板、羽布張りが使われていた。胴体の中はがらんと、爆弾を抱えるのだという。誰言うことなく特攻機だと知れた。その後、このキ一一五の試験飛行を見たことがあった。低空を飛行中、何やらボンボンとエンジンの不発音が入るのが聞

こえた。エンジントラブルであつたらしい。それでも、先を急ぐ戦局で合格とされ、生産へと入って行ったのだという。

空襲が激化して、帝都が焼土と化してゆく中で、我々は近くの多磨墓地門前に隣接する石材店に疎開した（この時のことは、他の人が詳しく書いているので省略する）。一方、その頃職場の主力も岩手県黒沢尻（現・北上市）に疎開して行った。我々はその後、本工場に戻ったものの、職場がないので一時事務部門に配属されたりして、七月には再び現場の仕事に戻り、やがて終戦を迎えることとなる。

緊迫した、追詰められるような戦況下の動員時代であつたが、鷹研の環境はまだ恵まれていた方であろう。飛行場の見物、雑木林の中での休息、構内に走る素掘りの地下壕での遊び、下の池での材木乗り、現場で合間に小物やフライパン作り（ハンドプレスの型が出来ていた）。終業後は政へ泳ぎに行った元気な者もいれば、職場の先輩学徒からタバコの伝授を受けた人、動員の女学生にモーションをかける器用な人もいる。防空壕に避難の合間のダベリ、暖をとる焚火での工員の

世間話やきわどい話、“オシャカ”などの現場用語、空腹と食堂の給食、職場慰問団の演芸、産報での物資配給、多磨墓地周辺疎開の時の春の野原の路・等々、色々な場面が思い出される。

友人達の中にも、空襲で家を焼かれる者が次々と出た。しかし彼等はほんの一、二日休んだだけで職場に復帰するのだった。松久君もその一人で、家を焼かれても相変わらず陽気に振舞い、大事な碁盤を池に沈めて助かったことなどを話していたのが忘れられない。また、ある空襲のあと、私は学生寮にいる兄の安否を気遣って自転車で渋谷方面に向かって煙の立ち込める中を急いでいる時、罹災した直後の佐野君に偶然出会い、何と慰めてよいか言葉もなかったことがあった。同君もまた、間もなく職場に姿をみせたのであった。故人のことを思うと胸が痛む。

工場時代は、先生方と教室で毎日接するということにはなかったが、先生方は、あのような戦況下に、近頃街で出会う修学旅行の中学生の年頃の生徒を工場現場に出していた訳で、今更ながら本当に大変なことであつたろうとつくづく思われる。

八月に入ると、遂に広島に「新型爆弾」が投下され、「相当の被害」が報ぜられた（軍事消息通の中島君が、ウラニウム爆弾だと言っていた）。帝都の主要部は既に焼土と化し、この頃になると爆撃は殆ど一日一都市という位のペースで地方に及んでいた。それでも幸いなことに、鷹研は機体工場に夜間若干の被弾があつただけで済んでいた。

八月十五日、天皇陛下の重大放送があるということで、正午前炎天下の研究本館前の広場に工場全員が整列した。玉音放送はよく聞き取れなかった。抑揚のある澄んだお声が印象に残っている。断片的なお言葉の端々から、やはり降伏なのだということを感じとつた。放心虚脱の状態で、その後どうしたかは覚えていない。

・・・・・・・・・・・・・・・・

夕方は武蔵境の駅まで皆と語りながら帰つたと思う。残念さと虚脱感の一方、来るべきものが来たという心境で、もう今夜は空襲もなく安眠してよいのかなという安堵感をもつたことであつた。

翌日からの数日間、私は原因不明の高熱に見舞われた。出勤した時には、格納庫の中はもう飛行機も道具

類も跡形もなく取り払われて、ガランとしたスペースになり、床下の部品庫もコンクリートで埋められていた。研究本館の方も、机や備品類が整理されてしまっていた。工場中総動員で後始末が行われたのであった。鷹研を後にした日や、学校に復帰した最初の日の確かな記憶がない。

往時を偲んで、記憶をたぐりにひと時あの地を訪ねてみた。

今はICU（国際基督教大学）のキャンパスとなっているが、それでも当時の面影がまだ残されている。正門からロータリーに至る真直な道には、桜並木が見事に育っている。当時の研究本館は、大学の本館として今も立派に生きている。機体工場であった大格納庫は、今は取り払われて、跡地が『研究地域』とされ、世界各国の樹木が植えられており、土台だけが跡を残している（ICU発足当初は、そのまま体育館として使われたそう）。よく空襲で避難した防空壕のあった南向きの斜面の辺りには、大学教授のハウスが並んでいる。武蔵境駅は、南口が開設された以外は大きな再開発はなく、当時の面影を留めていた。新小金井駅

の周りは、畑や野原がすっかり住宅街に変わってしまった。

思い起こせば、入所の日、いきなり空襲の洗礼を受けて以来、僅か八か月余りで終戦に追い込まれるまでの激動の時を、我々は鷹研での勤労働員で過ごしたのであった。様々な記憶が甦り、色々な思いが感ぜられる一方で、判らないこと、今度初めて知ったことも多く、今更のように四十五年という歳月の重みを感じるのである。

水泳部の思い出と今

4期 桑原 成巧

終戦近い頃の真夏、動員されて行った中島飛行機研究所も、疎開、疎開で仕事もないので、よくサボり、是政多摩川へ泳ぎに行った。当時の多摩川は、数メートルの深さの石まではつきりと見えていた程澄んでいた。

毎日毎日が日照りが強く、八月十五日の昼、よく意味の解らない玉音放送を聴いている時も、照り返しが強かったことをよく覚えている。

終戦宣言により一年ぶりで学生生活に戻ったといっても、ギコチのないものであった。

そうこうするうち、迂余曲折があったが、今というクラブ活動が出来るようになって来たのは喜ばしいもので、授業が終わってから、野球、バレー、テニス等を、裸な道具もないのに、日没まで若さにまかせて遊んだことは、一生のうち好い思い出の一つであった。

しかし、食料不足があつて、何時も空腹でいたが、これは今の中学、高校生に理解しろといつてもムリであ

ろう。だけれど、空襲、灯火管制、機銃掃射のない平和な生活で青春を謳歌できたのは、物のない時代の中での楽しさであった。

戦争中、防火用水として造られた二十五メートルのプールで、「水泳部」を仲間と先生と話し合つて設立したことは、非常に嬉しいことだった。講堂の外の凹みに強引に部室を作り、先生から撤去せよと命令があったが、無視して、赤、白、青等、色とりどりのフンドシをぶらさげて下校したものであった。当時、全校の上水道は、電気モーターで地下水を汲み上げ、賄っていた。プールの水はその残りを使用していたので、補給が間に合わず、プールはアオミドロの生息地となり、その中で練習していたので、白いフンドシはいくら洗つても薄緑色となっていた。現代のお母さん方がきいたら、全て退部させてしまっていることと思う。

しかし、水泳をしたい一心で、水の補給をするため、当時の担当部長先生の宿直の夜に許可を得て、給水塔

の電気モーターが過熱せぬよう、部員が交替で徹夜をしながら濡れ雑巾で冷やしたものだ。この部員は西高の第一期生から十数期生迄続いたためか、結束も堅く、今でも年二回位、数十人が集まりコンパをやっていることは、自慢出来ることと思う。

今、このメンバーを「西水会」といい、現役を入れて二百人となっており、今年は第一期生である小生もこの八月で還暦となるので、この西水会から赤いタオルでも戴けることとなりそうだ。ともかく、今でも週一回は泳いで、健康の維持に努力している。

戦後の玉泉中学の思い出

4期 渡部 力

昭和二十年八月六日と九日に、広島と長崎に新型爆弾が投下されたとのニュースを聞いた。それが原子爆弾であることは知る由もなく、白い衣服を着ていれば大丈夫というようなことを聞かされていた。ベルリン陥落の丁度三か月後、ソ連は日ソ不可侵条約破棄の通告と共に突如満洲、樺太に一斉に侵攻した。このような状況の中で、八月十日頃からラジオはレギュラーな番組を全く放送しなくなり、音楽番組のようなものだけを流していた。

八月十五日の正午に天皇陛下の重大発表があるとの予告が、前日にあった。この予告の受取り方は色々であった。学友の一人は、天皇陛下による国民への激励であり、本土決戦に備えて努力せよというものだろう、と言った。またある人は、もうこれ以上の戦争は出来ないで、ポツダム宣言を部分的に受入れることではないかなどと話した。さらに、皇国に敗戦・降伏はあり得ないとの議論もあったが、そういう人でも、本土

決戦のあとどうなるかは誰も判っていなかった。理屈で考えると、東京でも中央線の中野あたりから東が全部焦土となっていたので、これはどうにもならないという友達もいた。

玉音放送は、確か研究本館の前に集められて聞いたように思う。その時まで、我々は玉音なるものを全く聞いたことがなかった。ラジオから流れてくるお声はややかん高く、それ迄ご真影から受けていた天皇の印象とは異なるものであった。「耐へ難キヲ耐へ忍ビ難キヲ忍ビ」というお言葉を聞き、ああこれで終わったのだ、と思った。放送のあと都筑先生から訓示があり、「軽はずみな行動をとらないように、指示があるまでは今まで通りに鷹研に来るように」と言われたように思う。

このあと鷹研では色々な書類の焼却整理が始まった。私自身鷹研では現図から研究本館三階の設計、そのあと事務の会計課へ回っていた。事務の建物は不審火で

焼失しており、そのために整理焼却するものは余りなかったのではないか。この頃は水泳部の桑原君と一緒にであった。武蔵境の駅にビラが貼られて、厚木航空隊の名前で徹底抗戦を訴えていたのもこの頃であった。

九月になってからか（？）登校した。運動場一面に高く生えた草抜き、それから教練用の三八銃の整理を行ったような気がする。あの頃は誰もが軍国主義、反米英思想への追及を恐れているように見えた。

やがて授業が再開された。英語のドンちゃんこと藤本先生は、「君達は現在三年生だが、一年間勉強していなかったたので、とてもその学力はない。それで通常二年生で行なう内容のものを使う。このことをよく銘記しておかなければならない。出来るだけ早く三年生の学力に追い付かなくてはいけない」と言われた。実際私自身『you』のスペルを忘れていたのには自分でも驚いた。副読本として採り上げたのは、Andersenの“The Ugly Duckling”、Newtonの伝記、Lawhornの“Auto-biography”であった。本も何もないので、先生自身が書いて、先生が刷ったガリ版が教科書であった。“you”のスペルを忘れていた者にとつては、とにかく

くすべてを暗記するのが一番と、片端から暗記したのを覚えている。Newtonの伝記の冒頭の部分は、“On Christmas day in the year 1642, Isaac Newton was born at a small village of Woolsthorpe in England. His father being dead, Mrs Newton was married again to a clergyman.”母が再婚したので祖母に育てられた、というような出だしであった。

数学は土屋先生が印象に残っている。先生は代数を教えた。「この三月（二十年三月）の高等学校入試は、あれは人間の配給だ。もうあんなのはない。実力がものをいうので、実力をつけないと駄目だ」と言われた。戦争時代最後の年の入学試験は、交通事情その他から入学はすべて内申書のみで決定した。勿論全国の学生を集めての入試など出来るわけがなかった。我々はこれを「戦時利得」と呼んだ。数学も二年生で一度やった因数分解、二次方程式辺りから始まった。

食糧難は、戦後むしろ本格化した。春休みにアメリカ進駐軍のキャンプに、何人かの友達と日雇いのアルバイトに行ったのもこの頃である。朝、相模大野の駅前から軍用トラックに乗って淵野辺のキャンプ（現在

の宇宙科学研究所)で働き、帰りにその日の弁当を貰う仕組であつた。

空腹を抱えての登校で「早弁」をやっていたのもこの頃であつたのではなからうか。早弁は、その後食糧事情がよくなつても続いた。三時間目の授業中に、先生が黒板の方を向いている間に一口ずつ食べるという芸当をやつてのける者もいた。授業中にドンちゃんが貧血を起し、急に椅子に座り込んでしまったことがあつた。これは前日先生方の会で食べたものが当つたらしく、この日は他の先生も皆早く帰つてしまい、生徒も早く帰れて大喜びしたのであつた。

我々玉中組の井の頭線利用者は、久我山駅を使わず専ら富士見ヶ丘駅を利用していたが、学校の帰りに畑の砂糖黍をとって食べ、近所のお百姓さんから学校にどなり込まれたこともあつた。

交通機関もひどいものであつた。特に井の頭線はひどかつた。二十年五月の空襲で永福町の車庫にあつた電車がすべて焼けてしまい、その影響は半年たつても残っていた。熱で真中の下がつた車体に溶接機で鉄板のたるみを直しただけ、外面は凹凸だらけのものに床

板を張り、上段の一部だけガラスであとはすべて板張りの窓という復旧車と、小田急、青梅線や、他の地方鉄道から急遽集めた木造車などで走っていた。むろん、運転間隔も非常に長かつた。

あれから四十五年、歲月は流れ、日本も目覚ましい発展を遂げた。物不足に苦しみ、学制改革の波をモロにかぶつたあの頃を振り返ると、すべては夢のように思われるのである。

終戦から卒業まで

4期 佐田 昭午

終戦の玉音放送は、阿佐ヶ谷の父の友人のお宅で聞いた。当時私の家族は、神奈川県津久井郡串川村という辺びな山里にあり、私だけが阿佐ヶ谷に寄宿していた。

あの五月二十五日の東京大空襲で上目黒の家が罹災し、伝手で横浜線の橋本駅からバスでかなり行った農家の一室に疎開し、私も何か月間かそこから通学をした。併し、毎朝六時前に家を出て自転車で三十分走り、橋本から八王子経由で西荻窪へ行き、二十分歩いて大宮前の校舎へ辿り着き、帰りは暗い山道をまた自転車に戻る、というかなりハードな通学の毎日ではあった。それに、元々私は昭和十七年入学の三期生で、二年の時に右胸に激痛を覚え、乾性肋膜炎と診断されて、数か月の入院生活を余儀なくされた。母によれば、当時担任だった漢文の中込競先生が隅田川畔の病院まで見舞に来て下さったそうである。結局、一年休学することとなった病歴の身を親が案じて、比較的学校に近

い寄宿先を探してくれたものだったのであろう。

その後は小田急線の経堂に近い伯父の家から通うこととなり、卒業まで久我山ないし富士見丘通学組となった。健康の方は、中三、中四と経つうちに安定したと見え、ドッジボールや野球をやるのが楽しみとなった。木下、石坂、菅、三ツ橋、黒木といった野球のうまい諸君の顔が思い出される。

中四の時、こういうきっかけだったろうか排球部に入ることとなり、このスポーツとの縁が現在まで続くことになった。部長は小河原巖先生で、コートは校庭の東南端に近い高圧線の鉄塔の傍に芋畑を作り直したものであった。柏木、小澤、長澤といった諸君と共にバレーボールを追いかけたが、二十一年十月には東京都の中学校大会が都立六中であり、当校はそれでもベスト8に残った。当時のメンバーは、前衛：古澤、江藤、柏木、中衛：浅羽、五井、三橋、後衛：羽根井、佐田、小野塚、長谷川の諸君だったと思う。

その時の大会の優勝校は都立城南中で、主将でポイントゲッターだったのが、今の日本バレーボール協会会長松平康隆氏で、当校は城南に敗れたのだが、その後慶応と一緒にプレーをし、今尚OB会で苦勞をする仲になるとは、当時夢想だにしなかったことである。

敗戦から卒業までを振り返って

4期 近藤 徳彌

考えてみると、もの心がついてから半世紀を生きて来た訳であるが、この半世紀は、変化の激しい五十年であった。特にこの中で、第二次世界大戦の勃発とその敗戦は、我々の最も感じ易い青春期に大きな影響を与えたといえよう。勤労動員や敗戦のショックを一つの体験として人生の踏み台にした者もあれば、このショックに耐えられず挫折した者もある。

我々が勤労動員される頃は、戦局も敗色が濃いことは感じていたものの、敗れた後がどうなる、などについては皆目判らないし、考える余地もなかった。私は、敗戦の放送を何か他人事のような気持で聞いていたような気がする。当時の私は情熱家であったような気もするが、それ程醒めた心で敗戦の報を受けたことは、その時点で将来の方向が全く判らなかった故であろう。敗戦で学校へ戻ってみると、学校も相当荒れていた。それでも在京の学生は、厳しい交通環境を乗り越えて真面目に通学して来た。そのうちに、地方へ疎開して

いた人、軍の学校へ進んだ同級生が着々復学して来て、活気を取り戻して来た。この辺から玉中四期生の方向が大別して三つ位の方角に向かったと感じている。そして戦後の同期生は何故か皆が戦中より明るくなり、かつ自意識が薄らいで、誰彼となく万遍なく付き合えるようになったと思う。私が今玉中同期の皆さんと心おきなくお付き合い戴けるのは、まさにこの戦後の雰囲気のおかげだと思っている。

終戦から、五年で玉中を卒業する迄の間、強烈な印象として思い出に残ることは殆どないというのが実情である。しかし五年間を通じて、各担任の先生方はよく生徒の面倒をみて下さったと思う。これからも、先生方や同期生との付き合いを通じて、心豊かな人生を送りたい。

混沌の日々

(玉中時代の思い出・二)

昭和二十年八月、戦争が終わった。工場の人達からは「また勉強できてよかったね」などと言われたが、まだ虚脱から抜け切れず、正直なところ、さあ勉強だという心境とは程遠かった。初めて登校したのは二十日すぎだったろうか。教室は一部役所が疎開先として使っていたりして、我々にはとりあえず講堂があてがわれた。窓の外を見ると、B29が低空飛行を繰返していた。この間までは憎悪の象徴だったこの爆撃機も、改めて見ると極めて美しいフォームだと感心した。講堂の映写室には、応召した十中の某先生が残しておいた蔵書などが置いてあり、休み時間に誰かがその中からY本を探し出して来て、ひそかに回し読みするといった出来事もあった。

九月に入ると、改めて教室が割当てられ、曲りなりにも授業が始まった。疎開したり、幼年学校に行っていた友達も次第に復学して、教室は徐々に活気を取戻しつつあった。

GHQの指示による教科書の「墨塗り」は、戦後教

4期 村岡 精一

育史初頭の大作業であった。戦時中の教科書は、主題から文例に至るまで戦争一色であったから、関係箇所を墨塗りしてゆくと、何ページにもわたって切り取りまたは真黒になってしまう場合も少なくなかった。中村先生は文法の授業の時、生徒と一緒に代わりの文例を考え、たとえば「敵艦見ゆとの警報あり」を「鯨見ゆとの通報あり」と直したりした。教科書といえば、四年になった時の、ガラガラの新聞用紙に印刷してただ折っただけのお粗末なもので、自分で切り開いて十六ページとか三十二ページのものが出来る、という代物だった。

翌二十一年には、校舎の火災と玉中の統合という二つの大事件が起った。二月二十一日の朝、井の頭線の中で高井戸から乗って来た森君から校舎が火災に逢ったことを聞かされ、我々は仰天した。富士見ヶ丘駅から全速力で学校まで走っていつてみると、東側の一部や講堂、体育館は残ったものの、職員室など主な部分はすべて焼失していた。中庭の真中あたりにある階段

の傍が我々の教室だったが、丁度その辺まで燃えているのだ。シャッターが十分閉まらないままの防火壁が立っていたが、それでもこのお陰で火を食い止めるには役立つたのである。火元は西側二階の物理教室の辺りといわれた。尚、後日森田先生から伺ったところでは、火災の直後、石神井中学の校長先生は、当時貴重品だった試験用のワラ半紙を幾包も持ってお見舞に駆けつけ、その行届いた心遣いに職員一同感激したということである。

これに追い打ちをかけるように、玉中の廃止、十中への吸収が決まった。戦災復興という重荷を背負った東京都にとって、併設中学を独立させる余裕はなかったであろうか。いつの日か狛江の独立校舎に通うことを夢見ていた我々にとっては大きなショックだった。当時、十中との学力差はやはりあったと認めざるを得ない。そのためか、四年になつてのクラス分けは、旧玉中がD、E組となり、旧十中のA、C組とは区分された。我々にとっては、そういう組分けになつたいきさつなどはどうでもよいことで、むしろ引続き前からの友達と一緒にクラスにいられる気安さが有難かった。(五年では混合組となり、旧十中組の親しい友人も随分出来た。)

当時の先生の授業を二、三思い出してみよう。

数学の土屋先生は、問題をやらせて答えられないと、「こんな問題が出来ないのなら死んでしまえ。食料難なのに生きている値打ちがない。」と、冗談めかしてよく言われた。英語の藤本教頭は、ご自分でガリ版を刷った教材を使って、極度に落ちていた我々の語学力の強化に腐心された。テーマは

“Sir Isaac Newton”や“The Ugly Duckling”などで、先生のお人柄が滲み出るような貫禄のある授業だったと思う。“The Ugly Duckling”冒頭の“it was a fine summer day.”という一句は今でも記憶に残っている。

二十一年早々に着任された歴史の森田先生の授業は、最も印象的だった。戦時中の、皇国史観で固められた「国史」とは全く異なる角度から歴史を見直し、さらに広く社会というものを見る目を養っていただいたと思う。夏休みの宿題は、マルクス・エンゲルスの「共産党宣言」か、民俗学の柳田国男の「桃太郎の誕生」その他の著書かのどちらかを読んで感想文を出すこと、というのであった。何しろ禄に本のない頃のこと、私は渡部君と一緒に代々木の共産党本部まで買いに行つたが、生憎そこにもなく、結局、柳田国男の本を読んでお茶を濁した。あとで先生は、「どこかから文句

が来るといけないと思つて、左と右（柳田は決して右ではないが）を選択させたんだよ。」と笑つておいでになった。悪童共が先生に奉つた「近代出っ歯」という渾名が、着任後間もなく行なわれた「近代国家の原理」という授業に由来することから見ても、我々に与えた強烈な印象が想像されよう。

さて、小田急沿線に住む我々は、通学もひと苦勞であつた。電車の遅れ、混雑は毎度のこと、特に小田急線は極度の混雑が続いた。それでも、電車に乗るにはコツがあつた。電車の自動ドアも壊れ放しで、ドアが開いたままでも走るのに目をつけ、入口のステップに片足のかかるだけのスペースを確保し、車外に身を乗り出したまましがみついて乗つてゆくのは、別に珍しいことではなかつた。何しろその頃の通勤通学ときたら、運転室に入り込み、または連結器の上に乗るなど、あの手この手が横行していた時期であつた。一方、井の頭線も、二十年五月の空襲で永福町車庫をやられ、僅か数両が動くだけという惨状だつた。当時、井の頭線も小田急線も東京急行に統合されていたため、急いで小田急線から何両かを補充し、また後には罹災車両の復旧も始まつたものの、それでも運行は二十分から三十分間隔という時期が暫く続いた。気の早い者の中

には、授業終了が近付くとひそかにノートなどを鞆にしまい込み、終了と同時に教室をとり出して富士見ヶ丘駅まで走り、一本前の電車をつかまえるという離れ技を演ずる者もあつた。しかし、大半の者は、のんびり駄弁りながら歩き、駅でもガヤガヤ話し込むという、むしろ待ち時間を楽しむ毎日だつた。

佐藤（登志郎）君の家は、富士見ヶ丘駅の近くという、我々にとつて便利なところにあつたので、よくお邪魔して色々教えてもらった。部屋窓を開けると畑を隔てて表通りのパン屋が見え、双眼鏡でのぞいて店先にパンがあるのを確かめてから、誰かがパンを買つて来て皆で食べるというのがいつものパターンになつていた。スーパーや商店が立ち並び、一面の住宅街となつた今の富士見ヶ丘からは凡そ想像できないのんびりした世界だつた。

友達といえば、池ノ上の中西君の家にもよく遊びに行つた。交通の要衝・下北沢から簡単に行けるので、大挙して押し掛け、数学や物理などの解説を受けた。同君の部屋は北側にあり、広い窓からいきなり部屋の中に入るのだが、中で話しているとまた窓の外に後続部隊が現われるといった具合で、いつも大勢で屯していたから、さぞ迷惑だつたらうと、今更ながら申訳な

く思っている。

旧玉中組は、いつも十中に対し従の立場に置かれたせいか、よくいえば自立心が強く、悪くいえばヘソ曲がり、先生から見て扱い難いところがあったのではないかと思う。戦時中から、久我山駅で下車し、整列して登校するオーソドックスなスタイルを嫌い、富士見ヶ丘駅から三々五々登校していたし、戦後はさらにそれがはつきりし、富士見ヶ丘利用は殆ど玉中組という状態だった。このコースは途中で畑があったり、お化け屋敷と呼ばれる廃屋があったりで、先生と顔を合わせることも殆どなく、反面、途中で喫煙したりしていた連中もあつたかも知れないが、制約されない雰囲気が入っていたのだろう。

中学時代の最後になって、我がヘソ曲がり組はもう一つのハプニングを起こした。二十三年三月、旧制十中最後の卒業式の日、中庭に整列してこれから講堂に入ろうという段になって、何がきっかけだったのか、急に「おい、帰ろう。」ということになり、アツという間に同調して皆ゾロゾロ引揚げてしまったのである。あるいは、新制十高三年への横滑りが決まっております（偶々私は十中としての卒業組だったが）、今更卒業式でもあるまい、この思いがそうさせたのかも知れないが、とにかくかなりの人数が卒業式をボイコットする形となった。多分、後で卒業証書を受取りに行ったのだと思うが、それもはつきりした記憶がない。最後まで手数をかけた生徒達だったことだけは確かである。

今ふり返ってみると、当時は物資が乏しく、教育制度も大転換したばかりの、いわば混沌の時代だったが、全体的には解放感の溢れた「よき時代」でもあった。その後の我々の生き方には、この時期の影響を有形無形に強く受けていると感ずることの多い今日この頃である。

あの頃の亡友たち

4期 竹中 弘祐

一年は組の私の席は中程の左側、前から二番目だったように思う。直ぐ前は菅君、右隣は佐竹君、後と左側は誰だったかは、覚えていない。只、よく後を振り返って悪戯をした。

同じ小柄でもやや太目の菅とは違って、小柄ながらも佐竹はキリツと端整な少年だった。特徴的なのは、頭の右側、額の上部に、時によつては赤黒く、時によつては鮮やかな朱色になるアザが、縦に走っていたことだ。いま、どこかの国の大統領の頭に見ることの出来るあれである。不思議な男だなあ、と最初は思つてそのことを尋ねると、「生まれた時からだよ、仕方ないんだ」と哀しそうに言っていた。よく喧嘩もしたし口論もした。ある時などは英習字用のインク壺をひっくり返して、彼の上衣の裾を藍色に染めてしまった。栓をよく閉めていない為に鞆の底や教科書を汚してしまった人もいた筈である。豁達で楽しい担任だったが、その時ばかりは中川先生を怨めしく思つたものである。

ズイス・イズ・ア・ペン……。その頃のペンは、常に沈着と丁寧を強要していて、腕白で乱雑な私のような者を大いに悩ませ、鉛筆を使える授業をどんなに気楽に感じていたか。洋の東西を問わず、習字というのは厄介なものであった。

話を戻そう。ある時私は佐竹から折入つて相談があるから……。と校庭の隅へ連れていかれた。秋の太陽がキラキラと、ヤケに眼を射していたのを覚えている。「どうしたんだ……」。「うん」。佐竹は俯向いたままためらっていたが、「親父が幼年学校を受けるといふんだ」という。「いいじゃないか。第一、お前の親父は陸軍中将だし、これからは軍人の時代だぜ」。佐竹は黙つて考えていたが、暫くして、「俺は医者になりたいんだよ」。「……」今度は私が黙る番だった。「それで頼みがある。うちへ来て親父を説得して欲しいんだ」。「そんな……」。「お前にしかこんなことを頼めない」。「……お前の親父つて怖い人か？」

やつのことで私が尋ねると、ニヤツと笑って「厳しいけれどいい親父だ。話はよく聞いて呉れる」。「そんなら自分で言えればいいじゃないか」。「何遍か話をしたが、とても・・・」。というようなヤリトリの末、とうとう私は高円寺南にある彼の家へ行くこととなった。

何日か後、私は佐竹の家の立派な座敷でコチコチに緊張して彼の親父さん——陸軍築城本部長、参謀本部出仕、工学博士、中将閣下にお会いすることと相成った。「ようよう・・・」。先祖は館林藩の武家だという、いかにもそれにふさわしい風貌の端然とした老將軍——実際はまだ五十歳そこそこの筈だが、その頃の私には相当の年寄りに思えた——が、意外に気サクで親しみのある笑顔で接して来られた。陸士、東京帝大、ドイツ留学、そして各国の要塞や、日本の地下弾薬庫の話など、大変な御馳走と共に何う間に、私はアツサリと、簡単に敬服させられてしまっていた。食事の後、佐竹の母上が彼を「一寸・・・」と呼びに来た。彼が中座した機会を逃さずに私は座り直して、彼が今思っていること、つまり軍人になることを嫌っている

ことを彼の父上に申し上げた。物静かに聞き終わると老將軍は、「君の友を思う気持はよく判る。しかし、今、国家は重大な局面を迎えている。もし戦争で人を殺め合うのが嫌なら、私みたいに士官学校を卒えて、改めて大学に進み、学問・技術の道を極めることも出来る。少年期の一時の感傷や情緒で一生を誤ってはならない。そもそも佐竹一族は源氏の流れを汲む武家の人であり、竹中君、君も出身から推して肥前武田の一族だと思う。甲斐の武田は有名だが、当時の源氏の一族から何人かの武田を名乗る人が出て、それぞれ若狭武田、安芸武田、美濃武田となって地方へ派遣されたのだ。戦乱の世に敗れた武田は、武を竹に変えて野に下った。それぞれの一族は、竹田、竹中、竹内などと名乗って生き延びている。戦国時代の名謀、竹中半兵衛も、もともと美濃武田の一族と見ている。君もこの時代を機会に幼年学校を受けて、先祖の武威を高め給え・・・」。逆に説得されて、こともあろうにミイラ取りがミイラになってしまっていた。「僕も幼年学校を受けるから君も受けるんだ・・・」と佐竹に強く言い出す結果となった。やはり私は当時の軍国少年の一

人だった。何回か話をしているうちに彼もうなずき、とうとう二人で受験することとなった。私がそのことを教練の助教の兵長に伝えると、「佐竹は大丈夫だ、ど、お前はなあ・・」と笑っていた。結局佐竹は陸軍幼年学校の試験に合格し、私は不合格となった。

そして私は二学年の一学期から母の郷里である福井県の敦賀へ疎開してしまった。だから私は、皆が学徒動員で行った三鷹研究所を知らない。ただ、敦賀も空襲で焼け、私が疎開先で動員された東洋紡の工場も爆撃され、一緒に働いていた女学生の何人かが爆死して辛い思いをした。その上、細かい理由は省くが、旅行中に広島郊外の呉の辺りの列車内で原爆投下を体験して、この世の地獄絵図を目撃することとなったのは事実である。その後は父の郷里である山口県の岩国で被爆の後遺症に苦しみながら敗戦を迎え、ただ、今頃佐竹はどうしているかなあ、と考えていた。つまり敗戦に打ちひしがれて涙しているのか、それとも、本来の希望である医者になるべく復学して、明るく立ち直っているのか、が気になって仕方なかった。

とにかく、佐竹に会いたかった。その為、私は両親

を説得して、混乱の中の焼け残った東京の家へ帰り、健康も回復して玉中に戻ったのは三年生の三学期になつてからだだった。しかし佐竹は帰っていなかった。私を迎えたものは、復学が後れたために、皆の水準について行けない理数系の悪い成績だった。そして佐竹の死をずっと知らずにいたが、それを知った時以後は、私もいずれ何処かで野垂れ死ぬに違いないと思つて、自分を慰めることにしている。

敗戦後、佐竹にかわつて登場して来たのが小田である。四年生になる頃から何となく親しくなり、高円寺北側にある彼の家——といつても二間か三間の粗末な官舎だったが、そこへ訪れた時からである。小田の父上という人にもお会いした。色の黒い、ゴツゴツした、それでいて明るい暢気そうな人だった。小田の話では、一兵卒からコツコツと進級して行つた下級将校。たしか中尉が大尉で敗戦となった元軍人だった。彼の家では母上が働きに出て、食べるにも事欠く苦しい状況だった。敗戦、失業、罹災。本当に失意のどん底にあったのである。そんな状況の中で落ち着いた勉強が出来る訳はない。彼の成績は、悪い私よりさらに悪く（私

には、文系で点を稼ぐという手段があったが、彼にはそれもなかった。風呂にも入れないのだと愚痴をこぼしていた。しかし私が彼に好意を抱いたのは、どういう状態であれ、彼はケロリとしてそれを語り、自分を卑下してもけつして卑屈になったり、虚勢を張ったりすることがなかったからだと思う。実に気楽な男だった。

私はそんな彼を、方角の違う私の自宅へよく連れ帰った。勿論、食糧難は何れの家庭でも大変なことであったが、私の家では親父の仕事（映画）の関係で、ロケーション帰りのバスやトラックが衣装箱や機材箱の中に闇食糧を仕入れて届けて呉れたりして、雑炊や自家製の代用食パンを、時には玄米の御飯を曲りなりにも食べ続けることが出来たのである。罹災して行き場のない親父の仕事の関係の何世帯かが同居していたが、そういう人達からの嫌味や苦情をハネ返しても、私は小田に腹一杯何かを食べさせたかったし、若い頃に苦労をした両親も理解を示して呉れたりした。そして日曜日には湘南に住むトトキー——そう、現在銀座サイセリアの十時を尋ねては一緒に片瀬川へ行き、十時の知

合いのKさんの持船を借りて、川下りや、時には江の島沖へ漕ぎ出して遊んだりした。毎週のように出掛けだが、小田は必ず土曜日から拙宅へ泊り、日曜日にはレギュラーとして同行した。ゲストとして、糸井、宮澤、酒井、河田の諸氏も時折り参加した。水野はどうだったか覚えていない。或る時など（確か糸井が居たと思う）大船から品川まで電気機関車の運転室に乗せて貰って、学校で大自慢した記憶がある。何しろ四年生の春から秋にかけての毎週のことだし、夏休みなどは三日に一度の割で行ったのだから、十時やご家族の方々はさぞ大変だったと思う。十時の奴はこれ見よがしに竿を差し、櫓を漕ぎ、網を打つので口惜しくて、夢中で練習をしたものである。私もすぐに竿と櫓は操れるようになったが、投げ網は遂に駄目で、十時に独壇場を許してしまった。ところが小田は、何をやっても駄目だった。元来が不器用なのである。素朴で純情な彼に出来たことといえば、船を借りたKさん宅の隣家の病氣療養中という、当時一つか二つ年下の可愛い娘さんの話し相手になること位だった。Yさんというそのお宅では、我々がKさんの家に現われる度に、そ

の娘さんに小ざつぱりとした着物（必ず和服で、浴衣の時もあった）を着せて、家から出して呉れたのである。仮にM子さんとして置く。Mさんは結核性の療養生活を送っていて、女学校は断念して専ら無理のないような生活をさせているのだったが、よく舟にも乗って川遊びもした。ある時、Mさんが私に小田の名前を教えて呉れと言ってきた。直接小田にきけ、という、小田さんは顔を赤くするばかりで教えて呉れないのだという。突差に私は、その頃読んだ大衆小説の浪人の名前に小田典内というのがあったのを思い出して、小田典内だと教えると、Mさんはそれ以後、小田を指して典内さん、典内さん、と呼ぶようになった。小田が、どうして典内にしたんだと聞くので、その小説の浪人は、底抜けのお人好しで、弱虫で、そのくせ威張りたがりやで・・・人のおだてに乗り易く、そのための名前がオダテンナイ。それに試験の成績が悪く、いつも点がないから、テン無い・・・これ以上相応しい名前があるか、というと、その時ばかりは齒をむき出して怒ってきた。

そういう私も、四年生の終業式の前日、何処か他の

学校へ転校して呉れと担任に言われる破目になった。行先は都立五中で、制服はネクタイだから、お前には相応しい学校だというのである。更に理由を尋ねると私が学校内でタバコを吸っているのを見た人がいるのだ、というのである。その頃私は家では友達が来ると兄貴のマドロスパイプをくわえて、やたら気取ってタバコを吸ってみせたりした。しかし学校へ行く時は、ポケットの底のホコリまではたいて、一切痕跡を残さないように心がけたし、第一、学校内は勿論、往復時にさえそんな気配を見せたことはなかった。その時点で私は、中学校に対する興味も、学歴に対する意欲も失ってしまった。不器用に生きるしか道はなくなつた。そして私はその三月末の唯一の募集広告を見つけて鎌倉アカデミア演劇科に入学した。そしてその学校が文部省令による各種学校で、理容師や洋裁師を養成する学校と同じ種類のものであることを、ずっと後になつて気が付くのである。

小田が五年生の十一月に服毒自殺をしたと知った時、私が一番先に思った事は、彼の分も生きてやろうという事である。これも後日のことであるが、小田の死ん

だと同じ頃M子さんも不治の病気で亡くなっていた。更にその後、Mさんの兄に当る、NHKの幹部職員になっているYさんに偶然お目にかゝる機会があり、当時の話が出て、お互いに奇遇に驚いたことがある。

Yさんは、「そうか、あの際Kさんの所へ東京の中学生がよく来て、妹を連れ出して遊んで呉れたのが君達だったのか・・・有難う。あの際妹は白血病の診断を受けていて、余命いくばくもない事が判っていたのだよ。はかない青春を少しでも明るいい日にして呉れたことが嬉しい。有難う」と言われて言葉が詰まった。

当時我々を不良中学生と決め付けない人がいたことは、小田を知る者にとっては大きな救いとなる。いま改めて考えて見ると、戦争があろうとなかろうと、青春というのは戸惑いの季節であり、生きるための試練の時でもある。玉中同期の皆さんの一人一人が、私にとつては得難い人々であつて、私はあえて亡友にその思いを託した。折角の人生だからどうあつても生き続けたいものである。何人かの先生方の相変わらずぶりに接すると、益々その感を強くするのは私が突然稚くなるからだろうか。私の好きな詩の一つにロングフエ

口の "My lost youth" といつのがある。"Often I think of my old town" の一節に始まるその詩を書き綴ってみたが恥をかきそうなので止めておく。
乱文多謝。

(佐竹については、戦後間もなく皇居の濠で水死しているのを発見されたとの新聞記事を見た、という情報があるが、まだ確認していない。)

〔座談会〕戦中期の玉中を語る

出席者 (二十五周年記念誌より、1962)

都立松原高校教諭

藤本 純助

前・東京学芸大学教授

中込 競

都教育庁指導部長

田中喜一

都立昭和高校長

前島 寿一

小田急興業社長

見上 保

千葉大学助教授

木内 信敬

司 会 本牧教諭

中村 高樹

司会 玉泉中学は昭和十五年の一月に設立認可となり、白沢先生が兼任というようなことがあったが、きょうおいでくださいました藤本先生、その方面でいろいろ力添えをお願いした先生でございます。最初に、玉中設立当時の事情などについてお話しただきたいのですが。



藤本純助氏

藤本 そうですね。別に玉中だけができたんじゃないで、あの当時はたしか十三中から十九中までできたんです。東京都が大盤ふるまいをやった年ですね。それにともなつて女学校もできた年ですから、大へんな増設ですね。あのとき、私はたまたま玉中――その当時は十八中ですが、十八中に関係があつたんです。前々から東京に行きたい、高崎にいて、十年ばかりくさつておりまして、なんとか東京に出たいと思つておりました。そのころ、本校に荒井瑞雄先生あの方が沢登君

のあとを、継いで、昭和十五年の四月、教頭になったのでしよう。前々から荒井君もほねをおつてくれたし、東京へと考えておつたので、白沢先生が保証人になつて呼んでくださったのです。私が東京にきたときは、この十中の校舎は東側の方がずっとできていて、曲がつていたかしら。

木内 東の半分ぐらいありました。

藤本 西口の玄関ができていまして、いまの講堂と体育館ができていなかった。あれは私どもがきてからでした。きてみたら、先生は私やら、二人ばかり兼任になったんですよ。例の有名な高野さん、もう一人、英語の先生荻野さん。

木内 いや違う。かれは十中だった。

藤本 だかち兼任ですよ。私は二月の二十二日付で発令になってきたんですが、高野君などはもつと早いですよ。私は三番目くらいの発令だった。きてみたら、十八中関係の方はだれもおらなくて、私だけがポツンと一人でへやを与えられて、毎日何をしているのかというと、白沢さんが大きな白紙をくれたんですよ。地図で、それに生徒の居所を調べて記入しておけという

わけです。全部で百五十人ぐらいですから、書き入れたり、調べたりなんかして、おもむろに開設を待つておつたわけです。だれが教頭になるかということとは私は全然知らなかった、結局、いつの間にか私ということになったらしい。

まア、十中の職員室が隣にあつたのでときどきダベリに行ったり、時を送っているうちに四月一日ですが、いよいよはじまつたわけです。はじまるまでに、だいたいひととおり先生はきまりましたね。そのときのクラスは三組ですが、おかしな名前をつけまして、イ組、ロ組、ハ組・白沢先生がイロハでつけちゃいまして（笑い）入学式のときに、父兄に向かって、め組は作りませんがと冗談をいつたのを覚えています。私も最初は気になったが、いつの間になれてしまいました。最初の年に集まつた先生は、私は英語で一人だったんですが、国語が高野さん、歴史が家令さん。見上 家令さんは途中で十中に移ったね。

藤本 それから数学は土屋さんですか。体操が竹内さん、メンタマ先生といわれた。生徒に向かって「メンタマ動かすなッ」といった（笑い）剣道が降旗さん。

だいたいあとは十中の方からおいでいただいて最初の年はすんでるんじゃないかね。そんなふうにしてはじまったんです。開校までのところは。

司会 玉中の校訓が「感激・修文・練武・強く・清く・賢く」で、その修文練武は十四年六月に文部省から「修文練武」の訓令が出たのですが、校長はここから採ったのですね。あの時代の調子ですね。

藤本 白沢校長は鍛錬の体育館だといって、修練堂と名付けましたね。（笑い）訓練に訓練だったよ。

前島 とにかく、校歌が黒田節だった。（笑い）

藤本 奉拝運動とかいって、よく宮城まで歩かせられたからね。

前島 あそこまでよく歩けたナ。

田中 思い出しますよ。

見上 玉中は、結局終戦のときまで……。

藤本 二十一年三月だ。それで、私ときき思い出しますが、玉中だけどうして独立しなかったのだろうか。十三中から十九中まであって独立しなかったのは十八中だけだったのです。



前島寿一氏

前島 なにか事情でもあるの。

藤本 私の考えるところでは、こういうことじゃないの。つまり、当事者が熱心にやらなかった……。（笑い）

田中 畑ばかりつくっていたからか。（笑い）

藤本 当事者が熱心でないという以外に、生徒ならびに父兄が分離したがいなかったということじゃないかと思えますね。むしろ、十八中が十中であることを望んだということで、生徒の父兄やどこからもわれわれはつつかれなかったんです。歴代校長がちつとも熱心に行ってくれなかったよ。われわれは何度も、生徒にもここに校舎が建つんだということで大いに鼓舞激励したんですが。

前島 ところがイモばかりつくっちゃってね。(笑
い)

藤本 結局、ほんとうは私あたりが一生けんめいやらなければならなかったのですが。

前島 十中というものにあこがれを持っていたのです
ね。

藤本 むしろ、いっしょになることを望んでおった。
だから分離運動も、独立運動というものも起こらな
かった。

藤本 しかし、十三中は、これは独立したでしょう。
これはなぜかという、十三中は最初から一年の予定
なんです。玉中は三年の予定だった。若い順番に独立
していくんです。ところが玉中ですが、十三中が独立
するのに三年ぐらいかかっているでしょう。だから
玉中などは戦争に巻き込まれてしまつてどうにもなら
ない。その中で苦労してだれがいたいあと押しして
くれるかということです。建てるのに資材もないし、
独立すること、それ自身に希望がないとすれば消滅す
るのが自然の道だったでしょう。

前島 とにかく、白沢先生は「日本一の桃太郎」とい

うことを標榜(ひょうぼう)したでしょう。父兄もそ
うなんだ。

見上 私たち狛江にできるといふんで、狛江に家に移
したんですよ。(笑い)ところが、終戦の日まで丸三
年なんです、担任が玉中より十中の方の時間が多か
った。

藤本 そこで私、心にかかるのは、十八中の卒業生が、
じぶんたちの母校が十中に吸収されることにたいして
どういう考えを持っているか、ということで、聞いて
みたいという気がしますね。喜んでいいのか悲しんで
いるのか、そういう話し合いの機会がないんですが、
私としてはやはり努力すべきじゃなかったかという気
もしますね。時勢に巻き込まれて、そのままイージー
ゴーイングで行ってしまったような。後悔しています
よ。

司会 さびしい気持は持っていますね。

中込 あんまり関心持たんよ。

藤本 むしろいまでは西高の卒業生といっても同じです。

田中 十中が西高になっちゃったのだからそれでいいんじゃないでしょうか。

前島 現在の西高がおちぶれておったらかもかく、天下の西高だからいいんじゃないんでしょうか。

藤本 独立しても、いまより以上のものはできなかったでしょう。

司会 十中と玉中の合併のとき、玉中が吸収されたんじゃないくて、対等で統合され、新しい学校ができたということ。

藤本 にもかかわらず、名前は十でしたからね（笑い）十八中の十をとったのかな（笑い）

中込 私の方は辞令は十八中でした。いつからですかね。玉中は。（注。中込先生の辞令は十六年三月末か）

藤本 都からの指令は、十六年四月から十一中以下のナンバースクールの名前をつけろということです。玉中は狛江が和泉多摩川。その玉泉（たまいずみ）ので

んと違いますか。

見上 あそこは、実際、泉がこんこんとわきたつていた。

藤本 「玉」はほめことばだナ。（笑い）白沢校長も気にしてね、これを「ぎよくせん」と呼んじゃいかん、「たまいずみ」というんだ、とさかんにいったもんですよ。私が十八中にきまして、生徒の成績を調べたらみんな悪いんですよ。何番がここにはいつているかという、小学校の八、九番かち十五番ぐらいがはいっているのです。あのころ、一番が六中に行つて、二番から五番まで十中にきているんですよ。非常になさけない気がしたんです。どこの学校でもそうだと思いま



中込 競氏

すが、創設期は先生たち一生けんめいやるもんですよ。

生徒も。小学校ではその辺のところだったが、学校に



見上 保氏

はいつてから悪くはなかったのじゃないかと思うんです。結局、卒業して上の学校に行ったのを見ると相当いいところに行ってますね。ということは、一に十中にまけるなどということが、先生、生徒の間でおのずからあったわけなんでしょうね。

見上 生徒を激励する合いことばになっておったね。

田中 われわれ、玉中を教えた記憶はないが……。

藤本 一部の先生です。

司会 「私は十中の生徒に卒業後、先生に教わりました」とあいさつされることがありますよ。講習なんか

で教えているのですね。

見上 その点、私たちも、籍は玉中だが、十中の時間の方が多かったし。少しもそういうような意識はなかったね。

藤本 競争意識といったらいいかもしれませんが、とにかく十中のようにになりたいという気持ちは持っていた。十中をへこまそうというような気持ちはなかった。

見上 対立というものはなかった。

田中 藤本先生が教頭になっていた記憶があるがへやは別ですか。

藤本 最初は別で、玉中だけのいっしょのへやに居た。そして高野君がごちそうしてくれたもんですよ。

べに屋という、西荻窪に仕出し屋がありまして、玉中の先生だけにごちそうしてくれたんです。その最初の一年だけ別居じゃないですか。浅井さんがいなくなつて、大坪さんが教頭になったでしょう。そのときから合併しまして、私は大坪さんと並びました。

見上 私がせわになったとき、藤本先生が廊下側の方で、大坪先生が中庭の方だったね。

藤本 大坪さんが去って、上島さんになってそのままで火事になった。

田中 長浜さんはそのころきたんかな。

見上 長浜さんは十八年の四月ですよ。

藤本 一年しかいなかった。

田中 あんまり両方で違った感じはなかったね。

藤本 先生がときどきゴチャゴチャになったんですよ。

よく、先生が両方教えたんじゃないですか。

田中 高橋君は？

藤本 高橋君は玉中ですよ。

前島 家令君は両方ですね。

藤本 家令さんはコウモリ的存在からついにケモノになっちまった（笑い）白沢さんはそれを最初から考えていたんでしょう。

田中 玉泉と粕江の農場でカボチャをつくったのを覚えていないか。

藤本 あのころの畑の管理人が土屋さんですね。

田中 いまは？



田中喜一郎氏

藤本 いまは粕江町立中学校でやっていますね。もう都から払い下げたんでしょう。

司会 七〇〇坪だそうですよ。

田中 中村淳さんがたいへん努力したんだ。

藤本 あのころ、苗木をあそこに植えたんですよ。しかしいよいよダメになったので、相当こっちにきましてね。

司会 校門からずっとあるサクラがそうですよ。あそこ独立したら植えようと早くから苗木を植えたが不発弾に終わったわけですよ。

前島 しかし、白沢先生はえらい人だったですね、こ

わかったが……。

田中 ああいう校長のもとに勤める人はうらやましいね。（笑い）

藤本 あのころのことを考えると、先生も生徒をとつちめてやるんだ、ウンといわせてやるうという気持ちだったが、同様に校長も、先生たちをとつちめてやる主義で。（笑い）

見上 「統念」だよ、あのとき、ちよつとでも動くしかられた。平山さんがうんとしかられたね。

中込 私が、あのとき廊下にいたんですが、平山さんは動かなかつたはずですが、それを校長室からとび出してきて「おまえは動いた」。（笑い）平山さんがずいぶんしかられちゃつて。

藤本 小川君ですか、生徒の訓育係。あのころ、窓ガラスの位置がやかましくて、真ん中に二枚きちつと合わさっていないといけなかった。開いている距離がちゃんとできていないときは家におつてもわかるんですよ（笑い）。中野の自宅におつても、電話でしかつてくる。（笑い）

田中 ぼくが当直のときだったが、校長から電話が

かつてきてもわからなかったんだ。翌日おられちゃつて。無理ないよね、こつちは寝ているんだもの。

（笑い）

中込 農場に草が生えているとちゃんとしていないとしかられるんですよ。また、くるときどこからはいつてくるかわからない。表からはいつたり裏からはいつたり……小使い室からはいつて、きれいだつたので、よくしたなアとほめられたと柳田は非常にうれしがつてよく話していましたよ。とにかく、きれいにしておくと校長さんほめましたよ。

藤本 感激とか修文練武という校訓も、みんな校長が単独で考えられたことですね。

田中 職員会議にはかつたかな。（笑い）

藤本 われわれは、それをおしいただいて、それに理由をつけて生徒に説いたものですよ。

中込 冬の寒い日に、乾布摩擦をやらされたが、あれは考えてみるとよかつたね。どんな日でもやらされたが……。

藤本 スパルタ主義というか、訓練に訓練というところでしたな。徒歩というのがあつたでしょう。あれは



木内信敬氏

どういう時間にやったのですか。

木内 十中は水曜の六時間目で、そのため授業のない日があるんですよ。一時間分だけ。

田中 マラソンと違うの？

藤本 隊を組んで歩くんですよ。足を会わせてパツパツパツと軍隊式にね。

司会 標準歩行といひまして、ストップ・ウォッチを持ちまして、きまった時間に早く歩かないといけない。中込 西荻の駅から正常歩で歩くこともやらされましたよ。

藤本 あれはみな白沢先生の独想ですかね。

木内 浅井さんのときもやりましたね。

藤本 しかし校長さんが変わってだいぶん違ってきたな。

田中 白沢さんが浅井さんになつたのは戦争後ですか。

藤本 十七年の四月からですよ。白沢さんも、四中が最後の場所になつたんだが、やはり十中を去るときはさびしい気がしましたね。十中で終わられた方がいい気がしましたよ。あれはなんで変わられたんですか。

田中 清廉で修文練武を買われたんじゃないですか。

藤本 四中に行つてやれということですね。四中では、十中でやつたようにはいかなかったでしょうね。

木内 全然だめだったらしいですよ。

藤本 十中の教員は純情だったから、白沢さんはズケズケといえたが・・・。

田中 ぼくの親戚で戸山の同窓会に出る人がいるんですよ。そのとき、なんだ、おまえのところの校長がきたんだが、若造のくせになまいきだ、四中を改革するんだといっていたがとんでもないやつだ、といっていたよ。

藤本 五十歳位ですがね。

木内 四中卒業生に聞くと評判が悪かったですね。

藤本 まア、十中だからできたんだす。

中込 四中の卒業生の方で、当時教授をしていた人だが、裏話をしてくれましたが、四中を改革しなくちゃいかんということで、白沢先生を招く運動をしたという話がありました。

田中 卒業生の中にはいく派にも流派があるんですね。

藤本 そのうち、玉中には見上さんという豪傑がきておもしろくなったな。（笑い）

見上 私は十七年の八月、台湾からきたわけなんです。木内先生に「おまえは、きたときは純情だったが豪傑だった」といわれたが、浅井先生の関係できたわけなんです。いまの、皆さんが徳をしたっておられる白沢先生の子分の中に一人ボツンとはいってさたわけなんです。（笑い）若い先生方とも話したことがあるんですが、色メガネではじめられたかどうか知らぬが、この中に溶け込んで、職員の融和をもし欠くようなことがあると、じぶんの大きな責任であると、極力そういう点ではまだ若かったが努力して……。

田中 感じなかったな。（笑い）

見上 私は、籍は玉泉中学だったが、十中玉泉という

意識はなかった。しまいには、阿部さんのあとを引きついで時間割りの係りをやらされた。このコマを動かすのが不得手でまいったね。私としては十中の方の時間が多かったんですよ。

木内 それは前田さんがやめたんで、地理があなた一人だったからじゃないの。

見上 第一印象が台湾の私のいた学校と同じでした。

さっきの話じゃないが、台北の一中というのは、みんな優秀で、東京でいえば日比谷のようなところでした。つまり、玉中と同じく、そういう意味で併設された学校なんです。そして、第三中学とできていったが、先生はバカにされるし、生徒も相手にされない。そこで先生方がやつきとなって、一中にまけるのがんばり、一中と競争して台北大学の予科に入れたんですが、一期生が卒業したので夏にこちらに帰ってきて驚いたのは、先生が生徒の勉強を心配しないで、生徒自身が勉強している。これはほんとうに楽だと思いましたね。これだけ違うかと思いましたよ。で、浅井先生の縁できたんですが、そういうようなことで、皆さんと非常に気持ちよく、楽しかったです。狛江の自宅から通つ

てくる間、下北沢で西山先生、牧野先生、河野先生、岡田先生、これがたいていいしよなんですよ時間が、浜田山にくると鈴木先生、細内先生、絵の先生の増田先生。そういう先生と通っておった。

藤本 西高や十中に、小学校あるいは中学校から一番の生徒がくるようになったのはいつごろからでしょう。私が知っていたのは二番ぐらいからだから（笑）

田中 戦後じゃないの。

岸田 昭和十九年から二十年ごろこはいったものは小学校でぼつぼつ一番。

藤本 学区制からかな。

中込 十七年ごろからですね。学区は、玉中は一中の方？

藤本 区域が違って千歳中学でやったことがありましたよ。いまの千歳高校で・・。十中でやれないんですよ。世田谷の仲間にはいつてしまつて。

中込 千歳に行つて試験をやったことがありましたね。

藤本 不自由な思いをしてネ。

中込 すると玉中のとき、千歳中学と同じ？

前島 日比谷の一中と同じですよ。校長がここへよくみえたんです。試験の打ち合わせで。

中込 私は十六年にここにきたとき、白沢先生に、きみは教育系統にいたんだからといって、二年生のからだの悪いこどもばかり集めた。神田らのああいふ連中を一組にして、「れをきみに任せる」とおおせつかりましてやりましたが、白沢さんは教育家でしたね。ああいうところ、いろいろ考えておったのですよ。

藤本 戦争になり、勤労動員がはじまつたらメチャメチャになったね。私が国語の教員になったのですよ、みんな出はらちゃつて。

見上 学徒動員で、十八年の秋四年生をつれて立川に行つたのですよ。

司会 では戦時体制のときのお話を。

藤本 白沢先生から浅井先生に移り変わるときのことは？

見上 浅井先生のときのことですが、十八年の夏、いわゆる鍊成かどうか知らぬが、葉山と山中湖に分けて行つたことがあるのです。葉山の万福寺に行つたのは

十中と玉中の下級生で、藤本先生もいっしょですね。

十中の鈴木先生もいっしょでした。中込先生は山中湖でした。

中込 私が山梨だもんで、浅井校長がきみは山梨なんだからあそこに行って開拓しろということで、学徒寮という、高等師範の寮がありましてそれを使いました。そこで、食糧を心配しろというわけですが、食糧のつまった時代でして、私、山梨の方でも田舎ですから、郡内の方はいっこう知りませんといったら、そんなことあるか、ということでした。そこで電車の中で、大きな声でこの辺でだれか食糧を心配してくれるところはないかと話していると、ちょうどすわってあった人が、私のところにきなさいということでお百姓家に行きまして、それで解決したんです。あそこを開拓したのは十八年ですね。（注、十七年の御記憶がいらしい）

田中 山中で病人がたくさん出て困ったね。

中込 あれは十九年で、二年目には民家を利用したんですよ。

見上 十九年にはやらなかったよ。（注、十九年四月

学徒勤労動員）

司会 十七、十八ですね。（注、十七年は山中湖と北条館山。十八年は山中湖と葉山）

見上 で、万福寺の寺の中に炊事場をつくっているやつたんですよ。正田さんの別荘に招かれたこともありましたが。

田中 浅井さんは白沢先生とタイプが違う、なじめなくて困ったよ。

藤本 白沢先生も浅井さんも共通にいえることは二人とも非常に話がうまかったね。白沢さんの方は即興的で、当意即妙、ユーモラスな話をされた。それから浅井さんはどうかというと、これはおもてむき、正面きつてのまじめな話をしたが、それでもなかなか弁が立った。

前島 個人個人を知らなければいかんと、お昼、生徒にお弁当持参で十人ぐらいで校長室でたべたね。担任も立ち合ってたべたよ。（笑い）

藤本 ぼくはどういうわけか、校長三人を迎えに行きましたよ。白沢さんがやめたあとで浅井さんを迎えに行つたでしょう。浅井さんから丸山さん。これも石神

井に迎えに行ったんですよ。そしたら先生いないんですよ、都庁に行ったということで。それから火事のあとで、私一人で細田さんを迎えに行ったんですよ。

田中 丸山さんは穏やかな人でしたね。非常な年だった。

藤本 両角さんも輩下だったということですね。

見上 ここではりつばな先生でした。

藤本 デンとして動かない、非常に落ちついた人で、ばくのことをときどき「あんたもまじめにやってくれるんだが、どうもグチが多くてね」（笑い）グチをいっておこられちゃったが、あの方は大人の風格があったよ。

中込 終戦のときに、丸山さんはこれからしつかりしなければいかんとさかんにいましたよ。これからは日本人は団結しなければならない。団結するには寮をつくって、寮生活をしてしつかり日本の伝統を守らなければいかんと、そりゃえらい勢いで話をしましたよ、個人的に。

田中 面従服背ということを書いてね、はじめはそういう気持ちだったけどだんだん様子がおかしくなっ

て・・。ほくがときどきそれをいうもんだから、君まアーマーとすっかり気にしちゃってね。（笑い）

見上 十九年にB29が荻窪に爆弾を落としましたね。中島飛行機ですか。

藤本 十七年だね、ハシリの爆撃があったのは。

見上 いやいよいよ敗色濃くなって二十年になってから、戦争末期ですね、荻窪に落ちて、ぼくら学校の帰りに行って見たが、ここで三人死にましたよといった。その当時、先生方はみんな四年五年の生徒をつれて学徒動員に行っておった。そして動員先から学校にたまに帰ってくると、なんか残留の先生たちはコソツパイような感じになったんですね。これは、私いまでも印象に残っているんですよ。それで、終戦の年ですね。新学期のときに丸山校長にご注進じゃないが、行って、先生とにかくこれじゃいかん。残留している先生と第一線で働いている、指導している先生と、学校で意思の疎通が欠けるようなことがあると、学校の経営上からもまずいし、こういつたとき何とか考えなければいかんというここで、とにかく若い先生で新しい一年生を

引き受けて仲をとり持つ親睦をやるうじゃないか、ということをお願いしたことがあるんですよ。それはきみおもしろいじゃないかということで、十中では木内先生、川島先生、岸田先生、阿部先生、玉中の方は私と岡山さんと記憶では長坂先生。

藤本 長坂さんはしょっちゅう動員に出ておったね。

見上 それで、一年を担任したが、空襲が激しくなつたもんで、こちらは農園ですよ。先生方がきたら野菜もんでも持たせて家に帰えれば気持がなごやかになるだろうと思つて力ボチャなど・・・。

田中 そんな苦勞があつたんかナ。（笑い）

見上 配給をして、好評を受けたというのは、自信をもつて記憶によみがえらせることができる。ほんとうに先生方に喜ばれた。

木内 そのとき一番すごい配給は蒙古の徳王がよこした牛肉ですよ。ぼくら一年の担任が朝から晩までくつたんですから。こんな大きな（手いっぱい広げる）肉だ。

田中 記憶ないぞ。（笑い）

藤本 じゃもらえなかったナ。（笑い）

木内 ハムの工場があつて、その配給を受けたといふんだ。

藤本 ハムみたいなメンチボールみたいなんだよ。

木内 リュックサックで背おつてきて配給したんですよ。

中込 生徒にもやつたはずですね。

藤本 なんの肉だつたろうネ。（笑い）

岸田 さっきの出先に出ている先生と残っている先生とが意思の疎通を欠くということで、学校に残っていない先生は工場に行く先生の苦勞を知らない。教頭、校長はしょうがないが、たまには工場の方にも回つてこい、えらい先生が学校に残っているのはいかんというので、実はえらいのが工場に行き、若いのが帰つてきたんです。（笑い）

田中 いや帰つてこなかったよ。常駐されつ放しだったんだよ。（笑い）日本無線、岩崎通信によく行つたね。

見上 空襲が激しくなつて、小河原先生・非常に若いけど熱心な先生だったが、校庭の真ん中に防空壕をつくる大工をやったんだ。ついに完成しないで終戦に

なったが。それから校庭のすみの方で、サツマイモづくりをはじめた。生徒を使って草刈りをやったり。その汗の結晶の小麦を講堂の裏の方で脱穀させて。あそここの朝鮮人部落でドロクを作らせたが・・・。

田中 それは記憶ある。飲んだのを覚えているよ。

（笑い）

見上 宿直のときに、先生方の労をでねぎらうため、ドロクを飲ませたんです。

藤本 火事するときもドロクを飲んでいたんじゃないの。（笑い）

見上 その後、終戦の年の一学期ですか、お世話になった先生方にカボチャ二つぐらいお持ちになっていただき、とても喜んでくださったのですよ。

田中 そのころから実業家としての資格があったね。

（笑い）

見上 しかし、そのために渡り廊下をこわしたんですよ。講堂に行く渡り廊下をこわして防空壕の穴を掘って埋めた。

木内 あのととき、校長は絶対反対したんだが小河原君がこわしちゃった。

見上 埋めないうらに終戦になったんだが。

田中 講堂の中にみんなが泊まったのは終戦後？

藤本 あとですね。焼けてからですから。

田中 あのだブロク、いまでも飲めると思うね、すっぱかったが。

見上 良心ががめましたよ。生徒の耕して作った小麦をあのかどの朝鮮人部落で、そこへ取りに行ったのが岸田先生ですよ。（笑い）小林先生も。

藤本 サトイモやダイコンなんかもつくって、防衛宿直のとき煮てくつたナ。

見上 カボチャはずいぶんつくつた。

中込 イチゴも熱心につくつた。

司会 皆さんが生徒といっしょに、この運動場に草がはえてしょうがないからと草を刈りましてね。

岸田 戦後、運動場の半分ぐらい掘り起こして・・・。

田中 ピーマンをつくつたり。

中込 藤本先生は、菜園では熱心だった。

藤本 それだけうえていたんだね。（笑い）

前島 タバコのかわりに、サクラの葉っぱを巻いて吸

いましたよ。

見上 校長室に行つて丸山校長にタバコがございましたんかといつたら、フキの葉を乾燥したヤツを二本もらつたことがありますよ。

藤本 ところで、本物のアルコールが行くえ不明になつたんじゃないの。

見上 あれは砂糖水やなんかで薄めて飲みましたよ。

岸田 空襲が激しくなりまして、大きなピンにいつぱいはいつているヤツを、いちいち壕に埋めろのは危険だから、始末した方がいいんじゃないかということ……。（笑い）

田中 あれはみんなで決議して飲んだよ。（笑い）

前島 連帯責任だナ。

司会 じゃ、動員された学徒が工場でどんなふうに働いたかという思い出話を。

田中 久我山のむこうの川崎通信。あそこによく行つた。

藤本 この学校で行つたのは川崎通信と日本無線、キシヨードイ。玉中が行つたのは立川航空廠・高円寺に

あつた陸軍気象部。

前島 さくらゴムとかいう所にも行きましたよ。

藤本 あまり仕事ができなかつたんじゃないかな。

見上 そのときは戦略物資というか、そういうものが軍需工場でもなくて、うちの弟もよくガラスでつくつたネコなどを持ってきた。聞いたら、何も仕事がないといつていた。要するに戦力が消耗しておつたんじゃないですかね。

藤本 ただいたずらに動員したという感じだナ。

司会 しかし、日本無線なんか徹夜でやりましたよ。

工場によって違いますね。陸軍などはだめだった。

中込 日本無線では、工員が遊んでるんですよ。生徒ばかり働かせているので、こんなことあるか、とずいぶんケンカしましたよ。

田中 空襲警報、警戒警報ですぐ退避させるわけですが、警戒警報ぐらいじゃもう少し働かせるといので、そんなバカなことはないと派遣されている将校とケンカして、強引に退避させた記憶がありましたよ。

見上 あんまり強くすると思いが悪いとかすぐマークされたり、少しりくつをいうと、コイツはちよつとお

もしろくないといわれるんですね。

田中 結局、間にはさまったのです。

司会 工員たらにサボタージュ気分というのがあったんですか。

見上 それは、どちらかといえば、体力的に、食料がなかったりして、いわゆる疲れきって仕事ができなかったのですね。

田中 また、動員といっても、時期が長いんで、はじめの方とあとの方では違いますからね。

藤本 徴用の工員が多くてやる気がなかったということもある。

田中 日本無線のとき、空襲警報があつてどこかの学校の女の先生が二人壕の中にはいつてきたが、ちよつと変な気持らになったね。(笑い) 死んじゃうかもしれないし、手ぐらいにぎつてもいいんじゃないか(笑い)と思つてみたり。いまになつてみると生々しく思えますね。

藤本 指導部長がそういうことをいつちやいかんね。

(笑い)

田中 とにかく、男ばかりだったからね。

前島 日本無線は、女子大のいいお姉さんがきていたな。

中込 女子大の生徒あたりがいかにも物資がなかったかということ、地下タビをはいて学徒動員にきていました。

藤本 このころのテレビで、あのころの記憶がむし返されるようだ。

田中 あのころ、リーダーが岩崎通信でできるとかできてないとか・・・。実際にはできなかったんだね。隊長が大きなことばかりいつて。アメリカの半分ぐらいしか能率がなかったということだが、末期には、リーダーのことまで考えたんですね。

見上 あのころは一億玉砕ということで日の丸の八チマキで学徒動員をやったんだが、いま考えると、当時はそれで国に忠義なつもりで真剣にやつておつた。

木内 ばくは工場に行かなかったのですが、一年生をつれて、荻窪の駅の回りの家をこわす仕事をやつたよ。見上 そうだ。終戦の年の一学期一年生をつれていつたね。

中込 そして材木を全部かついできたんですよ。

見上 学校で欲しけりやあげるといふんですよ。残留の一年生、二年生がやったんだ。

川島 畳を持ってきて、生物教室を畳敷きにしてしまった。

見上 そうそう。小使室の前。

木内 こわしているうち、その生徒がこれは私の家ですというのが二件ぐらいあるんですよ。

司会 それは悲惨な話ですね。

見上 悲惨な感じというのは、いまから考えたことで、当時、空襲で焼けてしまうとさっぱりしたという感じがありましたよ。

藤本 ぼくは五月二十六日のあの火災で、麹町で焼けたんですが、非常にさっぱりしてなにかうれしくなっちゃった。あと、空を敵機が飛んでもちつともこわくない。（笑い）

見上 その当時、焼けた人の心理はみんなそうだったらしい。

藤本 大宮前に新しい家をついて引っ越してきたんですが、そしたらまたこわくなっちゃった。（笑い）
見上 終戦の八月ですか、その当時の一学期というも

のは、授業はほとんどできなかったような感じでしたね。しまいには空襲警報が鳴っても一年生を帰さなかったようでしたが……。

岸田 帰しましたね。警戒警報で帰しましたよ。

見上 残留した者も、家をこわしに行った、畑をつくったり、授業のひまがなかったですよ。

藤本 学問的には何らプラスできませんでした、精神的には得たものがあるでしょうね。

中込 卒業生に聞いてみると、あれが非常に役にたつたといっていますね。東芝に勤めている連中も、工場の経験があるために、たいがいのはわかるということです。それで非常に感謝していますよ、学徒動員に行ったことを。

司会 若い者は何からも教訓を得るんですね。

見上 一年生は無我夢中だからね。

木内 一年生を立川のそばの農村につれて行ったんですよ。食料があるでしょう、だから生徒がよくなくなっちゃうんですね。日曜日でも行っちゃうんですよ。（笑い）

見上 しまいには農家の手つだいに行ったことがあり

ますよ。

藤本 終戦というのは、丸山校長がみえてから何年目かしら。

木内 十八年ですから。

藤本 一年半ぐらいたっていますね。

見上 二年たらずですよ。二十年の八月ですから一年十カ月です。

田中 終戦のとき、正直のところほっとしたね。

前島 広島に爆弾が落ちたとき、教育勅語を背負いまして避難しましたよ。新型爆弾があぶないというので見上 なんか、前島先生が勅語の責任者のよううな格好だったんですね。

田中 あれから心細くなりましたね。

司会 ご真影は・・・。

前島 なかったんですよ。全然こなかったね。勅語だけを紫のふくさに包んで背負っていたよ。

木内 戦争の終わりが、海軍の兵学校に、受験したでしょう。そして学生が最後の試験を江田島でやったことがあるんですよ。そのときに十中から十五人、玉

中から五人ぐらい、二十人の生徒にぼくと剣道の丸山さんがついて江田島まで行ったんですよ。あのときたいへんだったですよ。東海道に大地震があつて東海道線が不通なんです。それで中央線回りとなったが、あのときの汽車の苦労は死ぬ思いでした。江田島はたべものは豊富でいいんですが、行きと帰りはたいへんな汽車でした。十九年の十二月ですよ。中央線で名古屋に出て、名古屋で乗れないんで豊橋に出て乗ったが、デッキにしがみついていたが生徒のことが心配で心配で・・・。寿命が十年ぐらい縮みましたね。

岸田 正田のむすこがその中にいたんですよ。

木内 なぜ丸山がついて行ったのかな。

田中 前田虎一郎さんがなくなったのはあの頃ですか。

木内 あれは阿波丸でしょう。もうちょっと前ですね。

田中 南方ぞいに行つて、船でやられたんですが、あれからガタガタでしたよ。

藤本 広島に落ちてからは全然だめでした。

前島 終戦で、米軍が進駐したとき、この辺にジープに乗ってきたね、銃剣をさげて。

中込 ライフルなんか持って・・・。

前島 私は通訳をやれといわれて。

見上 厚木にマッカーサーがおりるとき、北沢さんが呼ばれたんですよ。あと前島先生。

前島 招集されて、厚木の飛行場から横浜のニューグランド・ホテルに行ってマッカーサーの通訳をさせられましたよ。岩佐や北沢さんと。

司会 米軍が二人きて、校庭で爆弾を爆発させたことがありましたね。

藤本 何度もきたよ。やれ火薬庫を隠していないかとか。

見上 鉄道省がきていたのは終戦の年ですね。

藤本 火事の話だが、丸山先生は火事の責任をとってやめられたんですか。

木内 火事のすぐあとでしたな。

藤本 火事は二月の二十一日ですか。

司会 火事は二十一年の二月二十一日ですね。

田中 電気を猛烈に使っていたからね。電気以外、暖房をとる法がないんですよ。コンクリートの煙突に電線をぐるぐる巻いて。電気の知識のある人がやってい

たんじゃないから、火事にならないのがふしぎなぐらいでしたよ。

中込 生徒が知らせにきまして、真夜中に。いま考えてみると、上島さんが講堂の瑞に腰掛けてポカンとしていましたよ。私がきて、あんたそんなところで校長にはどうした、ということ。校長には私が知らせに行つたんですよ。一番電車で校長の家にかけつけて知らせました。

田中 あの日、英語の研究会かなにかあってここへきたら、何も無いんでびっくりしちゃった。あれは、まア電線なんかひどくなっていたんだね。

藤本 理科の準備室から火が出たのはまちがいないんですか。

中込 一番早く焼けたんですよ。

田中 あれは、結局原因不明で終わつたんですが、まア漏電だな。

藤本 岡田さんなんか、何度もひどい目に有つて。岡田さんが代表して贖罪（しよくざい）してくれたようなものですよ。

田中 たまたま理科の先生で、ここにいたということ

で・・。あのときたくさん泊まっていたね。だれが宿直かわからない。

司会 宿直はないということだったんですよ。上島さんは生物の準備室なんかにいた。

田中 宿直がだれかと役所でやかましかったが、宿直はないということだったし、あのとき大勢泊まっていたからしょうがないんですよ。

木内 あのとき宿直すると、三十銭なんかくれたんですよ。

前島 それとドブクロが飲めたんですよ。（笑い）朝きてみると、事務室の金庫がすっかりふくれあがってフタがあいていましたよ。中を見たら貯金通帳やなんかこげていたね。

田中 体育館に泊まったのは焼けたあとかな。

前島 体育館じゃなく、講堂の方に泊まっていましたね。

司会 火事のと、関口さんはいなかったんですか。

藤本 鈴木さんも泊まっていたんじゃないのかな。

見上 阿部さんもいた。

前島 阿部さんは家を追い立てられて・・・。

司会 荷物まで運んでいましたね。

田中 火事のと、PTAの会長の笹野さんが、遠くに材木を買いに行っただんですよ。あのときはもう細田さんが校長だった。

司会 日光の方ですね。

藤本 父兄が請け負ってくれたんですが、とてもめでしたね、契約が履行されないんですよ。金は渡したんですが、なかなか集まらなくて、ほんとうに心配しましたよ。結局くるにはきたんですが、じゅうぶんこなかったんじゃないですか。また、このあたりの建て直しにしても、材木がなくて二階にできないということです。

木内 一時、平屋だったね。

藤本 父兄に清水組の部長さんがいたんです、後援会の親方ですが。その方が、東京から名古屋に転任になり、わざわざ名古屋から送ってくれたんです、二枚ゲタ。小さいのを二枚合わせて使うんですね。

司会 この間、取こわしがあった際工事の人が、結構使えると喜んでいましたよ。

藤本 とにかく、一枚で二階を支えるケタがないんで、わざわざ名古屋から送ってくれたんです。

田中 そのとき、体育館で二部授業をやりましたね。

見上 あの教室はすごかったナ。

藤本 お隣が天井つづきなんだ。共同便所と同じで……。 (笑い) カベがあるだけだよ。

田中 あのととき、職員会議で悪いこといつちやっと思ったね。早出と遅出と二部授業だから、午後からきてもいいじゃないかとがんばった記憶がある。細田さんだったが、困ったヤツだというような顔をして……。いまになってみると、ああいうバカなことをいうものじゃないと思う。 (笑い)

藤本 荻村伊智朗君もあの間仕切り教室からだナ。

木内 あのとときはすごかったよ。いくら声を出しても抜けちゃうんだよ。

前島 競争して声を出さないと通じないものね。

藤本 相手を克服しなければ。 (笑い)

木内 八つぐらいありましたね。

司会 私はあそこで上級生を教えたことがありましたよ。

田中 午後の部がよかったね。少したったら、遅くきてもいいことになった。

司会 これも田中先生のおかげですよ。

前島 あのところ、校長さんに文句をつける先生が多かったですね。

藤本 前田先生は手ごわかったナ。 (笑い)

田中 青山に行っただんだ、前田松寿先生は。

藤本 土屋さんもなかなか闘志満々だったね。

田中 われわればかりの話だが、あのころ生徒はどうだったのだろう。

藤本 生徒が優秀だったというのはまちがいないね。

あんなところでまともに育って、今日りっぱになっているから。

岸田 終戦のときに一年生で、ろくすっぽ授業ができないで、その後火事で、間じきり二部授業をさせられていたのに、できはいいですよ。二十年にはいった連中ですが。

田中 それがよかったんですね。つまり生徒の質が生生の質よりも……。 (笑い)

見上 実際、生徒がよかったということは、台湾からきて痛切に感じましたね。問題にならない。

藤本 だから、一つの学校をよくするには生徒をとり替えるのが一番早い。（笑い）

田中 先生だって、妙な対立もなかったし。

見上 合併当時玉中の上級生が動揺したという話があるが、これは先生方の生徒への指導がたなかったことです。私は、あるとき独立しないで、むしろ西高になつたことを、玉中の一、二回生は誇りに思わなければいかんと思う。だから、私たちもその点では玉中の先生だという意識は全然なかった。

藤本 あなたはとくに十中の授業の方が多かったんだから。

見上 私は生徒の前でも強かったですね。腕力でもなんでも寒げいこで十中、玉中の生徒で初段というのを十人ぐらい並べて、私に歯がたたなかった。剣道五段の腕前を發揮してね。元気があつたよ。

田中 相当なぐつたナ。（笑い）先生も生徒にバカにされまいと一生けんめいやっていたね。このごろは、西高で先生をしていたという信用があるネ。（笑

い）いや、ほんとうだよ。

見上 それが証拠には、西高をやめて、よそにおつとめになつた人で、えらくならなかった先生はいないですね。

田中 いや、それはどうか知らないが（笑い）世間は信用するね。生徒のおかげですよ。

藤本 ほんとにそうだ。

司会 生徒がよかった、といういい結論が出ましたので、ここらで……。

資料編

校訓・校歌

校訓

感激・修文練武・強く・清く・賢く

校歌（旧十中校歌）

皇御国のもののふは

いかなることをか

つとむべき

ただ身に持てる真心を

君と親とに

つくすまで



浅井治平 先生



白澤清人 先生

資料

昭和十六年の入学試験（面接）問題

第一日（第一問）

一、君はふだん何か無駄をしてゐる事はありませんか

注（三つ位あげさせる若し「ない」と答へたら誘導する。例えば學用品、小遣、食事とか日用品に就き思ひ出させる）

二、それは何故無駄ですか

三、自分のものを自分で使ふのだから無駄をしてもかまはぬ様に思はれるがどうですか

（或は自分で金を払って使ふのだから）

四、何故いけないのかそのわけを言ひなさい

（イ、物を粗末にしてはいけないから、

ロ、今は戦争してゐるから物が大事だ）

五、大勢の中で自分一人位無駄をしてもかまはない事ではないですか

六、何故いけないのか、そのわけを言ひなさい

（一人で済まなくなつて全体に及ぶから）

七、國民が無駄をしたり贅澤をしたりすると國はどうなりますか

八、日本は今特に節約が必要なわけは何ですか

（戦争をしてゐるから）

九、倹約とけちとはどう違いますか

十、君は何をどんな風に節約してゐますか

十一、君の家では何をどんな風に節約してゐますか

第一日目（第二問）

一、君は猿蟹合戦の話を知つてゐますね

二、話の筋を極く簡単に言つて御覽なさい

（冗長にならぬ様、要点を抜かさぬ様）

三、今の話の中で猿と蟹が争ひをする。その原因は何處にあると思ひますか

（イ、猿が欲張りで意地悪だった事、ロ、握り飯と柿の種子を取換へた事）

四、話の中で猿が蟹に柿を投げつけて、けがをさせる話ともう一つ蟹を殺してしまふ話とあります。君はどちらの話がよいと思ひますか

（イ、けがだけの方がよい。ロ、殺した話の

方がよい。ハ、どちらでもよい）

五、何故けがだけの方がよいですか

（イ、残酷だから　ロ、蟹が可哀想だから

ハ、何と言ふ事なしに。）

何故殺した方がよいですか

（イ、猿は悪い奴だから。ロ、蟹が意久地な

しだから。ハ、大概の本にさうあるから）

六、蜂や曰が子蟹の味方をしたのは何故でしょう

（イ、猿が悪いやつだから。ロ、子蟹が弱い

から。ハ、仇討ちだから。二、面白いから）

七、最後に猿が曰に捉まった時に悪かったからと御

詫びをして許して貰う話と、もう一つ曰に押し

潰されてしまふ話とありますがどちらの話がよ

いと思ひますか

（イ、許して貰ふ方がよい。ロ、殺される方

がよい）

八、何故許して貰ふ話の方がよいのですか

何故押し潰されてしまふ話の方がよいのですか

九、猿蟹合戦の話にはためになる所がありますか

十、どんな所がためになると思ひますか

第一日（第三問）

一、君は何故中学校に入學しようと思ふのですか

二、君はどんな人がえらい人だと思ひますか

又はどうして醫者（例）にならうと思ふのです

か

第二日

一、君の家庭は何人家族ですか

二、目上の方は誰々で目下の人は誰ですか

三、平常君のことを心配して色々世話をして下さ

るのは誰々ですか

四、君は誰にどんな事をして貰ひますか

（三）の答の一人一人について（例へば父とか母

とか）

五、さういふ事の中で君が自分でやらうと思へばや

れる事はどんな事ですか。

六、君の家の仕事で君が毎日きまつてしてゐる事が

ありますか

七、どんな事ですか

八、「自分のことは自分でせよ」と言ひますが御互に自分のことさへしてゐればよいのでしょうか。

「よい」と答へた場合には例へば君が病氣にかつた時など、自分でなんでもできますか

九、何故いけないのですか

誰でも自分のことは自分でするばかりでなく、人のことも進んでしてあげるやうにしなければいけません

十、家の方にお世話をかけ、特に「有難いな」「すまないな」と思つたことはありませんか

十一、どんなことですか

（十）でなしと答へたら君は世話になつても、別段何とも思はないでゐますか

十二、「有難いな」「すまないな」と思つた文でよいですか

十三、どういふ事をして君は自分の感謝の心持を實行しますか

勅語・詔書

教育勅語

朕^{チン}惟^{オモ}フニ我力皇祖皇宗國ヲ肇^{ハジ}ムルコト宏遠^{コウエン}ニ德ヲ樹^タツルコト深厚ナリ我が臣民克^ヨク忠ニ克^クク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥^ソノ美ヲ濟^ナセルハ此レ我力國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源^{エンゲン}亦實^{マタ}ニ此^{コノ}ニ存ス爾^{ナリ}臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉^{オウ}己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能^{チノウ}ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵^{シタガ}ヒ一旦^{イツタン}緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是^カノ如キハ独リ朕力忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顕彰スルニ足ラン

斯^コノ道は實に我力皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱^{トモ}ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬^{アヤマ}ラス之ヲ中外ニ施シテ悖^{モト}ラス朕爾臣民ト俱ニ拳拳服膺^{ケンケンフクヨウ}シテ咸^{ミナソノ}其德ヲ一ニセンコトヲ庶^{コト}幾^{ネガ}フ

御名御璽

明治二十三年十月三十日

青少年學徒に下し賜りたる勅語

國本ニ培ヒ國力ヲ養ヒ以テ國家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠シ而シテ其ノ任實ニ繋リテ汝等青少年學徒ノ雙肩ニ在リ汝等其レ氣節ヲ尚ビ廉恥ヲ重ンジ古今ノ史實ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑒ミ其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長ジ執ル所中ヲ失ハズ嚮^{ムカ}フ所正ヲ謬^{アヤマ}ラス各其ノ本分ヲ恪守シ文ヲ修メ武ヲ練リ質實剛健ノ氣風ヲ振勵シ以テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ

御名御璽

昭和十四年五月二十二日

開戦の詔書

天佑ヲ保有シ万世一系ノ皇祚(こうそ)ヲ踐(ふ)メル大日本
 帝国天皇八昭(あきらか)ニ忠誠勇武ナル汝(なんじ)有衆ニ
 示ス。

朕茲(こゝ)ニ米國及英國ニ対シテ戦ヲ宣ス。朕ガ陸海將兵
 ハ全力ヲ奮(ふるい)テ交戦ニ従事シ、朕ガ百僚有司ハ励精
 職務ヲ奉行シ、朕ガ衆庶ハ各々其ノ本分ヲ尽シ、億兆一心
 國家ノ總力ヲ拏ゲテ征戦ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラム
 コトヲ期セヨ。

抑々(そもそも)東亞ノ安定ヲ確保シ、以テ世界ノ平和ニ寄
 与スルハ不顯(ひけん)ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル
 遠猷(えんゆう)ニシテ朕ガ拳々(けんけん)措力ザル所、而
 (しこう)シテ列國トノ交誼ヲ篤(あつ)クシ、万邦共榮ノ樂
 ヲ偕(とも)ニスルハ、之亦帝國ガ常ニ國交ノ要義ト為ス所
 ナリ。今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト鬬端(きんたん)ヲ開クニ
 至ル、洵(まこと)ニ已ムヲ得ザルモノアリ、豈(あに)朕ガ
 志ナラムヤ。中華民國政府曩(さき)ニ帝國ノ真意ヲ解セズ、
 濫(みだり)ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪乱シ、遂(つい)ニ
 帝國ヲシテ干戈(かんか)ヲ執ルニ至ラシメ、茲(こゝ)ニ四年有余
 ヲ経タリ。幸ニ國民政府更新スルアリ、帝國ハ之ト善隣ノ
 誼(よしみ)ヲ結び、相提携スルニ至レルモ、重慶ニ残存ス
 ル政權ハ米英ノ庇蔭(ひいん)ヲ恃(たの)ミテ兄弟(けいてい)
 (い)尚未ダ牆(かき)ニ相鬩(せめ)グヲ悛(あらた)メズ、米
 英兩國ハ残存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍乱ヲ助長シ、平和ノ
 美名(めい)ニ匿(かく)レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞(たくま)シウセム

トス。剩(あまつさ)ヘ与國ヲ誘(いざな)ヒ帝國ノ周辺ニ於
 テ武備ヲ増強シテ我ニ挑戦シ、更ニ帝國ノ平和的通商ニ有
 ラユル妨害ヲ与ヘ、遂ニ經濟断交ヲ敢(あえ)テシ、帝國ノ
 生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ。朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ
 裡(うち)ニ回復セシメムトシ、隱忍(いんじん)久シキニ弥(わた)リタ
 ルモ、彼ハ毫(こゝ)モ交譲ノ精神ナク、徒(いた)ずラニ時
 局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益々經濟上軍事上ノ
 脅威ヲ増大シ、以テ我ヲ屈從セシメムトス。斯(かく)ノ如
 クニシテ推移セム力、東亞安定ニ関スル帝國積年ノ努力ハ
 悉(ことごと)ク水泡ニ帰シ、帝國ノ存立亦正に危殆(きたい)
 (い)ニ瀕セリ。事既(ことごと)ニ此ニ至ル、帝國ハ今ヤ自存自衛ノ為
 蹶然(けつぜん)起ツテ一切ノ障礙(しょうがい)ヲ破碎スル
 ノ外ナキナリ。
 皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ、朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚
 (しんき)シ、祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ、速(すみやか)ニ禍根ヲ
 芟除(せんじょ)さんじョシテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ、以テ帝國ノ
 光榮ヲ保全セムコトヲ期ス。

御名御璽

昭和十六年十二月八日

終戦の詔書

朕深く世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑（かんが）ミ、非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ、茲（こゝ）ニ忠良ナル爾（なんじ）臣民ニ告グ。

朕ハ帝国政府ヲシテ米英支蘇四国ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ。

抑々（そもそも）帝国臣民ノ康寧ヲ図リ万邦共栄ノ樂ヲ偕（とも）ニスルハ皇祖祖宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々（けんけん）措（お）カザル所、曩（さき）ニ米英二国ニ宣戦セル所以（ゆえん）モ亦（また）実ニ帝国ノ自存ト東亜ノ安定トヲ庶幾スルニ出（いで）テ、他国ノ主権ヲ排シ領土ヲ侵スガ如キ八固（もと）ヨリ朕ガ志ニアラズ。然ルニ交戦已（すで）ニ四歳ヲ閱（けみ）シ、朕ガ陸海將兵ノ勇戦、朕ガ百僚有司ノ励精、朕ガ一億衆庶ノ奉公、各々最善ヲ尽セルニ拘（か）かわラズ戦局必ズシモ好転セズ。世界ノ大勢亦我ニ利アラズ。加之（くわするに）敵ハ新ニ残虐ナル爆弾ヲ使用シテ頻（しきり）ニ無辜（むこ）ヲ殺傷シ惨害ノ及ブ所真ニ測ルベカラザルニ至ル。而（しか）モ尚交戦ヲ継続セムカ、終（つい）ニ我ガ民族ノ滅亡ヲ招来スルノミナラズ延（ひ）テ人類ノ文明ヲモ破却スベシ。斯（かく）ノ如クハ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子（せきし）ヲ保（たもて）シ皇祖祖宗ノ神靈に謝セムヤ。是（こゝ）レ朕ガ帝国政府ヲシテ共同宣言ニ応ゼシムルニ至レル所以ナリ。

朕ハ帝国ト共ニ終始東亜ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ対シ遺

憾ノ意ヲ表セザルヲ得ズ。帝国臣民ニシテ戦陣ニ死シ職域ニ殉ジ非命ニ斃（たお）レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セバ五内（ごだい）為（な）ニ裂ク。且（かつ）戦傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ、朕ノ深く軫念（しんねん）スル所ナリ。惟（おも）フニ今後帝国ノ受クベキ苦難八固（もと）ヨリ尋常ニアラズ。爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル。然レドモ朕ハ時運ノ趨（おもむ）ク所堪（た）へ難キヲ堪へ忍ビ難キヲ忍ビ、以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス。

朕ハ茲（こゝ）ニ国体ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ、常ニ爾臣民ト共ニ在リ。若（も）シ夫（そ）レ情ノ激スル所、濫（みだり）ニ事端ヲ滋（しげ）クシ或（あるい）ハ同胞排擠互ニ時局ヲ乱リ為ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フガ如キ八朕最モ之ヲ戒ム。宜（よろ）シク拳國一家子孫相伝へ、確（か）たク神州ノ不滅ヲ信ジ任重クシテ道遠キヲ念（おも）ヒ、總力ヲ将来ノ建設ニ傾ケ、道義ヲ篤（あつ）クシ志操ヲ鞏（かた）クシ、誓テ国体ノ精華ヲ發揚シ、世界ノ進運ニ後（おく）レザラムコトヲ期スベシ。爾臣民其レ克（よく）朕ガ意ヲ体（たい）セヨ。

御名御璽

昭和二十年八月十四日

カイロ宣言

当時の朝日新聞は、カイロ会談について次のように報じている。「対日決議は、米國務省の発表によれば『無条件降伏』を大々的に宣伝したもので、実に日本をして三等国に転落せしめんとする日本本土処理にまで言及した侮辱的決議である。かかる荒唐無稽なる対日決議は、われわれとしてはとるに足らないものなるは明白なところである」(1943年12月2日夕刊)と。

「出典」外務省編『日本外交年表並主要文書』下巻、原書房、1966年

日本国に関する英、米、華三国宣言

千九百四十三年十一月二十七日「カイロ」ニ於テ署名

(本宣言ノ英文ハ千九百四十三年十二月二日付「ロンドン・タイムズ」ヨリ之ヲ採リタリ)

「ローズヴェルト」大統領、蒋介石大元帥及「チャーチ

ル」総理大臣ハ、各自ノ軍事及外交顧問ト共ニ北「アフリカ」ニ於(おい)テ会議ヲ終了シ、左ノ一般的声明ヲ発セラレタリ。

各軍事使節ハ日本国ニ対スル将来ノ軍事行動ヲ協定セリ。三大同盟国ハ海路陸路及空路ニ依リ、其ノ野蛮ナル敵国ニ対シ仮借ナキ弾圧ヲ加フルノ決意ヲ表明セリ。右弾圧ハ既ニ増大シツツアリ。

三大同盟国ハ日本国ノ侵略ヲ制止シ、且(かつ)之ヲ罰スル為、今次ノ戦争ヲ為シツツアルモノナリ。右同盟国ハ自国ノ為ニ何等ノ利得ヲモ欲求スルモノニ非ズ。又領土拡張ノ何等ノ念ヲモ有スルモノニ非ズ。

右同盟国ノ目的ハ日本国ヨリ千九百十四年ノ第一次世界戦争ノ開始以後ニ於テ日本国ガ奪取シ又ハ占領シタル太平洋ニ於ケル一切ノ島嶼(とうしょ)ヲ剥奪スルコト、並(ならび)ニ満洲、台湾及澎湖島(ほうことう)ノ如(ごと)キ日本国ガ清国人ヨリ盗取シタル一切ノ地域ヲ中華民國ニ返還スルコトニアリ。

日本国ハ又暴力及貪欲ニ依リ日本国ノ略取シタル他ノ一切ノ地域ヨリ驅逐セラルベシ。

前記三大国ハ朝鮮ノ人民ノ奴隷状態ニ留意シ、廳(やが)テ朝鮮ヲ自由且独立ノモノタラシムルノ決意ヲ有ス。右ノ目的ヲ以テ右三同盟国ハ、同盟諸国中日本国ト交戦中ナル諸国ト協調シ、日本国ノ無条件降伏ヲ齎(もたら)スニ必要ナル重大且長期ノ行動ヲ続行スベシ。

ヤルタ協定

当時の新聞はこの会談でのドイツの戦後処理については大きく報道しているが、当然のことながら、日本の戦後処理についての情報はつかんでいなかったようだ。だが、スウェーデンのストックホルム駐在武官小野寺信は、ソ連の対日参戦密約という情報をキャッチし、暗号で東京に打電した。しかしこの情報は政府上層部にはとどいていなかったという(小野寺百合子『バルト海のほとりにて』)。

「出典」外務省編『日本外交年表並主要文書』下巻、原書房、1966年

千九百四十五年二月ノ「ヤルタ」会談ニ於テ作成
千九百四十六年二月十一日米国内務省ヨリ発表

三大国即チ「ソヴィエト」連邦、「アメリカ」合衆国及英国ノ指揮者ハ「ドイツ」国力降伏シ、且(かつ)「ヨーロッパ」ニ於ケル戦争ガ終結シタル後二月又ハ三月ヲ経テ「ソヴィエト」連邦ガ左ノ条件ニ依リ連合国ニ与(く)みシテ日本ニ対スル戦争ニ参加スベキコトヲ協定セリ。

一、外蒙古(そともうこ: 蒙古人民共和国)ノ現状ハ維持セラルベシ。

二、千九百四年ノ日本国ノ背信的攻撃ニ依リ侵害セラレタル「ロシア」国ノ旧權利ハ左ノ如ク回復セラルベシ。

(イ)樺太(からふと)ノ南部及之ニ隣接スル一切ノ島嶼(とうしよ)ハ「ソヴィエト」連邦ニ返還セラルベシ。

(ロ)大連商港ニ於ケル「ソヴィエト」連邦ノ優先的利益ハ之ヲ擁護シ該港ハ国際化セラルベク、又「ソヴィエト」社会主義共和国連邦ノ海軍基地トシテノ旅順口ノ租借權ハ回復セラルベシ。

(ハ)東清鉄道及大連二出口ヲ供与スル南滿州鉄道ハ、

中「ソ」合併会社ノ設立ニ依リ共同ニ運営セラル

ベシ。但シ「ソヴィエト」連邦ノ優先的利益ハ保

障セラレ、又中華民国ハ滿州ニ於ケル完全ナル主

権ヲ保有スルモノトス。

三、千島列島ハ「ソヴィエト」連邦ニ引渡サルベシ。

前記ノ外蒙古並(ならび)ニ港湾及鉄道ニ關スル協定

ハ蒋介石総帥ノ同意ヲ要スルモノトス。大統領ハ

「スターリン」元帥ヨリノ通知ニ依リ右同意ヲ得ル

為措置ヲ執ルモノトス。

三大国ノ首班ハ「ソヴィエト」連邦ノ右要求ガ日本国ノ

敗北シタル後ニ於テ確實ニ満足セシメラルベキコトヲ協

定セリ。

「ソヴィエト」連邦ハ中華民國ヲ日本国ノ羈絆(きはん)

ヨリ解放スル目的ヲ以テ自己ノ軍隊ニ依リ之ニ援助ヲ与

フル為「ソヴィエト」社会主義共和国連邦・中華民国間

友好同盟条約ヲ中華民國国民政府ト締結スル用意アルコ

トヲ表明ス。

千九百四十五年二月十一日

ジエー・スターリン

フランクリン・デイー・ルーズヴェルト
ウィンストン・エス・チャーチル

ポツダム宣言

ポツダム宣言を受諾する最終的な経過は、昭和二十年八月九日午前中、最高戦争指導会議、午後二回にわたって臨時閣議がおこなわれ、そして同日夜半、天皇をまじえての最高戦争指導会議がふたたび開かれ、「天皇ノ国家統治ノ大権ヲ変更スルノ要求ヲ包含シ居ラサルコトノ了解ノ下ニ帝國政府ハ右宣言ヲ受諾ス」という「ポツダム宣言受諾に関する申し入れ」を決定。十日、中立国のスイスを通じてアメリカとイギリスに、またスウェーデンを通じてソ連と中国に打電された。連合国代表のアメリカの公式回答は十三日朝、発表された。十四日午前十時四十五分から宮中で御前会議が開かれ、国体護持について回答文の解釈をめぐって意見がわかれたが、天皇は「回答文は国体を承認しているものと考えるから」と受諾を決定したという。御前会議は正午に閉会した。

「出典」外務省編『日本外交年表並主要文書』下巻、原書房、1966年

ポツダム宣言 千九百四十五年七月二十六日

米、英、支三国宣言(千九百四十五年七月二十六日「ポツダム」ニ於テ)

一、吾等合衆国大統領、中華民国政府主席及「グレート・ブリテン」国総理大臣ハ吾等ノ数億ノ国民ヲ代表シ、協議ノ上日本国ニ対シ今次ノ戦争ヲ終結スルノ機会ヲ与フルコトニ意見一致セリ。

二、合衆国、英帝国及中華民国ノ巨大ナル陸、海、空軍ハ西方ヨリ自国ノ陸軍及空軍ニ依ル数倍ノ増強ヲ受け、日本国ニ対シ最後の打撃ヲ加フルノ態勢ヲ整ヘタリ。右軍事力ハ日本国ガ抵抗ヲ終止スルニ至ル迄同国ニ対シ戦争ヲ遂行スルノ一切ノ連合国ノ決意ニ依リ支持セラレ、且鼓舞セラレ居ルモノナリ。

三、蹶起(けつき)セル世界ノ自由ナル人民ノ力ニ対スル「ドイツ」国ノ無益且無意義ナル抵抗ノ結果ハ、日本国国民ニ対スル先例ヲ極メテ明白ニ示スモノナリ。現在日本国ニ対シ集結シツツアル力ハ抵抗スル「ナチス」ニ対シ適用セラレタル場合ニ於テ全「ドイツ」

ツ、国人民ノ土地、産業及生活様式ヲ必然的ニ荒廢ニ歸セシメタルカニ比シ、測リ知レザル程更ニ強大ナルモノナリ。吾等ノ決意ニ支持セラルル吾等ノ軍事力ノ最高度ノ使用ハ、日本国軍隊ノ不可避且完全ナル壊滅ヲ意味スベク、又同様必然的ニ日本国本土ノ完全ナル破壊ヲ意味スベシ。

四、無分別ナル打算ニ依リ日本帝国ヲ滅亡ノ淵ニ陥レタル我俥(わがまま)ナル軍国主義的助言者ニ依リ日本国ガ引続キ統御セラルベキ力、又ハ理性ノ経路ヲ日本国ガ履(ふ)ムベキカヲ日本国ガ決定スベキ時期ハ到来セリ。

五、吾等ノ条件ハ左ノ如シ。
吾等ハ右条件ヨリ離脱スルコトナカルベシ。右ニ代ル条件存在セズ。吾等ハ遅延ヲ認ムルヲ得ズ。

六、吾等ハ無責任ナル軍国主義ガ世界ヨリ驅逐セラルルニ至ル迄ハ平和、安全及正義ノ新秩序ガ生ジ得ザルコトヲ主張スルモノナルヲ以テ、日本国国民ヲ欺瞞(ぎまん)シ之ヲシテ世界征服ノ拳ニ出ヅルノ過誤ヲ犯サシメタル者ノ権力及勢力ハ永久ニ除去セラレザルベカラズ。

七、右ノ如キ新秩序ガ建設セラレ、且日本国ノ戦争遂行能力ガ破砕セラレタルコトノ確証アルニ至ルマデハ、聯合國ノ指定スベキ日本国領域内ノ諸地点ハ吾等ノ茲(ここ)ニ指示スル基本的目的ノ達成ヲ確保スルタメ占領セラルベシ。

八、「カイロ」宣言ノ条項ハ履行セラルベク、又日本国ノ主権ハ本州、北海道、九州及四国並ニ吾等ノ決定スル諸小島ニ局限セラルベシ。

九、日本国軍隊ハ完全ニ武装ヲ解除セラレタル後、各自ノ家庭ニ復歸し、平和的且生産的ノ生活ヲ営ムノ機会ヲ得シメラルベシ。

十、吾等ハ日本人ヲ民族トシテ奴隸化セントシ、又八国民トシテ滅亡セシメントスルノ意図ヲ有スルモノニ非ザルモ、吾等ノ俘虜ヲ虐待セル者ヲ含ム一切ノ戦争犯罪人ニ対シテハ嚴重ナル処罰ヲ加ヘラルベシ。日本国政府ハ日本国国民ノ間ニ於ケル民主主義的傾向ノ復活強化ニ対スル一切ノ障礙(しょうがい)ヲ除去スベシ。言論、宗教及思想ノ自由並ニ基本的人権ノ尊重ハ確立セラルベシ。

十一、日本国ハ其ノ經濟ヲ支持シ、且公正ナル実物賠償

ノ取立ヲ可能ナラシムルガ如キ産業ヲ維持スルコトヲ許サルベシ。但シ日本国ヲシテ戦争ノ為再軍備ヲ為スコトヲ得シムルガ如キ産業ハ此ノ限ニ在ラズ。右目的ノ為原料ノ入手(其ノ支配トハ之ヲ区別ス)ヲ許可サルベシ。日本国ハ将来世界貿易関係ヘノ参加ヲ許サルベシ。

十二、前記諸目的ガ達成セラレ、且日本国国民ノ自由ニ表明セル意思ニ從ヒ平和的傾向ヲ有シ且責任アル政府ガ樹立セラルルニ於テハ、聯合國ノ占領軍ハ直ニ日本国ヨリ撤収セラルベシ。

十三、吾等ハ日本国政府ガ直ニ全日本国軍隊ノ無条件降伏ヲ宣言シ、且右行動ニ於ケル同政府ノ誠意ニ付適當且充分ナル保障ヲ提供センコトヲ同政府ニ対シ要求ス。右以外ノ日本国ノ選択ハ迅速且完全ナル壊滅アルノミトス。

年表

昭和12年(1937) 日中戦争(日支事変)勃発

昭和13年(1938) ノモンハン事件

昭和14年(1939)

5月 天皇、全国学徒代表を閲兵
青少年学徒に勅語

9月 全国中等学校の入試筆記試験廃止を通達。
小学校校長の報告書と、口頭試問および身体検査で選抜。
翌15年入学(玉中一期生)から実施。

昭和15年(1940)

4月 東京府立第十八中学校第一回入学式挙行

7月 第二次近衛内閣成立

11月 紀元二千六百年祝賀式典実施
国民服令公布
中学生制服が国防色に戦闘帽になる

昭和16年(1941)

1月 東條陸相の名で「戦陣訓」を全軍に示達

4月 東京府立第十八中学校は東京府立玉泉中学校と改称
玉泉中学校の建設予定地を東京府狛江村とする
第二期生入学

6月 独ソ戦開始

7月 日本軍南仏領インドシナに進駐

10月 大学専門学校の期間短縮
東條内閣成立

12月 大東亜戦争(太平洋戦争)開戦

昭和17年(1942)

1月 マニラ占領

2月 シンガポール占領
学区制実施で

玉中は第一区(一中、八中、千歳中、十五中、玉泉中、二十二中、二十三中)
十中は第四区(二中、四中、六中、十中、豊多摩中、国立中、市一中)

4月 第三期生入学

校長白沢清人東京府立第四中学校長に

東京市立第一中学校教諭浅井治平本校二代校長に就任

米軍機東京初空襲

年表

- 7月 東京府立の学校の夏休みを短縮
- 8月 夏季練成 山中湖・館山
米軍ガダルカナル島に上陸
- 10月 大学・専門学校の在学年限を短縮
- 12月 言論・出版・集会・結社の臨時取締令

昭和18年(1943)

- 1月 学制改革発表・中学四年制、高校二年制、
中学の教科書を国定教科書にする
女学校の英語の選択科目化
- 2月 ガダルカナル島から撤退
スターリングラードのドイツ軍降伏
- 4月 第四期生入学
中学入試ワイロ事件検挙
山本連合艦隊司令長官戦死
- 5月 アッツ島守備隊玉砕
- 6月 学徒戦時動員体制確立要項決定
- 7月 東京都制発足
東京都立玉泉中学校と改称
- 8月 私立向島高等女学校に閉鎖命令
理工系以外の学生の徴兵猶予を停止
イタリア無条件降伏
- 9月 大坪国益校長事務取扱を命ぜらる
理工系以外の学生の徴兵猶予を停止
- 10月 東京都立石神井中学校長丸山正雄本校3代校長に補せらる
神宮外苑で学徒出陣壮行会
- 11月 マキン・トラウ玉砕
- 12月 カイロ会談・ルーズベルト・チャーチル・蒋介石
徴兵年齢一年引き下げ・19才から

昭和19年(1944)

- 3月 学徒勤労動員の通年実施決定
- 4月 第五期生入学
旅行制限強化
- 5月 疎開工事挺身隊結成
一期生勤労動員(立川・陸軍航空工廠)
- 6月 二期生勤労動員(高円寺・陸軍気象部)
英米軍ノルマンディ上陸
米軍サイパン上陸
マリアナ沖海戦で日本海軍の大半壊滅

- 7月 サイパン玉砕
東條内閣総辞職・小磯内閣成立
中学校低学年の動員決定
- 8月 三期生勤労動員（三鷹・日本無線）
- 10月 神風特別攻撃隊出撃
18才以上を兵役に編入
- 11月 B29東京空襲・中島飛行機工場
東京に初の夜間空襲
四期生勤労動員（中島飛行機三鷹研究所）
- 12月 東海地方に大地震

昭和20年（1945）

- 1月 米軍ルソン島上陸
- 2月 米機動部隊、本土初空襲
ヤルタ会談・ソ連の対日参戦密約
- 3月 東京下町大空襲
硫黄島日本軍全滅
東京都立玉泉中学校第一、二回卒業式挙行
卒業生第一回97名、第二回142名
国民学校初等科以外一年間教育停止
- 4月 第六期生入学
米軍沖縄本島に上陸
ルーズベルト大統領急死・トルーマン就任
- 5月 ドイツ、無条件降伏・東京山手大空襲
- 6月 沖縄守備隊全滅・沖縄戦終了
- 7月 動員解除・進学
ポツダム会談・宣言発表
- 8月 広島に原爆・ソ連参戦・長崎に原爆・終戦

昭和21年（1946）

- 2月 火災のため、教室大半を焼失す
- 3月 校長丸山正雄退職・細田菊雄本校四代校長
東京都立玉泉中学校は第十中学校に併合

昭和22年（1947）

- 4月 東京都立第十中学校は第十新制高等学校となる

昭和24年（1949）

- 4月 新制大学発足

昭和25年（1950）

- 3月 旧制高等学校閉校
- 4月 第十新制高等学校は東京都立西高等学校と改称

先生方

先生方

(着任・離任順・年は昭和)

氏 名	着任～離任	担当
白沢清人	12～17	校長
山田政善	12～19	書道
増田久太郎 (正宗)	12～19	図画
小川恵正	12～22	修身
石黒碩二郎	15～16	音楽
高野正己	15～16	国語
一木三七十 (降旗)	15～17	剣道
森田喜一	15～18	教練
大友善太郎	15～20	理科
家令俊雄	15～20	地歴
竹内不二雄	15～20	体操
土屋長松	15～22	数学
藤本純助	15～22	教頭・英語
興 高義	16～17	教練
滝沢愛喜	16～17	図画
小山佐吉	16～18	地歴
高橋一夫	16～18	国語
貝増善次郎	16～19	音楽
前田松寿	16～21	英語
中込 競	16～21	漢文
長坂亨三	16～22	理科
岡山茂夫	16～23	英語
高橋義雄	17～17	国語
奥山直文	17～18	剣道
浅井治平	17～18	校長
橋本栄二	17～19	図画
中川 清 (河野)	17～20	英語
牧野太郎	17～20	歴史・地歴
見上 保	17～20	地理・地歴
板本金次郎	17～21	理科・物理
足利正俊	17～21	教練
古米境郎 (小田)	17～22	教練
都筑修一	17～29	修身 英語
中村高樹	17～43	国語
嶺村満夫	17～47	英語
岡田信吉	17～53	数学
長浜 恵	18～19	数学
丸山正雄	18～21	校長
中村 淳	18～46	
影山直治 (景山)	19～20	国語
古谷喜彦	19～22	国語
桑原富雄	19～22	体操
細田菊雄	21～30	校長

東京都立中学校と都立高校

第一中	日比谷高校	第十五中	青山高校
第二中	立川高校	第十六中	江戸川高校
第三中	両国高校	第十七中	葛飾野高校
第四中	戸山高校	第十八中	玉泉中
第五中	小石川高校		十中に統合
第六中	新宿高校	第十九中	国立高校
第七中	墨田川高校	第二十中	大泉高校
第八中	小山台高校	第二十一中	武蔵丘高校
第九中	北園高校	第二十二中	城南高校
第十中	西高校	第二十三中	大森高校
第十一中	江北高校	第二十四中	九中に統合
第十二中	千歳高校	市立第一中	九段高校
第十三中	豊多摩高校	市立第二中	上野高校
第十四中	石神井高校	市立第三中	文京高校

東京都立高等女学校と都立高校

第一高女	白鷗高校	第十一高女	桜町高校
第二高女	竹早高校	第十二高女	北野高校
第三高女	駒場高校	第十三高女	武蔵高校
第四高女	南多摩高校	第十四高女	城北高校
第五高女	富士高校	第十五高女	神代高校
第六高女	三田高校	第十六高女	南葛飾高校
第七高女	小松川高校	第十七高女	第八に統合
第八高女	八潮高校	第十八高女	井草高校
第九高女	多摩高校	第十九高女	千歳丘高
第十高女	豊島高校	第二十高女	赤城台高校
		第二十一高女	第一に統合
		第二十二高女	第十に統合
		市立一高女	深川高校

編集後記

一期

文章を皆さんに先立つて読み終えたときに湧いたものは、人にはそれぞれ固有の世界があり、独特な輝きとメロディを発しているものだ、という感慨であった。昭和十五年から二十年（1940～45年）という共通の時と、東京西郊での間借り校舎と立川の航空廠という共通の場を通して知り合った仲間だが、共通の時空という舞台に現れるものは独自の内世界である。「なぜ人を殺してはいけないんですか」という問いが普通の若者から聞かれるような時代になったが、「人はみんな違うんだよ、一人一人がかげがないんだよ」と答えることもできるのだと思った。

数年前、仲間の一人である梅村君から「玉中の歴史を書いて置いたらどうか」と懇請され、その一助にと大部の記録文を戴いたことが、今回の文集の契機になっている。客観的な歴史を書き残すということも大事だが、一人乃至少数者の視野だけでは包括することはできず、多くの人の声と記録を必要とすると思った。

こんなわけで、できるだけ多くの人に執筆して戴こうと思い、千六百字以内を基本とする線を打ち出したのだが、思いを十全に表すためにその暫定枠を超えたものも多く、それぞれの固有

の光を伝える方がよいと考えて、割愛することは原則的には行わなかった。そのため、「何だそれならもつと書いたぞ」と思う人もあろうし、「あれは資料として出したので、文集なら別の表現をとつた」と云う向きもあるが、ご叱正を覚悟の上で、自然体の自由な声の魅力を伝えることにした。また順序は一見ラダムのようにみえるが、一冊の本として読み終えたときに、個々の声の響きが調和して何となくまとまった後味を残すように試みた結果であることを諒承されたい。 一期 近藤 記

二期

玉泉中学校存在の証として、また、若い人々に平和の大切さを訴えるためにもと思い、玉中の総合文集作成を思い立った。各期とも文集が出来ていたので、それらから玉中に関係する分を集めて総合文集にすることにした。これを読まれると、戦時中も楽しかったのではないかと思われるかも知れないが、この年代は陽気で困難な時にも楽しみを失わないのは若さの特権だったようだ。

二期生は卒業五十周年記念の文集を発行し、追補版も作成した。この2編から適当なものを選び出した。文の配列は大体記事の年代順に並べた。

平成十三年九月の西高記念祭で、同窓会の部屋が作られたので、玉中3期会同で出展した。この時西高の先生から我々の入学試験問題が出品されたのでそれも利用した。校舎の火災で全ての資料がなくなっていると思っていたが有難いことである。

長谷川君が勤労働員先の気象部のことをいろいろ調べてくれたので、長文だが掲載した。当時の日本陸軍も可成りの技術水準にあったことがうかがえる。これを読んでいろいろ思い出された方もあろうかと思う。

中学校の生活も必ずしも楽しいものではなかったし、また、戦中・戦後の混乱で、生活や体を壊された方も多いと思う。老境に入った我々は皆手を取り合って楽しい人生を実現するように今後も頑張りたいと思う。

二期 村田 記

三期

我々三期生の記録は平成六年から平成十三年まで八年間に互り毎年発行した会報「いづみ」から、今回集大成として発行の「思い出の都立玉泉中学校」の趣旨に沿った内容のものが選出されたもので、当時の学校や勤労働員中に拘わった出来事や思い出が記載されている。当然類似した事柄の記載もあるが、思い出が人によってかくも異なった内容や感懐として書かれたのに、想い新たにさせられるものがある。また同一人の寄稿が重複して掲載されていることがあるが、主題が異なり記録として

残したい内容が述べられているため選択されたものである。また選択から漏れた多くの記事の中にも愉快な、また貴重な体験談や、エッセイなど、掲載したい優れた文や記事も多くあったが発行の趣旨に添わぬ判断から、旅行記、仕事上の経験談、私小説的な文と共に掲載を省かれたものも多くあった。この点は会報編集者として残念な気持もあった。お許しを請う次第である。

我々の年代、特に三期生は（昭和四年四月～昭和五年三月生）平均的には巳年と若干の午年の構成であり、戦前戦後の激動期であつたため、

入学当時：159名（1942年・昭和十七年度生）であつたものが戦後の在籍生徒は

四年生時：117名（1945年・昭和二十年度、十中統合時のD、Eクラス）に減じた。

これは家の焼失或いは戦時疎開のための転校と考えられる。

また当時四年修了で上級学校に進んだ者もあつて卒業当時の在籍人員は五年生時：75名（1946年・昭和二十一年度、D、Eクラス）と更に減じて卒業した。

以降、玉中入学者の不明者を対象に追跡調査を行い、その結果

住居確認者（名簿記載者）：93名、住所不明者：22名、物故者：26名、計151名が確認されたが、入学時の名簿在籍者：159名は補欠入学および前年の病氣停学者が含まれてお

り、同様卒業時も病氣停学者、転出者も居り、これらの者が学校並びに友人への連絡が無いため8名が未だに不明となっている。

戦前の「人生僅か五十年」と言われた時代から見れば、食に、精神的に、辛い時代を経験したとはいえ、男性寿命が七十八歳と五割増しにも伸びた現在、よくぞ長寿に持ちこたえたものと思うが、これからの残る人生に於いて、若者にどのように伝え、知らしめることが出来るか、せめて一人でも我々の若き時代の記録の断片を知って頂き、平和の心を持続してもらいたいと乞い願う次第である。

三期 蜂須賀 記

四期

昨年来、二期の村田良雄さんを中心に、玉泉中の総合文集を作るうとの声が上がリ、四期に対しても寄稿などの協力を求められた。本来なら同期の皆さんに呼び掛け、新たな投稿を求めるべきだろうが、たまたま1990年に作った文集「玉泉」があったのを幸い、そこからの転載ということでお茶を濁すことにした。寄稿者には手紙を出し転載の承諾を求めたところ、全員の同意を得ることができたのは、幹事として嬉しい限りであった。

クラブ活動もなく、また勤労働員で学校がばらばらになった

りして前後の期の関係の薄かった我々にとっては、この文集で今まで知らなかった玉中の生活や知識が生き生きと描かれているのは大きな収穫だった。同期の皆さんにもそのことを吹聴して注文を集めたというのが実際のところである。

十二年前に文集を作ったのは中川（河野）先生にハツパをかけたのがきっかけだったが、当時も、六十歳で回想録は早すぎないか、との声もないではなかった。しかし、当時既に年間1〜2名の物故者が始めていたし、人間の記憶は時とともに段々不正確になるので、鮮明な記憶を持っている人が生きているうちに、早くそれを記録しておきたい、との隠れた狙いがあったことは否定できない。今回執筆者のリストを見ると、土屋、牧野、見上の三先生はじめ、生徒の中にも鬼籍に入った人も何人があり、狙いは外れていなかったと思っている。

文集のまとめについては村田さんに大変お世話になった。自分たちのことは棚に上げて、他の期の人々の原稿に色々勝手なイチャモンをつけ、ご迷惑をかけたことをお詫びしたい。この文集が、僅か五年で消えてしまった我々の母校玉泉中学の栄光を偲ぶよすがとなることを願わずにはおられない。

四期 村岡記



編集者一同

村岡（４期） 蜂須賀（３期）
 竹田（１期） 近藤（１期） 村田（２期）
 2002 - 8 - 6

作成 玉中会
 作成年月 2002年9月
 編集 1期 近藤 晴彦
 1期 竹田 信彦
 2期 村田 良雄
 3期 蜂須賀幸三
 4期 村岡 精一

印刷製本 プリントテクノ
 （理想科学工業株式会社）